立花堂遺跡発掘調査報告

２００８（平成20）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

県都・津市は、伊賀・伊勢で三十二万四千石を領した藤堂氏の城下町です。その中心部を貫く安濃川は、流域に肥沃な穀倉地帯を形成し、伊勢湾に注ぎます。この安濃川は、下流部においては蛇行を繰り返すため、藤堂氏もその治水に腐心し、様々な施策を行いました。そのひとつが下流部の城下町を洪水から護るため、上流部で堤防を低くして大水が出た際にそこを切って水の逃げを確保した「三泗堤」といわれる堤です。現在もこの部分の堤防は低く抑えられていて、津市街地に大量の水が侵入するのを防いでいます。

さて、今回報告する立花堂遺跡は、ちょうどこの「三泗堤」の下流、安濃川の南岸に位置しています。安濃川からその南に流れる岩田川までの低地部は、いったん出水があったときは絶えず洪水の危険に晒される地域ですが、今回の調査によって、この地においても微高地を利用しての人間活動の展開を確認することができました。まさに、自然と格闘しながら自らの生活の安定のために力を注いだ先人たちの日常が甦ってくるようです。

また、今回の調査で古代の井戸を２基確認しておりますが、いずれにおいても井戸の施設である曲物や井戸側が良好に残存しており、当該時期の井戸を研究する上で、大変貴重な資料となるものです。

しかし、一方でこのような遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。今回得られた成果をどのように活用していくかが、今後わたくしどもの重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、三重県県土整備部道路整備室および津建設事務所などの関係諸機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

２００８年3月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県津市南河路地内に所在する立花堂遺跡の第１～３次発掘調査にかかる報告書である。

2　本遺跡の第１次調査は平成14年度県営ほ場整備事業（津中部地区）、第２次調査は平成16年度国道163号（南河路ＢＰ）道路改築事業、第３次調査は平成18年度一般国道163号南河路ＢＰ国補道路特殊改良（一種）事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部および農林水産商工部から経費の執行委任を受けて実施したものである。

3　発掘調査は次の体制で行った。

【平成14年度】

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査研究グループ）

主査　　筒井　正明　　主事　　黒田　聖也

研修員　　野田　有美　　技術補助員　　豊田　祥三

調査期間　　平成１４年７月１日～平成１４年１１月２８日

調査面積　　２９９㎡

【平成17年度】

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ｉグループ）

主事　　柴山　圭子

調査期間　　平成１７年９月２６日～平成１８年１月１０日

調査面積　　２，０３５㎡

調査記録委託　　国際航業株式会社

【平成18年度】

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ｉ課）

主事　　柴山　圭子

調査期間　　平成１８年６月２３日～平成１８年１１月７日

調査面積　　１，７２６㎡

調査記録委託　　朝日航洋株式会社

4　本書作成にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

5　発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、三重県県土整備部道路整備室、県土整備部津建設事務所、三重県農林水産商工部、津地方県民局農林水産商工部（当時）、津中部土地改良区から多大な協力を得たことを明記する。

6　報告書作成にあたっては、小林　秀氏（三重県史編纂グループ）、榎村寛之氏（斎宮歴史博物館）から有益な御教示をいただいた。

7　本報告のもととなる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ｉ課および支援研究課が行った。また、報告文の執筆・遺物の写真撮影・全体の編集は柴山が行った。

凡　　例

＜地図類＞

１．本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、津市都市計画図である。

２．津市都市計画図は、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

３．挿図の方位は全て座標北（旧国土座標）で示している。なお、磁針方位は西偏６°40′、真北方位は西偏０°17′34″（平成10年）である。

＜遺構類＞

４．土層図は層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。

５．土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版、2003年第23版）を用いた。

６．当報告書での遺構番号は、通番としている。

７．遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＢ……掘立柱建物　ＳＤ……溝　ＳＫ……土坑

ＳＥ……井戸　ＳＺ……落ち込み、不明遺構　Pit……ピット、柱穴

８．掘立柱建物の方位は、南北主軸・東西主軸を問わず、全て北からの振れで表記している。したがって、東西主軸の建物は梁行をもとに方位を測った。

９．遺構などの断面図で平面図の相当位置に矢印があるものは立面図となっている。

＜遺物類＞

10. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものは、その都度示している。

11. 遺物実測図は、調査年次・遺物の種別（土器や石器、木器など）に関わらず、通番としている。

12. 当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

13. 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番　　号……挿図掲載番号である。

実測番号……実測段階の登録番号である。調査次数を頭に付した。

器　　種……「土師器」「須恵器」「陶器」「木製品」といった区分および遺物の器種を示した。

出土遺跡……調査時に設定したグリッド名および遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量（cm）……遺物の法量を示す。（口径）は口縁部径、（底径）は底部径、（高台径）は高台部径、（基部径）は脚部上端径、（脚裾径）は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整(技法)の特徴…主な特徴を外面(外：)、内面(内：)で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎　　土……小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色　　調……その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残 存 度……その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることで、この場合は「完存」と記した。

＜写真図版＞

14. 写真図版は、第１～３次をまとめて巻末に掲載した。

15. 挿図と写真図版の遺物番号は、対応している。

16. 遺物の写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

目　　次

Ⅰ　前　言 …… 1
1　調査の契機 …… 1
2　調査の経過と法的措置 …… 1
3　調査と記録の方法 …… 2
4　整理作業の方法 …… 2

Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 3
1　地理的環境 …… 3
2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　層位と遺構 …… 16
1　調査区の基本層位 …… 16
2　検出した遺構（１次） …… 16
3　検出した遺構（２次） …… 17
4　検出した遺構（３次） …… 24

Ⅳ　出土遺物 …… 34
1　第１次調査出土遺物 …… 34
2　第２次調査出土遺物 …… 34
3　第３次調査出土遺物 …… 38

Ⅴ　自然科学分析 …… 69
1　分析の目的 …… 69
2　立花堂遺跡の花粉化石分析 …… 69
3　立花堂遺跡の大型植物化石 …… 81
4　立花堂遺跡　出土昆虫化石群集について …… 84
5　立花堂遺跡の動物遺体同定 …… 87
6　立花堂遺跡出土木製品の樹種同定 …… 87
7　立花堂遺跡の自然科学分析 …… 103

Ⅵ　結　語 …… 106
1　立花堂遺跡の遺構について …… 106
2　周辺遺跡を含めた遺構の変遷 …… 106
3　建物の時期と方向 …… 109
4　井戸について …… 109
5　墨書土器について …… 113
6　立花堂遺跡の評価 …… 114
おわりに …… 114

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 ……4
第２図　遺跡地形図 ……5
第３図　調査区配置図 ……6
第４図　遺構平面図（①～⑥）紙割り図 ……8
第５図　遺構平面図① ……9
第６図　遺構平面図② ……10
第７図　遺構平面図③ ……11
第８図　遺構平面図④ ……12
第９図　遺構平面図⑤ ……13
第10図　遺構平面図⑥ ……14
第11図　第１次１地区遺構平面図 ……15
第12図　第２次北区（下層）遺構平面図 ……16
第13図　調査区土層断面図 ……18
第14図　ＳＥ57平面図・断面図 ……20
第15図　ＳＢ42・41平面図・断面図 ……21
第16図　ＳＥ64・65・68平面図・断面図 ……23
第17図　ＳＥ63平面図・断面図 ……24
第18図　ＳＢ121平面図・断面図 ……26
第19図　ＳＢ171・129平面図・断面図 ……27
第20図　ＳＢ172・130平面図・断面図 ……28
第21図　ＳＥ155平面図・断面図 ……29
第22図　出土遺物実測図① ……40
第23図　出土遺物実測図② ……41
第24図　出土遺物実測図③ ……42
第25図　出土遺物実測図④ ……43
第26図　出土遺物実測図⑤ ……44
第27図　出土遺物実測図⑥ ……45
第28図　出土遺物実測図⑦ ……46
第29図　出土遺物実測図⑧ ……47
第30図　出土遺物実測図⑨ ……48
第31図　出土遺物実測図⑩ ……49
第32図　出土遺物実測図⑪ ……50
第33図　出土遺物実測図⑫ ……51
第34図　出土遺物実測図⑬ ……52
第35図　出土遺物実測図⑭ ……53
第36図　出土遺物実測図⑮ ……54
第37図　出土遺物実測図⑯ ……55
第38図　ＳＥ64の花粉化石分布図 ……74
第39図　ＳＥ65の花粉化石分布図 ……75
第40図　ＳＥ155試料採取地点付近の土層
断面図と試料採取層順 ……77
第41図　ＳＥ155の花粉化石分布図 ……79

挿 表 目 次

第１表　土層断面土色一覧 ……19
第２表　掘立柱建物一覧 ……30
第３表　遺構一覧① ……31
第４表　遺構一覧② ……32
第５表　遺構一覧③ ……33
第６表　木製品観察表① ……56
第７表　木製品観察表② ……57
第８表　出土遺物観察表① ……58
第９表　出土遺物観察表② ……59
第10表　出土遺物観察表③ ……60
第11表　出土遺物観察表④ ……61
第12表　出土遺物観察表⑤ ……62
第13表　出土遺物観察表⑥ ……63
第14表　出土遺物観察表⑦ ……64
第15表　出土遺物観察表⑧ ……65
第16表　出土遺物観察表⑨ ……66
第17表　出土遺物観察表⑩ ……67
第18表　出土遺物観察表⑪ ……68
第19表　２次調査花粉化石産出一覧 ……73
第20表　３次調査花粉化石産出一覧 ……78
第21表　３次調査大型植物化石一覧 ……82
第22表　ＳＥ64出土昆虫化石一覧 ……85
第23表　２次調査出土骨類観察表 ……88
第24表　２次調査出土木製品同定表 ……90
第25表　３次調査出土木製品同定表 ……104
第26表　対象とした遺構と分析内容 ……104
第27表　立花堂遺跡および周辺遺跡の
掘立柱建物一覧 ……110
第28表　立花堂遺跡および周辺遺跡の
井戸一覧 ……112

図 版 目 次

図版１　２次調査で産出した花粉化石 ……76
図版２　３次調査で産出した花粉化石 ……80
図版３　ＳＤ152から出土した大型植物遺体 ……83
図版４　出土した昆虫化石 ……86
図版５　立花堂遺跡出土動物骨 ……88
図版６　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真① ……91
図版７　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真② ……92
図版８　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真③ ……93
図版９　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真④ ……94
図版10　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑤ ……95
図版11　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑥ ……96
図版12　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑦ ……97
図版13　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑧ ……98
図版14　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑨ ……99
図版15　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑩ ……100
図版16　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑪ ……101
図版17　２次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真⑫ ……102
図版18　３次調査出土木製品の
樹種顕微鏡写真 ……105

写 真 図 版 目 次

写真図版１　調査前風景／調査前風景 ……119
写真図版２　２次調査区遠景／
２次調査区遠景 ……120
写真図版３　２次調査区遠景／
２次調査区全景 ……121
写真図版４　２次調査区全景／
２次調査区西半 ……122
写真図版５　３次南調査区全景／
３次南調査区全景 ……123
写真図版６　３次北調査区全景／
３次北調査区全景 ……124
写真図版７　ＳＥ57井戸側検出状況／
ＳＥ57井戸側近接 ……125
写真図版８　ＳＥ57井戸側近接／
ＳＥ57・ＳＢ42 ……126
写真図版９　ＳＢ42／ＳＢ41 ……127
写真図版10　ＳＢ42内ｓ６ｐｉｔ６／
ＳＢ42内ｓ６ｐｉｔ６半裁状況 ……128
写真図版11　ＳＤ152出土状況／
ＳＢ121 ……129
写真図版12　ＳＢ129／ＳＢ130 ……130
写真図版13　ＳＥ155／ＳＥ155 ……131
写真図版14　ＳＥ155半裁状況／
ＳＥ155半裁状況 ……132
写真図版15　弥生土器出土状況／
弥生土器出土状況 ……133
写真図版16　立花堂遺跡現状風景／
立花堂遺跡現状風景 ……134
写真図版17　出土遺物① ……135
写真図版18　出土遺物② ……136
写真図版19　出土遺物③ ……137
写真図版20　出土遺物④ ……138
写真図版21　出土遺物⑤ ……139
写真図版22　出土遺物⑥ ……140
写真図版23　出土遺物⑦ ……141
写真図版24　出土遺物⑧ ……142
写真図版25　出土遺物⑨ ……143
写真図版26　出土遺物⑩ ……144
写真図版27　出土遺物⑪ ……145
写真図版28　出土遺物⑫ ……146
写真図版29　出土遺物⑬ ……147
写真図版30　出土遺物⑭ ……148
写真図版31　出土遺物⑮ ……149
写真図版32　出土遺物⑯ ……150

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

立花堂遺跡を含む津市南河路・野田の安濃川南岸堤防から岩田川間の沖積部一帯を南北に縦断するかたちで都市計画道路の中勢バイパス建設が決定されたのは昭和58年４月のことであった。これに伴って替田遺跡第１～２次調査（10,060㎡）が実施されている。

さて、この中勢バイパスに直交するかたちで国道163号線のバイパス建設事業が計画され、その事業照会を受けて埋蔵文化財の範囲確認調査が路線計画地内を対象として平成11年１月に行われた。

一方、津市南河路・野田周辺はほ場整備事業の未整備地域であり、立花堂遺跡を含む津中部地区を対象とした県営ほ場整備事業が平成９年度以降に順次実施されることが計画された。そこで、平成９年度から範囲確認調査が行われ、このうち立花堂遺跡を含む確認調査は平成11年度に実施されている。

これら県事業の範囲確認調査の結果を受けて、国道163号バイパス建設に伴う要本調査範囲が、替田遺跡7,800㎡、立花堂遺跡4,500㎡と確定し、平成11年度から順次本発掘調査が行われることとなった。詳細は以下のとおりである。

平成11年度：替田遺跡（第４次）
平成13年度：替田遺跡（第５次）
平成14年度：替田遺跡（第６次）
平成15年度：替田遺跡（第７次）
平成16年度：替田遺跡（第８次）
平成17年度：立花堂遺跡（第２次）
平成18年度：立花堂遺跡（第３次）

このうち、替田遺跡の調査は既に報告書が刊行されている（『替田遺跡（第４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2004年、『替田遺跡（第５次～第８次）発掘調査報告』　同　2007年）。また替田遺跡の報告書には、ほ場整備事業に伴う調査分も含まれていることを付け加える。

ここで報告する調査記録は、立花堂遺跡のものである。当該事業に伴う本発掘調査は、今回報告分が最終となる。

2　調査の経過と法的措置

a　発掘調査の経過

発掘調査の詳細は以下のとおりである。

第１次調査
原因事業：平成14年度県営ほ場整備事業
調査面積：299㎡
調査期間：平成14年７月１日～同年11月28日

第２次調査
原因事業：平成17年度国道163号（南河路ＢＰ）道路改築事業
調査面積：2,035㎡
調査期間：平成17年９月26日～平成18年１月10日

第３次調査
原因事業：平成18年度一般国道163号南河路ＢＰ国補道路特殊改良（一種）事業
調査面積：1,726㎡
調査期間：平成18年６月23日～同年11月７日

なお、立花堂遺跡（第１次）調査は、同年度に実施された替田遺跡（第６次）調査と併行して行われたものである。

b　文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる文化財保護法（以下、「法」）関係の諸通知は、以下により行っている。

〔第１次〕
・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長あて）
平成14年５月31日付け、県土第08－44号（県知事通知）
・法第58条の２第１項（県教育長あて）
平成14年６月26日付け、教埋第88号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（津警察署長あて）
平成15年１月７日付け、教委第12-6-10号（県教育長通知）

〔第２次〕
・法第99条第１項（県教育長あて）
平成17年９月30日付け、教埋第232号
・遺失物法による文化財発見・届出通知

（津警察署長あて）

平成18年２月６日付け、教委第12-4-27号

（県教育長通知）

〔第３次〕

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項

（県教育長あて）

平成18年３月31日付け第432号（県知事通知）

・法第99条第１項（県教育長あて）

平成18年７月３日付け、教埋第162号

・遺失物法による文化財発見・届出通知

（津警察署長あて）

平成18年11月16日付け、教委第12-4-13号

（県教育長通知）

３　調査と記録の方法

ａ　掘削の方法

いずれの調査も、遺構が検出できる面まで重機掘削を行った。その後人力により遺構検出・遺構掘削を行った。

第２次調査の南端部および第３次調査の北区においては遺構検出面に遺物を含んでいたことから、下層遺構の存在が疑われたため、再度重機掘削を行い、その後人力による遺構検出および掘削を行った。

ｂ　地区設定

調査区内は、４ｍ四方の升目で区切ることによって小地区（グリッド）を設定している。

第１次調査は水路部分の２ヶ所の調査で、それぞれ１地区、２地区としている。いずれも幅約２ｍの線掘りであったことから、設定は調査区に沿ったものとし、国土座標には則っていない。

第２・３次調査は道路改築の継続事業であったことから、旧国土座標（日本測地系）に則って連続した小地区設定を行った。北西隅をそのグリッド名とし、北からアルファベットの大文字から小文字へ、西から数字を付与している。

ｃ　遺構カード

小地区を単位として1/40で作成し、略図・埋土土質・切り合い等を記すとともに、遺物が出土した遺構については取り上げにおける遺構番号およびピット番号の注記台帳としても使用した。

ｄ　遺構図面

調査区の平面図は、1/20で手書き実測を行った。また、個々の遺構で遺物出土状況などが重要と判断したものについては、1/10の個別実測図を作成した。土層図は1/20で作成した。

ｅ　遺構写真

遺構関連の写真は、重要なものを４×５判および６×９判（ブローニー）で撮影し、補助・メモ的に35㎜判を使用した。それぞれのフィルムは、基本的に白黒とリバーサルを同時に作成している。なお、第２次調査についてはラジコンヘリによる空撮も併せて行っており、４×５判および６×６判で撮影した。

４　整理作業の方法

ａ　遺物類

発掘調査で出土した遺物は、各調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業などを行った。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に専用収蔵庫へと収蔵した。

実測図などが完成した遺物は、平成18～19年度に報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物の中で主なものについては、写真撮影を６×９判（ブローニー）で実施した。

ｂ　記録類

発掘調査にかかる記録類は、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは所定の番号を付与し、当センターの専用収蔵庫に保管している。ただし、１次調査の調査日誌は、替田遺跡（第６次）の日誌中に併記されている。

また、第２・３次調査にかかる花粉分析や昆虫遺体の分析など外部に委託した自然科学分析結果についても、同様の記録類として保存している。

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　地理的環境

立花堂遺跡は、津市を東西に貫いて伊勢湾に注ぐ安濃川南岸の標高5.3～６ｍの自然堤防およびそれに続く微高地上に位置する。

この安濃川は、鈴鹿山脈錫杖ヶ岳付近に源を発し、伊賀に連なる布引山系の東側を画する独立峰、長谷山の北麓を流れる穴倉川などを合流しつつ、流域に肥沃な沖積平野を形成する。安濃川によってもたらされたこの沖積平野は、西側を経ヶ峰から長谷山にいたる山塊、北側を長岡丘陵（見当山丘陵）、南側を半田丘陵によって画されて地理的なひとつのまとまりと見ることが可能で、巨視的には北側（長岡丘陵）から南側（半田丘陵）に向かって低くなっていく地形をなす。すなわち、長岡丘陵南麓を流れる美濃屋川は、南側へ小流路を派生させて安濃川北岸の水田を潤し、最終的に美濃屋川本体も含めて安濃川へ排出される。また、安濃川から南へ派生した三泗川は安濃川南岸の水田を潤しつつ、半田丘陵北麓を流れる岩田川に集まり、伊勢湾へと注ぐ。

さて、立花堂遺跡周辺は、安濃川が伊勢湾に向かって向きを転じ、東流を開始する部分に相当する。この地で安濃川から派生し、岩田川へ注ぐ三泗川は、普段はさほど大きな流路ではない。しかし、大雨時には津城下町を洪水から護るため安濃川の水を岩田川へ排出する機能を負っており、非常時はかなりの水量を受け持つ（当該部の安濃川堤防は、現在も大雨時の南側への分水を前提として低い）。そのため、三泗川沿いの水田は、洪水時には水没するような低地となっている。

また、立花堂遺跡の北は安濃川が小さな蛇行を開始する起点でもあり、当遺跡周辺においても大雨時には安濃川が氾濫し、水没するような低地であると考えられる。

立花堂遺跡は、地籍上津市南河路の「立花堂」「堤ノ下」という２つの小字にまたがっている。起伏の少ない沖積低地に形成された集落遺跡であるが、そのなかでも自然堤防から続く僅かな微高地を利用して占地された状況が窺える。

2　歴史的環境

立花堂遺跡が含まれる津地域は、その中心域が安濃川水系となる地域であり、安濃川上流の旧安濃町と旧芸濃町の一部を合わせて旧の郡域は安濃郡にあたる。ここでは、安濃郡のなかでも、立花堂遺跡の所在する安濃川中～下流域の遺跡を中心に、その展開を概観してみる。

〈縄文時代〉　縄文時代はまだ沖積部への進出・開発は未活発であるが、安濃川南岸の蔵田遺跡[1]では後期末葉の土坑、松ノ木遺跡[2]では晩期の河道と竪穴住居が確認されている。僅かではあるが、縄文時代後晩期段階には開発が沖積低地へも及んでいたことが知られる。

〈弥生時代〉　この時代になると、安濃川流域で一気に遺跡の形成が進む。このうち、最も注目されるのは、納所遺跡[3]である。納所遺跡は、安濃川下流北岸の自然堤防上に立地し、立花堂遺跡の対岸に存在する。そこでは、弥生時代前期の自然河道が確認されており、各種農耕具類をはじめとする多数の木製品が出土している。このことは、水稲稲作に基盤を置く弥生文化が、当地域への波及当初から基本的な生活用具類を装備した状態で伝播していることを示している。納所遺跡は、中期に最盛期を迎え、伊勢湾西岸域を代表する弥生集落となる。ただし、後期を迎える頃には急速に衰退し、流路程度しか明瞭な遺構が確認できないようになる。

前期の集落は、沖積部だけでなく丘陵部にも見られる。納所遺跡の出現よりは遅れるが半田丘陵の上村遺跡[4]でも多数の前期弥生土器の出土が確認されている。

中期になると、遺跡数はさらに増加し、安濃川南岸の替田遺跡[5]やその南の弐ノ坪遺跡[6]でも遺構が確認されているほか、北岸の沖積部では蔵田遺跡・松ノ木遺跡（方形周溝墓、墓域）・森山東遺跡[7]（水田、生産域）など多数の遺跡がみられる。これらの遺跡は、遺構密度としては納所遺跡にはるかに及ばず、納所遺跡の後方に展開する衛星集落的な様相を呈するが、この時期の活発な低地進出の動きは

1 立花堂遺跡
2 替田遺跡
3 弐ノ坪遺跡
4 里前遺跡
5 惣作遺跡
6 神戸遺跡
7 納所遺跡
8 長遺跡
9 山籠遺跡
10 森山東遺跡
11 松ノ木遺跡
12 蔵田遺跡
13 位田遺跡
14 梁瀬遺跡
15 上村遺跡
16 高松遺跡
17 安濃津遺跡群
18 高茶屋大垣内遺跡
19 亀井遺跡
20 浄土寺南遺跡
21 神戸銅鐸出土地
22 野田銅鐸出土地（詳細位置不明）
23 坂本山古墳群
24 平田古墳群
25 長谷山古墳群
26 殿村1号墳
27 君ヶ口古墳
28 鎌切・稲葉古墳群
29 池の谷古墳
30 藤谷埴輪窯
31 久居古窯跡群
32 法ヶ広埴輪窯

第１図　遺跡位置図（１：50,000）　　**国土地理院「津西部」「津東部」１：25,000より**

特筆に価する。

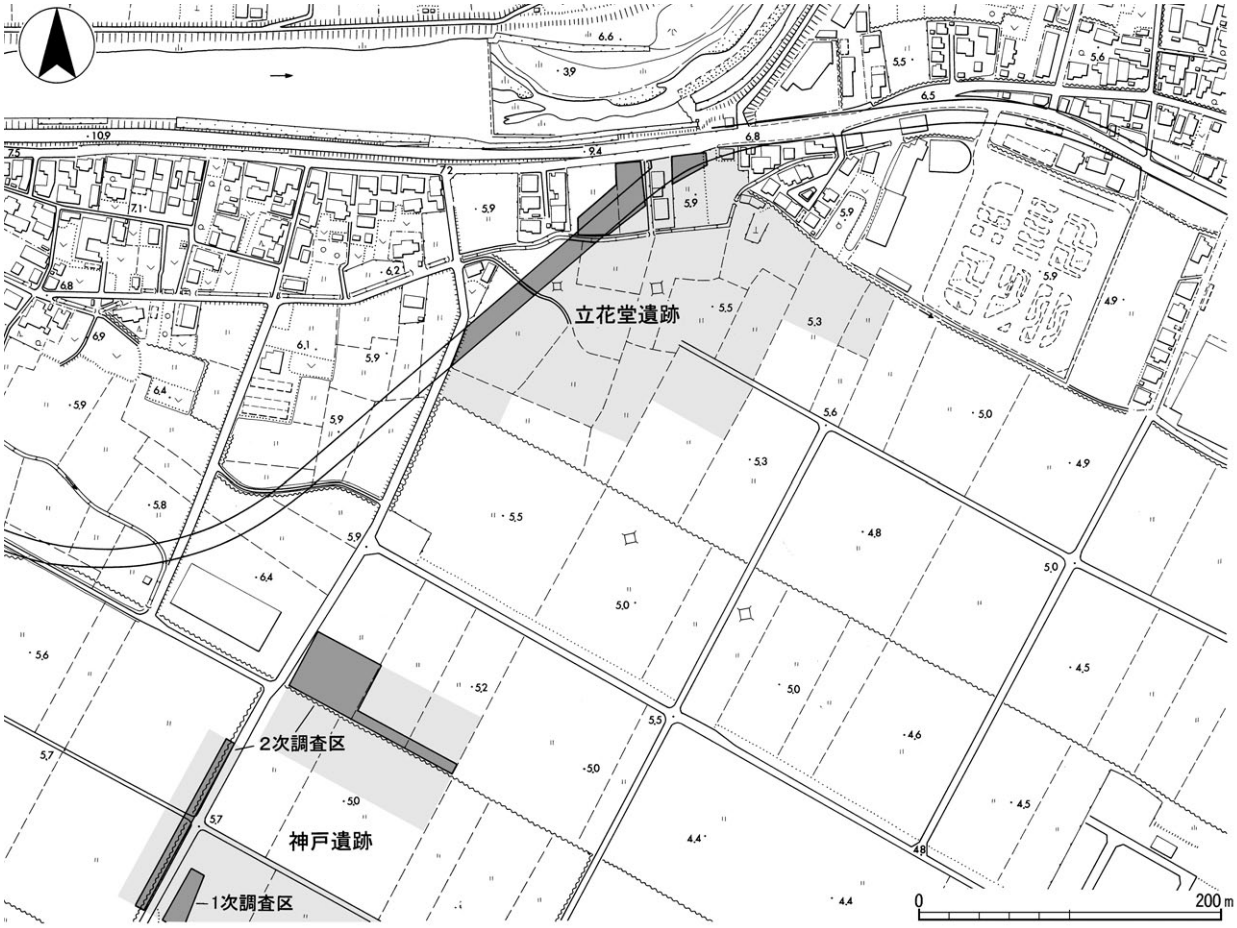
中期後葉には丘陵部への集落形成がさらに進展し、長岡丘陵には長遺跡[8]（竪穴住居100基以上）や山籠遺跡[9]（竪穴住居10基）など狭い範囲に多数の竪穴住居が集中して営まれた集落が見られる。これらの遺跡は、後期には廃絶しており、納所遺跡の盛衰とほぼ同じような状況を呈することは注目される。つまり、安濃川下流域に形成された弥生中期集落は、地域の拠点集落である納所遺跡の動向と、少なからぬ関係を有しながら存在した可能性が考えられる。

後期に入ると、岩田川北岸の半田丘陵を中心に新たな集落形成の動きが広がるとともに、方形台状墓などの墳墓が造営される。また、半田丘陵に入り込んだ谷筋からは、銅鐸が出土している（神戸銅鐸出土地）。

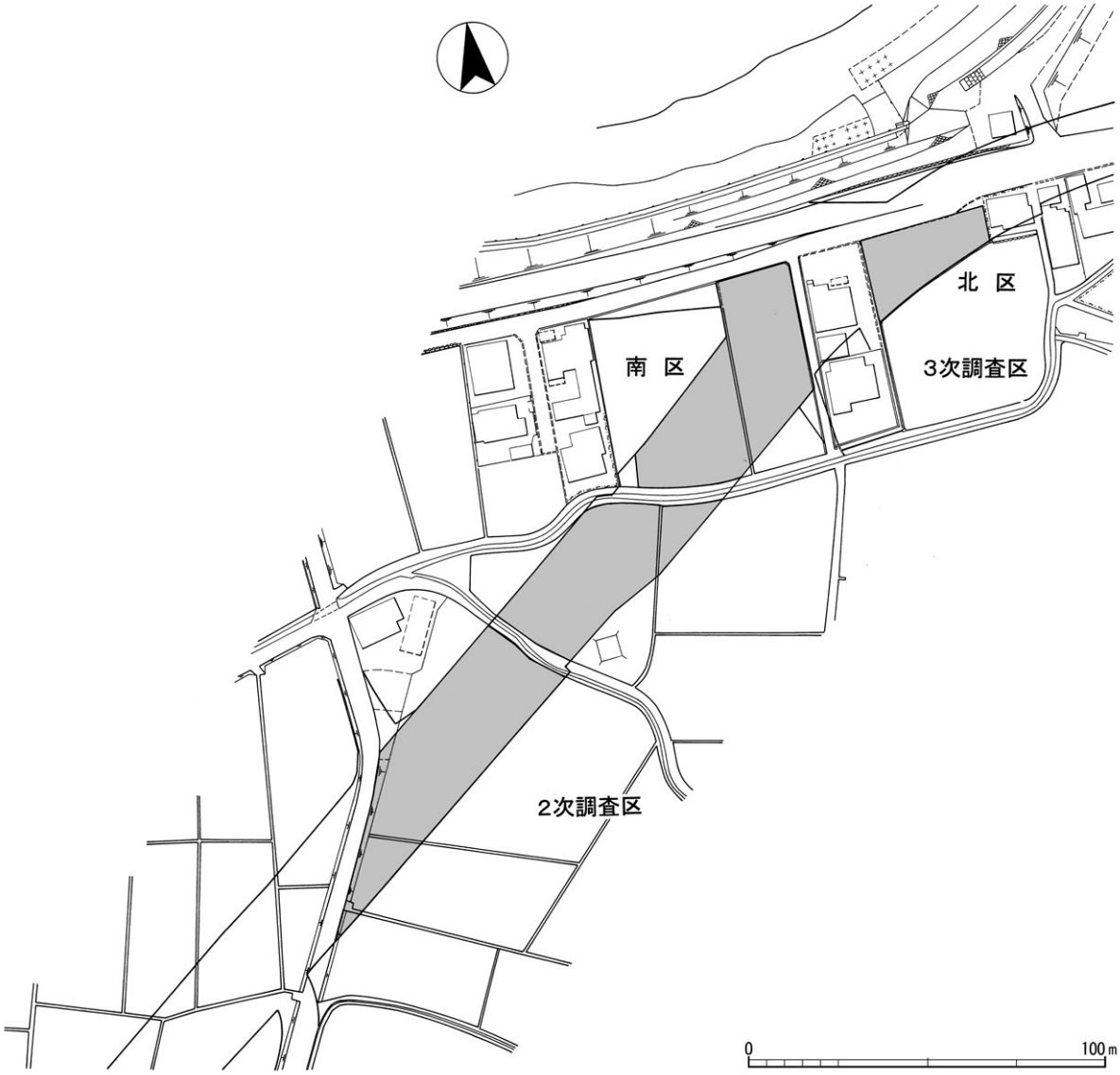
〈古墳時代〉　安濃川水系の古墳時代の集落は、現在知られているものに関してはそれほど大規模なものは無く、比較的遺構密度も薄いものが中心である。古墳・墳墓に関しても、前期のものは岩田川水系の坂本山古墳群[10]があるが、小規模である。また、安濃川北岸の位田遺跡[11]や南岸の高松Ｃ遺跡[12]などにも古墳時代初頭の墳墓（方形周溝墓）が営まれるが、これらのあり方は弥生時代の墳墓群の延長にある。

安濃川水系の明瞭な首長墓は、中期中葉頃になって中流域南岸に出現する明合古墳[13]（全長81mの造出付き方墳）の築造に始まる。また、安濃川水系とはやや離れるが、入り海（潟湖）を望む丘陵上に中勢地域最大の前方後円墳、池の谷古墳[14]がある。当地域における首長墳は、５世紀頃を境に明瞭に把握できるようになる。

この後、５世紀後葉以降も、安濃川水系では半田丘陵や長谷山から派生した丘陵部を中心に前方後円墳の築造が続き、小規模ながら安定した首長墓の系譜をみることができる[15]。また集落遺跡としては、替田遺跡で少量ではあるが、前期からの遺構や遺物が確認されており、集落形成があったことが指摘さ



第２図　遺跡地形図（１：5,000）



第３図　調査区配置図（１：2,000）

れている[16]。前述した首長墓の母体として認識できる集落遺跡としては、池の谷古墳がさらに南方の台地上に展開する高茶屋大垣内遺跡[17]との関係が考慮される以外、まだ不明な部分が大きい。

前方後円墳の廃絶後も、首長墓に連なる古墳が確認されており、そのひとつが安濃川下流北岸の長岡丘陵端部に所在する鳥居古墳[18]である。この古墳は、家形石棺を内包した横穴式石室墳である。初葬時か追葬時かはともかく、金銅製押出仏など注目すべき出土品があり、初期仏教の地方浸透を考える上でも重要である。

また、安濃川河口に近い津市中河原の地蔵院には、家形石棺を用いた石棺仏がある。これなどは鳥居古墳からつながる首長墳に用いられた可能性も考えられる。

〈奈良・平安時代〉　安濃川水系の地域は、大部分が古代安濃郡に含まれる。安濃郡には『和名類聚抄』によると建部・英太・長屋・跡部など九郷が存在したとされ、南河路や野田集落付近は岩田郷に属していたと推定されている。現在のところ、安濃郡衙に相当するような官衙遺跡や、確実に奈良時代以前に遡る古代寺院は、当地域では確認されていない。しかし、納所遺跡から断片的ではあるが古代瓦の出土が見られるほか、長岡丘陵の東端部に近い津市広明町からもかつて軒丸・軒平瓦が発見されており[19]、広明町瓦窯跡（四天王寺瓦窯跡）として瓦窯の可能性が考えられている。前述の鳥居古墳に近い位置にあり、郡家や古代寺院を含む古代安濃郡の中枢施設

に関わる遺跡の確認は、今後に残された大きな課題である。

古代の集落としては、見当山丘陵南の宮ノ前遺跡や沖積地中央に位置する蔵田遺跡、替田遺跡などで奈良時代までの集落が確認されている。また、平安時代以降では、安濃川北岸の自然堤防上にある位田遺跡やその対岸の弐ノ坪遺跡、神戸遺跡[20]、安濃川を上流に少し遡った南岸にある浄土寺南遺跡[21]などで集落が認められる。このうち浄土寺南遺跡では、規則性をもった平安時代後期の掘立柱建物が見つかっており、円面硯や緑釉陶器の出土など、公的機能をもった性格も考えられている。

また、安濃川流域は近年まで条里地割が良好に残っていた地域で、N30°Eの条里プランの復元[22]が提示されている。弐ノ坪遺跡の調査でも、平安時代前期の掘立柱建物が、前述した条里プランに沿って整然と並んでいる状況が確認されている。

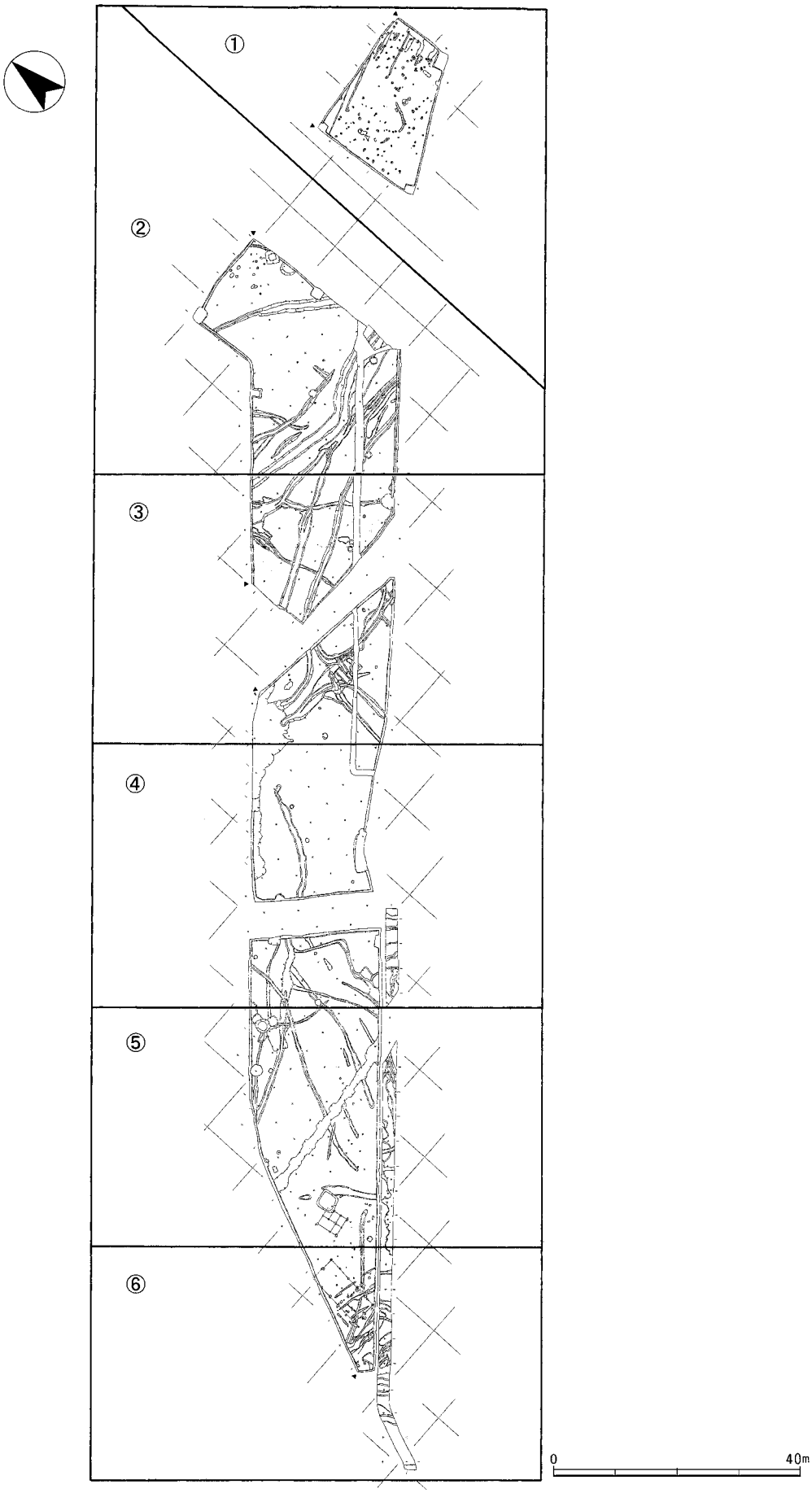
さらに、神戸丘陵の西端には古代の駅である市村駅の所在地と想定されている本馬領遺跡がある[23]。

〈鎌倉・室町時代〉　当地域で、鎌倉・室町期の遺構や遺物が確認された遺跡はいくつかあるが、注目できるのは立花堂遺跡の南西方向に位置する里前遺跡[24]である。里前遺跡は岩田川北岸にあって、三泗川が岩田川に流入する北西側に立地する。集落の中心域と目される微高地部分は大部分が調査区外であるが、三泗川沿いの調査区からは未使用品を含む大量の墨書山茶椀が出土している。これらは、岩田川を遡上して内陸へ物資を荷揚げする内水運の拠点地としての性格や、墨書の内容から年貢集配に関わる機能などが想定されている。これらは、河口部の安濃津から搬送されてきたと考えられている[25]。

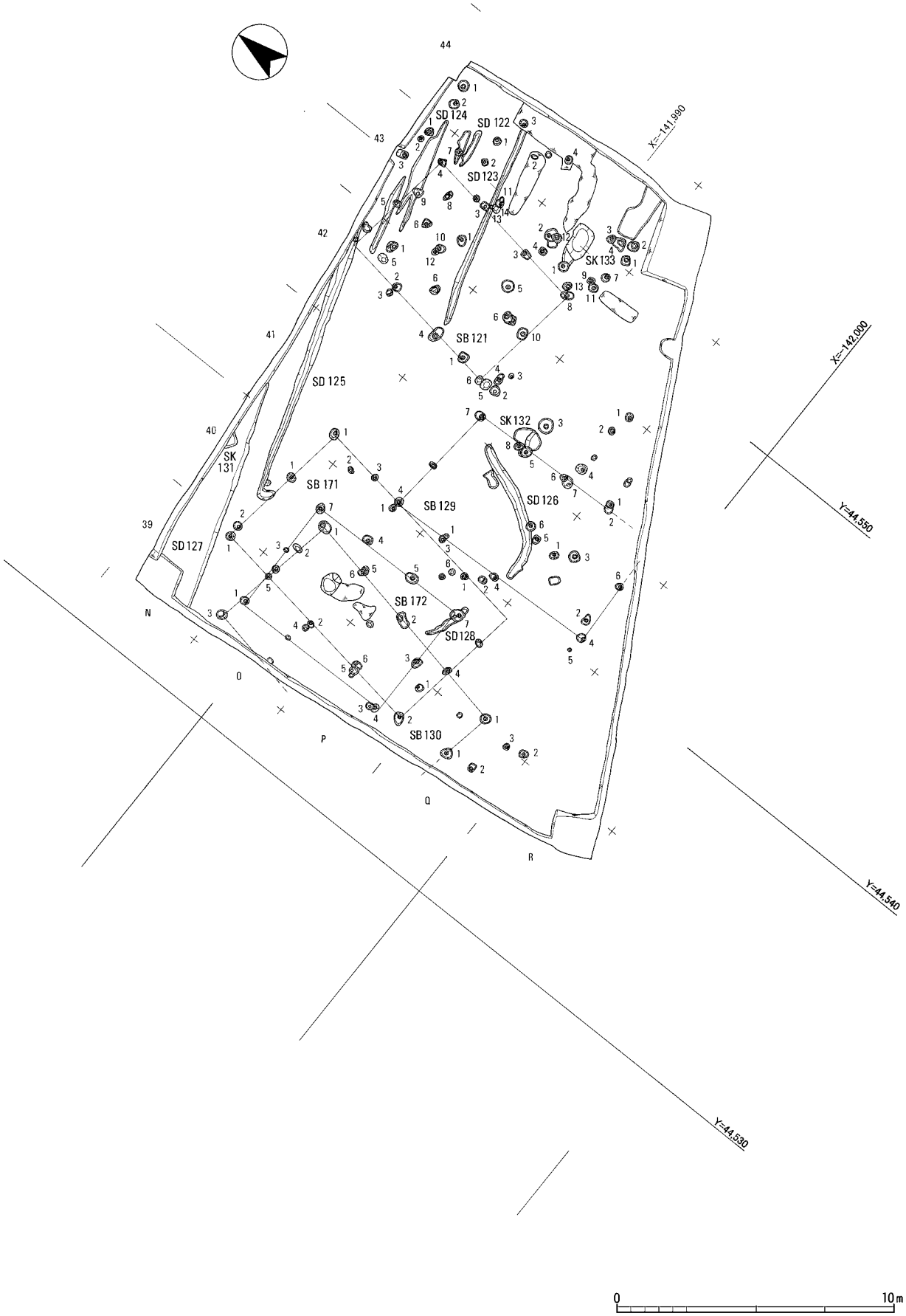
さて、天禄元年（973）に、安濃郡は伊勢神宮の神郡となっている[26]。そのため当地には、神宮関係の安濃政所があった。また、御薗・御厨なども存在していた。立花堂遺跡の近傍には「野田」という地があり、中世には神宮領荘園が存在していたようで、『神宮雑例集』（13世紀初頭頃成立）の「野田御薗」、『神鳳鈔』（14世紀後半頃成立）の「野田御厨」に相当すると考えられる[27]。これにあたる集落の比定はまだ定まったものはないが、これまで行われた安濃川流域の発掘調査の結果とも総合して、今後、より豊かな地域像が提示されることが期待される。

【註】

（1）三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』（1999年）
（2）三重県埋蔵文化財センター『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』（1993年）
（3）三重県教育委員会『納所遺跡－遺構と遺物』（1980年）
（4）津市教育委員会『上村遺跡発掘調査報告』（1972年）
（5）三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第４次）発掘調査報告』（2004年）
　三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第５次～第８次）発掘調査報告』（2007年）ほか
（6）三重県埋蔵文化財センター『弐ノ坪遺跡発掘調査報告』（2005年）
（7）前掲註（2）
（8）三重県埋蔵文化財センター『長遺跡発掘調査報告』（2000年）
（9）三重県埋蔵文化財センター『大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』（1995年）
（10）津市教育委員会『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』（1970年）
（11）三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』（1993年）
（12）津市教育委員会「高松Ｃ遺跡発掘調査報告」（『津市埋蔵文化財センター年報』３　1999年）
（13）安濃町史編纂委員会『安濃町史資料編』（1994年）
（14）藤田充子「津市池の谷古墳出土の円筒埴輪」（『三重の古文化』81　三重郷土会　1999年）
（15）鎌切古墳群など。
（16）三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第５次～第８次）発掘調査報告』（2007年）
（17）三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』（2000年）
（18）浅生悦生「鳥居古墳と押出仏」（『津市の文化財』津市教育委員会　1989年）
（19）鈴木敏雄『三重県古瓦図録』（1993年）
　三重県の古瓦刊行会『三重県の古瓦』（1997年）
（20）三重県埋蔵文化財センター『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』（2001年）
（21）三重県教育委員会『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（1981年）
（22）仲見秀雄・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』（東京堂出版　1979年）
（23）岡田　登「伊勢国市村駅家所在地考」（『皇學館論叢』13－6　1980年）
（24）三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』（2002年）
（25）伊藤裕偉「補論１　安濃津と物資集散機能」（『中世史研究叢書10　中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院　2007年）
（26）「神宮雑例集」（『群書類従』第１輯）
（27）平凡社『日本の地名』（1988年）

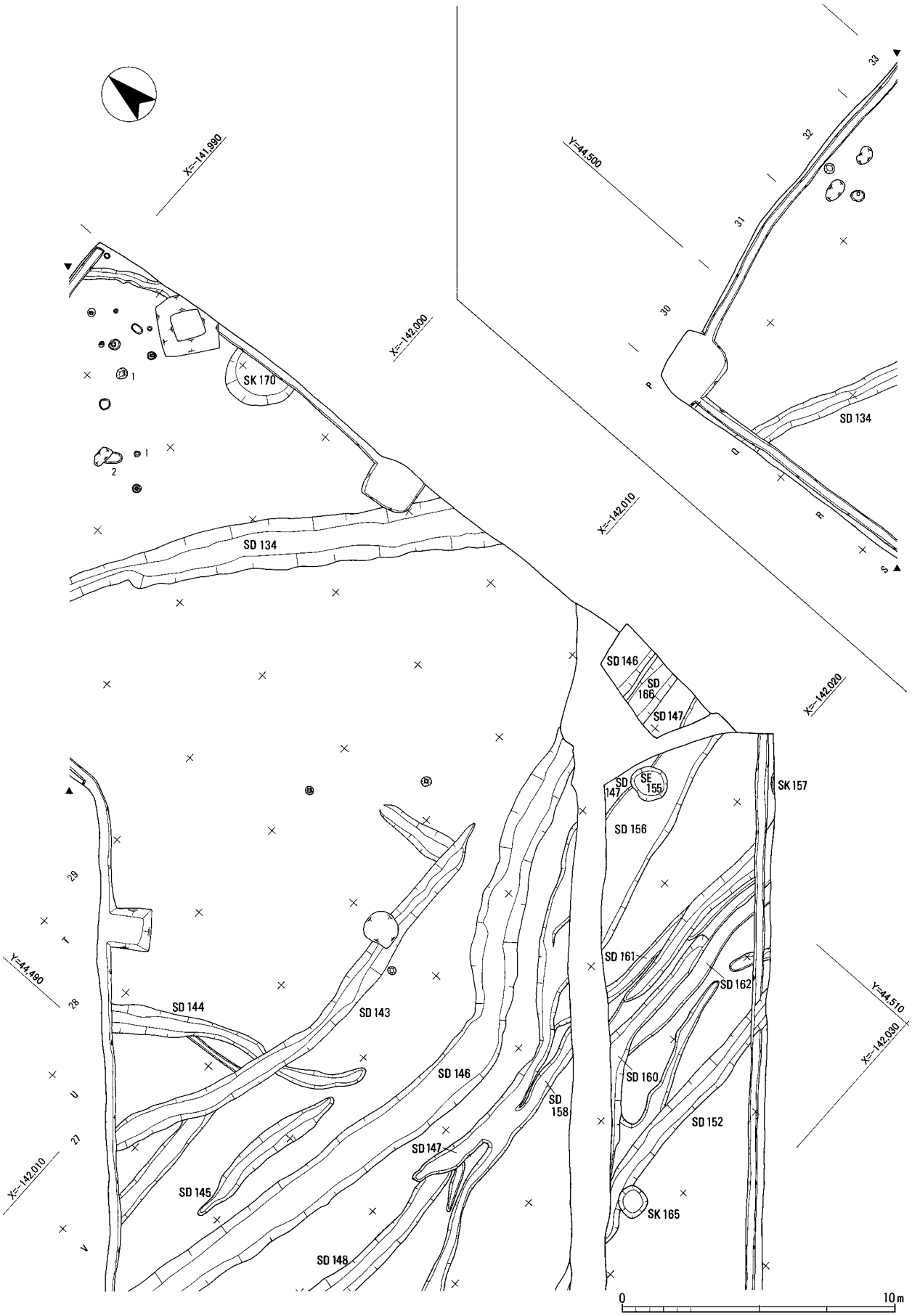


第４図　遺構平面図（①～⑥）紙割図（１：1,000）

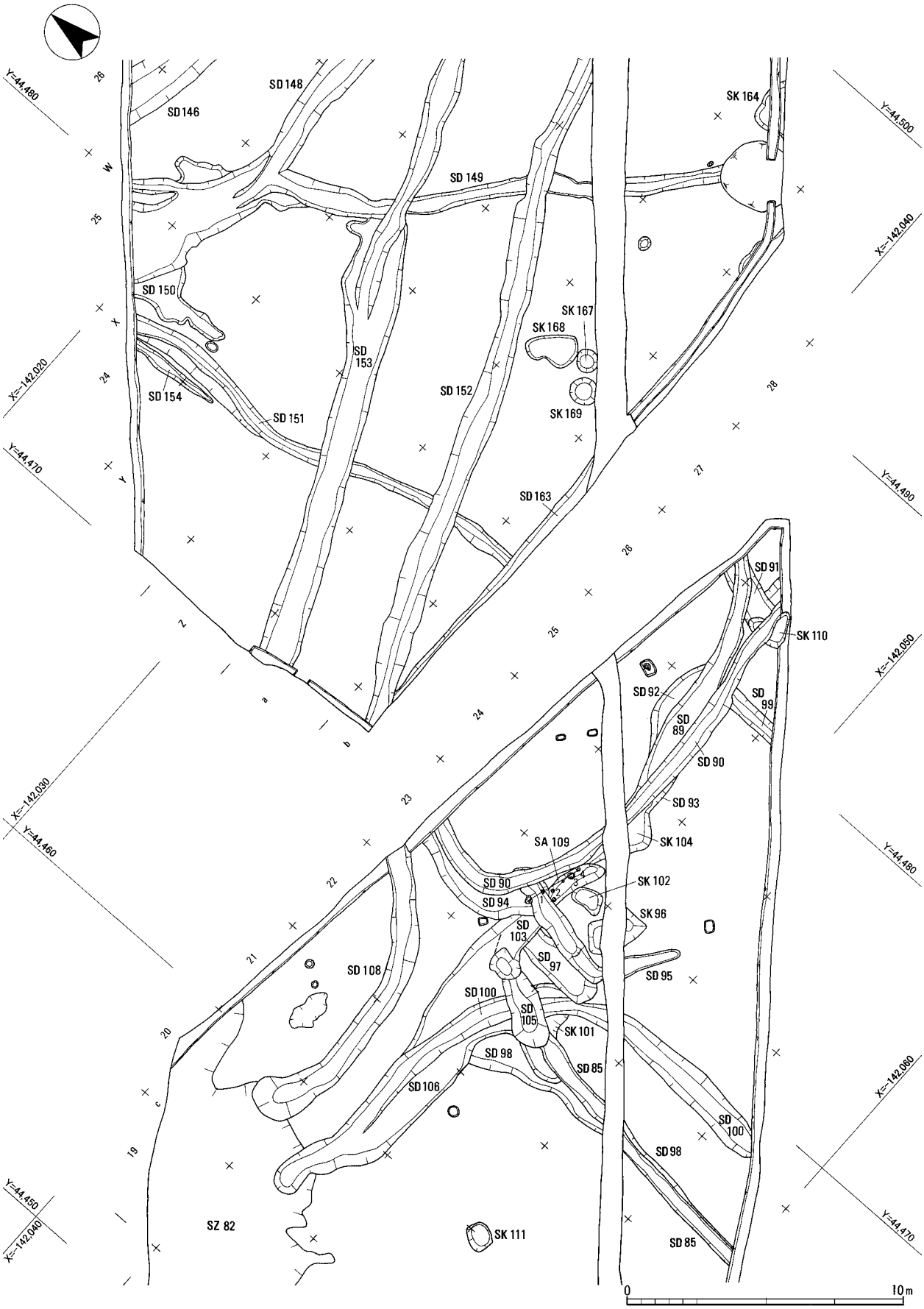


0　　10m

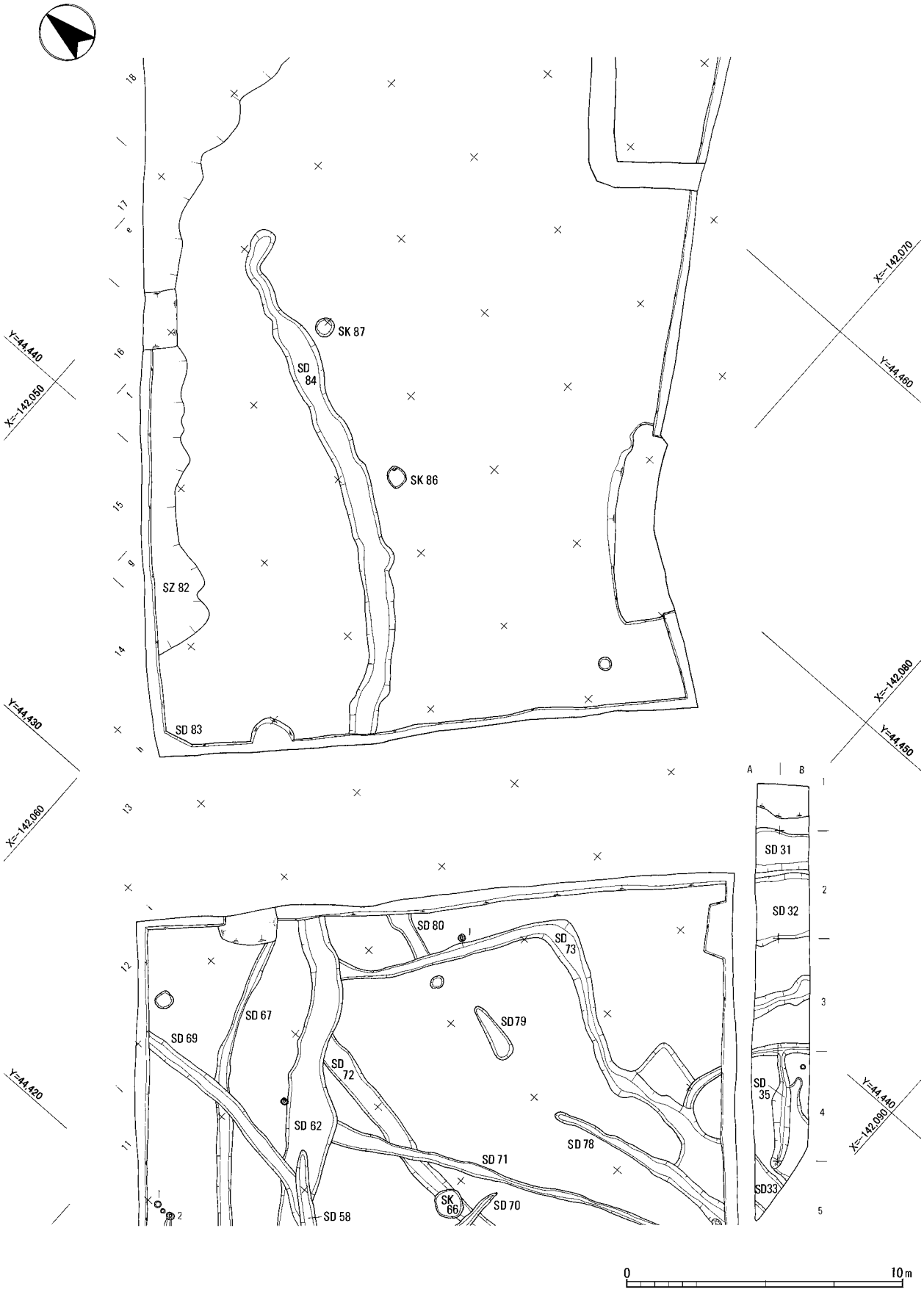
第５図　遺構平面図①（１：200）



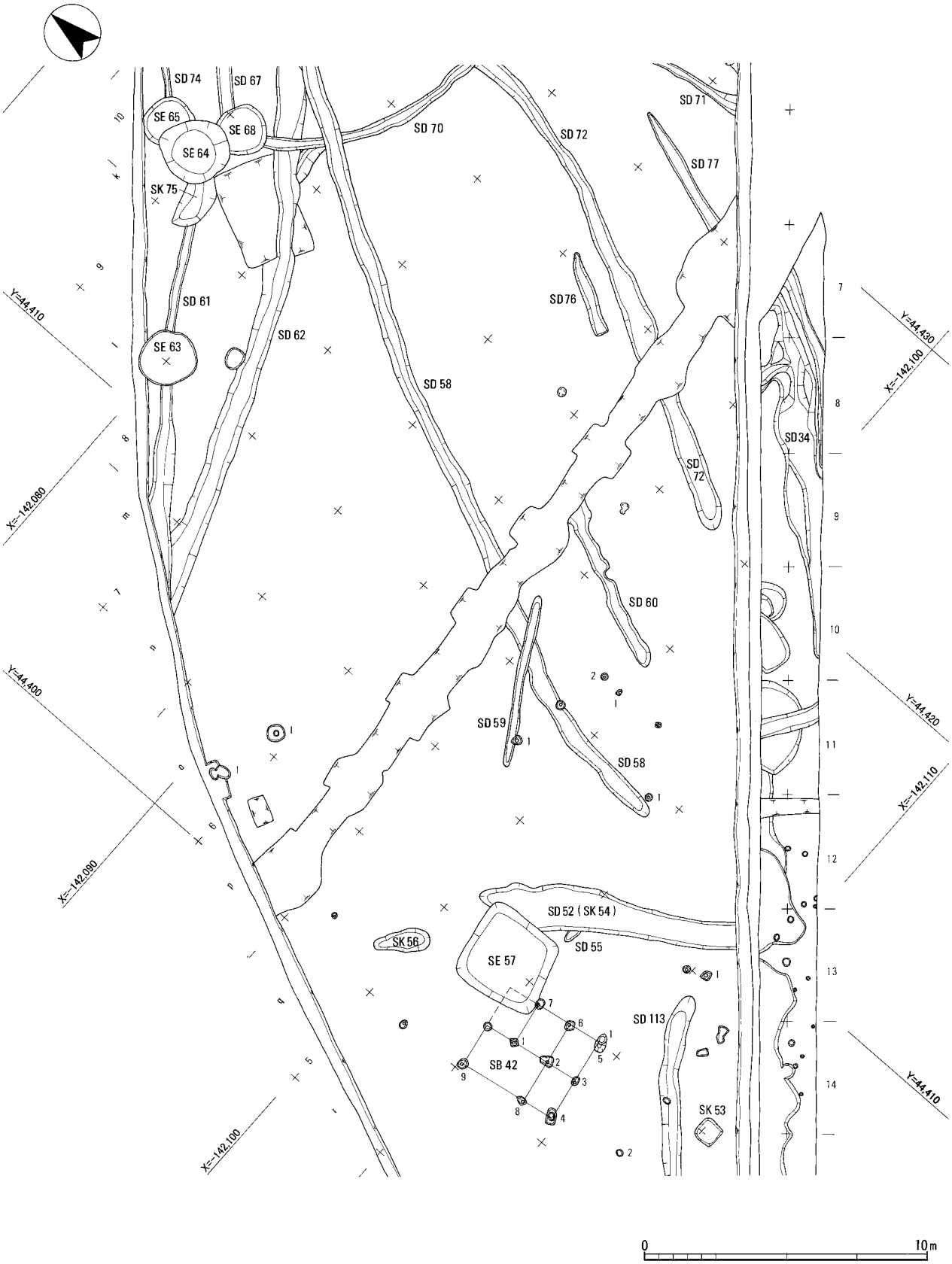
第６図　遺構平面図②（１：200）



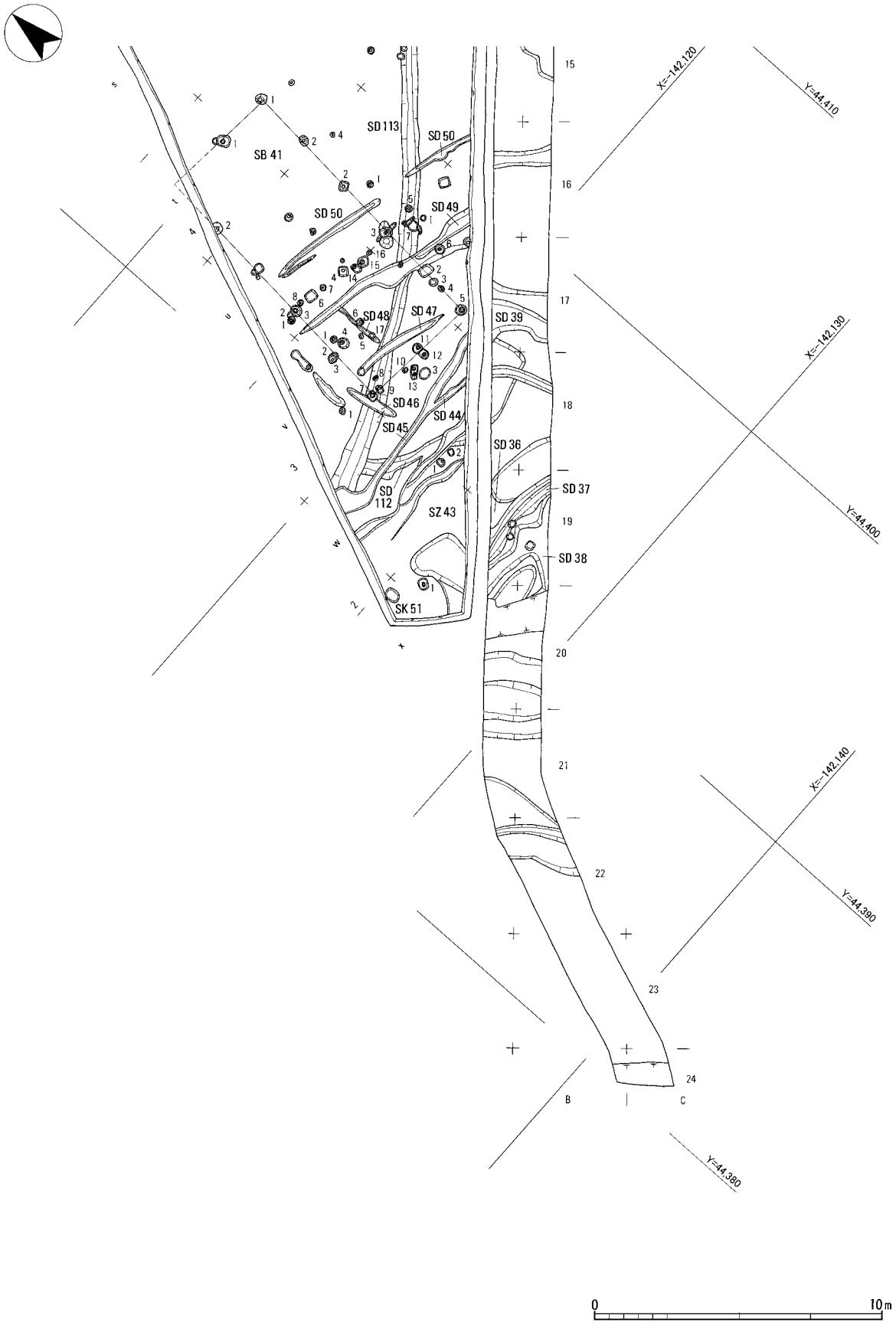
第７図　遺構平面図③（１：200）



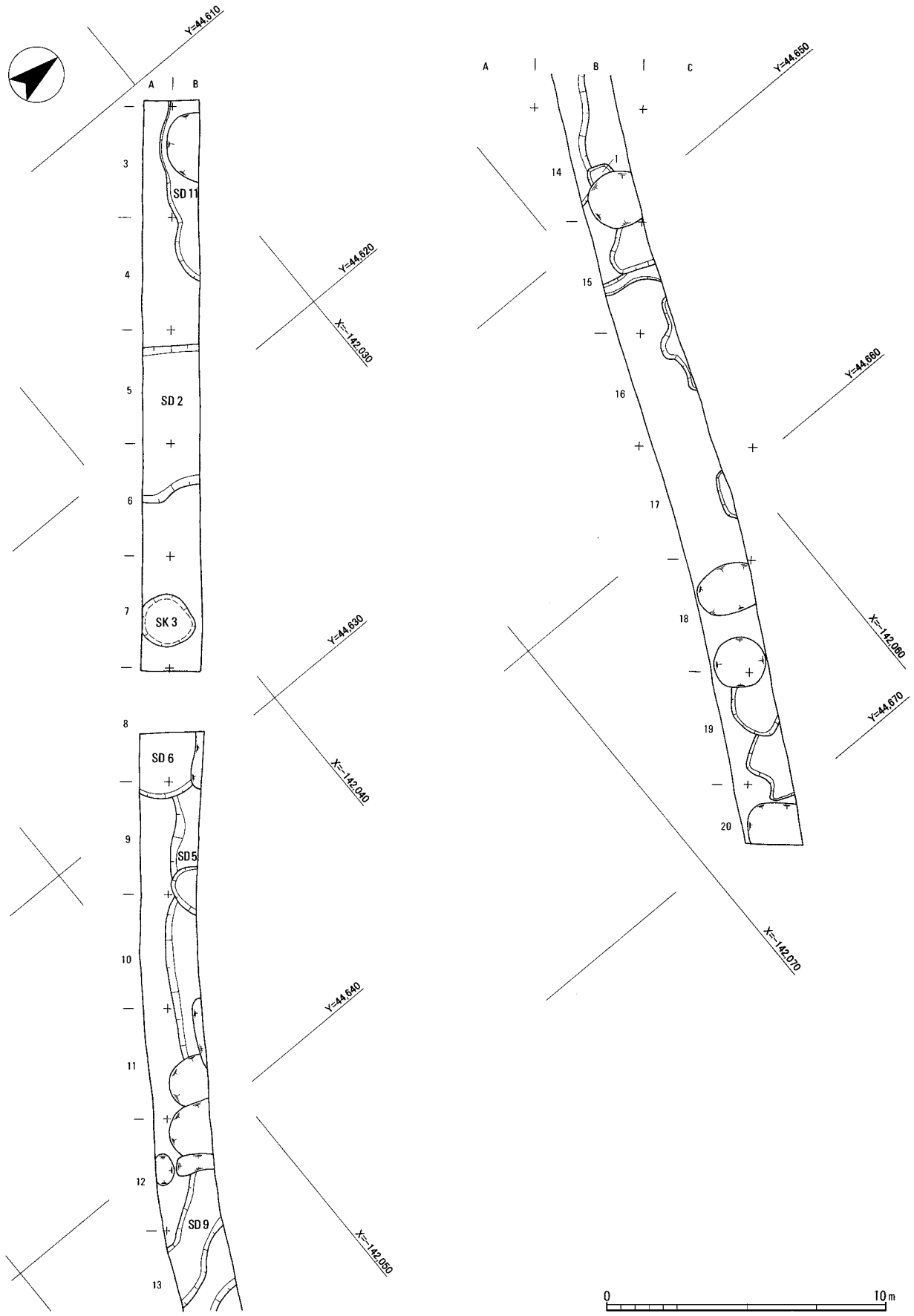
第８図　遺構平面図④（１：200）



第９図　遺構平面図⑤（１：200）



第10図　遺構平面図⑥（1：200）



第11図　第１次　１地区遺構平面図（１：200）

Ⅲ　層位と遺構

1　調査区の基本層位

調査区は、安濃川と岩田川に挟まれた、標高約5.9mの沖積地に位置し、行政上は津市南河路に所在する。現況は水田である。

調査区の層序は、第１層が耕作土、第２層が床土、第３層が基本的に褐色系のシルトでこの層が遺物包含層に相当する。第４層が灰黄褐色系のシルトで、この層上面で古代末の遺構を検出した。また第５層が黄灰色～黒褐色系のシルトで、第３次調査の北区ではこの層上面で再度検出を行った。標高約4.2m前後で灰色粘土層が確認できる。

2　検出した遺構（１次）

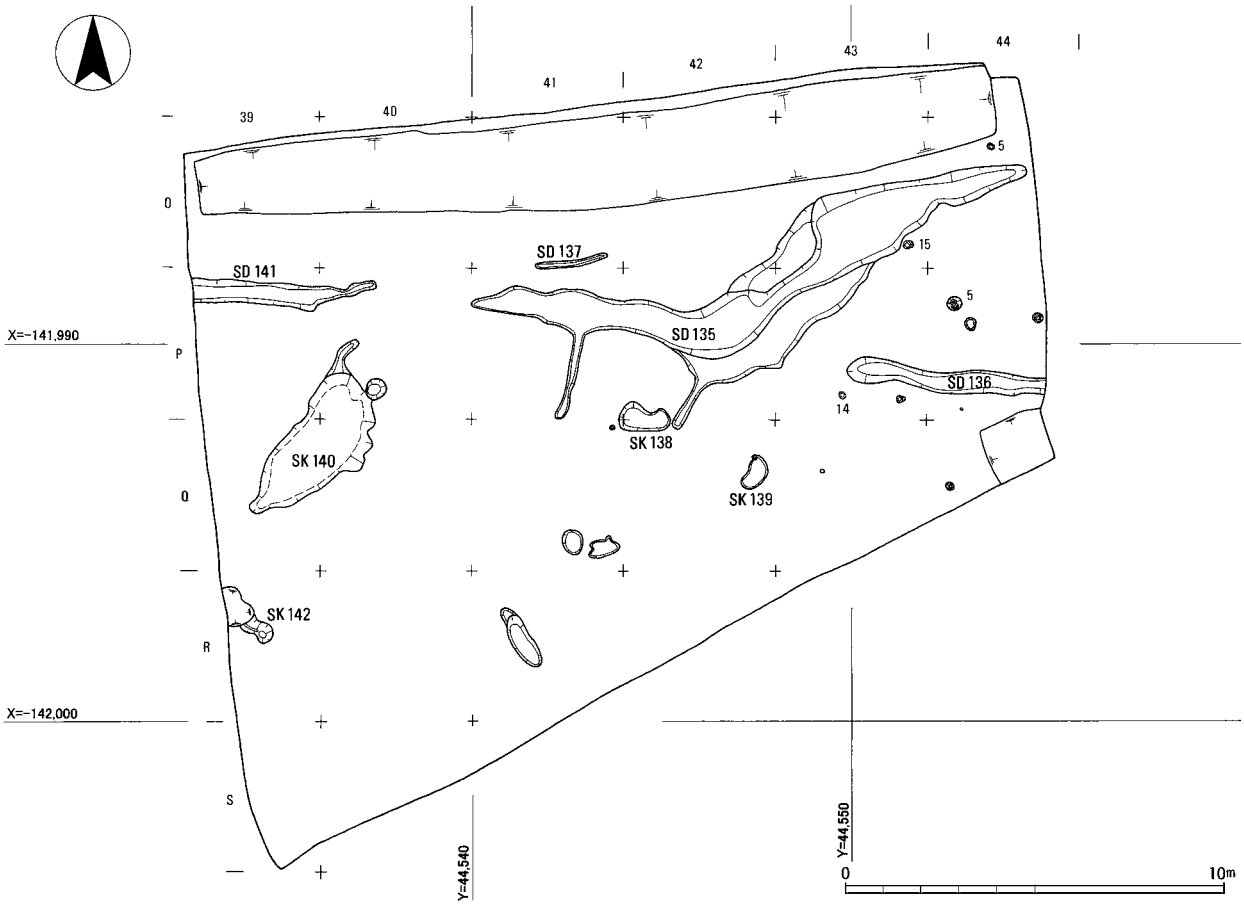
第１次調査区は、２箇所に分かれており、調査時に１地区・２地区とした。いずれも水路部分の幅２mのトレンチ調査である。

１地区では溝を検出したが、それ以外はカクランが非常に多い。調査当時井戸と認識して、遺構番号を付与していたものも、そのほとんどが近現代のカクランであることが判明した。第２次調査区の東側に隣接する２地区ではピットが少数検出されたが、やはり溝が多い。以下、主な遺構について概述する。個々の遺構については後掲の遺構一覧（第３表）を参照されたい。

溝ＳＤ３９　２地区の中央付近で検出した遺構である。検出できた溝の幅は約２m、検出面からの深さ約20cmである。北側がテラス状になっている。

埋土からは、Ｓ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」）のＥ類に相当するものや、須恵器などが出土しており、古墳時代後期の溝であると考えられる。

溝ＳＤ９　１地区の中央付近、Ｂ12・13グリッドで検出した遺構である。確認できた溝幅は約175cm、



第12図　第２次　北区（下層）遺構平面図（１：200）

検出面からの深さ約15cmである。西側に平行する溝があり、調査中別遺構として掘削しているが、同一である可能性も考えられる。また東側のＳＤ５につながることも考えられるか。

灰釉陶器などが出土しており、平安時代後半の遺構と思われる。

３　検出した遺構（２次）

今回の調査区で検出した遺構は、古墳時代後期～中世にかけてのものである。調査区南部においては、古代の建物跡を検出したが、その検出面とした層に遺物が混入していたため、遺構掘削終了後に再度重機で20～30cmほど下げて、下層遺構の確認を行い、古墳～古代初期のものと思われる溝を２条検出した。

以下に主な遺構について概述する。個々の遺構については遺構一覧（第２～４表）を参照されたい。

ａ　古墳時代後期

溝ＳＤ６２　調査区中央、ｍ８・９グリッド付近で検出した遺構である。溝幅１～1.7m、検出面からの深さ20～30cmで、壁は緩やかに立ち上がる。南西～北東方向の溝で地形に沿って緩やかに蛇行する。おそらく北側の調査区で検出したＳＤ84につながると思われるが、ＳＤ62として検出したほうが深く、遺物の出土量も多い。

埋土からはＳ字甕（27～29）をはじめ、須恵器の杯（41）などが出土している。

ｂ　奈良・平安時代

井戸ＳＥ５７（第14図）　調査区中央からやや南寄りのｒ６・７グリッド付近で検出した遺構である。平面は方形で東西約３m、南北約3.2m、検出面からの深さ約1.4mである。すり鉢状に掘削されており、南側にはテラスがある。第５および６層（第14図の土層番号に対応）の細粒砂からは常に湧水が見られ、遺構の掘削途中から常に滞水状態であった。また、枠内埋土には２cmほどの小石が含まれていた。

掘方の中央北寄りに、横板を井籠状に組んだ井戸側（報告番号84～105）を確認した。横板はすべてスギ材で、その両端に近いところに両方向から切り欠いて仕口を設け、それを交互に組み合わせる「相欠き仕口横板組」である。最下段の東西に据えた２枚については、両端の仕口が片側からのみである。内法は約1.0m、枠板は確認できたもので６段分である。底部には枠板の沈下を防ぐような施設や底板はなく、最下段の板を直接掘方に据えていた。この井戸施設は、宇野隆夫氏の井戸分類でＢⅥ類横板井籠組井戸のｄ類に相当するものである[(1)]。

出土遺物は非常に少ないが、土師器の皿・杯、須恵器杯などが出土しており、奈良時代後半に廃絶した井戸であると考えられる。

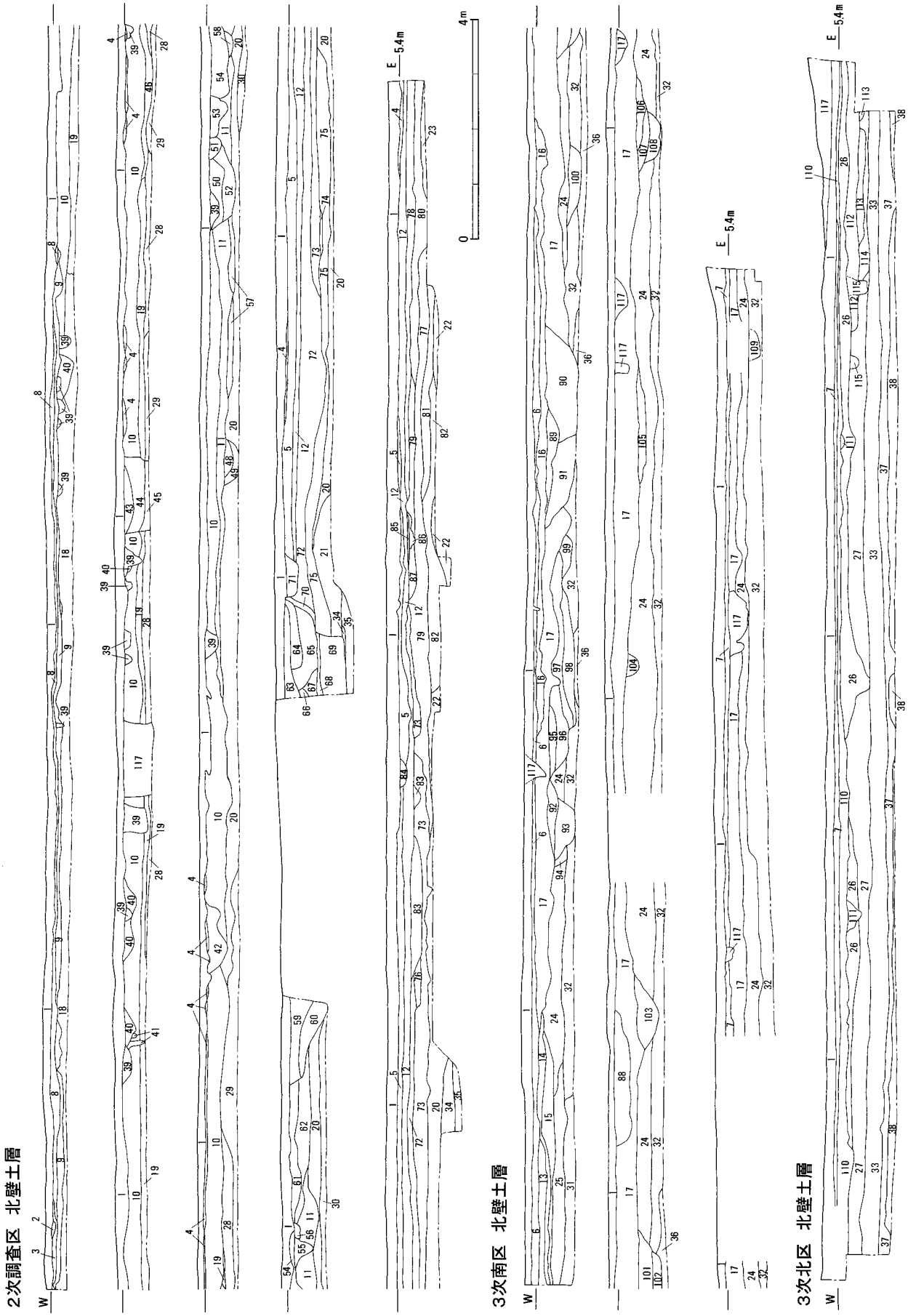
溝ＳＤ５２　調査区の南部、ｓ７・８グリッド付近で検出した遺構である。ＳＥ57の掘方と重複し、その付近で途切れる。溝幅は約1.2m、検出面からの深さは約10cmである。埋土からの出土遺物は、相対的に多く、暗文の施された土師器の皿や杯をはじめ、甕・甑、また外面に「刀自女」の墨書が見られる須恵器蓋（45）が出土していることが特筆される。奈良時代後半のものか。

土坑ＳＫ５４　調査区の南部、ｒ７グリッドで検出した遺構である。検出時、埋土の僅かな差でＳＤ52と別遺構として掘削を行ったが、最終的には同一遺構であると考える。

掘立柱建物ＳＢ４１（第15図）　調査区の南端、ｔ４・５グリッド付近で検出した遺構である。南北５間、東西２間の南北棟の建物で、軸方位はＮ５°Ｅである。柱間は２～2.2mで、柱穴の大半は、直径30cm程度の柱痕を持つ。柱穴からは黒色土器や灰釉陶器が出土しており、平安時代後期の建物であると考えられる。

掘立柱建物ＳＢ４２（第15図）　調査区中央から南寄りのｓ６グリッド付近で検出した遺構である。東西２間、南北３間の総柱建物であると考える。確認できないピットも存在したため、庇付き建物の可能性も考慮に入れ、現地で精査を行ったが、それに見合う柱穴は検出できなかった。軸方向はＮ５～６°Ｗで、ＳＢ41とは方向を異にする。柱間は1.2～1.6mで、各柱穴には直径約30cmの柱痕が確認できる。また、ＳＥ57と重複しており、平面の観察からＳＥ57の掘方よりも後出することがいえる。

柱穴からは少量の土器片しか出土していないが、ｓ６グリッドpit６では柱材（208）が残存していた。断面を観察すると、柱材は斜立しており、抜き取り

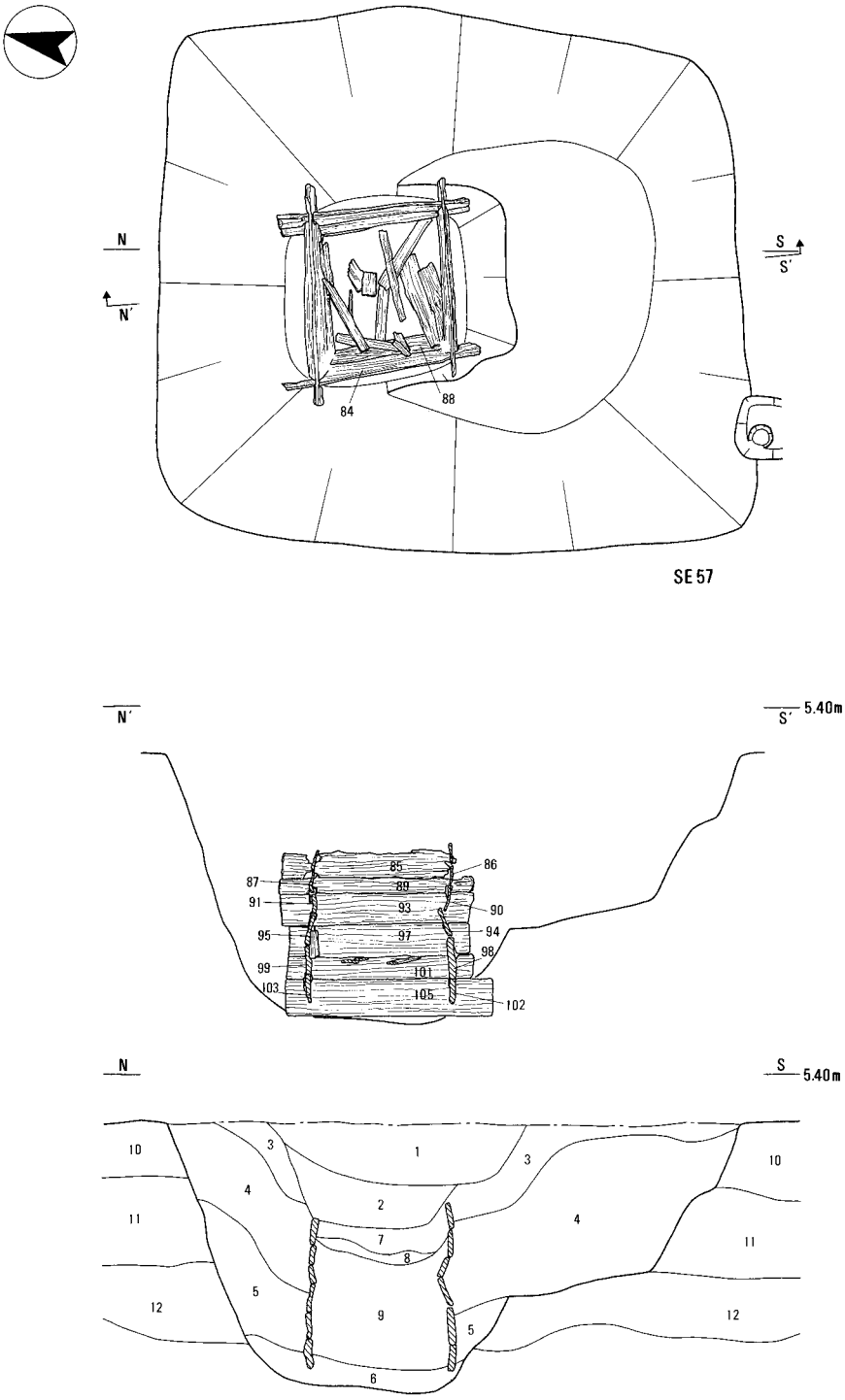


第13図　調査区土層断面図（1：100）

耕作土	1	7.5Y2/1	黒色土(耕作土)
床土	2	2.5Y3/1	黒褐色シルト(床土)
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(長石・雲母多く含む、床土)
	4	7.5YR4/6	褐色シルト(床土)
	5	10YR3/1	黒褐色シルト(床土)
	6	2.5Y7/4	浅黄色シルト(床土)
	7	10YR6/4	にぶい黄橙色砂質シルト(粗砂沈殿箇所あり、床土)
包含層	8	10YR4/1	褐灰色シルト(よくしまる、遺物含む)
	9	10YR4/1	褐灰色シルト
	10	10YR4/2	灰黄褐色シルト(植物遺体少量含む)
	11	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト
	12	10YR3/1	黒褐色シルト
	13	2.5Y6/2	灰黄色シルト(粘性あり、鉄分多く含む、遺物含む)
	14	2.5Y7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む)
	15	2.5Y6/3	にぶい黄色シルト(褐灰色土ブロック混じる)
	16	2.5Y7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、遺物含む)
	17	10YR4/4	褐色シルト(粘性あり、遺物含む)
検出面	18	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(検出面)
	19	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(検出面)
	20	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト(雲母多い、検出面)
	21	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト(検出面)
	22	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト(検出面)
	23	10Y4/1	灰色粘質シルト(検出面)
	24	10YR4/2	褐灰色砂質シルト(検出面)
	25	10YR5/2	灰黄褐色シルト(検出面)北区上層
	26	10YR6/2	灰黄褐色シルト(粘性あり、検出面)
	27	10YR4/4	褐色シルト(粘性あり、検出面)
	28	10YR3/3	暗褐色シルト(粘性あり、検出面)
検出面下層	29	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト(10YR4/4褐色粘質シルトブロック混じる)
	30	10YR2/2	黒褐色シルト(炭化物少量含む)
	31	2.5Y3/2	黒褐色シルト
	32	2.5Y6/1	黄灰色シルト(粘性あり、鉄分多く含む)
	33	2.5Y3/2	黒褐色シルト(粘性あり、砂が部分的に混じる)北区下層
	34	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト(粘性あり)
	35	2.5Y4/3	暗オリーブ褐色粘土
最下層	36	2.5Y2/1	黒色粘土
	37	2.5Y7/1	灰白色粘質土(粘性あり、鉄分含む)
	38	10YR4/2	灰黄褐色シルト(よくしまる、砂含む)
	39	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土(粘性あり、鉄分含む)
遺構埋土	40	2.5Y3/1	黒褐色シルト
	41	10YR3/1	黒褐色シルト
	42	10YR2/1	黒色シルト
	43	10YR3/1	黒褐色シルト(2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック混じる)
	44	10YR4/1	褐灰色シルト
	45	10YR3/2	黒褐色砂質シルト
	46	10YR3/1	黒褐色砂質シルト
	47	2.5Y3/1	黒褐色シルト(SD61埋土)
	48	2.5Y4/1	黄灰色細砂(2.5Y3/3暗オリーブ褐色土混じる)
	49	2.5Y4/1	黄灰色細砂
	50	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト
	51	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト
	52	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト
	53	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト
	54	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト
	55	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト(遺物含む)
	56	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト(遺物含む)
	57	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/1黄灰色砂質シルト斑に混じる)
	58	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト
	59	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(鉄分多く含む)

遺構埋土	60	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(粘質あり、鉄分含む)
	61	10YR3/2	黒褐色シルト(炭化物少量含む)
	62	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト
	63	10YR4/1	褐灰色細粒砂(SD83埋土)
	64	2.5Y3/1	黒褐色細粒砂(SDD83埋土)
	65	2.5Y4/1	黄灰色細粒砂(SD83埋土)
	66	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(砂多く混じる、SD83埋土)
	67	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色砂質シルト(SD83埋土)
	68	10Y3/1	オリーブ黒色中粒砂(SD83埋土)
	69	10Y4/1	灰色粘質シルト(SD83埋土)
	70	10YR4/2	灰黄褐色細粒砂(SD83埋土)
	71	10YR3/1	黒褐色砂質シルト
	72	10YR5/2	灰黄褐色砂質シルト(SZ82埋土)
	73	10YR4/1	褐灰色細粒砂(SZ82埋土)
	74	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色細粒砂(SZ82埋土)
	75	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(SZ82埋土)
	76	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト(SZ82埋土)
	77	10YR4/2	灰黄褐色細粒砂(鉄分含む、遺物含む、SZ82埋土)
	78	10YR4/1	褐灰色シルト(遺物含む、SZ82埋土)
	79	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト(SZ82埋土)
	80	2.5Y4/1	黄灰色細粒砂(SZ82埋土)
	81	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(SZ82埋土)
	82	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土(SZ82埋土)
	83	2.5Y5/1	黄灰色砂質シルト
	84	2.5Y5/1	黄灰色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色細砂ブロック混じる)
	85	10YR5/1	褐灰色砂質シルト
	86	10YR4/1	褐灰色シルト
	87	10YR4/1	褐灰色砂質シルト
	88	2.5Y5/3	黄褐色シルト(粘性あり、遺物含む)
	89	2.5Y6/2	灰黄色シルト(遺物含む、炭化物混じる)
	90	10YR3/1	黒褐色シルト(遺物多く含む、SD146埋土)
	91	5Y6/1	灰色砂質シルト(底部に砂層、溝埋土か)
	92	10YR7/1	灰白色砂質シルト(灰色土混じる、SD151埋土)
	93	10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、砂質強い, SD151埋土)
	94	10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分少量含む、SD154埋土)
	95	10YR6/2	灰黄褐色シルト(粘性あり、遺物含む、SD148・149埋土)
	96	10YR6/1	褐灰色粘質土(よくしまる、SD148・149埋土)
	97	10YR6/2	灰黄褐色砂質シルト(SD148・149埋土)
	98	N7/0	灰白色粘土(鉄分含む、SD148・149埋土)
	99	10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、砂質強い、SD148・149埋土)
	100	10YR7/1	灰白色砂質シルト(鉄分多く含む、溝埋土)
	101	10YR6/3	にぶい黄橙シルト(鉄分少量含む、SD143埋土)
	102	2.5Y6/1	黄灰色シルト(鉄分多く含む、粘性あり、SD143埋土)
	103	2.5Y6/1	黄灰色シルト(底部粘性強い、SD144埋土)
	104	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト(粘性あり)
	105	2.5Y6/4	にぶい黄色シルト(粘性あり)
	106	10YR5/8	褐灰色シルト(粘性あり、鉄分含む、SD134埋土)
	107	10YR6/2	灰黄褐色シルト(粘性あり、鉄分含む、SD134埋土)
	108	10YR6/1	褐灰色砂質シルト(SD134埋土)
	109	10YR4/4	褐色シルト(溝埋土)
	110	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト(SD127埋土)
	111	10YR6/2	灰黄褐色砂質シルト(粘性あり、SK131埋土)
	112	10YR5/6	黄褐色砂質シルト(砂多い、遺物含む、遺構埋土か)
	113	10YR5/2	灰黄褐色砂質シルト(粘性あり、遺構埋土か)
	114	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト(粘性あり、遺構埋土か)
	115	10YR3/4	暗褐色シルト(よくしまる、炭化物少量含む)
	116	10YR3/2	黒褐色シルト(炭化物・遺物含む、しまり弱い、粘性弱い)
	117		カクラン

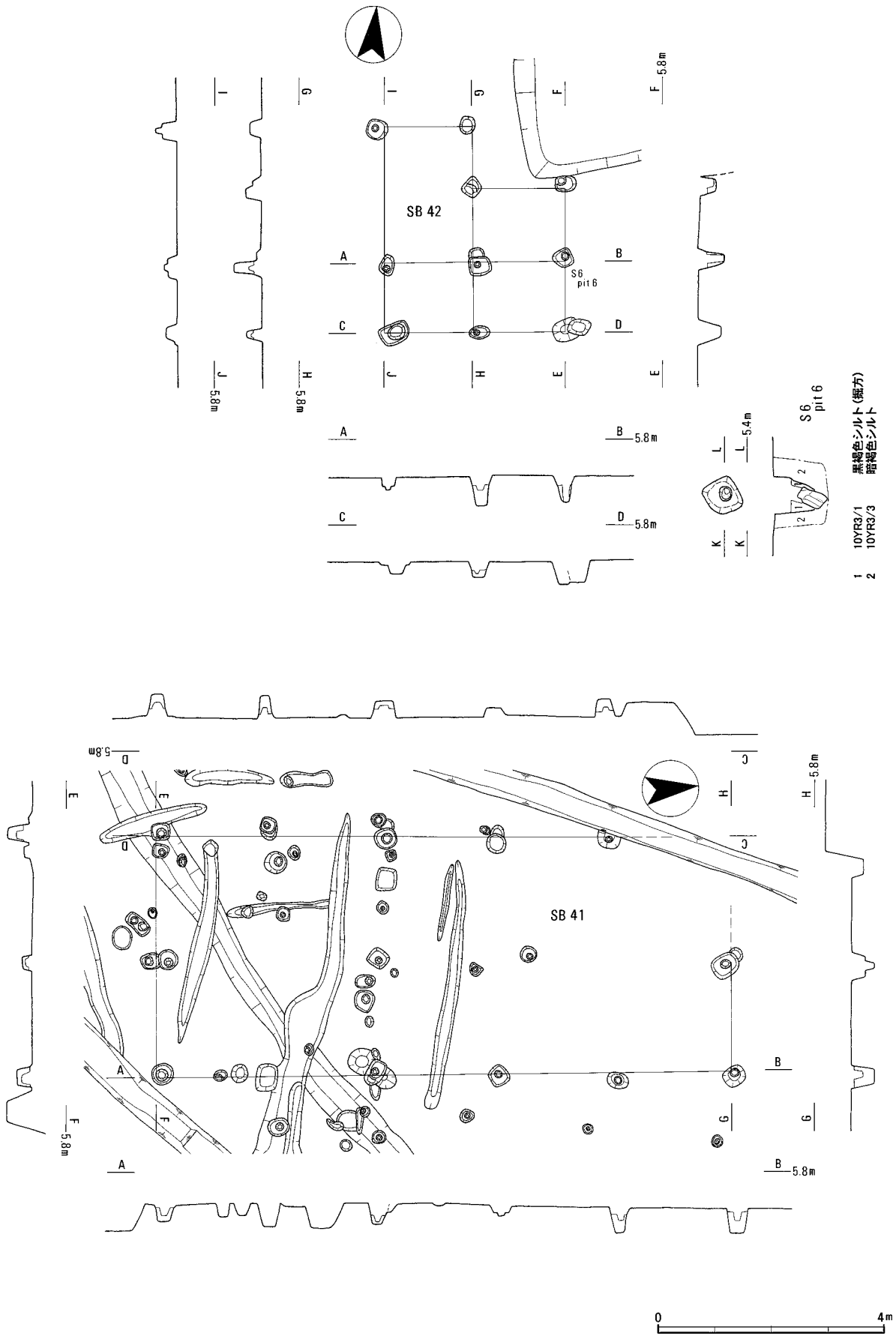
第１表　土層断面土色一覧



1	10YR3/3	暗褐色砂質シルト(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック混じる)	7	5Y7/1	灰白色砂質土(φ2mm程の細粒砂混じる)
2	10YR3/2	黒褐色砂質シルト(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロックおよび礫混じる)	8	10YR4/6	褐色粘質土(10YR5/1褐灰色粘質土ブロックおよび細砂多く混じる)
3	10YR3/3	暗褐色砂質シルト(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック少量混じる)	9	7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質土(微砂粒および小石混じる)
4	10YR3/3	暗褐色砂質シルト(2.5Y3/1黒褐色粘土ブロック層状に重なる)	10	10YR3/2	黒褐色シルト(検出面)
5	2.5Y4/1	黄灰色シルト質細粒砂	11	10YR2/1	黒色シルト
6	2.5Y3/2	黒褐色細粒砂(雲母多い)	12	7.5YR2/1	黒色粘土

0 2m

第14図　ＳＥ５７　平面図・断面図（１：40）



第15図　ＳＢ４２，ＳＢ４１　平面図・断面図（１：100）

時に折れたものが残存している可能性も考えられるか。

溝ＳＤ５８　調査区南半部、ｎ10グリッド付近で検出した遺構である。溝幅約75㎝、検出面からの深さ約20㎝で断面は船底形を呈する。北側はＳＤ62と交わるところで、南側も途中で切れる。

出土遺物は、土師器甕片や須恵器片少量が確認できるのみである。

溝ＳＤ７２　調査区南半部、ｎ12グリッド付近で検出した遺構である。溝幅約85㎝、検出面からの深さ約15㎝、断面が船底形を呈する。途中までＳＤ58と並走し、これもＳＤ62と交わって途切れる。

埋土からは土師器甕や須恵器甕片などが出土している。

溝ＳＤ７１　調査区中央、ｌ12・13グリッド付近で検出した遺構である。溝幅0.3～0.9m、検出面からの深さは約10㎝で、前述のＳＤ62とほぼ直交する。

埋土からはＳ字甕（42）などのほか、土師器甕や須恵器壺片などが出土している。

溝ＳＤ８５　調査区北部、ｆ・ｇ22グリッド付近で検出した遺構である。溝幅55～75㎝、検出面からの深さ約15㎝である。ＳＤ98を切ってほぼ南北に流れ、ＳＤ105やＳＤ103に切られるように検出した。ただし、この付近は何条もの溝が交錯するところで、僅かな埋土の差で重複関係を判断したが、出土した遺物を比較しても明確な時期差は認められない。平安時代末頃までは機能していた溝であろう。

溝ＳＤ１００　調査区北部、ｆ・ｇ23グリッド付近で検出した遺構である。ＳＤ85とほぼ並走し、西の方向に流れを変える。溝幅約1.2m、検出面からの深さは約60㎝で、断面逆台形である。部分的に壁がオーバーハングしており、そこには水の滞留を示す青灰色系の粘土が確認できる。周辺で検出した他の溝の断面が船底状や不整形であることと比較して、ＳＤ100は人工的に掘削されたと考える。

埋土からは灰釉陶器や土師質土器、黒色土器などが出土しており、平安時代末ごろのものであろう。

落ち込みＳＺ８２　調査区の北西部、ｄ19グリッド付近で検出した遺構である。平面が不整形に広がっており、砂とシルトが各所で層状あるいは攪拌して見られる埋土であることから、自然流路もしくは低地部に氾濫土が滞留したものと考えられる。

ＳＤ100・108・106はＳＺ82と交わるところで途切れる。

出土した遺物は平安時代のものが中心であり、鉄滓も数点確認した。

ｃ　鎌倉時代

柱列ＳＡ１０９　調査区北部、ｄ23・24グリッドで検出した遺構である。軸方向はＮ73～74°Ｗである。柱穴内に杭（209・210）が残存していた。ＳＤ90にほぼ沿う状況から、何らかの関連が考えられる。

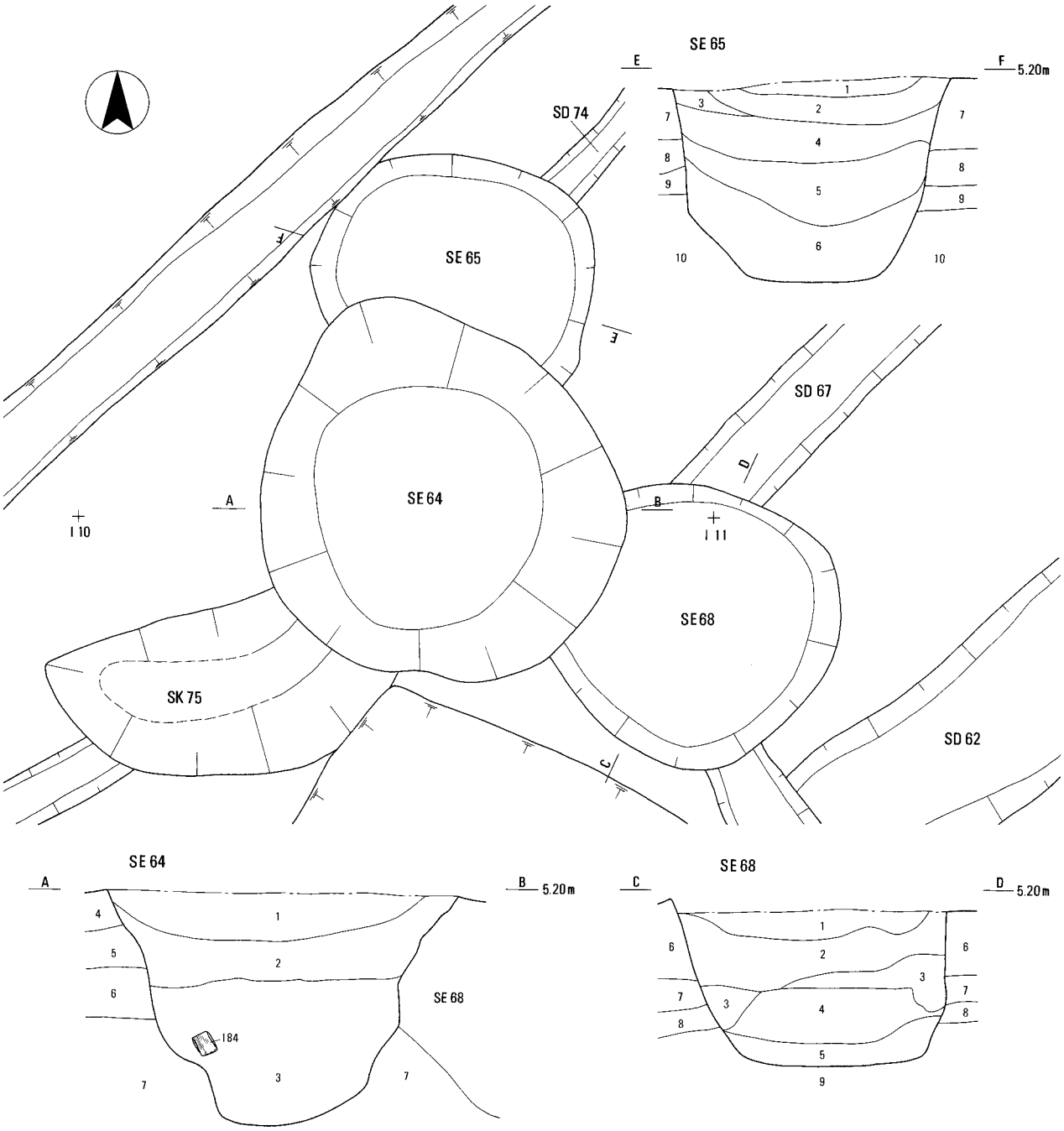
井戸ＳＥ６３（第17図）　調査区中央南寄り、ｍ８グリッド付近で検出した遺構である。平面円形で、直径約２m、検出面からの深さは約１mである。掘削深40㎝付近で埋土が暗緑灰色シルト層となり、そこには非常に多くの植物遺体が混じり、湧水が確認できる。曲物や結桶などの井戸施設は確認できなかった。約25m南では良好に施設が残るＳＥ57を検出しており、滞水の状況など木製品が残存するための条件が同じであるにもかかわらず、木片なども見られないことから、素掘り井戸もしくは井戸廃絶時に曲物などの施設を抜き取ったものと思われる。

埋土からは、土師器や須恵器、東海系無釉陶器椀（以下、「山茶椀」）などが出土しており、鎌倉期のものと考えられる。

井戸ＳＥ６４（第16図）　調査区中央南寄り、ｋ10グリッド付近で検出した遺構である。平面は不整楕円形。長軸約2.5m、短軸約2.2m、検出面からの深さは約1.5mで、すり鉢状に掘削されている。埋土のオリーブ黒色シルト層には、昆虫遺体のほか種子などの有機質が多量に混入しており、湧水が確認できる。井戸を構成するような曲物や結桶などは確認できなかった。

埋土からは、山茶椀や南伊勢系土師器などのほか、径18.8㎝の底板を持つ曲物（184）も出土している。

井戸ＳＥ６５（第16図）　調査区中央南寄り、ｋ10グリッドで検出した遺構である。ＳＥ64と重複しており、平面の観察から、ＳＥ64のほうが新しい。このＳＥ64によってほぼ半分が破壊されているが、平面は直径約1.8mの円形、検出面からの深さ約1.3mである。井戸を構成する曲物や枠などの施設は確認できなかった。



SE64

1	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト(10YR4/1褐灰色シルトが斑に混じる)
2	10YR4/1	褐灰色シルト
3	5Y3/1	オリーブ黒色シルト
4	2.5Y5/2	暗灰黄褐色砂質シルト(検出面)
5	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト
6	2.5Y5/2	灰黄褐色シルト
7	10Y4/1	灰色細粒砂と中粒砂

SE65

1	2.5Y3/2	黒褐色シルト(2.5Y4/1黄褐色シルトブロック混じる)
2	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト(黄灰色シルトおよび中粒砂が斑に混じる)
3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト
4	2.5Y3/2	黒褐色シルト
5	5Y3/1	オリーブ黒色シルト
6	5Y3/1	オリーブ黒色砂質シルト
7	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト(検出面)
8	10YR3/1	黒褐色シルト
9	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト
10	10Y4/1	灰色細粒砂と中粒砂

SE68

1	10YR3/1	黒褐色シルト(褐灰色細砂と黄灰色シルトが混じる)
2	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト(10YR5/1褐灰色細砂が層状に入る)
3	10YR5/2	灰黄褐色シルト質細砂
4	10Y4/1	灰色シルト質細砂
5	7.5Y4/1	灰色砂質シルト(細粒砂ブロック混じる)
6	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト(検出面)
7	10YR3/1	黒褐色シルト
8	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト
9	10Y4/1	灰色細粒砂と中粒砂

0 2m

第16図　ＳＥ６４，ＳＥ６５，ＳＥ６８　平面図・断面図（１：40）

埋土からは、山茶椀などが出土している。

井戸ＳＥ６８（第16図）　調査区中央部、１10グリッド付近で検出した遺構である。ＳＤ67やＳＤ70より新しく、ＳＥ64より古い。平面はほぼ円形で、直径約２ｍ、検出面からの深さ約１ｍである。井戸側や井戸枠などの施設は確認できず、素掘りの井戸もしくは廃絶時に抜き取られたものと考えられる。埋土は５層に分けられ、このうち下層の灰色砂質シルト層からは種子などの有機物などが確認できたが、ＳＥ64やＳＥ65に比べて埋土に砂が多く混入する。山皿や山茶椀などが出土しており、鎌倉時代のものと思われる。

溝ＳＤ９０　調査区北部で検出した遺構である。この付近は多くの溝が重複し、平面で１条１条の溝を検出することは非常に困難であった。このＳＤ90も当初溝幅の大きなＳＤ88として検出を行い、掘削を行っていく途上で数条の溝に分かれたものの１つである。調査区内で弧を描くような状態で確認され、検出面からの深さは約10cmと浅い。溝の形状からも人工的なものではなく、自然流路であろう。

埋土からは古墳後期の遺物から山茶椀まで含まれており、最終的に鎌倉期に埋まった溝であると考えられる。

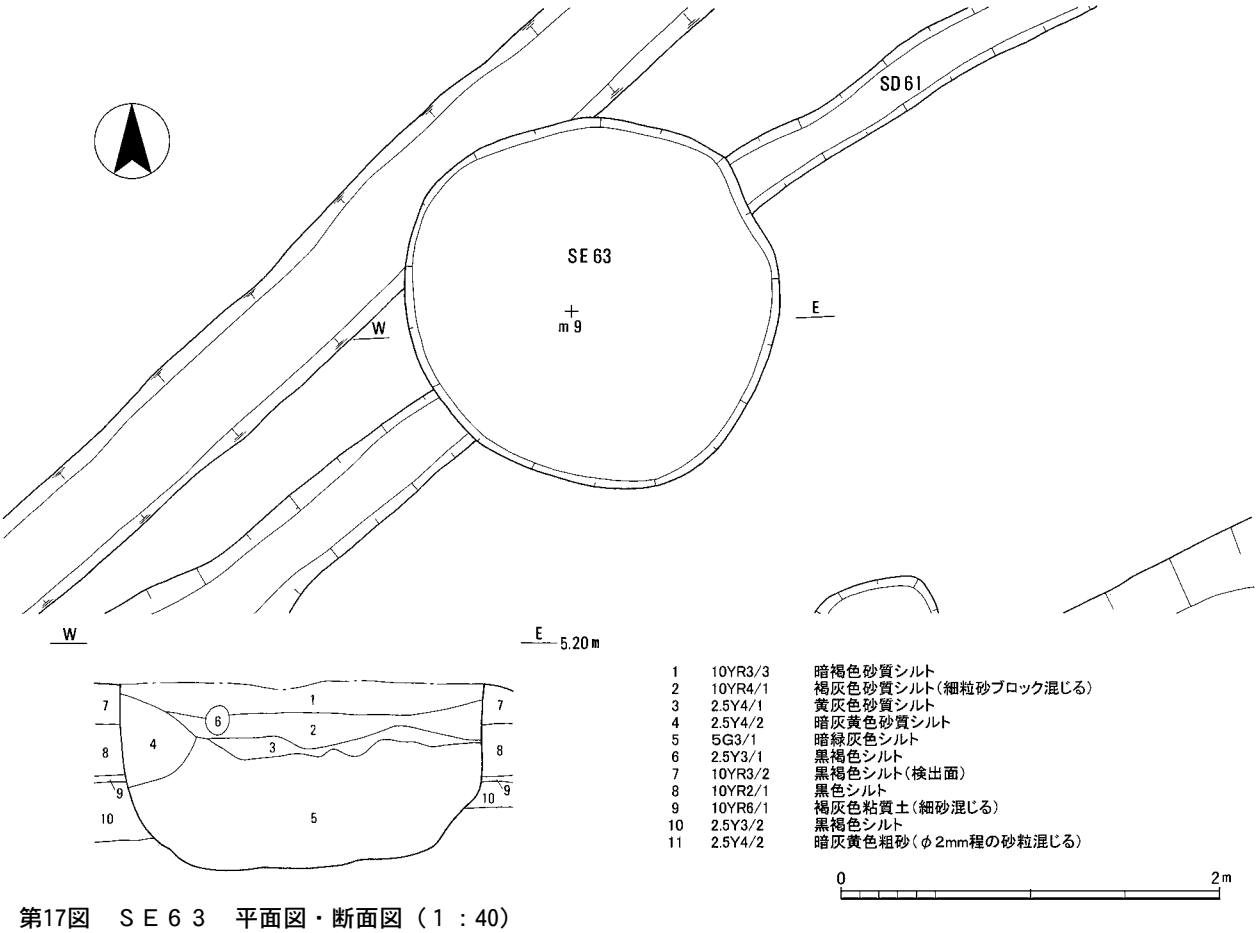
４　検出した遺構（３次）

３次調査区で検出した遺構は、古代が中心である。宅地を挟んで北区と南区に分けられ、北区では、はじめに遺構検出面とした層中にも遺物を含んでいたことから、２面の調査を行った。上層では平安末頃の掘立柱建物や溝などを、下層では溝などを検出した。出土遺物からは上・下層の明確な時期差は認められなかった。

ａ　古墳時代後期

土坑ＳＫ１７０　南区北部、Ｒ33グリッド付近で検出した遺構である。東半分が調査区外であるが、平面が直径約2.5mの円形、検出面からの深さ約１ｍである。断面観察により中央が窪む形状で、２層に分けられる。下層は青灰色粘土が堆積しており、滞水状態であったことが窺える。

溝ＳＤ１３４　南区の北端部、Ｓ33グリッド付近で



第17図　ＳＥ６３　平面図・断面図（１：40）

検出した遺構である。溝幅40～100㎝、検出面からの深さ約50㎝で断面は船底形である。北西－南東方向の溝で、南東に向かって徐々に深くなる。

埋土からは台付甕の破片などが出土している。

ｂ　奈良・平安時代

掘立柱建物ＳＢ１２１（第18図）　北調査区の上層北部、O43グリッド付近で検出した遺構である。南北３間、東西２間の側柱建物で、軸方向はＮ９～10°Ｅである。柱間は約2.4mで、各柱穴には直径約30㎝の柱痕が確認できる。柱穴からは緑釉陶器や灰釉陶器などが出土しており、平安時代後期の建物と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ１２９（第19図）　北調査区の上層中央部、Q41グリッド付近で検出した遺構である。南北４間、東西２間の側柱建物で、軸方向はＮ２°Ｗである。建物の東側にほぼ同じ軸方向の柱列が認められることから、東に庇を持つ建物である可能性も考えられる。柱間は1.8～2.1mと不揃いである。柱穴からは土師器や瓦器椀などが出土している。ＳＢ172とほぼ棟をそろえる。

掘立柱建物ＳＢ１３０（第20図）　北調査区の上層西部、Ｐ39グリッド付近で検出した遺構である。南北４間、東西２間の南北棟の建物で、柱間は約2.1mである。軸方向はＮ11～12°ＥでＳＢ121やＳＢ171とほぼ同方向である。ほとんどの柱穴では直径20㎝前後の柱痕が確認できる。

柱痕の底から灰釉陶器壺の底部（432）が根石状に確認されており、平安時代後半の建物であると考えられる。

掘立柱建物ＳＢ１７１（第19図）　北調査区の上層西部、O40グリッド付近で検出した遺構である。南北４間、東西２間の側柱建物で、軸方向はＮ８～９°Ｅである。柱間は約2.1mで径約20㎝の柱痕を確認できる。

柱穴からは土師質土器などが出土しており、平安時代後期の建物であろう。

掘立柱建物ＳＢ１７２（第20図）　北調査区の上層西部、P40グリッド付近で検出した遺構である。南北３間、東西２間の側柱建物で、軸方向はＮ０～１°Ｗ。ＳＢ129とほぼ棟を揃える。柱間は約1.8mで直径約20㎝の柱痕を持つ。

柱穴からは黒色土器などが出土しており、平安時代後期の建物であると考えられる。

井戸ＳＥ１５５（第21図）　南調査区の東部、W33グリッドで検出した遺構である。平面楕円形で長軸1.4m、短軸1.1m、検出面からの深さ約2.1mである。井戸の施設として、縦板に横桟を渡し隅柱を使用する井戸側と、曲物を４段使用した水溜が確認できた。隅柱４本のうち３本までが、建築部材を転用したもので、横桟を通す枘は確認できない。また、曲物は下にあるものほど径が小さくなり、特に４段目はひとまわり小さい。そのためか、３段目を据えるときに四方に支えとなる石を置いている状況が確認できた。４段目の曲物には集水のための孔が見られる。宇野氏の分類ではＢⅣ類縦板組横桟どめ井戸（無枘井戸）に相当するか。

溝ＳＤ１４６　南区中央部、W28グリッド付近で検出した遺構である。幅約1.7m、検出面からの深さ約30㎝。調査区内で方向を変える。

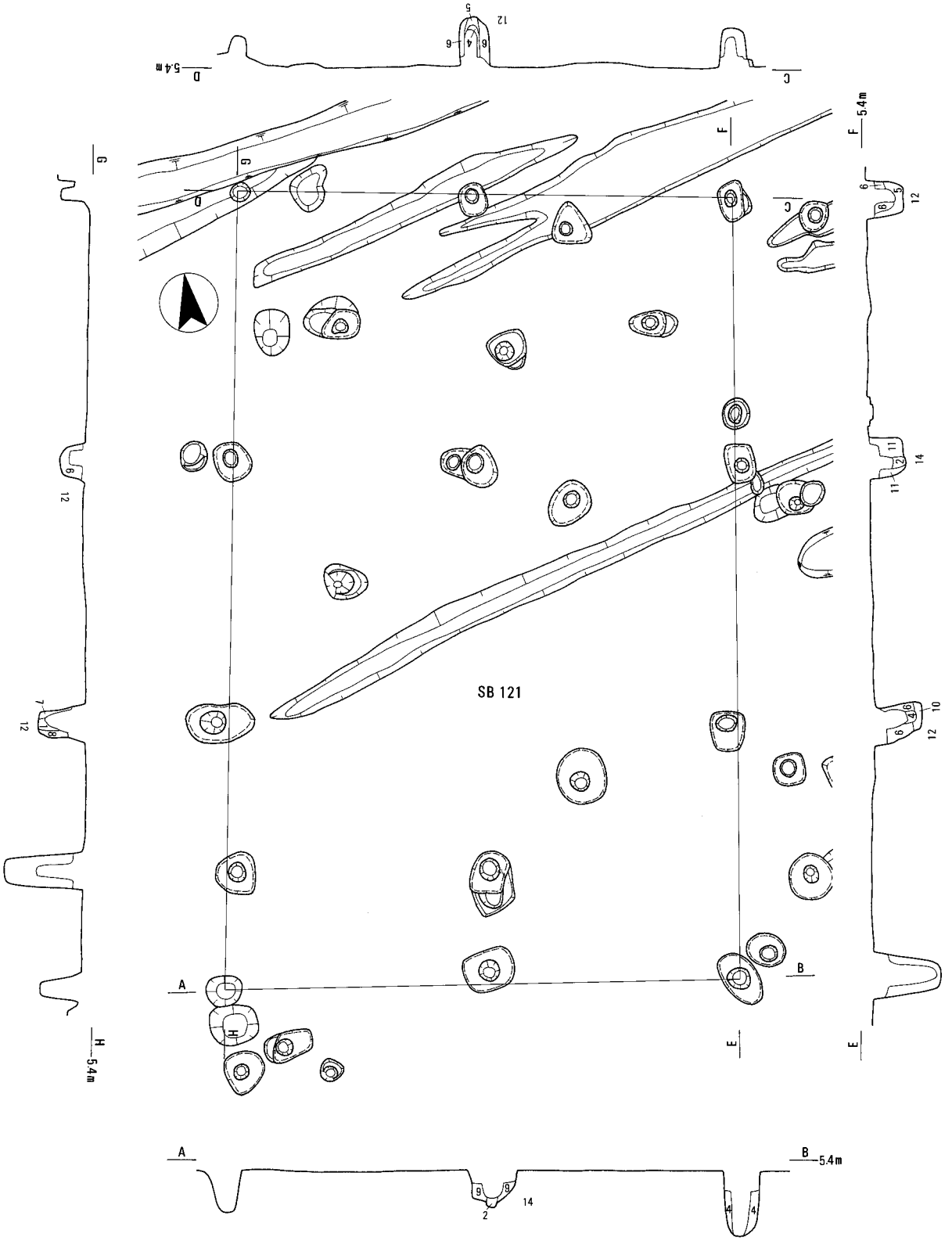
埋土からは土師器杯や黒色土器、灰釉陶器などが出土している。特に、「万饒」と墨書された灰釉陶器椀が２点（395・400）出土している。

平安時代後半の溝であろう。

溝ＳＤ１６６　南区東端部中央、V34グリッドで検出した遺構である。断面観察により、ＳＤ146・ＳＤ147より新しいことがわかる。下層は粘質の強い灰色粘質土で、木片や種子を含む。「万饒」と墨書された灰釉陶器椀（405）などが出土している。

溝ＳＤ１５２　南区の南端部、Ｚ27グリッド付近で検出した遺構である。幅約１m、検出面からの深さ約30㎝である。溝の最下層の埋土が粘質の強い灰色シルトで、そこから大型種子（分析結果後掲）や木製品などを確認した。また、特筆できる遺物として延喜通寶や土馬なども出土している。土馬は頭部・尾部・脚部が欠損しており、祭祀が行われた可能性も考えられよう。平安時代中葉～後葉頃の遺構か。

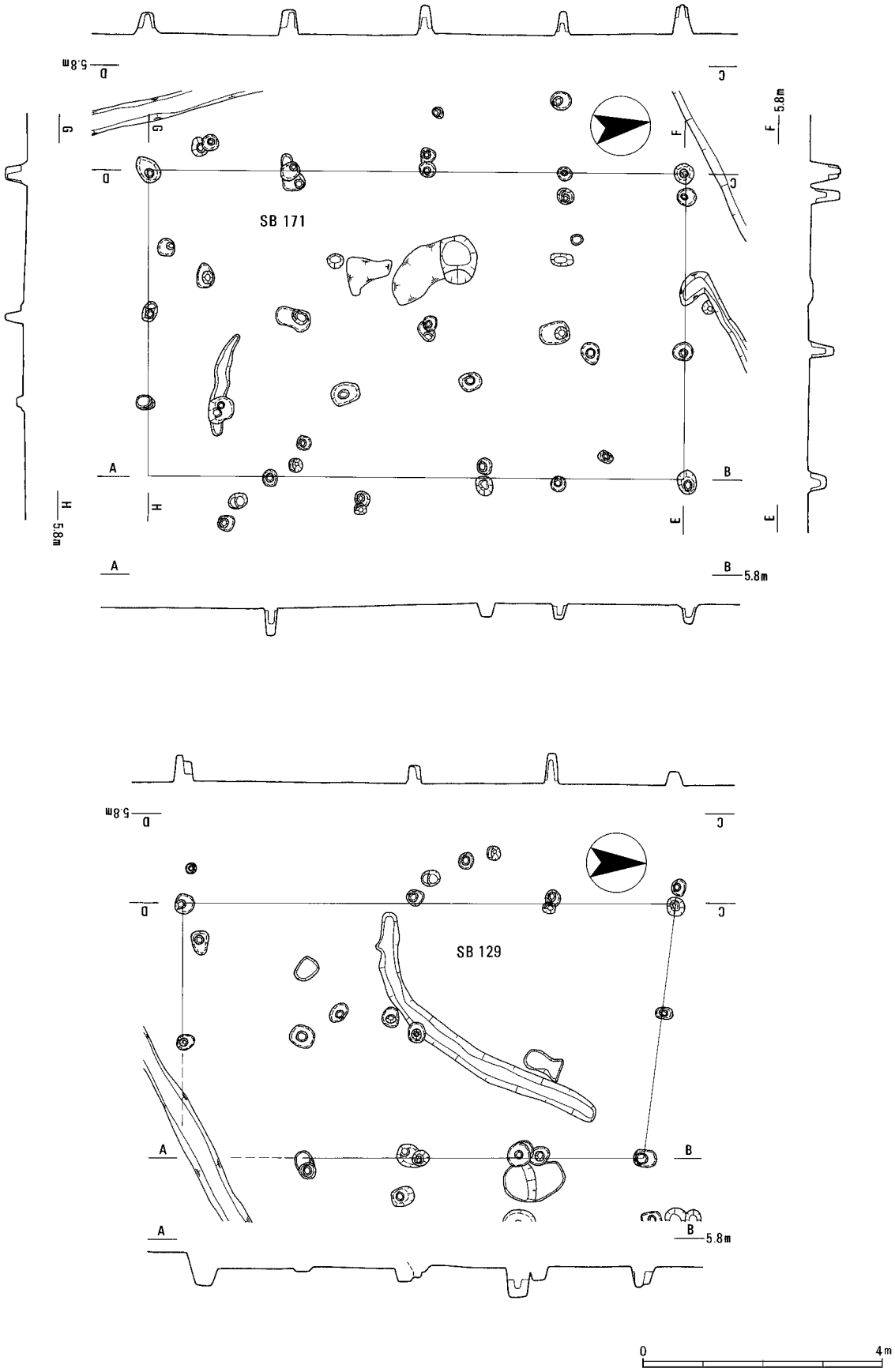
溝ＳＤ１５３　南区の南部、Y27グリッド付近で検出した遺構である。幅約1.2m、検出面からの深さ約30㎝である。堆積状況を断面で観察すると、一度埋まったところに再度溝を掘削している状況が窺える。下層ほど粘質の強い埋土となり、有機質などを含む。出土遺物が少ないため、細かな時期での比較



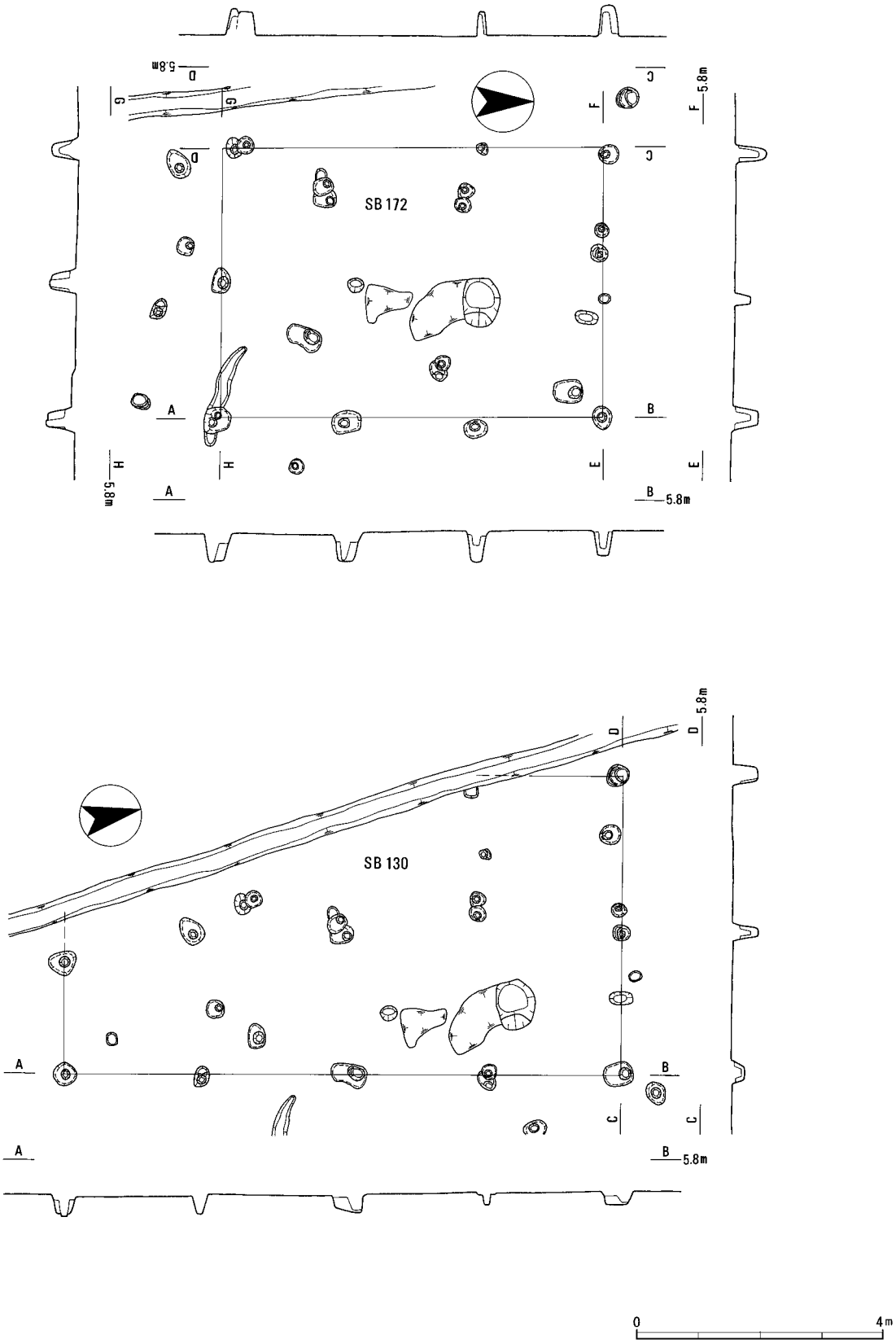
1	10YR3/3	暗褐色シルト	8	10YR3/4	暗褐色シルト
2	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト	9	2.5Y5/2	暗灰黄色シルト
3	10YR4/2	灰黄褐色シルト	10	10YR6/2	灰黄褐色シルト
4	10YR4/1	褐灰色シルト	11	2.5Y2/2	暗灰黄色シルト
5	10YR6/1	褐灰色シルト	12	10YR4/4	褐色シルト(粘性強くしまりあり)
6	10YR5/1	褐灰色シルト	13	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト
7	10YR3/2	黒褐色シルト	14	2.5Y5/1	黄灰色シルト

0 2m

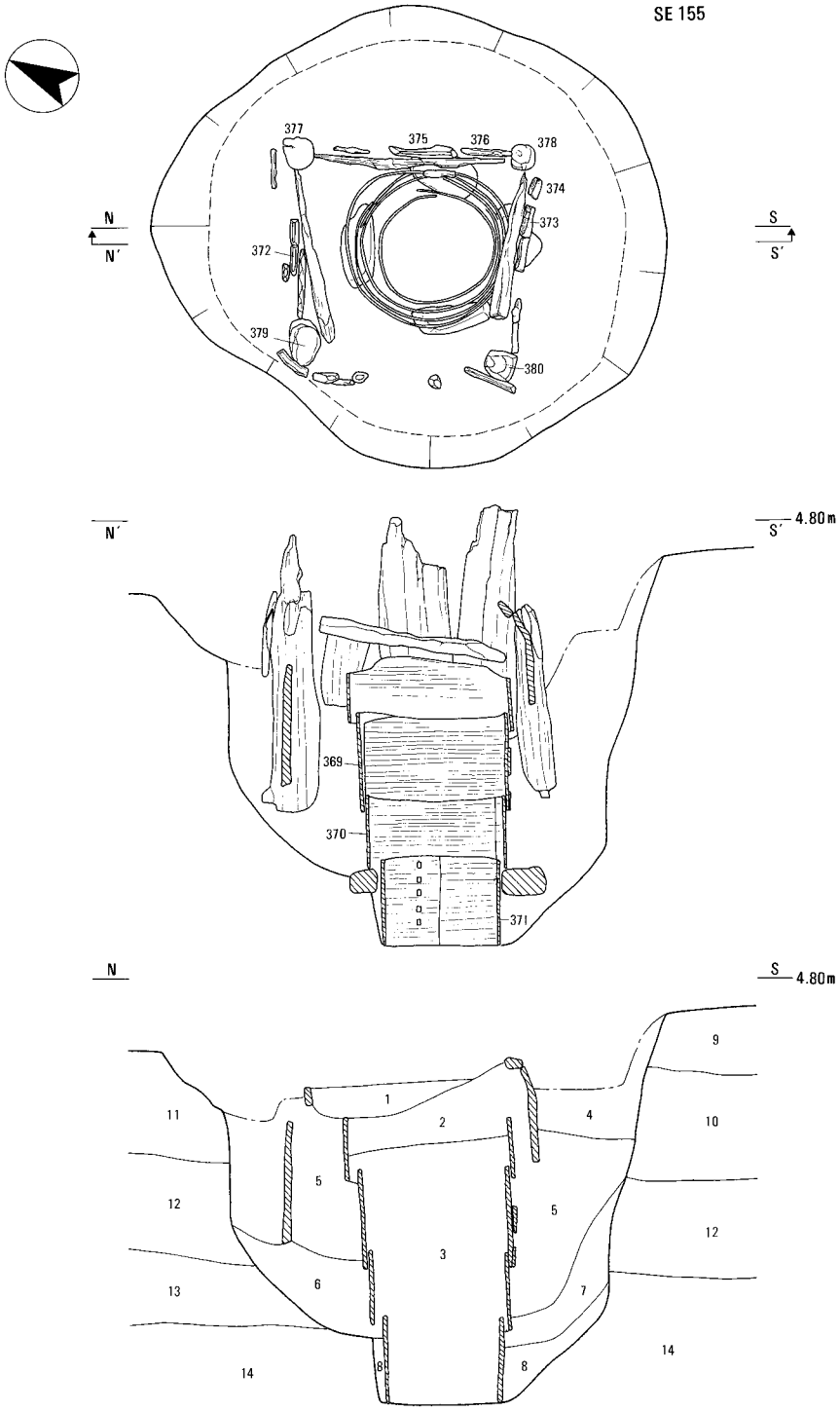
第18図　ＳＢ１２１　平面図・断面図（１：50）



第19図　ＳＢ１７１，ＳＢ１２９　平面図・断面図（１：100）



第20図　ＳＢ１７２，ＳＢ１３０　平面図・断面図（１：100）



1	10GY6/1	緑灰色シルト(褐色土および砂混じる)	8	5Y5/1	灰色砂質シルト(φ3mm以下の小石混じる)
2	5GY5/1	オリーブ灰色シルト(砂混じる)	9	10YR6/3	にぶい黄橙シルト(SD156埋土)
3	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色粘質土	10	10BG5/1	青灰色シルト(SD156埋土)
4	7.5Y4/1	灰色シルト	11	10YR4/2	灰黄褐色粘質シルト(検出面)
5	7.5Y5/1	灰色シルト(7.5Y7/1灰白色細砂混じる)	12	10YR4/1	褐灰色粘土
6	5Y4/1	灰色粘土	13	5GY5/1	オリーブ灰色シルト
7	7.5Y5/1	灰色シルト(10YR4/1褐灰色粘土混じる)	14	5GY5/1	オリーブ灰色砂礫

0 1m

第21図　ＳＥ１５５　平面図・断面図（１：20）

はできないが、ＳＤ158・ＳＤ161と一連の溝とも考えられ、ＳＤ152と溝の心々約２ｍを保って並走する。道路遺構の可能性も考えられるか。

ｃ　鎌倉時代

溝ＳＤ１６３　南区の南端部、ｂ28グリッド付近で検出した遺構である。北肩のみ調査区内で検出したが、ほとんどが調査区外である。

埋土からは南伊勢系土師器の鍋や山茶椀、加工円盤などが出土している。

【註】

（１）宇野隆夫　「井戸考」（『史林』第65巻第５号　史学研究会　1982年）

遺構番号	調査次数	性格	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模（東西間×南北間・m）	主軸	方位（N基準）	備考
ＳＢ４１	2	掘立柱建物	ｔ４	Ｐ１・Ｐ２	Ｐ１：土師器 Ｐ２：土師器	平安後期	２間（4.2m）×５間（10.2m）	南北	Ｎ５°Ｅ	
			ｔ５	Ｐ１・Ｐ２	Ｐ１：土師器 Ｐ２：土師器・土師質土器					
			ｕ４	Ｐ３	土師器・土師質土器					
			ｕ５	Ｐ２・Ｐ３	Ｐ２：土師器・灰釉陶器 Ｐ３：土師器・灰釉陶器					
			ｖ４	Ｐ３・Ｐ７・Ｐ11	Ｐ３：土師器・土師質土器 Ｐ７：土師器・土師質土器・製塩土器					
			ｖ５	Ｐ２・Ｐ５	Ｐ２：土師器・須恵器・土師質土器・灰釉陶器 Ｐ５：土師器・須恵器・黒色土器					
ＳＢ４２	2	掘立柱建物	ｓ６	Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９	いずれも土師器小片出土	古代	２間（3.2m）×３間（3.6m）	南北	Ｎ５～６°Ｗ	柱材残存。
			ｓ７	Ｐ１	土師器					
ＳＡ１０９	2	柱列	ｄ２３	Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３	Ｐ１：土師器	中世	３間（2.4m）	東西	N73～74°Ｗ	ＳＤ９０と関連か。
			ｄ２４	Ｐ４						
ＳＢ１２１	3	掘立柱建物	Ｏ４２	Ｐ２・Ｐ４	Ｐ２：土師器・灰釉陶器 Ｐ４：土師器・須恵器・灰釉陶器・土師質土器	平安後期	２間（4.2m）×３間（6.4m）	南北	Ｎ９～10°Ｅ	
			Ｏ４３	Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５	Ｐ３：土師器・須恵器 Ｐ４：土師器 Ｐ５：土師器・灰釉陶器・製塩土器					
			Ｐ４２	Ｐ６						
			Ｐ４３	Ｐ３・Ｐ８・Ｐ10	Ｐ３：土師器・須恵器・灰釉陶器・土師質土器 Ｐ８：土師器・灰釉陶器・黒色土器 Ｐ10：土師器・須恵器・土師質土器					
ＳＢ１２９	3	掘立柱建物	Ｐ４１	Ｐ４	土師器・土師質土器・根石（砥石）	平安後期	２間（4.2m）×４間（8.2m）	南北	Ｎ２°Ｗ	
			Ｐ４２	Ｐ７	土師器					
			Ｑ４１	Ｐ１・Ｐ４	Ｐ１：土師器 Ｐ４：土師器・瓦器・灰釉陶器					
			Ｑ４２	Ｐ５・Ｐ７	Ｐ５：土師器・須恵器 Ｐ７：土師器					
			Ｒ４１	Ｐ４・Ｐ６	Ｐ４：土師器 Ｐ６：土師器・須恵器					
			Ｒ４２	Ｐ２	土師器					
ＳＢ１３０	3	掘立柱建物	Ｐ３９	Ｐ３	土師器・灰釉陶器	平安後期	２間（4.8m）×４間（8.8m）	南北	N11～12°Ｅ	
			Ｐ４０	Ｐ１・Ｐ６	Ｐ１：土師器 Ｐ６：土師器・須恵器・灰釉陶器					
			Ｑ４０	Ｐ２・Ｐ４	Ｐ２：土師器・須恵器・陶器 Ｐ４：土師器					
			Ｒ３９	Ｐ１	土師器					
			Ｒ４０	Ｐ１	土師器					
ＳＢ１７１	3	掘立柱建物	Ｏ３９	Ｐ１	土師器・土師質土器	平安後期	２間（5.2m）×４間（9.0m）	南北	Ｎ８～９°Ｅ	
			Ｏ４０	Ｐ１	土師器・黒色土器					
			Ｏ４１	Ｐ１	土師器					
			Ｐ３９	Ｐ２・Ｐ５	Ｐ２：土師器・須恵器					
			Ｐ４１	Ｐ３	土師器					
			Ｑ３９	Ｐ２・Ｐ５	Ｐ２：土師器 Ｐ５：土師器					
			Ｑ４０	Ｐ１	土師器					
ＳＢ１７２	3	掘立柱建物	Ｐ３９	Ｐ１	土師器	平安後期	２間（4.4m）×３間（6.1m）	南北	Ｎ０～１°Ｗ	
			Ｐ４０	Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７	Ｐ３：黒色土器 Ｐ４：土師器 Ｐ７：土師器					
			Ｑ３９	Ｐ４	土師器・須恵器					
			Ｑ４０	Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７	Ｐ３：土師器 Ｐ５：土師器 Ｐ７：土師器					

第２表　掘立柱建物一覧

遺構番号	調査時の番号	性　格	調査次数	地区	遺構面	グリッド	時　期	備　　考
	ＳＥ１	カクラン	1	1		Ｂ３		
ＳＤ２		溝	1	1		Ａ５・６、Ｂ５・６	古墳後期？	
ＳＫ３		土坑	1	1		Ａ７・Ｂ７	古墳後期	平面円形
	ＳＫ４	カクラン？	1	1		Ｂ８		土層図ではカクラン表記。
ＳＤ５		溝	1	1		Ｂ10・11	平安後半	ＳＤ９と同一か。
ＳＤ６		溝？	1	1		Ａ８・Ｂ８	古墳？	土坑の可能性あり。
	ＳＥ７	カクラン	1	1		Ｂ12		
	ＳＫ８	カクラン	1	1		Ｂ11		
ＳＤ９		溝	1	1		Ｂ12・13	平安後半	ＳＤ５と同一か。
	ＳＥ１０	カクラン	1	1		Ｃ18・19		
ＳＤ１１		溝	1	1		Ｂ３・４	古代？	
１２～３０								欠番
ＳＤ３１		溝	1	2		Ａ２・Ｂ２		
ＳＤ３２		溝	1	2		Ａ２・Ｂ２	古墳後期	
ＳＤ３３		溝	1	2		Ａ５	古代	徳居窯須恵器蓋出土。
ＳＤ３４		溝	1	2		Ａ８・９、Ｂ８・９		ＳＤ７７と同一か。
ＳＤ３５		溝	1	2		Ｂ４・５		
ＳＤ３６		溝？	1	2		Ａ19		調査途中消滅
ＳＤ３７		溝	1	2		Ａ19・Ｂ19	～古代	
ＳＤ３８		溝	1	2		Ａ19・20ほか	古代	
ＳＤ３９		溝	1	2		Ａ17・Ｂ17	古墳後期	
４０～４２								欠番
ＳＺ４３		落ち込み？	2			ｗ３・ｘ３	中世	奈良後期～鎌倉までの遺物出土。
ＳＤ４４		溝	2			ｗ４	古代？	
ＳＤ４５		溝	2			ｗ３・４	古代	
ＳＤ４６		溝	2			ｖ３・４、ｗ４	古代？	
ＳＤ４７		溝	2			ｖ４	平安	ＳＤ４９・ＳＤ５０と並走。
ＳＤ４８		溝	2			ｖ４	古代？	
ＳＤ４９		溝	2			ｖ４・５	平安	ＳＤ４７・ＳＤ５０と並走。
ＳＤ５０		溝	2			ｕ４・５	古代？	ＳＤ４７・ＳＤ４９と並走。
ＳＫ５１	ＳＤ５１	溝	2			ｘ２・ｗ２		
ＳＤ５２		溝	2			ｒ７・ｓ８	奈良後半	ＳＫ５４を含む。 「刀自女」の墨書須恵器蓋出土。
ＳＫ５３		土坑	2			ｔ７・ｕ７	不明	遺物なし
ＳＫ５４		土坑	2			ｒ７	奈良後半	ＳＤ５２と同一か。
ＳＤ５５		溝	2			ｒ７	奈良後半	
ＳＫ５６		土坑	2			ｒ６・ｑ６	平安前期	長楕円形
ＳＥ５７	ＳＫ５７	井戸	2			ｓ・ｒ６、ｓ・ｒ７	奈良後半	横板組相欠き仕口型
ＳＤ５８		溝	2			ｑ・ｒ８、ｐ・ｑ９	平安	
ＳＤ５９		溝	2			ｐ９、ｑ８・９	古代	
ＳＤ６０		溝	2			ｑ・ｒ９、ｑ10	古代	
ＳＤ６１		溝	2			ｍ８、ｌ９・10		
ＳＤ６２		溝	2			ｍ８・９・10	古墳後期	ＳＤ８４と同一の可能性あり。
ＳＥ６３	ＳＫ６３	井戸	2			ｌ・ｍ８、ｌ・ｍ９	中世前半	有機物多量に含む。 墨書山茶椀出土。
ＳＥ６４	ＳＫ６４	井戸	2			ｋ・ｌ10	中世	昆虫化石・有機物含む。 木製品出土。
ＳＥ６５	ＳＫ６５	井戸	2			ｋ10	中世前半	有機物含む。
ＳＫ６６		土坑	2			ｌ・ｍ12	古代？	桃の種子出土。
ＳＤ６７		溝	2			ｋ11	古代	

第３表　遺構一覧①

遺構番号	調査時の番号	性　格	調査次数	地区	遺構面	グリッド	時　期	備　　考
ＳＥ６８	ＳＫ６８	井戸	2			l 11	鎌倉	
ＳＤ６９		溝	2			j・k 12	古代？	
ＳＤ７０		溝	2			l 11・12	不明	遺物なし
ＳＤ７１		溝	2			l 12	古代	
ＳＤ７２		溝	2			l 13	古代	
ＳＤ７３		溝	2			k 14	古代？	
ＳＤ７４		溝	2			k 10	不明	遺物なし
ＳＫ７５		土坑	2			l 10	不明	遺物なし
ＳＤ７６		溝	2			o 11	古代？	
ＳＤ７７		溝	2			o 13		
ＳＤ７８		溝	2			n 14	不明	遺物なし
ＳＤ７９		溝	2			l 14	古代？	種子など有機物出土。
ＳＤ８０		溝	2			k 14	不明	遺物なし
	ＳＫ８１	カクランか	2			h・i 14		遺物なし
ＳＺ８２		落ち込み	2			g 14・15ほか	平安後半	旧河道か。 鉄滓や「六」の墨書灰釉陶器出土。
ＳＤ８３		溝	2			h 14	不明	遺物なし
ＳＤ８４		溝	2			f 17ほか		遺物少量 ＳＤ６２と同一の可能性あり。
ＳＤ８５		溝	2			g・f 22	平安末	
ＳＫ８６		土坑	2			h 17	不明	埋土に炭化物混じる。 遺物なし
ＳＫ８７		土坑	2			g 18	不明	埋土砂混じり。 遺物なし
ＳＤ８８		溝	2			d 23・24・25	中世前半	ＳＤ８９・９０などの上層。 平安～中世までの遺物出土。
ＳＤ８９		溝	2			c27、d 23ほか	中世	
ＳＤ９０		溝	2			d 23～27	鎌倉	古墳後期～中世までの遺物出土。 ほぼ垂直に曲がる。
ＳＤ９１		溝	2			c27、d 26	古代？	埋土砂混じり。
ＳＤ９２	ＳＫ９２	溝	2			d 25・26	平安後期	ＳＤ９３・ＳＫ１０４と同一。
ＳＤ９３		溝	2			d 24～26	平安後期	ＳＤ９２・ＳＫ１０４と同一。
ＳＤ９４		溝	2			d 23	中世	ＳＤ９２・ＳＤ９３・ＳＫ１０４と同一の可能性あり。
ＳＤ９５		溝	2			d・e 23	平安	
ＳＫ９６		土坑	2			e 23	古代	
ＳＤ９７		溝	2			d・e 23	平安後期	
ＳＤ９８		溝	2			d・e 23	平安前半	
ＳＤ９９		溝	2			d 26	古代？	
ＳＤ１００		溝	2			e 23ほか	平安末	ほぼ垂直に曲がる。 種子出土。
ＳＫ１０１		土坑	2			e 22	平安	
ＳＫ１０２		土坑	2			d 23		
ＳＤ１０３		溝	2			d 23	平安末	ＳＤ１０５と同一か。
ＳＫ１０４		土坑	2			d 24	平安後期	ＳＤ９２・ＳＤ９３と同一。
ＳＤ１０５		溝	2			d・e 22	古代	ＳＤ１０３と同一か。
ＳＤ１０６		溝	2			d 22	平安末	
ＳＤ１０７		溝	2			f・g 22	不明	消滅 遺物なし
ＳＤ１０８		溝	2			c・d 22ほか	平安？	
ＳＫ１１０		土坑	2			d 26・27	不明	遺物なし
ＳＫ１１１		土坑	2			f 20・21	古代？	
ＳＤ１１２		溝	2			w３・４	不明	遺物なし 下層で検出。
ＳＤ１１３		溝	2			t６・７	古代？	下層で検出。
１１４～１２０								欠番
ＳＤ１２２		溝	3	北	上層	O43・44		ＳＤ１２３～１２５と形状・埋土類似。

第４表　遺構一覧②

遺構番号	調査時の番号	性　格	調査次数	地区	遺構面	グリッド	時　期	備　　考
ＳＤ１２３		溝	3	北	上層	O42～44	平安	ＳＤ１２２・１２４・１２５と形状・埋土類似。
ＳＤ１２４		溝	3	北	上層	N43・44、O43	平安	ＳＤ１２２・１２３・１２５と形状・埋土類似。
ＳＤ１２５		溝	3	北	上層	N42・43、O40～42	平安	ＳＤ１２２～１２４と形状・埋土類似。
ＳＤ１２６		溝	3	北	上層	P41・42、Q41・42	平安	
ＳＤ１２７		溝	3	北	上層	O39～41	平安	ＳＤ１２２～１２５と埋土類似。
ＳＤ１２８		溝	3	北	上層	Q40	古代？	
ＳＫ１３１		土坑	3	北	上層	O40	古代	
ＳＫ１３２		土坑	3	北	上層	Q42	平安	
ＳＫ１３３		土坑	3	北	上層	P43・44		
ＳＤ１３４		溝	3	南		Q30・31ほか	古墳後期	
ＳＤ１３５		溝	3	北	下層	O42～44ほか	古墳後期	
ＳＤ１３６		溝	3	北	下層	P43・44		
ＳＤ１３７		溝	3	北	下層	O41・P41		
ＳＫ１３８		土坑	3	北	下層	P41・42、Q41・42	古墳？	埋土に炭化物含む。
ＳＫ１３９		土坑	3	北	下層	Q42	平安	
ＳＫ１４０		土坑	3	北	下層	P39・40、Q39・40	古代	
ＳＤ１４１		溝	3	北	下層	P39・40		
ＳＫ１４２		土坑	3	北	下層	R39	古代	
ＳＤ１４３		溝	3	南		U27・28、V28～32	古墳？	ＳＤ１４４・１４５と埋土類似。
ＳＤ１４４		溝	3	南		T28、U28・29ほか	古墳後期	ＳＤ１４３・１４５と埋土類似。
ＳＤ１４５		溝	3	南		V27～29、W28・29	古代（平安？）	ＳＤ１４３・１４４と埋土類似。
ＳＤ１４６		溝	3	南		V26・27・31～34ほか	平安後半	「万鏡」など墨書灰釉陶器・緑釉陶器・種子など出土。 ＳＤ１６６と重複。
ＳＤ１４７		溝	3	南		V33・34ほか	平安後半	ＳＤ１５６・ＳＤ１６６と重複。 種子出土。
ＳＤ１４８		溝	3	南		W25・26ほか	古代？	ＳＤ１４９・１５０・１５１と埋土類似。 ＳＤ１４９と合流。
ＳＤ１４９		溝	3	南		W25・26ほか	古墳後期～古代	ＳＤ１４８・１５０・１５１と埋土類似。 ＳＤ１４８と合流。
ＳＤ１５０		溝	3	南		X25、Y25	古代？	ＳＤ１４８・１４９との重複関係不明。 ＳＤ１４８・１４９・１５１と埋土類似。
ＳＤ１５１		溝	3	南		X25、Y25ほか	古墳後期	ＳＤ１４８・１４９・１５０と埋土類似。
ＳＤ１５２		溝	3	南		Y28～32ほか	平安後半	墨書灰釉陶器・土馬・木製品・銭（「延喜通寶」）・種子など出土。 ＳＤ１５３と並走。
ＳＤ１５３		溝	3	南		X28・29ほか	平安	ＳＤ１５８と一連。 桃などの種子多量に出土。ＳＤ１５２と並走。
ＳＤ１５４		溝	3	南		X24・25、Y24・25	古代	埋土に炭化物含む。 桃などの種子出土。
ＳＥ１５５		井戸	3	南		W33	平安後期	縦板組横桟どめ。 曲物４段組み残存。隅柱に建築部材転用。
ＳＤ１５６		溝	3	南		W31～34ほか	古代？	ＳＤ１４７と重複して合流か。 桃などの種子出土。
ＳＫ１５７		土坑	3	南		X34		耕土直下で検出。
ＳＤ１５８		溝	3	南		X29～31	平安？	ＳＤ１５３と一連。 種子出土。
１５９								欠番
ＳＤ１６０		溝	3	南		X31～33、Y30・31	古代	ＳＤ１５２と合流する可能性あり。 種子出土。
ＳＤ１６１		溝	3	南		X31～34	不明	遺物なし
ＳＤ１６２		溝	3	南		X31～34	古代？	ＳＤ１６０と重複。
ＳＤ１６３		溝	3	南		b23～29	中世前半	北肩の一部は、排水溝により不明。南肩は調査区外。 墨書山茶椀出土。
ＳＫ１６４		土坑	3	南		a30		耕土直下で検出。 埋土に地山ブロック多い。
ＳＫ１６５		土坑	3	南		Y30	中世？	
ＳＤ１６６		溝	3	南		V33・34、W34	平安後半	「万鏡」など墨書灰釉陶器・種子出土。 ＳＤ１４６・ＳＤ１４７と重複。 V34ブロックでＳＤ１４６の遺物と混入の可能性あり。
ＳＫ１６７		土坑	3	南		a27	中世前半	円形
ＳＫ１６８		土坑	3	南		a27	中世？	
ＳＫ１６９		土坑	3	南		a27		円形
ＳＫ１７０		土坑	3	南		Q33・34、R33・34	古墳後期？	東半は調査区外。

第５表　遺構一覧③

Ⅳ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、１～３次のものを合わせると整理箱にして約110箱である。これらは古墳時代後期から鎌倉時代のものが中心である。

以下、主な出土遺物について遺構別に記述する。

なお、遺物個々の詳細については、木製品・遺物観察表（第６～18表）を参照されたい。

１　第１次調査出土遺物

溝ＳＤ３９出土遺物（１～６）　１～４は土師器台付甕。口縁部がＳ字状を呈するもの（Ｓ字状口縁台付甕。以下「Ｓ字甕」と呼称。）で、１はＤ類[1]新～Ｅ類[2]古に、それ以外はＥ類に属するものである。なかでも２はＥ類の古相であろう。５は土師器の甑、６は須恵器杯身である。

いずれも６世紀前半頃のものと考えられる。

溝ＳＤ３３出土遺物（７・８）　７は須恵器の蓋で、キノコ形のつまみを持つ。徳居産のものか[3]。８は杯身である。

溝ＳＤ１１出土遺物（９）　土師器の台付椀と思われる。

土坑ＳＫ３出土遺物（10）　土師器の小形壺である。外面には細かいハケメが施されており、全体的に器壁が薄い。古墳時代後期のものか。

溝ＳＤ３８出土遺物（11）　土師器の甕である。口縁部付近のみの出土であるが、体部は長胴を呈するものか。内面には炭化物が付着する。

溝ＳＤ５出土遺物（12・13）　12は志摩式製塩土器の体部片である。非常に粗い胎土であり、口縁部先端を欠く。

13は土師器杯である。口縁部が外反する。口縁端部に煤状のものが付着する。平安期のものか。

溝ＳＤ９出土遺物（14・15）　14・15は灰釉陶器の椀。いずれも体部が丸みを持つ形状で、器壁は薄い。15の高台は細長い。O53号窯式期のものである[4]。

遺構外出土遺物（16～25）　16は灰釉陶器椀。高台部の断面が三角形状を呈する。17は須恵器皿Ｂ[5]。底部内面に使用痕が確認できる。18～23は東海系無釉陶器の椀。通称「山茶椀」と呼称されるものである（以下、「山茶椀」と呼称）。内面に使用痕があるものが多い。藤澤良祐氏による山茶椀の編年[6]の第５～７型式に収まるものである。

24・25は加工円盤である。24は山茶椀の底部を打ち欠いて転用している。25は常滑産甕の体部片。

２　第２次調査出土遺物

溝ＳＤ６２出土遺物（26～41）　26は弥生土器の壺である。口縁部が強く外反し、端部内面に瘤状突起を貼り付ける。中期前半頃のもの。

27～29はＳ字甕である。いずれもＥ類に属するものであろう。なかでも27は古相を示す。28は口縁部の屈曲が弱い。30・31は台付甕の台部。31は端部を折り返す。

32～40は土師器。32は小形壺。器壁が比較的薄い。33は鉢。体部は丸く、口縁部は外反する。「高茶屋式」[7]のものである。34は甑。内外面ナデ調整で、器壁は薄い。35～40は高杯の脚部。37には直径５㎜程度の穿孔が見られる。

41は須恵器の杯身。

いずれも古墳時代後期（６世紀前半頃）に属する。

溝ＳＤ７１出土遺物（42）　42はＳ字甕。Ｅ類のものである。

土坑ＳＫ５４出土遺物（43・44）　43・44は土師器杯。口縁部がヨコナデによって外反する。斎宮編年[8]の第Ｉ期第３段階（以下、「Ｉ－３期」のように記す。）併行のものである。

溝ＳＤ５２出土遺物（45～60）　45～48は須恵器である。45は宝珠つまみ付きの蓋。外面に「刀自女」の墨書が見られる。46は杯Ａ、47は杯Ｂ。48は鉢である。焼きが軟質で、薄い青灰色を呈する。

49～60は土師器。49は皿Ａである。内面に炭化物が付着する。外面にはミガキ調整を施す。50～56は杯Ａ。内面に暗文が見られるものもある。57は甕、58・59は甑、60は高杯である。斎宮編年のＩ－３期併行のものであると思われる。

土坑ＳＫ５６出土遺物（61・62）　61・62は土師器の杯Ａである。斎宮編年のⅡ－１～２期のものか。

溝ＳＤ５９出土遺物（63）　土師器の甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲する。

溝ＳＤ５８出土遺物（64）　土師器の甕である。口縁部が強く外反し、端部に面を持つ。

溝ＳＤ５５出土遺物（65）　土師器の杯Ａである。口縁部はヨコナデによって僅かに外反する。外面には煤が付着している。斎宮編年のＩ－３期に併行するものか。

溝ＳＤ４９出土遺物（66）　黒色土器の椀と思われる。内黒[8]である。

溝ＳＤ４５出土遺物（67）　須恵器の杯Ｂである。体部下半の張りが弱い。

井戸ＳＥ５７出土遺物（68～105）　68～72は須恵器。68は杯身。底部外面にヘラ書きが見られる。69～72は杯Ａ。69は底部外面にヘラ切り痕、内面に一定方向のナデが認められる。70の底部外面に墨書が確認できるが、詳細は不明である。71は焼成不良。

73～77は土師器。73～75は杯Ａ、76は皿Ａである。内面にミガキや暗文が見られる。斎宮編年のＩ－３期に併行するものであろう。77は甕。体部外面には煤、内面には炭化物が付着する。

78～105は木製品である。78は井戸側の内部から出土したものである。薄い板状で円弧状を呈する。桶の材か。79・82～105は井戸側の部材である。79・82・83は枠内から出土している。井戸側の上段部分が崩壊したものと考えられる。後者２点は非常に薄く残存状態が悪い。84・85は確認できた井戸側の１段目のものである。以下４点ごとに86～89は２段目、90～93は３段目、94～97は４段目、98～101は５段目、102～105は６段目でこれが最終段である。長さ108～116㎝、幅９～22㎝、厚み２～５㎝ほどである。86～103は板の両端付近を上下から切り込んで仕口とし、それらを組み合わせるようにしている。104・105は最下段のもので、片側のみに仕口が切られる。いずれの板にも墨書などはみられない。

溝ＳＤ６０出土遺物（106）　須恵器の蓋である。宝珠つまみが付く。内面が研磨されており、硯に転用していた可能性が考えられる。

溝ＳＤ７９出土遺物（107・108）　107は土師器杯Ｂ。奈良時代前半のものか。108は土師器高杯の脚柱部。

落ち込みＳＺ４３出土遺物（109～117）　109・110は土師器杯Ａ。いずれも摩滅が激しく調整不明瞭である。111は須恵器の皿。底部外面を手持ちのケズリで調整している。112は土錘。113は土師器の把手付鍋。口縁部片と把手のついた体部片が別個に出土したが、同一個体と思われる。斎宮編年のＩ－３期～Ⅱ－１期併行のものである。

114・115は緑釉陶器。114は皿、115は椀である。115は摩滅が激しく釉が全て剥がれている。116は土師質土器[10]の台付皿。摩滅激しい。117は山茶椀。瀬戸・猿投産である。

溝ＳＤ１１３出土遺物（118・119）　118は須恵器の蓋。天頂部に宝珠つまみが付く。内面に墨痕が付着しており、研磨されていることから硯に転用されたものと考えられる。119は土師器の甕である。体部から口縁部が強く外反する。

土坑ＳＫ６６出土遺物（120）　須恵器甕の体部片である。外面カキメ、内面は同心円状のあて具痕が確認できる。

溝ＳＤ７２出土遺物（121）　須恵器甕の口縁部。

土坑ＳＫ９６出土遺物（122）　土師器の皿Ａである。底部から口縁部が緩やかに立ち上がる。斎宮編年のＩ－３期に併行するものか。

溝ＳＤ９５出土遺物（123）　土師器の皿Ａである。斎宮編年のⅡ－１期併行と思われる。

土坑ＳＫ１０４出土遺物（124・125）　124は須恵器の蓋。天頂部が欠損しているが、おそらくつまみが付く。125は杯Ｂである。削りだし高台か。

溝ＳＤ９７出土遺物（126・127）　126は須恵器の壺。体部から口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部が下方に肥厚する。127は黒色土器椀。内黒のものである。高台の断面は三角形である。

溝ＳＤ９８出土遺物（128・129）　128は土師器の椀。129は緑釉陶器の椀。

溝ＳＤ１００出土遺物（130～133）　130は土師質土器の椀と思われるが、黒色土器の可能性もある。131は黒色土器椀。内黒のものである。130・131は高台部を意図的に打ち欠いている。

132は土師器の椀、133は皿である。132は断面半円形を呈する。また底部より口縁部のほうが器壁が厚くなる。斎宮編年のⅡ－１～２期に収まるか。

落ち込みＳＺ８２出土遺物（134～142）　134は須恵器の小壺か。高台部径が4.9cmと小さい。135は壺の口縁部である。136は陶器の獣足壺。獣足は３方向に付くと思われ、爪などの表現がなされている。

137は緑釉陶器椀。胎土が土師質系である。138～140は灰釉陶器の椀である。139・140の底部外面には墨書が見られ、140は「六」と読める。O53号窯式期のものと考えられる。

141は土師器杯。外面に煤が付着している。142は甕である。口縁部外面に煤が付着する。

土坑ＳＫ１０１出土遺物（143）　灰釉陶器の椀である。H72号窯式期と考えられる。

溝ＳＤ１０３出土遺物（144）　土師質土器の台付小皿である。11世紀後半頃のものか。

溝ＳＤ８９出土遺物（145）　土師器の小皿である。器壁が薄く、底部から口縁部が　緩やかに内弯して立ち上がる。南伊勢系のもの。

溝ＳＤ８８出土遺物（146～154）　146は土師質土器の椀であると考えたが、黒色土器の可能性もあるか。高台部を意図的に打ち欠いている。全体的に摩滅が激しく調整は不明瞭である。

147は山皿、148～150は山茶椀。147の底部外面に「＋」の墨書がみられる。150のみ知多・猿投産、それ以外は渥美産で、いずれも第６型式に併行するものであろう。

151・152は土師器皿。151は中北勢系、152は南伊勢系である。153・154は南伊勢系鍋である。伊藤裕偉氏の編年[11]（以下、「伊藤編年」と呼称。）の第１段階ｂのものである。

また、図示はできなかったが、鞴の羽口の破片も出土している。

溝ＳＤ９０出土遺物（155～166）　155～157は山皿、158～161は山茶椀である。158の内面には炭化物が付着する。また161の底部外面には墨書が確認できるが、破片のため詳細は不明である。159が渥美産のものであるほかは知多・猿投産。いずれも藤澤編年の第６型式に相当する。162は陶器練鉢。

163・164は土師器小皿。前者は中北勢系、後者は南伊勢系のものである。165は南伊勢系の羽釜。外面鍔部に煤が付着する。166は土錘。今回の調査で出土しているもののなかで比較的大形のものである。

井戸ＳＥ６３出土遺物（167・168）　167・168は山茶椀である。底部外面に墨書が見られる。167は「○」、168は「＋」である。168の底部内面には顕著な使用痕が確認できる。藤澤編年の第６型式に相当する。

井戸ＳＥ６５出土遺物（169）　山茶椀である。知多・猿投産のものか。高台部にモミガラ痕が明瞭に残る。藤澤編年の第６型式に相当しよう。

井戸ＳＥ６８出土遺物（170～173）　170は山皿、171・172は山茶椀である。170は底部外面に墨書らしきものが観察できるが、詳細は不明である。171の底部外面には「＋」とみられる墨書がある。173は陶器の練鉢。いずれも知多・猿投産のもので、藤澤編年の第６～７型式に相当しよう。

井戸ＳＥ６４出土遺物（174～184）　174は小皿、175は皿、176は鍋。いずれも南伊勢系土師器である。13世紀代のものか。

177は山皿、178～181は山茶椀である。178の底部内面には炭化物が付着する。179は内面に顕著な使用痕が認められる。180は内面に炭化物、外面に煤が付着する。瀬戸産のものであろう。181は底部内面に炭化物が付着し、外面には墨書が見られる。丸の中に十文字のように見える。藤澤編年の第６～８型式に併行するか。182は常滑産の甕である。

183・184は木製品。183は折敷。一部炭化している。直径約２㎜の孔が２個確認できる。修繕時のものか。184は曲物および底板である。底板を固定するような釘孔などは確認できない。

溝ＳＤ８５出土遺物（185～189）　185は須恵器の甕である。186は灰釉陶器の椀。Ｋ90号窯式期に相当する。

187～189は土師器。187は高台の付く杯Ｂ、188は杯Ａ。189は小皿である。口縁部が「て」の字状を呈する。

溝ＳＤ１０６出土遺物（190～193）　190は須恵器蓋。つまみの付くものである。内面に墨痕があり、顕著な使用痕が認められることから、硯に転用していたものと考えられる。191は灰釉陶器椀である。底部外面に墨書があるようである。O53号窯式期に相当する。192は山茶椀。内外面に煤が付着する。また、内面に筆そろえの跡が見られる。193は砥石。

上下面に顕著な使用痕が認められる。

溝ＳＤ９４出土遺物（194～197）　194は土師器小皿。南伊勢系のものである。195は山皿、196は練鉢。いずれも知多・猿投産。197は須恵器の長頸壺。底部は丸みを帯び、頸部に２本・体部に１本沈線が巡る。体部表面を研磨している。

ｐｉｔ出土遺物（198～210）　198（i12 pit1）は須恵器壺。199（o7 pit1）は須恵器甕の体部片を転用した硯である。200（u5 pit5）は須恵器壺の口縁部。外面に自然釉が認められる。201（r8 pit1）は土師器高杯。非常に摩滅が激しく調整が不明瞭である。202（v4 pit17）は黒色土器の椀。高台の先端部を意図的に打ち欠く。10世紀後半頃のものか。203（v5 pit6）は灰釉陶器の椀。付け掛けによる施釉である。O53号窯式期のもの。204（v5 pit2）・205（u4 pit3）・206（v4 pit13）はＳＢ41を構成するピット内出土遺物である。204・206は土師質土器小皿、205は皿である。207（i12 pit1）は山皿。知多・猿投産。208（s6 pit6）はＳＢ42の柱材。209・210はＳＡ109を構成するピットから出土した杭材である。

遺構外出土遺物（211～320）　211は縄文土器か。口縁部から下がった部分に凸帯を巡らせる。

212～214はＳ字甕。212はＤ類、213・214はＥ類に相当する。215は台付甕の台部である。おそらくＳ字甕のＤ新～Ｅ類相当であろう。216・217は土師器甕。217は大形のもので、外面に煤が付着する。Ｓ字甕のＥ類併行のもの。

218～226は須恵器。218は杯蓋。天頂部はヘラ切り調整。転用硯の可能性が考えられる。219は杯蓋と考えたが、天地が逆になる可能性もある。飛鳥Ⅰ～Ⅱ[12]頃のものか。220は杯蓋。稜が残る。221～223は杯身。221・222は同一地点から出土している。224は高杯の脚部。透かしが４方向に見られる。225は高杯の台部か。１辺が約８㎜の方形の透かしが３方向に見られる。６世紀前半に相当するものであろう。226は壺の底部である。

227は砥石、228は有孔円盤である。直径約2.0㎝、厚み３㎜で、ほぼ中央に径約２㎜の孔が開く。いずれも結晶片岩である。

229～234は土錘。紡錘形を呈し、長さ３～５㎝に収まる小形のものである。

235～256は須恵器。235～241は壺。235～237は口縁部破片で、波状文やカキメなどが施される。239は小形の壺の台部である。242は壺の蓋。243は甕である。244・245は蓋。244の天頂部には宝珠つまみが付く。接合できない破片を図上で復元している。245は天頂部が欠損しているが、おそらくつまみが付くものであろう。246は皿。小片のため、口径に不安を残す。247～249は杯Ａ。247の底部外面にヘラ記号が認められる。250～255は高台の付く杯Ｂ。255の底部外面に「＋」のようなヘラ記号が見られる。256は鉢である。口縁端部が肥厚する。

257～280は土師器。257は高杯の脚部。258は椀、259・260は小皿である。261～266は杯Ａ。263は内面の暗文の書き直しをしているようである。264は底部内面に螺旋状暗文が認められる。267・268は皿。267は平らな底部から口縁部が斜め上方に立ち上がる。268は口縁部が底部から緩やかに立ち上がるもので、底部外面にはケズリを施す。いずれも斎宮編年のⅠ－３期～Ⅱ－３期に併行するものである。269は鉢。８世紀代のもの。270は甑か。ただし径が約12㎝と小さい。筒型土師器の可能性も考えられる。271はミニチュアの甕。272～276は甕。273の内面に炭化物、274～276の口縁部外面には煤が付着する。277～279は鉢。277・278は外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで調整する。279は摩滅が激しく調整不明瞭である。280は移動式の竈である。

281・282は緑釉陶器。281は椀。軟質である。282は皿。

283～295は灰釉陶器の椀。283の底部内面には墨痕が見られ、研磨されている。硯に転用していた可能性が考えられる。284は内面研磨なし。287は釉をハケ塗りしている。K90～H72号窯式期の範疇に収まる。

296は黒色土器椀。内黒である。297～299は土師質土器。297は台付小皿、298は小皿、299は皿である。300～303は土師器。300は「て」の字皿である。301・302は南伊勢系の皿、303は鍋である。伊藤編年の第２段階ｃに相当する。304は大和型の瓦器椀。

305・306は山皿。知多・猿投産。305の底部外面はヘラ切りで調整か。307は小椀。猿投・瀬戸産で

ある。308～319は山茶椀である。310の底部外面には墨痕、内面には炭化物が付着し、重ね焼き痕が残る。312の底部内面には炭化物が付着する。313は内面に墨痕が見られることから、硯に転用していた可能性がある。316は底部外面に墨痕、内面に煤が付着する。317の内面にも炭化物が付着する。317・318は非常に均質な造りで、瀬戸産のものと考えられる。高台部が欠損している。319は内面に炭化物が付着する。320は練鉢である。知多・猿投産のもの。

３　第３次調査出土遺物

溝ＳＤ１３４出土遺物（321・322）　321は台付甕の台部。口縁部分が無いことから断定はできないが、器壁が薄いことやハケメの感じからＳ字甕のＢ～Ｃ類に収まると思われる。外面には煤が付着する。322は弥生土器甕。

溝ＳＤ１４８・１４９出土遺物（323～326）　323～325は台付甕。323は口縁部の形状からＳ字甕。Ｃ類新に相当か。324・325は台部のみであるが、台の開きが大きいことや端部の折り返しがないこと、残存しているハケメの感じからＥ類に相当するものであろう。326は土師器甕である。

土坑ＳＫ１７０出土遺物（327～329）　327は須恵器杯身。底部外面をヘラ切り後ナデ・オサエで調整する。328は土師器台付皿の台部か。329は甑である。

土坑ＳＫ１３８出土遺物（330）　土師器の小形壺。全体的に摩滅が激しいが、下半をケズリで調整しているのが確認できる。古墳時代前期から中期のものと考えられる。

溝ＳＤ１２５出土遺物（331）　土師器の甕である。口縁部が緩やかに外反する。内外面とも非常に摩滅が激しい。

溝ＳＤ１２８出土遺物（332）　土師器の甕である。口縁端部に面を持つ。摩滅激しく、調整は不明瞭。

溝ＳＤ１４３出土遺物（333）　土師器の小型鉢である。丸底で、口縁部が内弯する。

溝ＳＤ１５３出土遺物（334・335）　334・335は土師器の杯Ａ。334の底部外面に圧痕が見られる。いずれも斎宮編年のⅡ－１～２期併行のものである。

土坑ＳＫ１３２出土遺物（336～338）　336～338は土師器。336・337は杯Ａである。斎宮編年のⅡ－１～２期併行のものか。338は甕。口縁部外面に煤が付着する。摩滅が激しいため、調整は不明瞭である。

土坑ＳＫ１３９出土遺物（339～341）　339は土師器皿Ａ、340は甕である。斎宮編年のⅡ－２～３期併行か。341は須恵器の甕。いずれも摩滅激しく、調整不明瞭である。

溝ＳＤ１４６出土遺物（342～345、381～402）

342～345は土錘である。大きさ・重さなどバラエティーに富む。

381～385は土師器杯Ａ。385が新しい要素を含むが、概ね斎宮編年のⅡ－１～２期併行のものである。386は鉢。丸みを帯びた体部から口縁部が緩やかに外反する。底部外面はケズリで調整される。387は口縁部の小片のみが残存するもので、器種がはっきりしないが、ここでは小皿として報告する。底部から口縁部の立ち上がりが急で、端部に明確な面を持つ。388は高杯の脚柱部。12の面取りを施されている。389は甕である。頸部外面に少量の煤が付着する。390は黒色土器の椀。内黒のものである。

391～393は須恵器。391は高杯か。392は平瓶、393は甕である。392の口縁部は直立し、端部が凹む。393は内外面とも摩滅が激しい。

394は緑釉陶器の椀か。壺の可能性もあるが底部内面にトチン痕があり、口縁部がすぼまらないものが予想されることから、ここでは椀として報告した。素地は均質で猿投産のものと考えられる。

395～400は灰釉陶器椀。395・400の底部外面には「万饒」の墨書が見られる。395については底部内面に顕著な研磨痕が見られ、また合わせて墨痕があることから、硯として転用されていた可能性が考えられる。また、同じく397の底部内面にも同様の状況が見られる。398の底部外面にも墨書が見られる。Ｏ53～Ｈ72号窯式期の範疇に収まるものである。401は灰釉陶器の長頸壺。402は陶器の壺か。

溝ＳＤ１４７出土遺物（346）　土師器の椀。平底から口縁部が緩やかに立ち上がる。斎宮編年のⅡ－３～４期併行のものか。

溝ＳＤ１２７出土遺物（347・348）　347・348は土錘。いずれも先端が欠けているが、ほぼ同じ大きさのものであろう。

溝ＳＤ１５２出土遺物（349～362）　349～351は土

師器の杯Ａ、352は瓦器椀である。353は土馬。体部は円棒状で、それに円棒状の脚を別に付けている。頭・尾・脚部は欠損しており、右脚部のみ別地点の包含層から出土した。胴部には鞍が貼り付けられ、手綱などの細部は沈線で表現されている。中実で重量感がある。

354・355は灰釉陶器の皿、356・357は椀である。354は口縁部分に片口がある。355～357の底部外面には墨書が見られる。いずれも破片のため、詳細は不明であるが､おそらく記号ではなく漢字であろう。内面は研磨されている｡Ｋ90～〇53号窯式期のもの。

358は延喜通寶。直径が1.9cm、孔の一辺が0.6cmで非常に軽量である。

359～362は木製品である。359は曲物の底板か。360は欠損している部分があり用途不明である。361・362は紡織具か。361はさすまた状で中央に方形の孔が開く。362は棒状の両端を加工する。362の片端に361を差し込んで使用するものと考えられる。また、前述の360についても方形と思われる孔があり、出土位置も近いことから、361・362と合わせて使用する可能性も考えられる。

溝ＳＤ１６０出土遺物（363）　須恵器の蓋である。宝珠形のつまみが付く｡墨痕などは確認できないが､硯に転用していた可能性もあろう。

溝ＳＤ１５６出土遺物（364）　須恵器高杯の脚部である。

溝ＳＤ１５８出土遺物（365）　志摩式製塩土器である。非常に粗い胎土である。

溝ＳＤ１２３出土遺物（366）　灰釉陶器の椀｡底部内面に重ね焼き痕が残る｡Ｋ90号窯式期に相当する。

溝ＳＤ１２６出土遺物（367）　白磁の椀である。大宰府分類[13]のⅣ類に相当しよう。

井戸ＳＥ１５５出土遺物（368～380）　368は土師質土器の椀を転用した加工円盤である。

369～371は曲物である。369は２段目で、直径約43cm、高さ26cmである。つなぎ部に板片を挟み込んで調整している。釘孔が７ヶ所見られる。370は３段目で、直径約41cm、高さ約22cmである。371は最下段にあったもので、直径約33cm、高さ約24cm。８方向に集水用と思われる孔が見られる。372～376は縦板か。非常に残りが悪い。373・376は一部が焼けている。377～380は隅柱である。377は自然木をそのまま使用したもの｡378～380は建築部材の転用か。

溝ＳＤ１６６出土遺物（403～405）　403は土師器杯Ａ。底部から口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。斎宮編年のⅡ－１～２期に併行するものか。404・405は灰釉陶器の椀。404は底部外面に「〇」の墨書が見られる。また内面に墨痕および顕著な研磨痕があり、硯に転用されたものと考えられる。405の底部外面にも墨書がある｡「万饒」と読める。

土坑ＳＫ１６７出土遺物（406）　山茶椀である。内面に炭化物、外面に煤が付着する。高台部が欠損するため、確実なことは言えないが藤澤編年の第７～８型式に相当するか。

溝ＳＤ１６３出土遺物（407～413）　407は土師器鍋。南伊勢系である。伊藤編年の第１段階のものである。408～410は山茶椀。408の内面には炭化物が付着し、研磨痕も見られる。409の底部外面には「＋」､410には｢丸に斜線｣の墨書がある｡藤澤編年の第６型式のものである。411・412は山茶椀を転用した加工円盤である｡413は陶器の鉢｡近世のものか。

ｐｉｔ出土遺物（414～432）　414（042 pit4）は須恵器高杯の蓋。６世紀前半のものか。415（Q32 pit2）は台付甕の台部。ハケメの様子および形状からＳ字甕のＡ～Ｂ類に収まるものと考えられる。416（040 pit1）はＳＢ171を構成するピット内遺物。土師質土器の大皿か。非常に小片であり、摩滅のため調整も不明瞭である。417（043 pit9）は土師器椀。418～420はＳＢ129のピットから出土している。418（P41 pit4）は土師質土器の小皿。419（P41 pit4）は底部が欠損しているが、高杯の杯部であろう。420（P41 pit4）は砥石か。柱穴内の根石とされていたものである。421（Q41 pit6）は土師器高杯か。杯部が丸い椀状のものである。底部を欠いているため椀の可能性もある。422・423はＳＢ121のピット内遺物。422（043 pit4）は緑釉陶器の皿。423（042 pit2）は灰釉陶器椀。内面に研磨痕が見られる。424（043 pit7）は土師質土器の小皿。425（P42 pit2）は土師器甕。外面に煤が付着する。口縁端部を折り返したような形状で平安末期のもの。426（P40 pit3）は黒色土器の椀でＳＢ172のピットから出土したものである。外面の摩滅が非常に激し

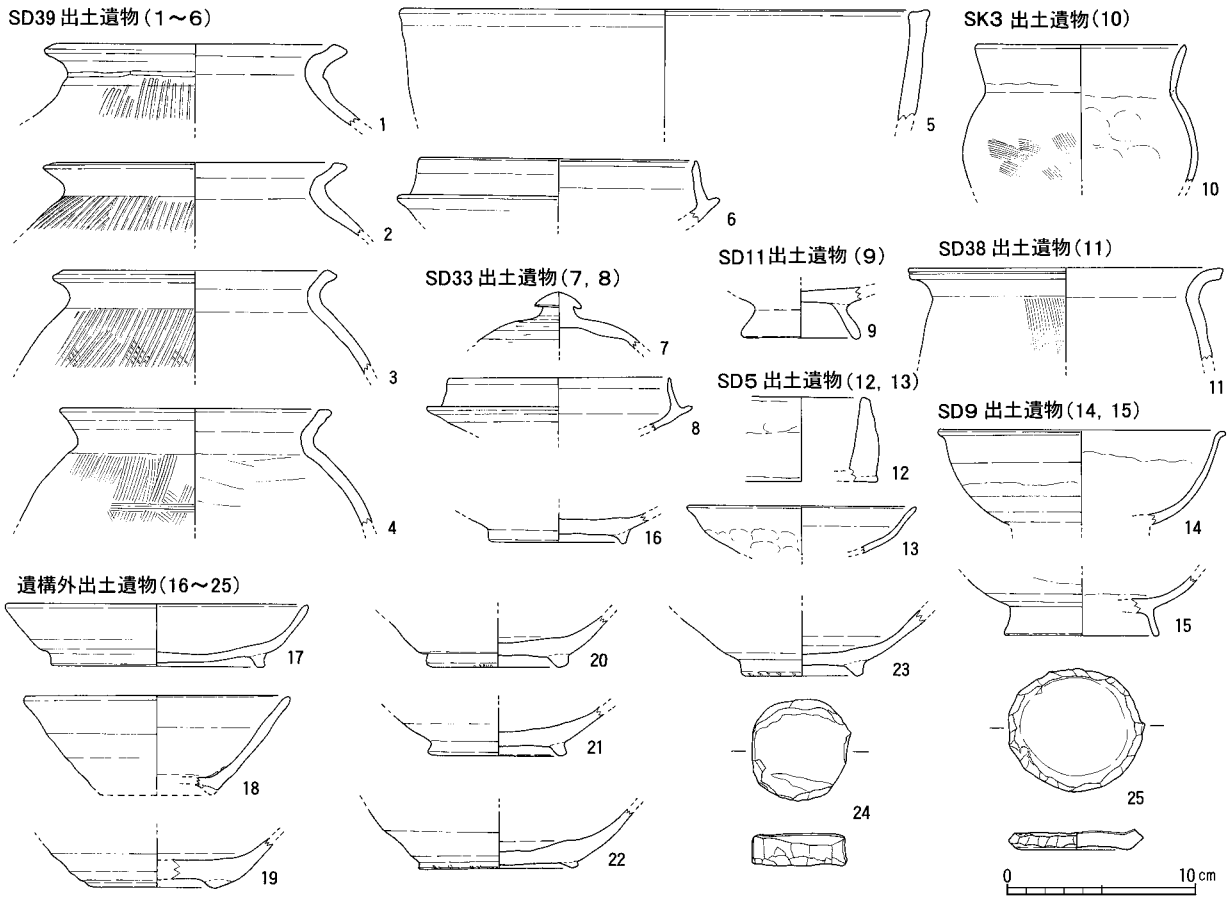
い。内黒である。427（043 pit9）・428（042 pit1）は土師質土器の皿と台付小皿。429（042 pit1）は灰釉陶器の椀。内面に重ね焼き痕が残るが、研磨も見られる。430（Q41 pit4）は瓦器椀。大和型である。ＳＢ129のピット内遺物。431（P44 pit2）は陶器小椀。藤澤編年の第４型式に相当する。432（P39 pit3）は灰釉陶器の壺か。柱痕の底から出土した。根石として使用したものか。ＳＢ130のピットから出土したものである。

遺構外出土遺物（433～499）　433は叩き石。側面には擦り痕、上下面には敲打痕が見られる。手の中に収まるサイズである。434は土錘。435～437は弥生土器壺。435は体部片で波状文や簾状文などが施される。436は437の内部から出土している。中期～後期初頭のものか。438は土師器甑。口縁端部が凹む。439・440は台付甕。同じ地点からの出土である。439はＳ字甕のＥ類新に相当する。また440は体部下半のみの残存であるが、台部端部の折り返しがないことや開脚が大きいことなどからＳ字甕のＥ類頃のものと考える。

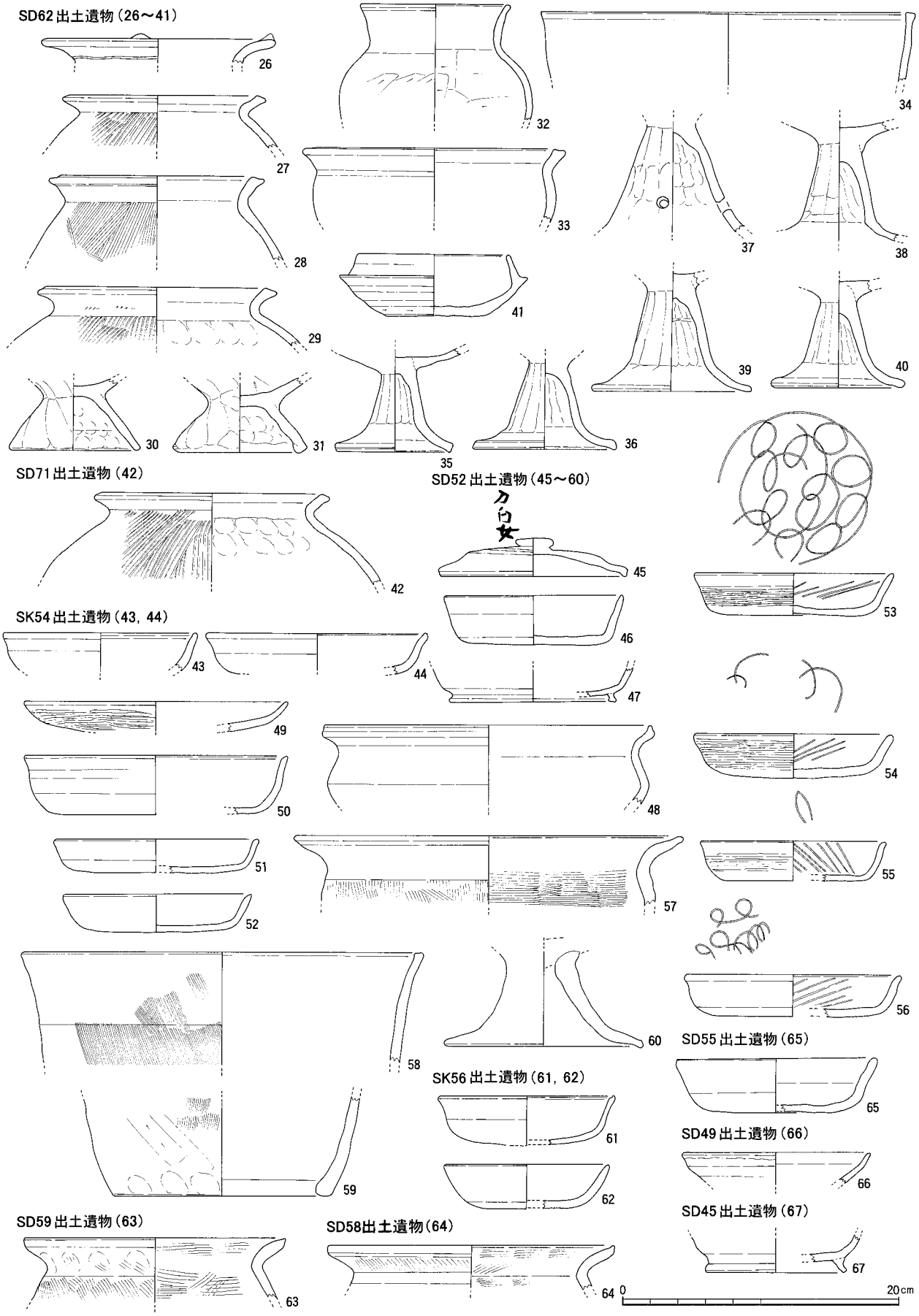
441～458は須恵器。441は短頸壺。底部外面はヘラ切り後未調整である。442は平瓶の口縁部か。緩やかに内弯し、端部に面を持つ。443・444は高杯の蓋、445・446は杯蓋である。446の外面にはヘラ記号が見られる。447～449は杯身。448の底部外面はヘラ切り後未調整、449はヘラ切り。450は高杯の脚部。451は杯で報告したが、蓋になる可能性もある。452は平瓶。453は蓋。表面の剥離が激しいが、宝珠形のつまみが付く。454～456は杯Ｂ。457は椀か。458は甕の口縁部である。

459～462は志摩式製塩土器。このうち３点が北区から出土している。

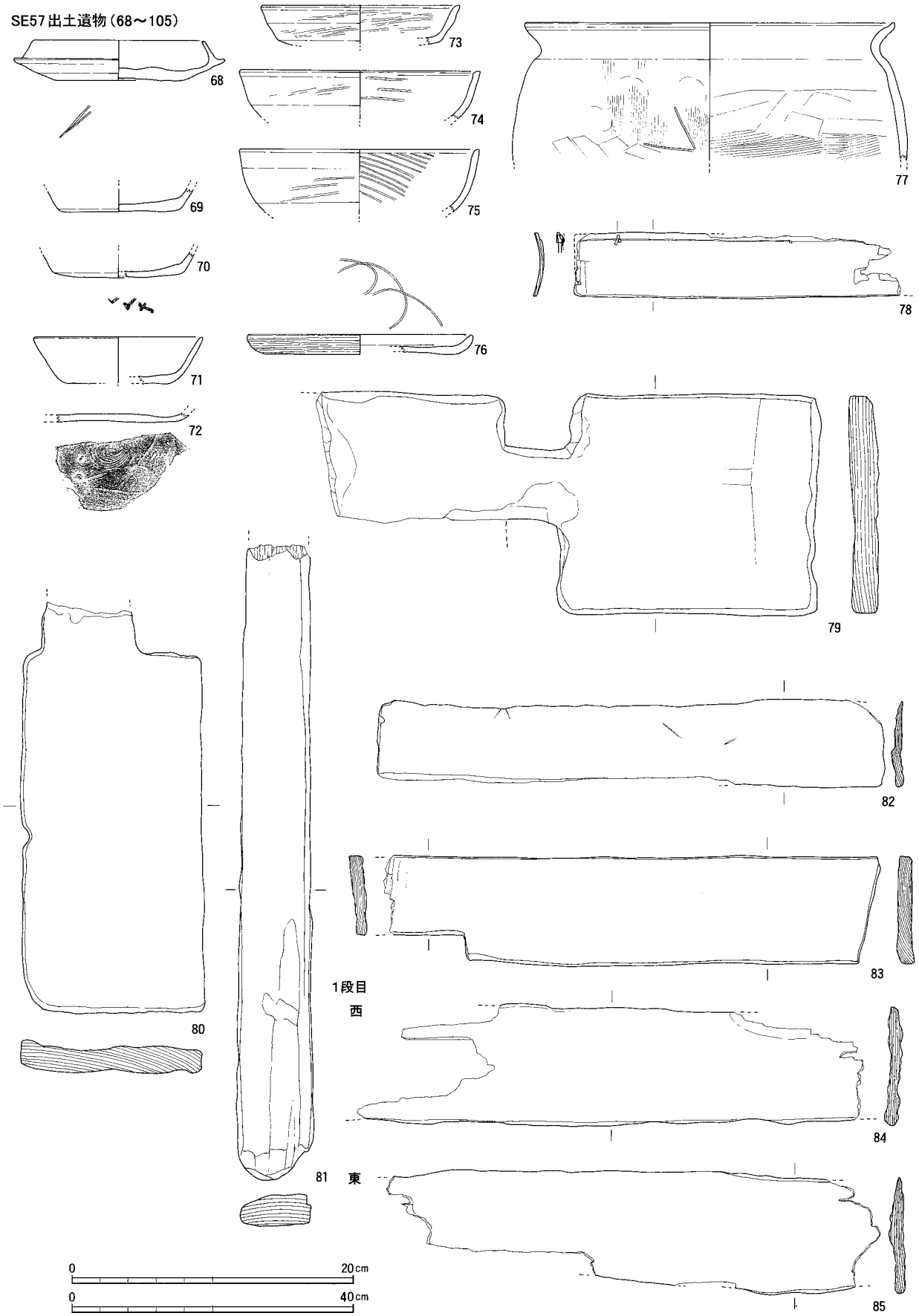
463～475・477～493は土師器。463は小皿。「て」の字状口縁を呈する。464～473は杯Ａである。465・466は内面に暗文が見られる。また、同じく内面に煤が付着する。467・469は底部から口縁部の立ち上がりが急である。473の底部内面に螺旋状暗文が見られる。474・475は皿Ａである。474の内面に



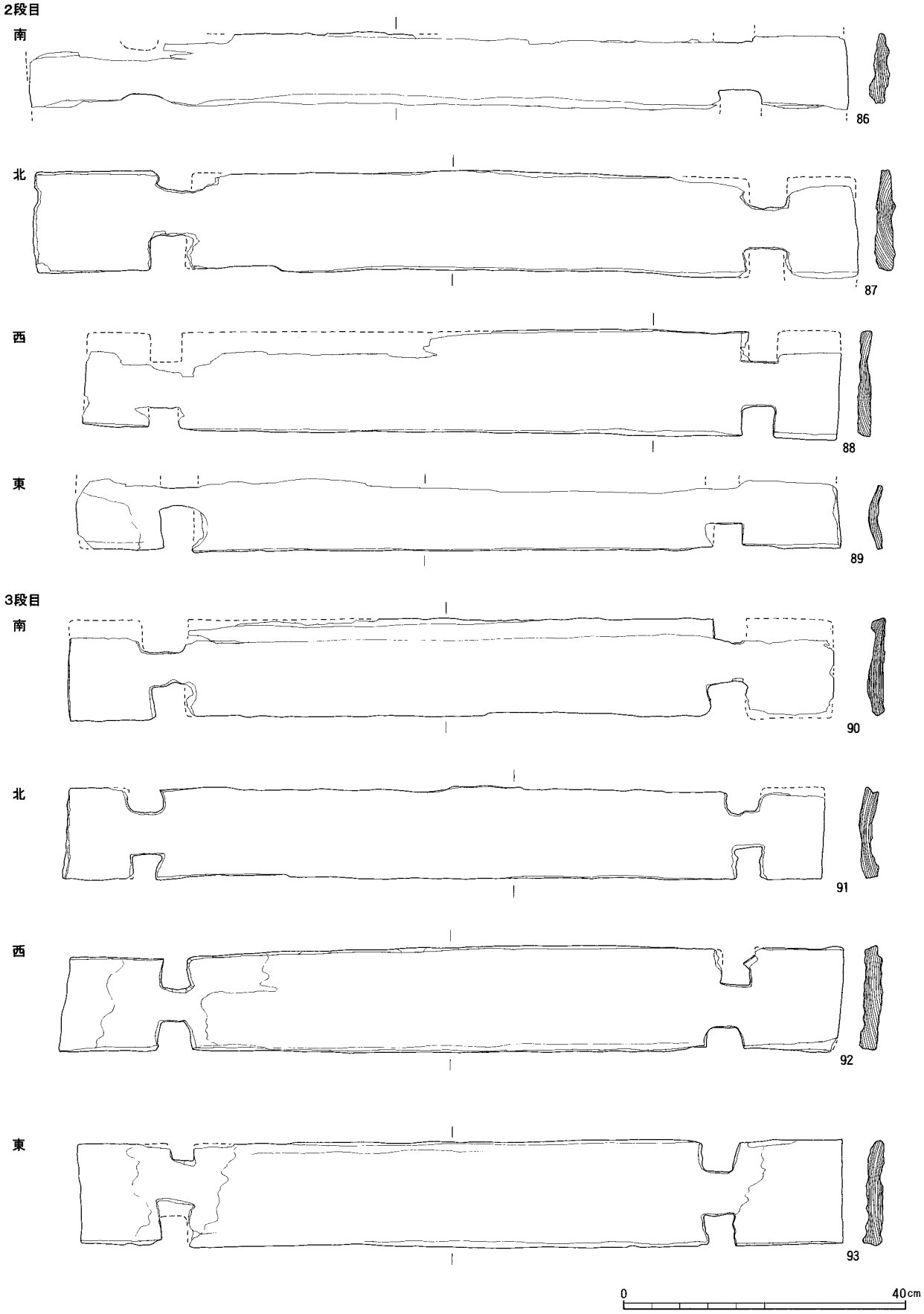
第22図　出土遺物実測図①（１：４）



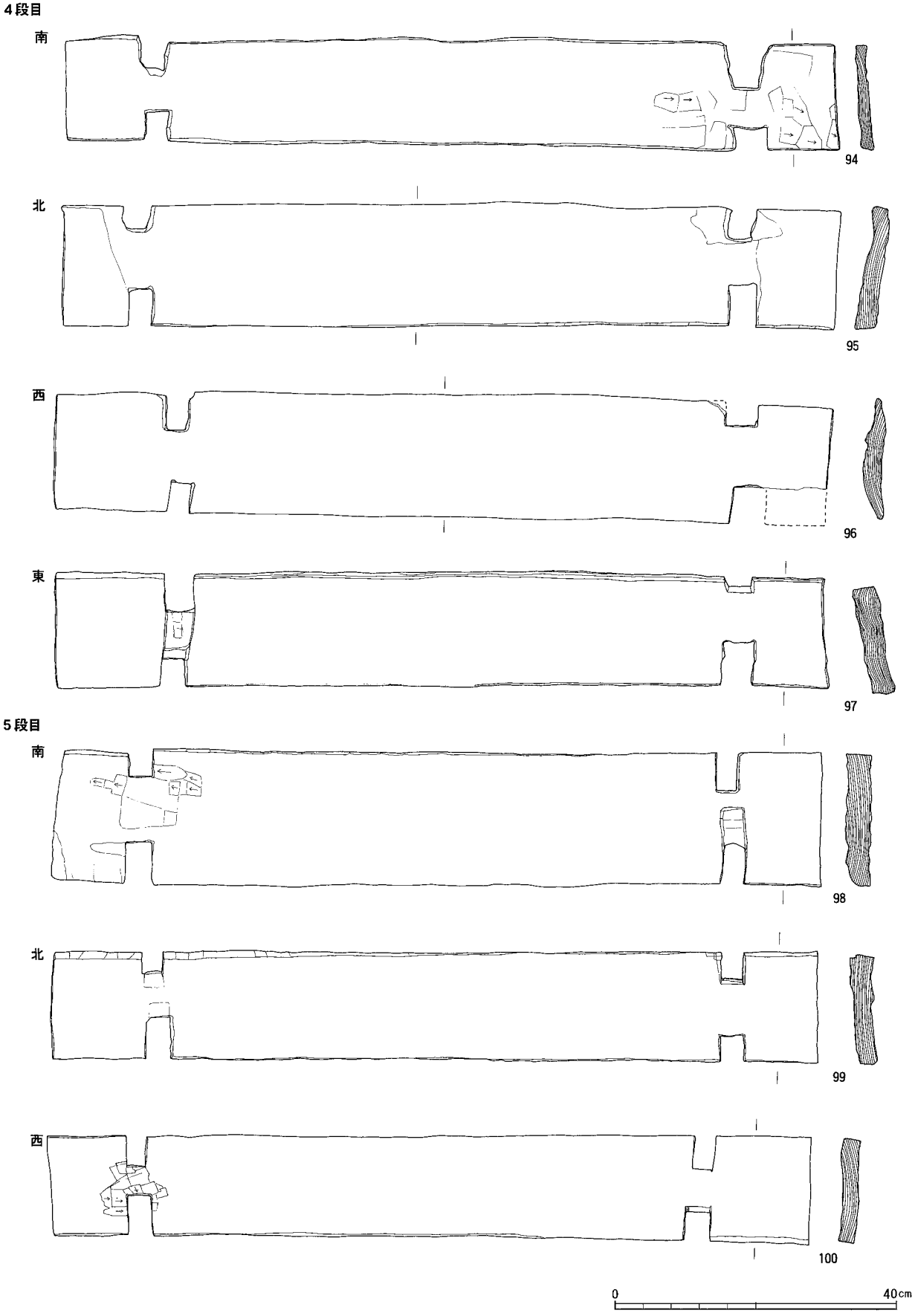
第23図　出土遺物実測図②（１：４）



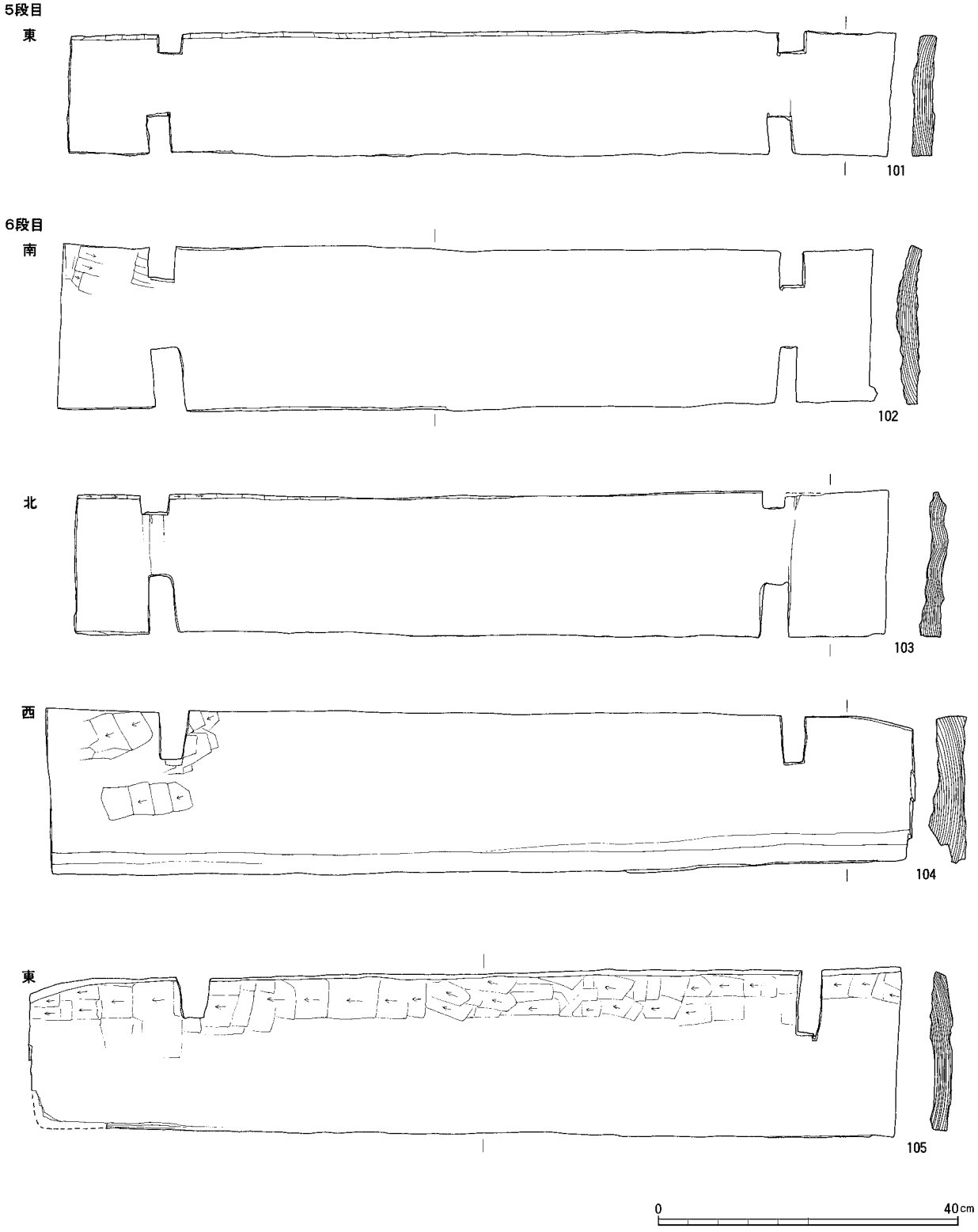
第24図　出土遺物実測図③（78・82～85は１：８、それ以外１：４）



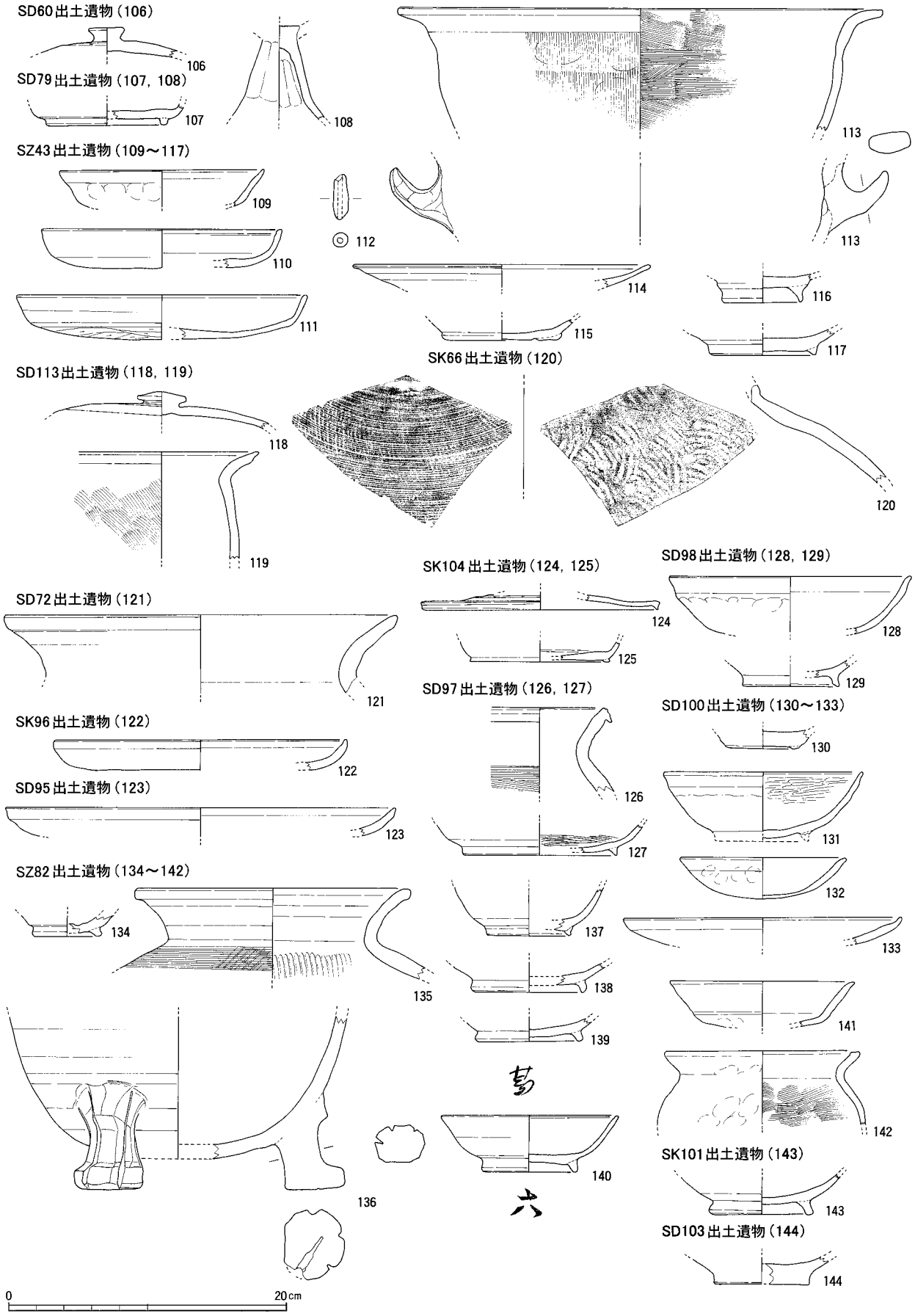
第25図　出土遺物実測図④（１：８）



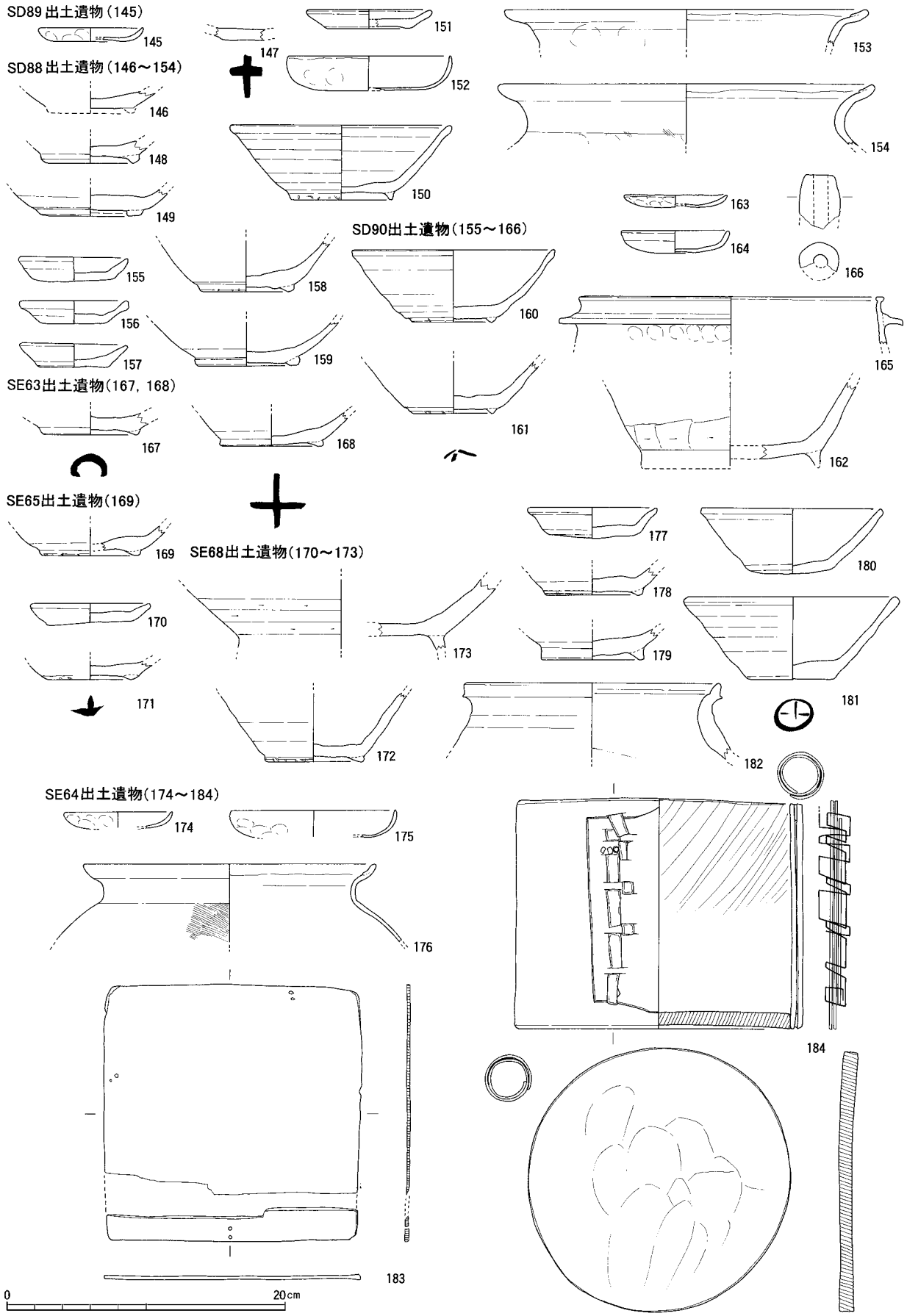
第26図　出土遺物実測図⑤（１：８）



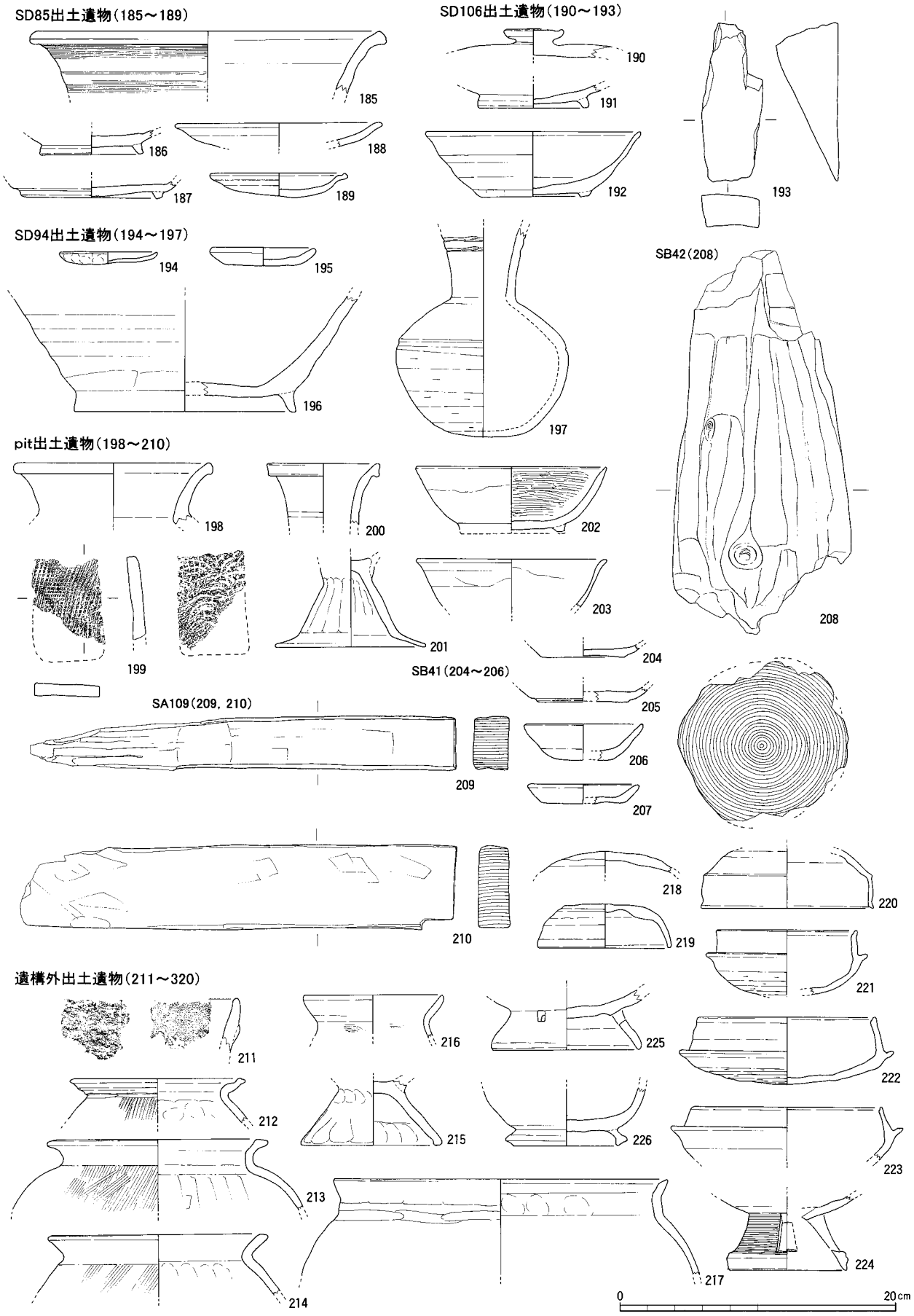
第27図　出土遺物実測図⑥（１：８）



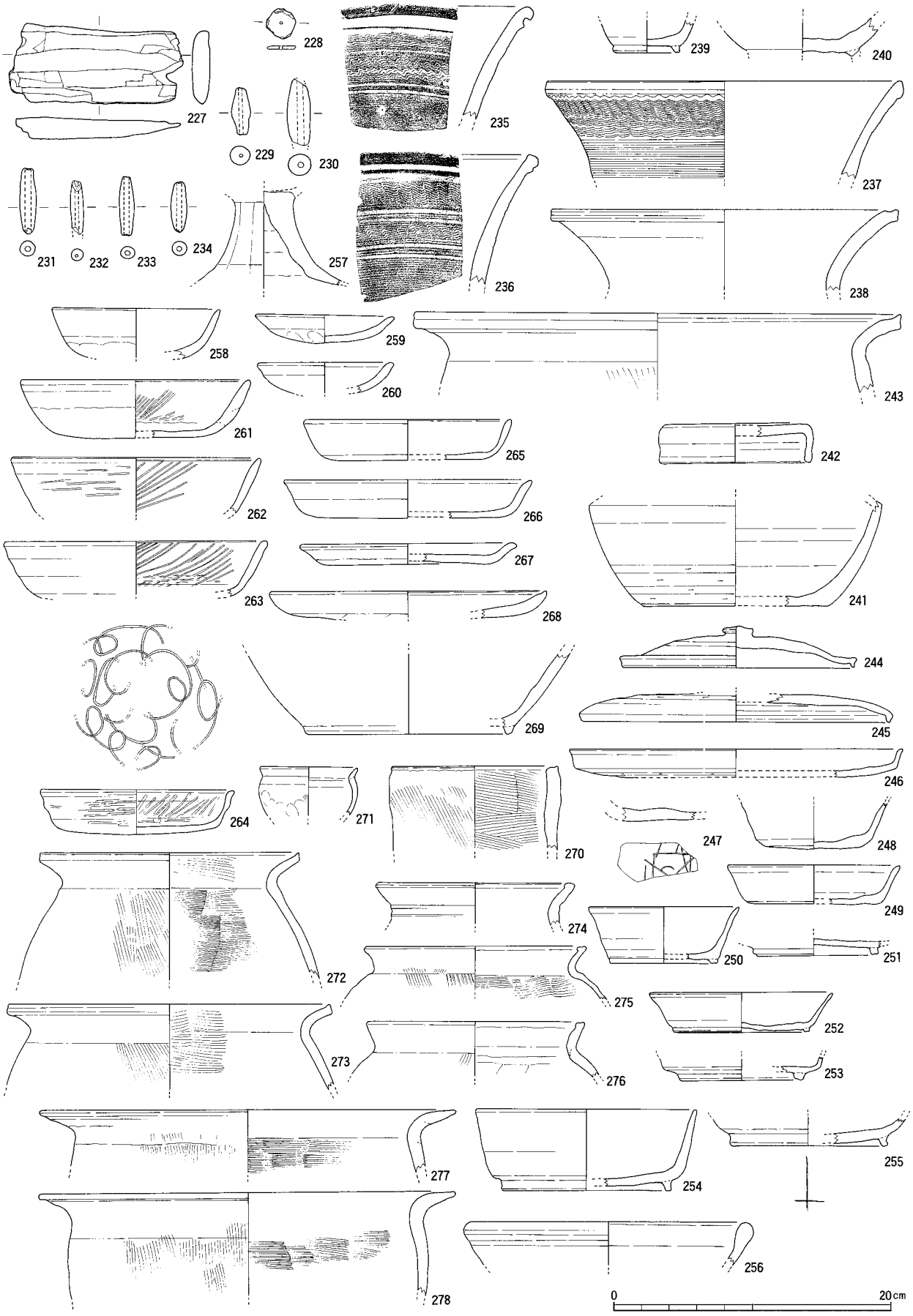
第28図　出土遺物実測図⑦（１：４）



第29図　出土遺物実測図⑧（1：4）



第30図　出土遺物実測図⑨（１：４）



第31図　出土遺物実測図⑩（１：４）

は暗文が見られ、炭化物が付着する。これらは斎宮編年のⅠ－３期～Ⅱ－２期に収まるものである。477は高杯の脚柱部。478～491は甕。体部が丸みを帯びるもの（478～483）と長胴を呈するもの（484～491）がある。490の口縁部内面に炭化物が付着する。492は清郷型鍋である。外面に煤が付着する。10世紀後半頃のものか[14]。493は甑。

476は黒色土器椀。内黒のもの。

494・495は灰釉陶器椀。494の内面には研磨痕、495には重ね焼き痕が見られる。

496～499は山茶椀。496の底部外面には「上」と読める墨書が施される。497の底部外面にも墨痕が見られるが、半分が欠損しており詳細は不明。記号の可能性が大きいと考える。498・499の底部内面には一定方向のナデが見られる。496を除き、いずれも知多・猿投産か。

【註】

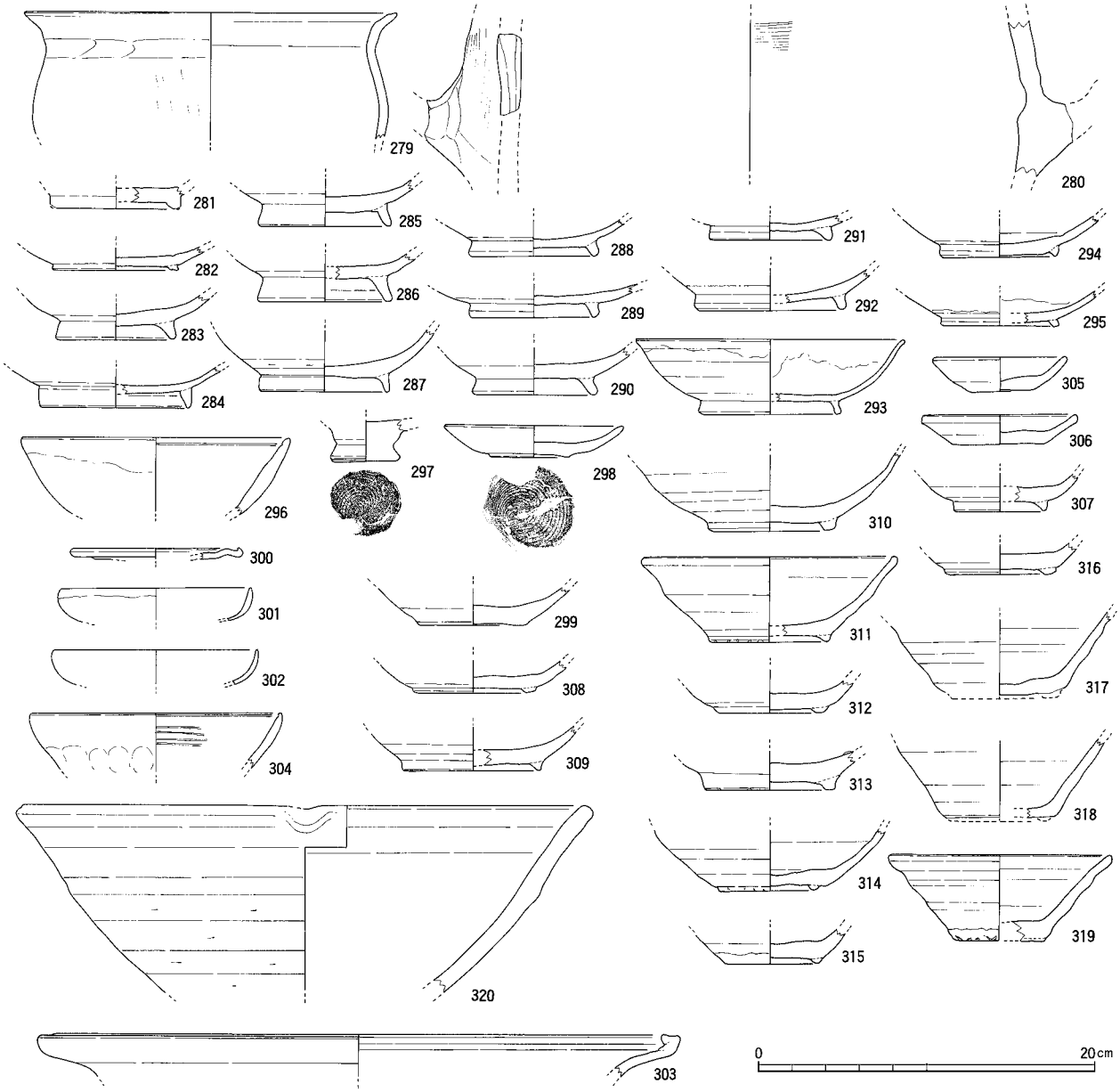
（１）（財）愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』（1990年）

（２）三重県埋蔵文化財センター『嶋抜Ⅲ』（2001年）

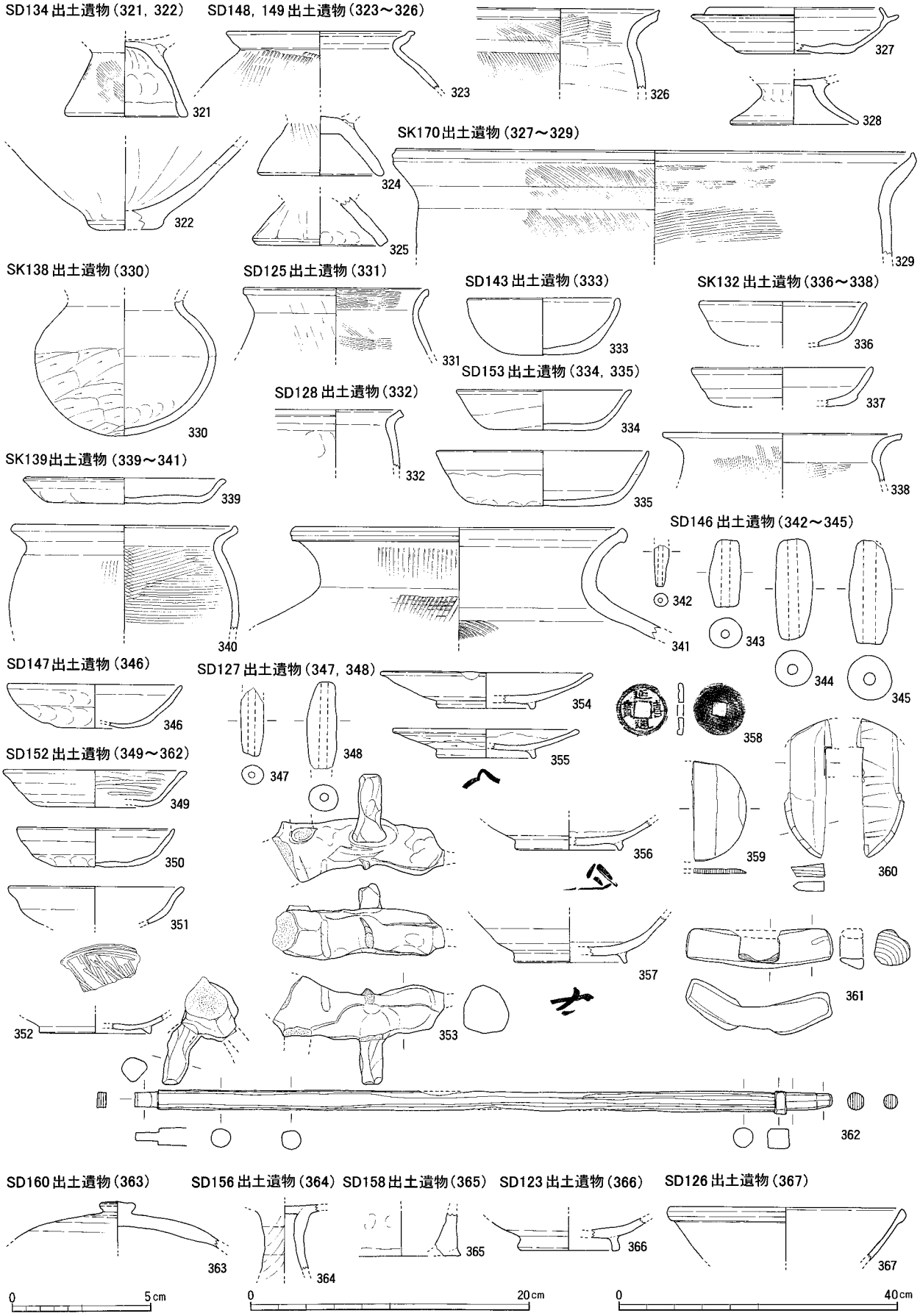
（３）浅生卓司氏のご教示による。

（４）以下、灰釉陶器については下記の文献に依る。
斉藤孝正「附論　猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」（『日本の美術６』　至文堂　2000年）

（５）以下、奈良・平安時代の須恵器・土師器の皿・杯類の分類は以下の文献に依る。

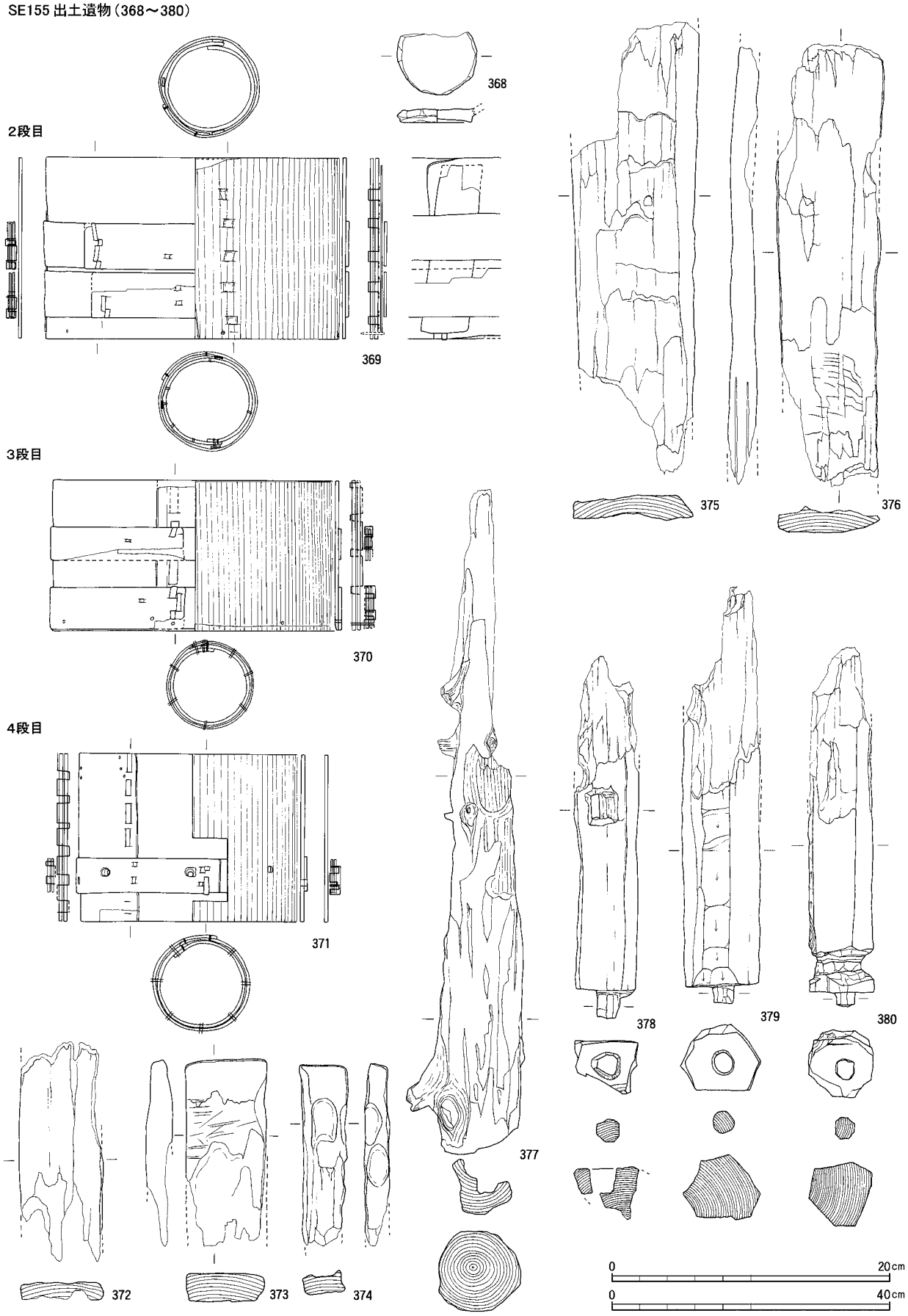


第32図　出土遺物実測図⑪（１：４）

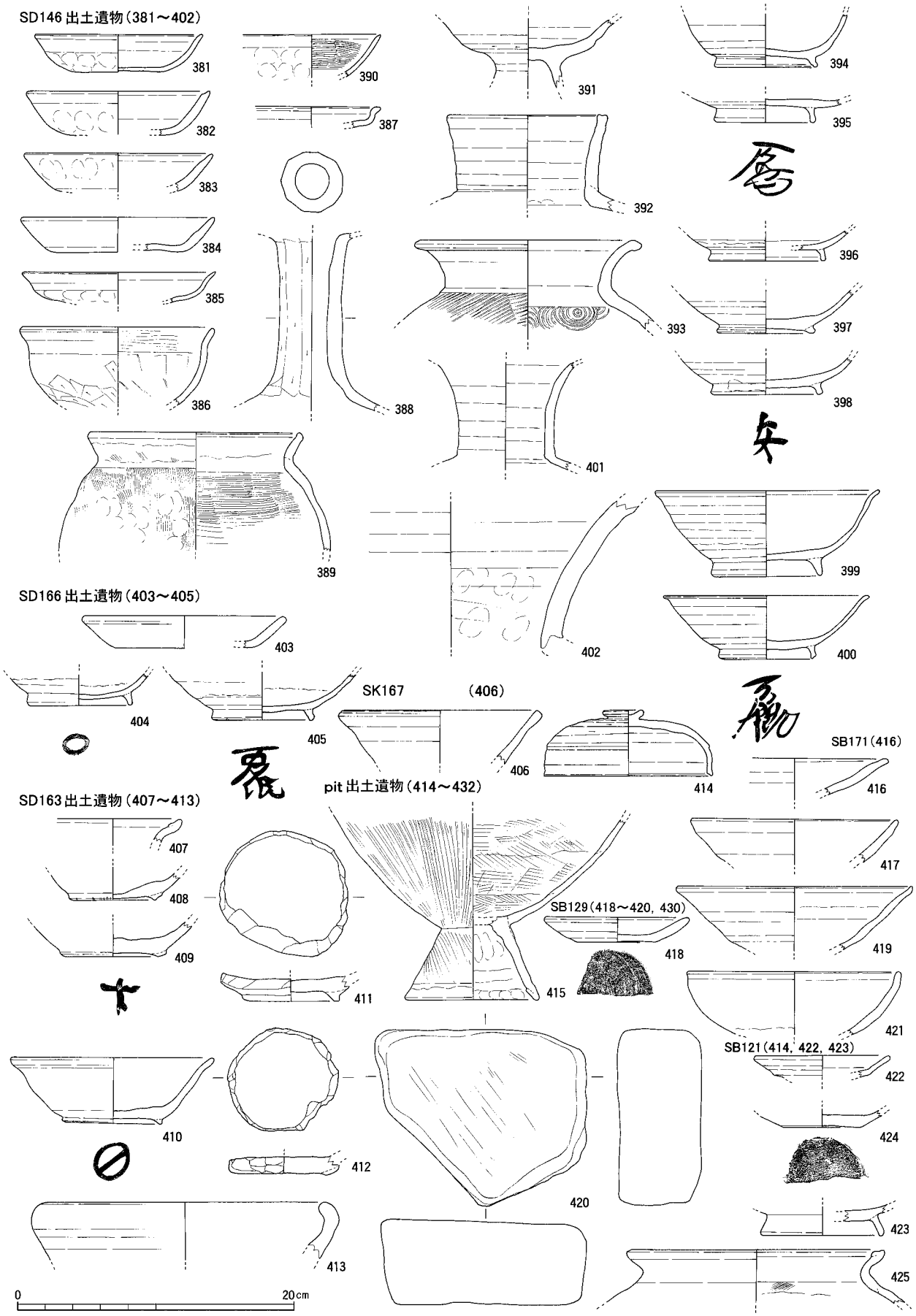


第33図　出土遺物実測図⑫（358は１：２、359・360・362は１：８、それ以外１：４）

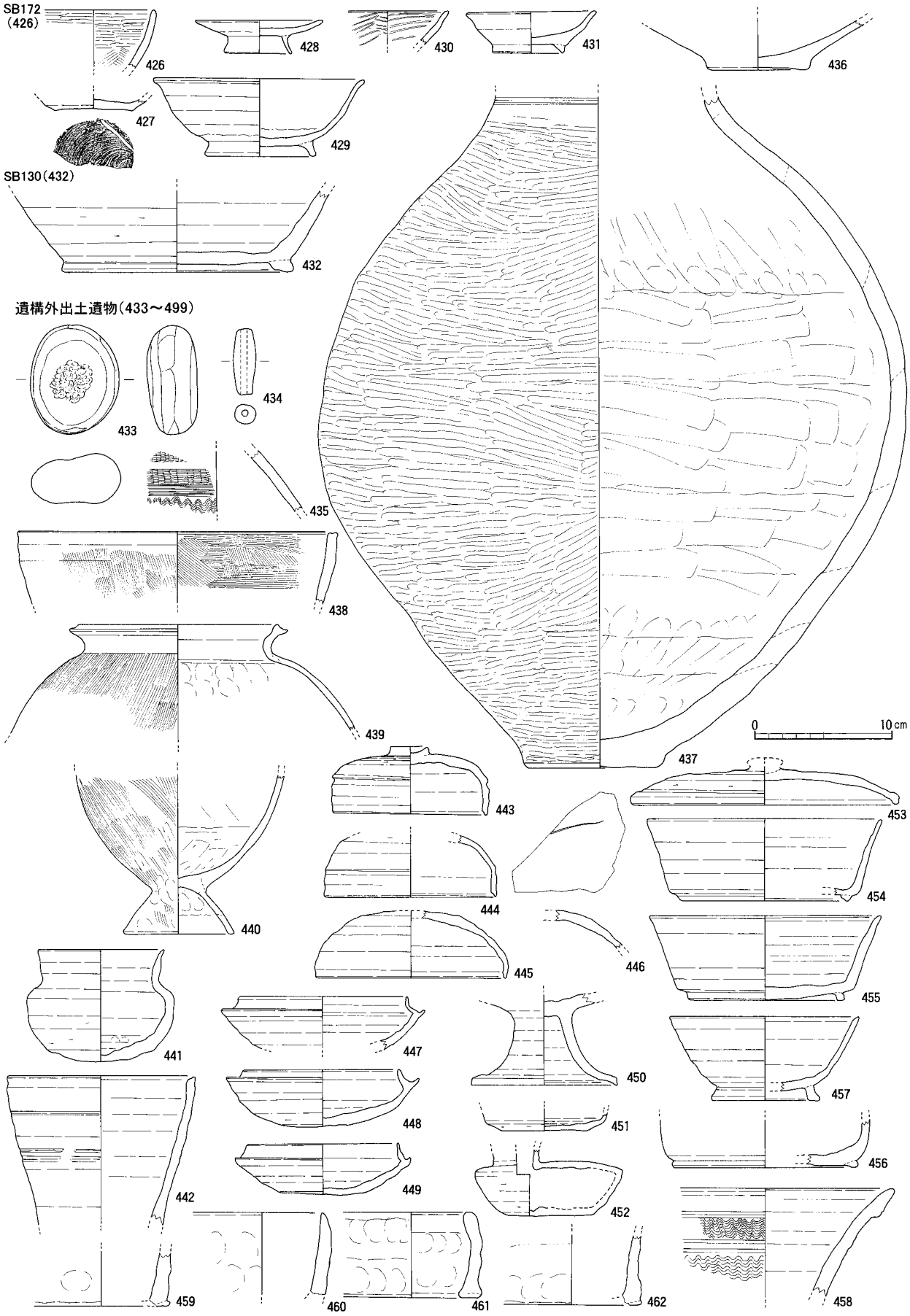
SE155 出土遺物（368～380）



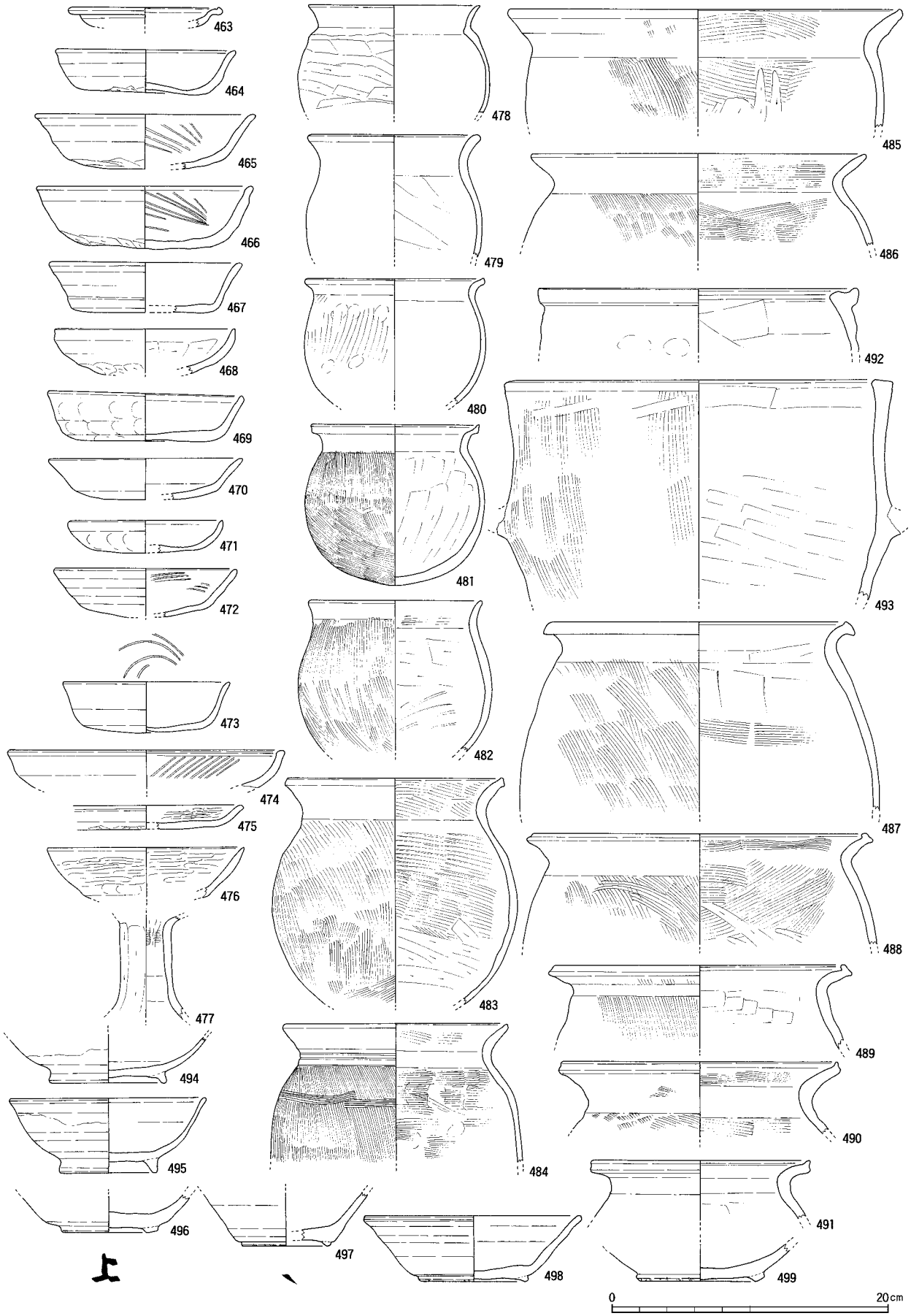
第34図　出土遺物実測図⑬（368は１：４、それ以外１：８）



第35図　出土遺物実測図⑭（１：４）



第36図　出土遺物実測図⑮（１：４）



第37図　出土遺物実測図⑯（１：４）

斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査　本文編』(2001年)

（６）以下、山茶椀については以下の文献に依る。
藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994年)

（７）（２）の文献と同じ。

（８）以下、斎宮編年については下記の文献に依る。
斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査　本文編』(2001年)

（９）森　隆「２．黒色土器」(『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995年初版)

(10) この「土師質土器」という名称を使用するのは、以下の文献に依る。
伊藤裕偉「３　伊勢の土師質土器が意味するもの」(『嶋抜Ⅱ』　三重県埋蔵文化財センター　2000年)

(11) 以下、南伊勢系鍋については下記の文献に依る。
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(『鍋と甕　そのデザイン』　東海考古学フォーラム　1996年)

(12) 古代の土器研究会　『古代の土器１　都城の土器集成』(1992年)

(13) 大宰府分類については、横田賢次郎・森田勉の両氏による分類（「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　1978年）をさらにまとめられた山本信夫氏の分類（同氏「土器の分類」『太宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市教育委員会　1983年）を用いる。

(14) 永井宏幸「清郷型鍋再考」(『財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　年報』(財) 愛知県埋蔵文化財センター　1996年)

№.	登録№.	次数	出土遺構	器種	法量（ｃｍ）		樹種	残存度	備考
78	２－０１６－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ 枠内	木製品 桶？	残存長 幅 厚さ	46.2 9.2 0.6	ヒノキ科 アスナロ属		
79	２－０１２－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ 枠内	木製品 井戸側部材	幅 厚さ	15.5 2.2	スギ		
80	２－０１１－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ 枠内	木製品 井戸側部材？	幅 厚さ	12.8 2.4	スギ		
81	２－０１２－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ 枠内	木製品 棒状具	幅 厚さ	5.5 2.2	スギ		
82	２－００１－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ 枠内	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	71.9 12.3 1.75	スギ		
83	２－００１－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ 枠内	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	70.1 15.0 2.4	スギ		
84	２－００２－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.３	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	71.2 16.5 2.5	スギ	一部欠損	１段目西
85	２－００１－０３	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.１	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	69.9 16.5 2.3	スギ		１段目東
86	２－００２－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.２	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.6 9.3 2.85	スギ	一部欠損	２段目南
87	２－００９－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.４	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.7 14.0 2.7	スギ	一部欠損	２段目北
88	２－００５－０３	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.11	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.1 15.0 1.8	スギ	一部欠損	２段目西
89	２－００２－０３	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.５	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 8.9 1.9	スギ	一部欠損	２段目東
90	２－００３－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.９	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 14.0 2.3	スギ	一部欠損	３段目南
91	２－００４－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.10	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.9 13.0 2.4	スギ	完存	３段目北
92	２－００７－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.12	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	110.1 14.5 3.1	スギ	完存	３段目西
93	２－００７－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.13	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 14.8 2.4	スギ	一部欠損	３段目東
94	２－００５－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.14	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.2 15.0 2.3	スギ	完存	４段目南
95	２－００８－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.15	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.6 17.1 4.8	スギ	完存	４段目北
96	２－００５－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.16	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.5 17.0 2.7	スギ	一部欠損	４段目西
97	２－００３－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ №.17	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	113.6 15.0 3.5	スギ	完存	４段目東

第６表　木製品観察表①

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（ｃｍ）		樹種	残存度	備考
98	２－００９－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.18	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	108.5 18.8 4.5	スギ	完存	５段目南
99	２－０１０－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.20	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.8 15.2 4.3	スギ	完存	５段目北
100	２－００３－０３	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.21	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.9 15.1 2.5	スギ	完存	５段目西
101	２－０１０－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.19	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	109.0 11.5 3.7	スギ	完存	５段目東
102	２－００８－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.22	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	108.7 21.0 3.3	スギ	完存	６段目南
103	２－００６－０１	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.23	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	107.9 19.0 3.2	スギ	完存	６段目北
104	２－００６－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.24	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.0 22.0 4.5	スギ	完存	６段目西
105	２－００４－０２	2	ｒ６・７ ＳＥ５７ No.25	木製品 井戸側部材	長さ 幅 厚さ	115.5 22.4 2.9	スギ	完存	６段目東
183	２－０１１－０１	2	ｌ１０ ＳＥ６４	木製品 折敷	長さ 幅 厚さ	18.5 15＋2.5＋α 0.2	ヒノキ科 アスナロ属		一部炭化
184	２－０１５－０１	2	ｍ７ ＳＥ６４ 第３層	木製品 曲物・底板	径 高さ	20.5 16.5	ヒノキ科 アスナロ属	ほぼ完存	底板（径18.8、厚さ1.1）
208	２－０１４－０１	2	ｓ６ ｐｉｔ６ （ＳＢ４２）	木製品 柱材	残存径	12.4	コウヤマキ		
209	２－０１３－０１	2	ＳＡ１０９ ｐｉｔ２	木製品 板状杭	幅 厚さ	3.9 2.6	ヒノキ科 アスナロ属		
210	２－０１３－０２	2	ＳＡ１０９ ｐｉｔ４	木製品 板状杭	幅 厚さ	6.0 2.3	ヒノキ科 アスナロ属		
359	３－００７－０４	3	Ｏ２５ ＳＤ１５２ 青灰色土	木製品 底板？	直径	14.4～15.0	ヒノキ属		
360	３－００４－０３	3	ｂ２４ ＳＤ１５２ No.2	木製品 不明	最大長 最大幅 厚さ	19.8 6.8 1.8	アカガシ亜属		
361	３－００４－０４	3	ｂ２４ ＳＤ１５２ No.2	木製品 紡織具？	最大長 最大幅 厚さ	10.7 2.5 2.5	ヒノキ属		３６２を差込か
362	３－００４－０１	3	ｂ２４ ＳＤ１５２ No.1	木製品 紡織具？	長さ 径	100.0 3.0	スギ	完存か	
369	３－００３－０１	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.31	木製品 曲物	直径 高さ	43.1 26.0	スギ	ほぼ完存	曲物の２段目　釘孔７ヶ所 （タガには通っていない） 差込板あり
370	３－００２－０１	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.32	木製品 曲物	直径 高さ	41.0 21.5	スギ	ほぼ完存	曲物の３段目 釘孔８ヶ所 （内１ヶ所で木釘残存）
371	３－００１－０１	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.33	木製品 曲物	直径 高さ	32.5 24.0	スギ	ほぼ完存	曲物の４段目 ８方に水抜き孔 修繕の痕跡
372	３－００６－０１	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.21	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	31.4 12.0 2.5	ヒノキ属		縦板
373	３－００５－０３	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.20	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	26.7 11.7 4.0	ヒノキ属		縦板 一部焼け
374	３－００６－０２	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.23	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	26.0 6.6 3.6	ヒノキ属		縦板
375	３－００５－０１	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.30	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	65.2 18.0 4.3	ヒノキ属		縦板
376	３－００５－０２	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.29	木製品 井戸側部材	残存長 残存幅 残存厚	63.3 14.9 3.9	ヒノキ属		縦板 一部やや焼け
377	３－００４－０２	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.25	木製品 井戸隅柱	残存長 最大幅	95.3 11.8	スギ		隅柱 自然木使用？
378	３－００７－０３	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.27	木製品 井戸隅柱	残存長 最大幅	51.8 9.0	スギ		隅柱 建築部材転用か
379	３－００７－０１	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.15	木製品 井戸隅柱	残存長 最大幅	59.6 11.3	スギ		隅柱 建築部材転用か
380	３－００７－０２	3	Ｗ３３ ＳＥ１５５ No.14	木製品 井戸隅柱	残存長 最大幅	51.6 9.5	スギ		隅柱 建築部材転用か

第７表　木製品観察表②

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	1-002-05	1	Ｂ１７ ＳＤ３９	土師器 台付甕	口径	16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	灰黄2.5Y6/2 灰黄褐10YR5/2	口縁部　2/12	Ｓ字甕Ｄ類新～Ｅ類古
2	1-002-02	1	Ｂ１７ ＳＤ３９	土師器 台付甕	口径	16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部　3/12	Ｓ字甕Ｅ類古 （６世紀前半）
3	1-002-03	1	Ｂ１７ ＳＤ３９	土師器 台付甕	口径	15.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	にぶい褐7.5YR5/3、6/3	口縁部　2/12	Ｓ字甕Ｅ類 内面に炭化物付着
4	1-002-04	1	Ｂ１７ ＳＤ３９	土師器 台付甕	口径	14.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：工具ナデ→ヨコナデ	密	—	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部　2/12	Ｓ字甕Ｅ類
5	1-002-01	1	Ｂ１７ ＳＤ３９	土師器 甑	口径	28.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	浅黄橙10YR8/4 にぶい黄橙10YR7/4	口縁部　1/12	６世紀前半頃か
6	1-001-04	1	Ｂ１７ ＳＤ３９	須恵器 杯身	口径 受部径	14.8 17.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部　1/12 受部　1/12	
7	1-001-03	1	Ｂ５ ＳＤ３３	須恵器 蓋	つまみ径	2.6	外：ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/1		キノコ形つまみ 徳居産か？
8	1-004-04	1	Ｂ５ ＳＤ３３	須恵器 杯身	口径 受部径	11.7 14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	口縁部　1/12 受部　2/12	
9	1-004-06	1	Ｂ４ ＳＤ１１	土師器 椀？	台径	6.2	外：ナデ・貼付ナデ 内：ナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/3	台部　2/12	
10	1-004-05	1	Ａ・Ｂ７ ＳＫ３	土師器 小形壺	口径	11.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密 ～5.0mmの砂粒含む	—	外面：褐灰7.5YR6/1 内面：明褐灰7.5YR7/2	口縁部　2/12	外面に煤付着
11	1-001-05	1	Ｂ１９ ＳＤ３８	土師器 甕	口径	16.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 微砂粒含む	—	橙2.5Y7/6 褐灰10YR4/1	口縁部　2/12	内面に炭化物付着 口縁端部に沈線
12	1-004-03	1	Ｂ１０ ＳＤ５	製塩土器			外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗 ～5.0mmの砂粒含む	—	橙５YR6/6	小片	志摩式
13	1-004-02	1	Ｂ１０ ＳＤ５	土師器 杯	口径	6.1	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	—	灰白10YR8/2	口縁部　2/12	口縁端部に煤付着 南伊勢系
14	1-001-01	1	Ｂ１２ ＳＤ９	灰釉陶器 椀	口径	15.2	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Y7/1	口縁部　4/12	猿投産 施釉
15	1-001-02	1	Ｂ１２ ＳＤ９	灰釉陶器 椀	高台径	8.2	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	釉色：灰白7.5Y7/1 素地：灰白５Y7/1	高台部　2/12	施釉
16	1-004-01	1	Ｂ３ カクラン	灰釉陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	高台部　5/12	内面研磨痕 体部打ち欠きか？
17	1-003-07	1	Ｂ８ 包含層	須恵器 皿Ｂ	口径 器高 高台径	16.0 3.3 11.2	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	口縁部　1/12 高台部　3/12	内面研磨痕
18	1-003-06	1	包含層	陶器 椀	口径	14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部　3/12	山茶椀（尾張）第７型式
19	1-003-04	1	１地区　Ｂ７ 包含層	陶器 椀	高台径	8.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白N8/0	高台部　5/12	内面自然釉 山茶椀（尾張・知多） 第６型式　砂痕
20	1-003-02	1	表土掘削	陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰白N8/0 内面：灰白N7/0	高台部　完存	内面研磨痕　外面煤少量付着 山茶椀（渥美） 第６型式併行
21	1-003-01	1	２地区 表土掘削	陶器 椀	高台径	7.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y8/1	高台部　11/12	内面研磨痕 山茶椀（渥美？） 第５型式併行？
22	1-003-05	1	表土掘削	陶器 椀	高台径	8.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	高台部　11/12	内面研磨痕 山茶椀（尾張） 第６型式　モミガラ痕
23	1-003-03	1	表土掘削	陶器 椀	高台径	6.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	高台部　完存	内面研磨痕　モミガラ痕 山茶椀（尾張・知多？） 第６型式
24	1-004-08	1	表採	加工円盤	直径	4.9～5.4		密		にぶい橙５YR7/3		常滑甕の体部使用 重量　50ｇ
25	1-004-07	1	Ａ１１ 包含層	加工円盤	直径	6.5～7.1		密 ～2.0mmの砂粒含む	良	外面：灰白N8/0 内面：灰オリーブ7.5Y4/2		山茶椀（尾張・知多）の高台部使用 重量　58ｇ
26	2-047-05	2	ｍ９ ＳＤ６２	弥生土器 壺	口径	16.4	外：ヨコナデ、沈線 内：ヨコナデ、浮文	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部　1/12	中期前半か？
27	2-048-04	2	ｍ８ ＳＤ６２	土師器 台付甕	口径	14.7	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ、ナデ→ヨコナデ	密 ～4.0mmの砂粒含む	—	にぶい褐7.5YR6/3	口縁部　1/12	Ｓ字甕Ｄ類新～Ｅ類
28	2-048-03	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 台付甕	口径	15.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/3	口縁部　1/12	Ｓ字甕Ｅ類新
29	2-048-02	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 台付甕	口径	17.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ、ナデ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５YR6/6	口縁部　2/12	Ｓ字甕Ｅ類新
30	2-047-03	2	ｍ９ ＳＤ６２ ③	土師器 台付甕	脚台径	9.4	外：工具ナデ、オサエ 内：オサエ、ヨコナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR7/3	脚台部　6/12	摩滅のため調整不明瞭 Ｓ字甕Ｅ類か
31	2-047-02	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 台付甕	脚台径	9.6	外：工具ナデ、ナデ 内：ナデ、オサエ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10YR7/4	脚台部　完存	Ｓ字甕Ｅ類か
32	2-047-04	2	ｍ９ ＳＤ６２ ④	土師器 小形壺	口径	10.8	外：ナデ、ケズリ→ヨコナデ 内：ケズリ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2	口縁部　3/12	
33	2-047-06	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 鉢	口径	19.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～4.0mmの砂粒含む	—	橙2.5YR6/6	口縁部　1/12	「高茶屋式」
34	2-048-05	2	ｎ８ ＳＤ６２	土師器 甑	口径	27.0	外：ナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙7.5YR7/4 内面：灰白10YR8/2	口縁部　1/12	
35	2-046-06	2	ｍ９ ＳＤ６２ ②	土師器 高杯	基部径 脚裾径	2.5 8.5	外：ナデ、工具ナデ→ヨコナデ 内：ナデ、シボリ→ヨコナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	—	橙５YR6/6	基部　完存 脚裾部　3/12	
36	2-046-03	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 高杯	基部径 脚裾径	2.8 10.4	外：ナデ、工具ナデ→ヨコナデ 内：ナデ、シボリ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５YR6/6	基部　完存 脚裾部　6/12	
37	2-047-01	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 高杯	基部径	3.4	外：ナデ、面取りナデ 内：ナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい赤褐５YR5/4	基部　完存	穿孔１ヶ所残
38	2-046-04	2	ｍ９ ＳＤ６２ ①	土師器 高杯	基部径	3.2	外：ナデ、工具ナデ 内：ナデ、シボリ	密 ～3.5mmの砂粒含む	—	橙５YR6/6	基部　完存	脚部外面黒変
39	2-046-05	2	ｍ９ ＳＤ６２	土師器 高杯	基部径 脚裾径	3.5 11.5	外：工具ナデ→ヨコナデ 内：ナデ、シボリ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR7/4	基部　完存 脚裾部　2/12	
40	2-046-02	2	ｍ９ ＳＤ６２ ①	土師器 高杯	基部径 脚裾径	2.6 9.7	外：ナデ、工具ナデ→ヨコナデ 内：ナデ、シボリ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５YR6/6	基部　完存 脚裾部　4/12	
41	2-046-01	2	ｍ１０ ＳＤ６２	須恵器 杯身	口径 器高 受部径	11.0 3.5 13.6	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰N6/0 灰N5/0	口縁部　3/12 受部　3/12	

第８表　出土遺物観察表①

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
42	2-048-01	2	l12 SD71	土師器 台付甕	口径	17.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ、オサエ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	S字甕E類
43	2-043-05	2	r7 SK54	土師器 杯	口径	14.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
44	2-043-06	2	r7 SK54	土師器 杯	口径	16.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
45	2-061-07	2	r7 SD52	須恵器 蓋	口径 器高 つまみ径	13.6 2.8 2.7	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白2.5Y7/1	口縁部 4/12	外面墨書あり「刀自女」
46	2-061-06	2	r7 SD52 ⑧	須恵器 杯A	口径 器高	13.0 3.6	外：ロクロナデ、ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白5Y7/1	口縁部 11/12	
47	2-063-05	2	r7 SD52	須恵器 杯B	高台径	12.0	外：ロクロナデ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～0.5mmの砂粒含む	良	外面：灰N5/0 内面：灰N6/0	高台部 2/12	
48	2-062-03	2	r7 SD52	須恵器 鉢	口径	23.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	不良	灰白5Y8/1	口縁部 1/12	摩滅激しい
49	2-064-04	2	r7 SD52	土師器 皿A	口径	19.0	外：ミガキ、ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	橙5YR7/6	口縁部 2/12	内面に炭化物 外面一部黒斑
50	2-064-03	2	r7 SD52	土師器 杯A	口径 器高	19.0 4.2	外：ミガキ？→ヨコナデ 内：ミガキ？→ヨコナデ	密	—	橙5YR7/6	口縁部 2/12	
51	2-061-03	2	r7 SD52	土師器 杯A	口径 器高	14.8 2.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：浅黄橙7.5YR8/6 内面：橙5YR7/6	口縁部 4/12	調整不明瞭 内面一部黒変
52	2-061-02	2	s8 SD52 ①	土師器 杯A	口径 器高	13.6 2.7	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ？→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：橙5YR6/6 内面：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12	
53	2-061-01	2	r7 SD52 ⑫	土師器 杯A	口径 器高	14.4 3.0	外：ミガキ、オサエ→ヨコナデ 内：暗文→ヨコナデ	やや密	—	外面：橙5YR7/6 内面：橙7.5YR7/6	口縁部 8/12	口縁部油煙付着 内面放射状暗文・螺旋状暗文
54	2-061-04	2	t8 SD52	土師器 杯A	口径 器高	14.4 3.1	外：ミガキ 内：暗文	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：橙5YR7/6 内面：橙5YR7/8	口縁部 3/12	内面放射状暗文・螺旋状暗文
55	2-061-05	2	r7 SD52	土師器 杯A	口径 器高	13.4 2.9	外：ミガキ 内：暗文	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：橙5YR6/8 内面：橙5YR7/6	口縁部 1/12	内面放射状暗文・螺旋状暗文？
56	2-064-02	2	r7 SD52 ⑥	土師器 杯A	口径 器高	15.6 3.0	外：ミガキ？→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：橙2.5YR7/6 内面：にぶい褐7.5YR6/3	口縁部 2/12	内面放射状暗文・螺旋状暗文 内面炭化物？付着
57	2-065-01	2	r7 SD52	土師器 甕	口径	28.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密	—	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	報告番号277と同一か
58	2-062-01	2	r7 SD52	土師器 甑	口径	29.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
59	2-062-02	2	r7 SD52 ⑨	土師器 甑	底径	15.7	外：ハケメ、オサエ、ナデ→ケズリ 内：ナデ→ケズリ	やや粗 ～3.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄橙10YR7/2 内面：にぶい橙7.5YR6/4	底部 2/12	
60	2-062-04	2	s8 SD52 ②	土師器 高杯	脚裾径	14.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/3	底部 4/12	
61	2-042-03	2	r6 SK56	土師器 杯A	口径 器高	12.8 3.5	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	橙5YR7/6 浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	
62	2-059-05	2	q6 SK56	土師器 杯A	口径 器高	12.0 3.2	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
63	2-059-02	2	q9 SD59	土師器 甕	口径	18.8	外：ハケメ、オサエ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗 ～2.5mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	
64	2-059-01	2	m11 SD58	土師器 甕	口径	20.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2	口縁部 3/12	
65	2-059-03	2	r7 SD55	土師器 杯A	口径 器高	14.5 3.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗 ～3.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/3	口縁部 6/12	外面煤付着
66	2-060-01	2	v5 SD49	黒色土器 椀	口径	13.6	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	内黒
67	2-039-03	2	w3・4 SD45	須恵器 杯B	高台径	10.2	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～0.5mmの砂粒含む	良	灰N6/0	高台部 3/12	
68	2-052-06	2	r6 SE57 ③	須恵器 杯身	口径 器高 受部径	12.0 2.8 15.0	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	口縁部 1/12 受部 2/12	底部外面にヘラ描き
69	2-054-02	2	r7 SE57 ①	須恵器 杯A	底径	8.6	外：ロクロナデ→ヘラ切り 内：ロクロナデ、一定方向ナデ	密	良	灰白N8/0	底部 10/12	
70	2-054-04	2	r7 SE57 ①	須恵器 杯A	底径	9.2	外：ロクロナデ→ヘラ切り 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	底部 5/12	底部外面墨書あり
71	2-054-03	2	r7 SE57 ④	須恵器 杯A	口径	12.0		密	不良	灰N6/0 灰白2.5Y8/1	口縁部 2/12	生焼け 摩滅のため調整不明瞭
72	2-053-03	2	r6 SE57 ③	須恵器 杯A			外：糸切、手持ちケズリ 内：ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	底部片	
73	2-052-02	2	r7 SE57 ①	土師器 杯A	口径	14.0	外：ミガキ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密	—	にぶい褐7.5YR6/3・5/3 褐灰7.5YR4/1	口縁部 1/12	内面一部黒変
74	2-052-01	2	r6 SE57 ④掘方	土師器 杯A	口径	17.0	外：ミガキ？→ヨコナデ 内：ミガキ？→ヨコナデ	密	—	橙7.5YR7/6 にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
75	2-052-04	2	r7 SE57 ②	土師器 杯A	口径	17.0	外：ミガキ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、暗文	密	—	橙5YR6/6	口縁部 1/12	内面放射状暗文
76	2-052-03	2	r7 SE57 ①	土師器 皿A	口径 器高	16.0 1.4	外：ミガキ 内：ナデ、暗文	密	—	橙5YR6/6	口縁部 2/12	内面螺旋状暗文
77	2-054-01	2	r6・r7 SE57 枠内	土師器 甕	口径	26.2	外：ハケメ、ケズリ→ヨコナデ 内：ナデ、ケズリ、ハケメ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	外面煤付着　ヘラ描き？ 内面炭化物付着
106	2-059-09	2	q9 SD60	須恵器 蓋	つまみ径	2.5	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	粗 ～4.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0 灰白N7/0	つまみ部 ほぼ完存	硯に転用か
107	2-052-05	2	l14 SD79	土師器 杯B	高台径	8.6	外：ロクロナデ？、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ？	密	—	にぶい橙7.5YR7/4 灰白2.5Y8/1	高台部 3/12	
108	2-054-05	2	l14 SD79	土師器 高杯	基部径	2.6	外：ナデ、面取りナデ 内：ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10YR7/4		
109	2-057-01	2	w3 SZ43	土師器 杯A	口径	14.7	外：オサエ	やや粗 ～1.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	摩滅のため調整不明瞭
110	2-057-02	2	w3 SZ43	土師器 杯A	口径	17.2	外：ナデ、ヨコナデ？ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	橙5YR7/6	口縁部 1/12	摩滅のため調整不明瞭

第９表　出土遺物観察表②

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
111	2-057-03	2	x３ ＳＺ４３	須恵器 皿	口径 器高	20.9 3.2	外：ロクロナデ、手持ちケズリ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　4/12	
112	2-057-05	2	x３ ＳＺ４３	土錘	長さ 幅 穴径	3.2 1.1 0.4		やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰黄褐10YR4/2 黒褐10YR3/1		重量　3.18g
113	2-058-01	2	w３ ＳＺ４３	土師器 把手付鍋	口径	34.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい褐7.5YR5/3 内面：灰褐7.5YR4/2	口縁部　1/12 体部片	把手部分接合せず
114	2-057-04	2	w３ ＳＺ４３	緑釉陶器 皿	口径	21.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	素地：灰白N7/0 釉色：灰白7.5Y7/1	口縁部　小片	口径不安
115	2-056-05	2	x３ ＳＺ４３	緑釉陶器 椀	台径	8.6	外：ナデ、貼付ナデ 内：ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白10YR8/2 内面：浅黄橙10YR8/3	台部　3/12	摩滅のため調整不明瞭 釉が全部剥離
116	2-056-02	2	x３ ＳＺ４３	土師質土器 台付皿	高台径	5.6	外：ナデ→貼付ナデ 内：ナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2	高台部　小片	
117	2-056-03	2	x３ ＳＺ４３	陶器 椀	高台径	7.7	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	高台部　5/12	山茶椀（猿投・瀬戸） 第５型式？ 内面研磨痕
118	2-040-06	2	w３・４ ＳＤ１１３	須恵器 蓋	つまみ径	3.5	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	外面：灰白５Y7/1 内面：灰白５Y8/1	つまみ部 9/12	硯に転用 墨痕あり
119	2-041-03	2	u６ ＳＤ１１３	土師器 甕			外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/4	口縁部　小片	
120	2-053-01	2	m１２ ＳＫ６６	須恵器 甕			外：ロクロナデ、タタキ後カキメ 内：同心円タタキ	密	良	灰白N7/0 灰N6/0	体部片	
121	2-053-02	2	k１３ ＳＤ７２	須恵器 甕	口径	28.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、ナデ	密	良	灰N5/0 灰白N7/0	口縁部　1/12	
122	2-040-01	2	e２３ ＳＫ９６	土師器 皿Ａ	口径	21.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：浅黄橙7.5YR8/4 内面：明褐灰7.5YR7/2	口縁部　1/12	
123	2-039-08	2	d２３ ＳＤ９５	土師器 皿Ａ	口径	28.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：浅黄橙10YR8/3 内面：橙５YR7/6	口縁部　1/12	口径不安
124	2-037-02	2	d２４ ＳＫ１０４	須恵器 蓋	口径	17.0	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	口縁部　2/12	
125	2-037-01	2	d２４ ＳＫ１０４	須恵器 杯Ｂ	高台径	10.0	外：ロクロナデ、削り出し高台 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰N4/0 内面：灰白N7/0	高台部　2/12	
126	2-041-02	2	d２３ ＳＤ９７	須恵器 壺			外：ロクロナデ、カキメ 内：ロクロナデ	密 ～0.5mmの砂粒含む	良	灰N7/0	口縁部　小片	
127	2-040-03	2	e２３ ＳＤ９７	黒色土器 椀	高台径	11.0	外：ナデ→貼付ナデ 内：ミガキ	密	—	外面：浅黄橙10YR8/3 内面：暗灰N3/0	高台部　3/12	内黒
128	2-039-06	2	f２２ ＳＤ９８	土師器 椀	口径	17.4	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	灰白10YR8/2	口縁部　2/12	
129	2-039-04	2	f２２ ＳＤ９８	緑釉陶器 椀	高台径	7.0	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	密	良	素地：灰白５Y7/1 釉色：灰オリーブ7.5Y5/3	高台部　2/12	施釉
130	2-040-08	2	d２１ ＳＤ１００	土師質土器 椀	高台径	5.4	外：糸切→貼付ナデ 内：ミガキ	密 ～0.5mmの砂粒含む	—	外面：灰白10YR8/2 内面：灰N4/0	底部　1/12	内黒 高台意図的に打ち欠く
131	2-041-04	2	e２３ ＳＤ１００	黒色土器 椀	口径	14.3	外：ナデ、貼付ナデ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密	—	外面：灰白10YR8/2 内面：暗灰N3/0	口縁部　1/12	内黒 高台意図的に打ち欠く
132	2-040-02	2	e２２ ＳＤ１００	土師器 椀	口径 器高	12.0 2.95	外：オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：灰白2.5Y8/2 内面：灰白2.5Y8/1	口縁部　2/12	
133	2-039-07	2	d２１ ＳＤ１００	土師器 皿	口径	20.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：灰白10YR8/2 内面：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部　1/12	
134	2-040-04	2	c１９ ＳＺ８２	須恵器 小壺	高台径	4.9	外：ハケメ？→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰N6/0	高台部　4/12	
135	2-056-01	2	g１５ ＳＺ８２	須恵器 壺	口径	19.8	外：ロクロナデ、タタキ後カキメ 内：ロクロナデ、タタキ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰N5/0	口縁部　2/12	
136	2-045-01	2	e１８ ＳＺ８２	陶器 獣足壺	脚上部体部径	21.0	外：ロクロナデ、ケズリ、工具ナデ、ナデ 内：ロクロナデ、ナデ	やや粗 ～3.5mmの砂粒含む	良	灰５Y6/1 灰白N7/0		
137	2-039-05	2	c１９ ＳＺ８２	緑釉陶器 椀	高台径	6.0	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	密	良	素地：にぶい黄橙10YR7/4 釉色：オリーブ５Y5/4	高台部　1/12	施釉
138	2-043-07	2	d１９ ＳＺ８２	灰釉陶器 椀	高台径	8.2	外：ロクロナデ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部　3/12	
139	2-044-03	2	e１８ ＳＺ８２	灰釉陶器 椀	高台径	7.8	外：糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	良	灰白５Y8/1	高台部　4/12	底部外面に墨書 内面研磨痕
140	2-044-02	2	d１８ ＳＺ８２	灰釉陶器 椀	口径 器高 高台径	12.7 4.1 6.9	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	粗 ～2.5mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部わずか 高台部　完存	底部外面に墨書「六」
141	2-042-04	2	d１９ ＳＺ８２	土師器 杯	口径	13.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～1.5mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/4 灰白10YR8/2	口縁部　1/12	外面煤付着
142	2-041-01	2	d２０ ＳＺ８２	土師器 甕	口径	14.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密	—	外面：にぶい黄橙10YR5/3 内面：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部　2/12	口縁部外面煤付着
143	2-039-01	2	e２２ ＳＫ１０１	灰釉陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	高台部　完存	内外面施釉 内面研磨痕
144	2-040-05	2	d２３ ＳＤ１０３	土師質土器 台付小皿	底径	6.8	外：ナデ→糸切 内：ナデ	密	—	灰白５Y8/1	底部　4/12	
145	2-051-05	2	d２５ ＳＤ８９	土師器 小皿	口径 器高	7.5 1.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密	—	灰白10YR8/2	口縁部　4/12	南伊勢系
146	2-056-04	2	d２３ ＳＤ８８	土師質土器 椀			外：ナデ、貼付ナデ 内：ミガキ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白2.5Y8/2 内面：暗灰N3/0	底部片	高台部意図的に打ち欠く
147	2-055-04	2	d２５ ＳＤ８８	陶器 小皿			外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白7.5Y7/1	底部片	山皿（渥美） 第６型式併行？ 底部外面墨書あり「＋」
148	2-055-06	2	d２３ ＳＤ８８	陶器 椀	高台径	7.1	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	褐灰10YR5/1	高台部　2/12	山茶椀（渥美） 第６型式併行 内面煤（墨？）付着
149	2-055-05	2	d２５ ＳＤ８８	陶器 椀	高台径	7.3	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Y7/1	高台部　5/12	山茶椀（渥美） 第６型式併行 内面研磨痕
150	2-055-03	2	d２５ ＳＤ８８	陶器 椀	口径 器高 高台径	16.0 5.4 7.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　1/12 高台部　完存	山茶椀（知多・猿投） 第６型式 モミガラ痕
151	2-055-07	2	d２４ ＳＤ８８	土師器 皿	口径 器高 底径	9.0 1.3 6.0	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	橙５YR7/8	口縁部　5/12 底部　5/12	

第10表　出土遺物観察表③

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
152	2-056-06	2	d２３ SD８８	土師器 皿	口径 器高	11.8 2.5	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密	—	灰白2.5Y8/2	口縁部　4/12	南伊勢系
153	2-055-02	2	d２５ SD８８	土師器 鍋	口径	26.0	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄褐10YR5/3 内面：浅黄橙10YR8/3	口縁部　1/12	南伊勢系　第１段階ｂ 外面煤付着
154	2-055-01	2	d２５ SD８８	土師器 鍋	口径	27.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい褐7.5YR5/3 内面：灰黄褐10YR5/2	口縁部　1/12	南伊勢系　第１段階ｂ 外面煤付着
155	2-060-04	2	d２５ SD９０	陶器 小皿	口径 器高	8.0 1.7	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ、ナデ	粗 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部　8/12	山皿（猿投・知多） 第６型式 自然釉あり
156	2-060-06	2	d２６ SD９０	陶器 小皿	口径 器高	7.8 1.6	外：ロクロナデ、ナデ→糸切 内：ロクロナデ、ナデ	粗 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部　6/12	山皿（猿投・知多） 第６型式 内面研磨痕
157	2-060-05	2	d２６ SD９０	陶器 小皿	口径 器高 底径	7.8 1.7 5.3	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ→ナデ	やや粗 ～2.5mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部　9/12 底部　完存	山皿（猿投・知多） 第６型式 自然釉あり　内面研磨痕
158	2-060-03	2	d２４ SD９０	陶器 椀	高台径	6.7	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	粗 ～7.5mmの小石含む	良	灰白５Y7/1	高台部　8/12	山茶椀（知多・猿投） 第６型式 内面炭化物付着　モミガラ痕
159	2-063-02	2	d２４ SD９０	陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～0.5mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　9/12	山茶椀（渥美） 第６型式併行 内面炭化物付着
160	2-063-01	2	d２５ SD９０	陶器 椀	口径 器高 高台径	14.6 5.2 5.8	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部　2/12 高台部　6/12	山茶椀（知多・猿投） 第６型式 モミガラ痕
161	2-060-07	2	d２５ SD９０	陶器 椀	高台径	6.2	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	粗 ～4.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	高台部　4/12	山茶椀（知多・猿投） 第６型式 底部外面墨書　モミガラ痕
162	2-060-02	2	d２６ SD９０	陶器 練鉢	高台径	約12.8	外：ロクロナデ、ケズリ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ、ナデ	粗 ～5.5mmの小石含む	良	灰白N7/0	底部	知多・猿投 高台部欠損
163	2-059-08	2	d２５ SD９０	土師器 小皿	口径 器高	7.4 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部　3/12	南伊勢系
164	2-059-06	2	d２４ SD９０	土師器 小皿	口径 器高	7.8 1.6	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～3.5mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部　9/12	南伊勢系
165	2-059-04	2	d２５ SD９０	土師器 羽釜	口径 つば径	21.8 24.6	外：ナデ、貼付ナデ 内：ナデ	粗 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2 断面：灰５Y5/1	口縁部　1/12	外面煤付着
166	2-060-08	2	d２３ SD９０	土錘	残存長 残存幅 穴径	3.9 2.8 1.0		やや密 ～4.0mmの小石含む	—	褐灰10YR6/1		重量　18.0ｇ
167	2-050-03	2	m９ SE６３	陶器 椀	高台径	6.8	外：ロクロナデ→ヘラ切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	やや良	灰白N7/0	高台部　4/12	山茶椀（渥美）　第６型式 底部外面墨書あり「○」
168	2-050-02	2	m９ SE６３	陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや粗 ～4.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N7/0	高台部　2/12	山茶椀（知多・猿投） 第６型式　内面研磨痕 底部外面墨書あり「＋」
169	2-050-05	2	k１０ SE６５	陶器 椀	高台径	7.2	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　4/12	山茶椀（知多・猿投） 第６型式 モミガラ痕
170	2-050-04	2	l１１ SE６８	陶器 小皿	口径 器高	8.3～8.5 1.6	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N8/0	口縁部　9/12	山皿（知多・猿投） 第７型式　内面自然釉 底部外面墨書あり
171	2-036-05	2	l１０ SE６８	陶器 椀	高台径	6.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	外面：灰白7.5Y7/1 内面：灰白N8/0	高台部　1/12	山茶椀（知多・猿投） 第６型式　底部外面墨書「＋」？ モミガラ痕　内面研磨痕
172	2-049-05	2	l１１ SE６８	陶器 椀	高台径	7.1	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N7/0	高台部　8/12	山茶椀（知多）　第７型式 モミガラ痕
173	2-049-02	2	l１０ SE６４・６８ 底	陶器 練鉢			外：ロクロケズリ、ケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや粗 ～3.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N7/0	底部	知多・猿投 高台部欠損
174	2-051-04	2	k１０ SE６４	土師器 小皿	口径	7.8	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密	—	灰白10YR8/2	口縁部　4/12	南伊勢系
175	2-051-03	2	k１０ SE６４	土師器 皿	口径	12.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白2.5Y8/2	口縁部　1/12	南伊勢系 口径不安
176	2-051-01	2	k１０ SE６４	土師器 鍋	口径	21.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	—	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部　1/12	外面煤付着 南伊勢系　第１段階ｂ
177	2-049-06	2	l１０ SE６４	陶器 小皿	口径 器高	9.3 2.2	外：ロクロナデ→ヘラ切り？ 内：ロクロナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N7/0	口縁部　3/12	山皿（知多・猿投） 第５～６型式
178	2-049-07	2	l１０ SE６４	陶器 椀	高台径	7.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　6/12	山茶椀（知多・猿投） 第７型式　外面煤付着 内面炭化物付着　モミガラ痕
179	2-049-04	2	l１０ SE６４	陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰N6/0	高台部　4/12	山茶椀（猿投・瀬戸） 第５型式？ 内面自然釉・研磨痕
180	2-049-03	2	l１０ SE６４	陶器 椀	口径 器高	13.1 4.7	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	やや密 ～4.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N8/0	口縁部　7/12	山茶椀（瀬戸）　第８型式 内面炭化物付着 外面煤付着
181	2-050-01	2	k１０ SE６４	陶器 椀	口径 器高 底径	15.5 5.95 6.2	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白N7/0	口縁部　2/12 底部　完存	山茶椀（知多・猿投） 第８～９型式　高台欠損か 底部外面墨書？あり 内面炭化物付着
182	2-049-01	2	l１０ SE６４	陶器 甕	口径	18.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、ケズリ？	やや密	良	褐灰7.5YR5/1	口縁部　1/12	常滑
185	2-044-01	2	e２２ SD８５	須恵器 甕	口径	25.8	外：ロクロナデ、カキメ 内：ロクロナデ	やや粗 ～4.5mmの小石含む	良	灰白N7/0	口縁部　1/12	
186	2-044-04	2	g２２ SD８５	灰釉陶器 椀	高台径	7.5	外：糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	高台部　3/12	内面研磨痕
187	2-043-08	2	d２２ SD８５	土師器 杯Ｂ	高台径	10.2	外：ナデ→貼付ナデ 内：ナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白10YR8/2 内面：灰５Y5/1	高台部　4/12	
188	2-043-04	2	e２２ SD８５	土師器 杯Ａ	口径	15.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白2.5Y8/2 内面：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部　1/12	
189	2-043-01	2	f２２ SD８５	土師器 小皿	口径 器高	10.0 1.7	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～1.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/4 にぶい橙7.5YR7/4	口縁部　完存	ての字皿
190	2-040-07	2	d２１ SD１０６	須恵器 蓋	つまみ径	4.3	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	つまみ部 2/12	硯に転用（内面研磨痕） 墨痕あり
191	2-039-02	2	d２１ SD１０６	灰釉陶器 椀	高台径	8.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	高台部　8/12	底部外面墨書か？ 内面研磨痕 施釉
192	2-036-01	2	d２２ SD１０６	陶器 椀	口径 器高 高台径	15.5 4.7 7.8	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	外面：灰白N8/0 内面：灰白N7/0	口縁部　1/12 高台部　6/12	山茶椀（渥美）　第５型式 内外面に煤付着 内面に筆そろえの痕 自然釉・研磨痕
193	2-036-04	2	d２２ SD１０６	砥石	長さ 幅 最大厚	11.5 4.2 4.5						重量　225ｇ 花崗岩？

第11表　出土遺物観察表④

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
194	2-043-03	2	d23 SD94	土師器 小皿	口径 器高	7.1 0.9	外：オサエ・ナデ 内：オサエ・ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙5YR6/4 内面：灰褐7.5YR5/2	口縁部 9/12	南伊勢系
195	2-043-02	2	d23 SD94	陶器 小皿	口径 器高 底径	7.7 1.3 5.2	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ→ナデ	やや粗 ～4.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部 3/12 底部 4/12	山皿（知多・猿投） 第7型式 内面研磨痕
196	2-042-02	2	d23 SD94	陶器 練鉢	高台径	16.0	外：ロクロナデ、ケズリ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ、ケズリ	粗 ～7.0mmの砂粒含む	良	灰白5Y7/1	高台部 3/12	知多・猿投
197	2-042-01	2	d23 SD94	須恵器 長頸壺	頸部径	4.6	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、ナデ、沈線	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白5Y7/1	頸部 完存	自然釉 外面研磨（表面に土器片付着） 報告番号200と同一個体か
198	2-064-06	2	i12 pit1	須恵器 壺	口径	14.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	外面：灰N5/0 内面：灰N6/0	口縁部 2/12	
199	2-065-02	2	o7 pit1	転用硯				密	良	灰白N7/0		須恵器甕体部 墨付着
200	2-049-08	2	u5 pit5 掘方	須恵器 壺	口径	8.2	外：ロクロナデ、沈線 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	口縁部 4/12	外面自然釉 報告番号197と同一個体か
201	2-051-02	2	r8 pit1	土師器 高杯	脚裾径	10.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	—	橙5YR6/6 にぶい橙7.5YR7/4	脚裾部 5/12	摩滅激しい
202	2-064-07	2	v4 pit17	黒色土器 椀	口径 器高 高台径	13.8 4.8 7.8	外：ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	外面：灰白10YR8/2 内面：暗灰N3/0	口縁部 10/12	内黒 高台部意図的に打ち欠く
203	2-051-06	2	v5 pit6 掘方	灰釉陶器 椀	口径	13.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	口縁部 1/12	浸けがけ釉
204	2-063-09	2	v5 pit2 （SB41）	土師質土器 小皿	底径	6.0	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白2.5Y8/1 内面：浅黄橙10YR8/3	底部 完存	
205	2-059-07	2	u4 pit3掘方 （SB41）	土師質土器 皿	底径	6.6	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	やや粗 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2	底部 3/12	
206	2-063-08	2	v4 pit13 （SB41）	土師質土器 小皿	口径 器高 底径	8.6 2.6 4.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	—	外面：褐灰10YR6/1 内面：灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12 底部 2/12	
207	2-063-07	2	i12 pit1	陶器 小皿	口径 器高	8.0 1.4	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部 4/12	山皿（猿投・知多） 第6型式
211	2-028-04	2	e21 包含層	縄文土器 深鉢？			外：ナデ→貼付突帯 内：ナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/4 （外面一部）暗灰N3/0	口縁部 小片	晩期突帯文か？
212	2-028-02	2	x4 排水溝	土師器 台付甕	口径	12.7	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄橙10YR7/3 内面：褐灰10YR5/1	口縁部 3/12	S字甕D類 外面一部黒斑
213	2-028-01	2	q5 排水溝	土師器 台付甕	口径	16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10YR7/3 灰褐7.5YR5/2	口縁部 3/12	S字甕E類
214	2-027-03	2	m8 包含層	土師器 台付甕	口径	16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12 以下	S字甕E類
215	2-027-05	2	j15 排水溝	土師器 台付甕	台径	10.2	外：ナデ 内：ナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5YR8/4	台部 7/12	
216	2-038-03	2	q10 包含層	土師器 甕	口径	10.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	—	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	ミニチュアか
217	2-025-07	2	i15 包含層	土師器 甕	口径	24.2	外：ナデ→オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→オサエ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：浅黄橙10YR8/3 内面：灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12	S字甕E類併行
218	2-029-05	2	e17 排水溝	須恵器 杯蓋			外：ロクロナデ、ロクロケズリ→ヘラ切り 内：ロクロナデ→一定方向ナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	天井部片	意図的に円盤状に打ち欠く
219	2-022-07	2	g23 包含層	須恵器 杯蓋	口径 器高	9.7 3.2	外：ロクロナデ→ヘラ切り 内：ロクロナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	良	外面：灰白2.5Y8/1 内面：灰白2.5Y8/2	口縁部 4/12	杯身の可能性あり
220	2-029-06	2	m8 包含層	須恵器 杯蓋	口径 受部径	12.5 12.2	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	口縁部 1/12	
221	2-028-07	2	j15 排水溝	須恵器 杯身	口径 受部径	10.2 11.7	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰N6/0	口縁部 4/12 受部 5/12	外面自然釉
222	2-028-06	2	j15 排水溝	須恵器 杯身	口径 受部径 器高	13.0 15.5 4.8	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	やや良	灰N5/0	口縁部 2/12 受部 3/12	
223	2-028-08	2	k12 包含層	須恵器 杯身	口径 受部径	13.8 16.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白N7/0	口縁部 2/12 受部 1/12	
224	2-029-07	2	m8 包含層	須恵器 高杯	台径	8.7	外：ロクロナデ→カキメ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	台部 2/12	四方スカシ（二方残る）
225	2-024-02	2	f16 排水溝	須恵器 高杯？	高台径	10.8	外：ロクロナデ→台部三方スカシ 内：ナデ	やや密	良	外面：灰5Y4/1 内面：灰赤2.5YR4/2	高台部 9/12	内外面自然釉
226	2-032-01	2	g17 包含層	須恵器 壺	高台径	7.7	外：ロクロナデ→ナデ→貼付ナデ 内：工具ナデ、ナデ	粗 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰N5/0 灰白N7/0	高台部 4/12	
227	2-026-02	2	c23 包含層	砥石	長さ 幅 厚さ	12.5 5.7 1.6						重量 162g 結晶片岩
228	2-032-06	2	m8 包含層	有孔円盤	径 幅 孔径	2.1 0.3 0.2						重量 1.86g 結晶片岩
229	2-034-05	2	v4 包含層	土錘	長さ 幅 穴径	3.3 1.4 0.25		密	—	褐灰10YR4/1		重量 4.83g
230	2-034-06	2	w3 包含層	土錘	長さ 幅 穴径	4.8 1.7 0.4		やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10YR7/3		重量 11.52g
231	2-023-06	2	e23 包含層	土錘	長さ 幅 穴径	4.8 1.1 0.4		密	—	黒2.5Y2/1		重量 5.5g
232	2-038-04	2	u4 包含層	土錘	長さ 幅 穴径	3.95 0.9 0.2		やや密	—	灰白2.5Y8/2		重量 3.66g
233	2-023-05	2	c19 包含層	土錘	長さ 幅 穴径	4.2 1.0 0.35		密	—	橙5YR6/6		重量 3.3g
234	2-026-03	2	f21 包含層	土錘	長さ 幅 穴径	3.6 1.1 0.35		やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	灰黄褐10YR6/2		重量 3.67g
235	2-030-04	2	f24 排水溝	須恵器 壺			外：ロクロナデ→カキメ、波状文、沈線 内：ロクロナデ	粗 ～5.0mmの小石含む	良	外面：暗灰N3/0 内面：灰5Y6/1	口縁部片	
236	2-030-03	2	f24 排水溝	須恵器 壺			外：ロクロナデ→カキメ、波状文、沈線 内：ロクロナデ	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	良	外面：灰5Y4/1 内面：灰白N8/0	口縁部片	
237	2-024-01	2	d23 包含層	須恵器 壺	口径	25.7	外：カキメ・波状文 内：ナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	外面：灰N4/0 内面：灰白2.5GY8/1	口縁部 2/12	

第12表　出土遺物観察表⑤

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
238	2-029-01	2	m14 包含層	須恵器 壺	口径	25.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰N6/0	口縁部　1/12	
239	2-031-08	2	f24 排水溝	須恵器 小形壺	高台径	4.8	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	良	灰N6/0	高台部　完存	
240	2-031-03	2	c26 表土掘削	須恵器 壺			外：ロクロナデ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	良	外面：褐灰10YR4/1 内面：灰白2.5Y7/1		内面見込みに工具痕？ 高台部意図的に打ち欠き？
241	2-036-02	2	q10 包含層	須恵器 壺	底径	13.1	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ→ナデ、オサエ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰N6/0	底部　1/12	
242	2-031-07	2	c26 表土掘削	須恵器 壺蓋	口径 器高 底径	10.8 2.8 11.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/1 灰N4/1	口縁部　4/12 底部　4/12	
243	2-030-01	2	q8 包含層	須恵器 甕	口径	35.0	外：ハケ？タタキ？→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～2.5mmの砂粒含む	良	灰白5Y7/1	口縁部　1/12	
244	2-023-04	2	g23 包含層	須恵器 蓋	口径 器高 つまみ径	16.8 2.9 2.1	外：ロクロケズリ、ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	口縁部　1/12 つまみ部 ほぼ完存	2片を合成して図化 （接合しない）
245	2-036-03	2	s7 包含層	須恵器 蓋	口径	22.2	外：ロクロケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰7.5Y6/1	口縁部　3/12	
246	2-032-04	2	表土掘削	須恵器 皿	口径	24.0	外：ロクロケズリ→ヨコナデ？ 内：ロクロナデ→ヨコナデ？	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	橙2.5YR7/6	口縁部　小片	
247	2-026-01	2	f21 包含層	須恵器 杯A			外：ロクロ成形 内：ロクロ成形	やや密	良	外面：灰白N6/0 内面：灰白N7/0	底部　小片	底部外面にヘラ記号
248	2-029-03	2	表土掘削	須恵器 杯A	底径	7.0	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰褐5YR5/2 灰白N7/0	底部　7/12	
249	2-037-04	2	s7 包含層	須恵器 杯A	口径 器高 底径	12.4 2.8 9.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰N6/0	口縁部　3/12 底部　5/12	
250	2-031-06	2	c26 表土掘削	須恵器 杯B	口径 器高 高台径	10.8 4.1 7.8	外：ロクロナデ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部　1/12 高台部　5/12	
251	2-031-04	2	北区 表土掘削 （水道管付近）	須恵器 杯B	高台径	9.0	外：ロクロナデ→糸切後ケズリ？→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白5Y7/1	高台部　8/12	
252	2-031-05	2	f24 排水溝	須恵器 杯B	口径 器高 高台径	13.2 2.9 9.8	外：ロクロナデ、ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	良	灰白7.5Y7/1	口縁部　3/12 高台部　4/12	
253	2-022-02	2	d22 包含層	須恵器 杯B	高台径	8.8	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	外面：灰N5/0 内面：灰N7/0	高台部　2/12	
254	2-029-02	2	表土掘削	須恵器 杯B	口径 器高	16.0 5.85	外：ロクロナデ→ヘラ切り？→貼付ナデ 内：ロクロナデ→一定方向ナデ	やや密	良	灰白N7/0	口縁部　2/12 高台部　3/12	
255	2-025-06	2	k13 包含層	須恵器 杯B	高台径	11.3	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰7.5Y6/1	高台部　11/12	底部外面にヘラ記号
256	2-024-07	2	e21 包含層	須恵器 鉢	口径	20.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白7.5Y7/1	口縁部　1/12	
257	2-032-05	2	m8 包含層	土師器 高杯	基部径	4.2	外：面取りナデ、ナデ 内：ナデ	やや密 ～1.5mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/4 断面：橙5YR7/6	脚柱部　9/12	
258	2-024-03	2	l14 包含層	土師器 椀	口径	12.1	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2	口縁部　1/12	
259	2-028-05	2	南区 表土掘削	土師器 小皿	口径 器高	10.0 2.0	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	—	浅黄橙10YR8/3	口縁部　9/12	
260	2-064-01	2	d21 包含層	土師器 小皿	口径	9.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	灰白2.5Y8/2	口縁部　3/12	
261	2-037-07	2	s7 包含層	土師器 杯A	口径 器高	16.6 4.1	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ、暗文→ヨコナデ	やや密	—	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部　1/12	内面放射状暗文
262	2-032-02	2	r7 包含層	土師器 杯A	口径	18.0	外：ミガキ？、ヨコナデ 内：暗文、ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	橙5YR6/6	口縁部　2/12	
263	2-037-08	2	s8 包含層	土師器 杯A	口径	19.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ミガキ、暗文→ヨコナデ	やや密	—	にぶい赤褐5YR5/3	口縁部　3/12	内面放射状暗文 （書き直しあり）
264	2-038-02	2	r6 包含層	土師器 杯A	口径 器高	13.9 3.1	外：ミガキ 内：ミガキ、暗文	やや密	—	外面：灰褐7.5YR6/2 内面：にぶい橙7.5YR7/3	口縁部　2/12	内面放射状暗文・螺旋状暗文 油煙付着
265	2-037-05	2	s7 包含層	土師器 杯A	口径 器高	15.0 2.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～0.5mmの砂粒含む	—	にぶい橙5YR6/4	口縁部　2/12	摩滅のため調整不明瞭
266	2-032-03	2	r7 包含層	土師器 杯A	口径 器高	17.9 2.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙5YR6/4 にぶい橙7.5YR7/3	口縁部　1/12	
267	2-025-08	2	c19 包含層	土師器 皿	口径 器高	15.6 1.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部　1/12	
268	2-023-03	2	g23 包含層	土師器 皿	口径	20.0	外：ナデ・ケズリ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白2.5Y8/2 内面：橙7.5YR7/6	口縁部　1/12	
269	2-027-04	2	m9 排水溝	土師器 鉢	高台径	15.0	外：ナデ→貼付ナデ 内：ナデ	やや密	—	橙7.5YR7/6	高台部　1/12 以下	
270	2-064-05	2	p9 包含層	土師器 甑？	口径	12.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：灰黄褐10YR6/2 内面：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部　2/12	
271	2-038-06	2	o7 排水溝	ミニチュア 土器 甕	口径	7.2	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	—	外面：にぶい黄橙10YR7/2 内面；にぶい橙7.5YR7/4	口縁部　2/12	
272	2-031-01	2	m11 包含層	土師器 甕	口径	18.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	粗 ～1.5mmの砂粒含む	—	灰白10YR8/2	口縁部　1/12	
273	2-027-02	2	n13 包含層	土師器 甕	口径	23.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	—	外面：にぶい黄橙10YR7/3 内面：灰褐7.5YR4/2	口縁部　1/12	内面に炭化物付着
274	2-034-04	2	u5 包含層	土師器 甕	口径	14.3	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄橙10YR7/3 内面：浅黄橙10YR8/3	口縁部　1/12	口縁部外面煤付着
275	2-021-04	2	d19 包含層	土師器 甕	口径	16.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白10YR8/2 内面：灰白2.5Y8/1	口縁部　2/12	口縁部外面煤付着
276	2-021-07	2	c21 包含層	土師器 甕	口径	15.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～2.5mmの小石含む	—	外面：にぶい橙7.5YR6/4 内面：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部　4/12	口縁部外面煤付着
277	2-038-01	2	s7 包含層	土師器 鉢	口径	30.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	—	浅黄橙10YR8/2	口縁部　2/12	報告番号57と同一か
278	2-030-02	2	s8 包含層	土師器 鉢	口径	30.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ナデ、ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10YR8/3	口縁部　1/12	

第13表　出土遺物観察表⑥

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
279	2-028-03	2	j１５ 排水溝	土師器 鉢	口径	22.0	外：ケズリ？→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3 内面：暗灰N3/0	口縁部　1/12	摩滅のため調整不明瞭
280	2-027-01	2	n１２ 包含層	土師器 竈形土器			外：ハケメ、ナデ 内：ナデ・オサエ、ハケメ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/3	把手付近体部片	
281	2-037-06	2	ｔ４ 排水溝	緑釉陶器 椀	高台径	7.8	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	密	良	オリーブ灰10Ｙ5/2	高台部　1/12	内外面施釉
282	2-037-03	2	ｗ３ 包含層	緑釉陶器 皿	高台径	7.4	外：ロクロナデ→貼付ナデ？ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Ｇ Y8/1	高台部　5/12	内外面施釉
283	2-021-05	2	ｅ２０ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	7.1	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部 ほぼ完存	内面見込みに墨付着・研磨痕
284	2-021-01	2	ｄ１９ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	9.0	外：ロクロナデ→貼付けナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	高台部　4/12	内面研磨なし
285	2-025-03	2	ｊ１３ 排水溝	灰釉陶器 椀	高台径	7.8	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/1	高台部　8/12	施釉
286	2-021-02	2	ｃ１９ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	8.0	外：ロクロナデ→貼付けナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　2/12	
287	2-022-06	2	ｇ２３ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	7.7	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0 釉色：灰オリーブ7.5Y6/2	高台部　5/12	釉はハケ塗り
288	2-063-06	2	表土掘削	灰釉陶器 椀	高台径	7.6	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Y8/1	高台部　6/12	
289	2-025-01	2	ｇ２０ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	7.7	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Y7/1	高台部　6/12	施釉
290	2-025-02	2	ｅ２２ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白５Y7/1	高台部　6/12	
291	2-021-06	2	ｄ２１ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	7.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	高台部　6/12	
292	2-025-04	2	ｈ２０ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	9.0	外：ロクロナデ、ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰白５Y8/1 内面：灰白５Y7/1	高台部　3/12	
293	2-031-02	2	ｅ２５ 包含層	灰釉陶器 椀	口径 器高 高台径	15.9 4.4 8.4	外：ロクロナデ→ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部　4/12 高台部　6/12	
294	2-029-04	2	表土掘削	灰釉陶器 椀	高台径	7.0～7.1	外：ロクロナデ→糸切？→貼付ナデ 内：ロクロナデ、ナデ	密	良	灰白N8/0	高台部　9/12	
295	2-025-05	2	ｆ２１ 包含層	灰釉陶器 椀	高台径	7.0	外：ロクロケズリ、ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白10Y8/1 灰白５Y8/1	高台部　2/12	施釉
296	2-024-05	2	ｄ２２ 包含層	黒色土器 椀	口径	16.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白2.5Y8/2 灰N4/0	口縁部　1/12	内黒
297	2-022-04	2	ｄ２１ 包含層	土師質土器 台付小皿	高台径	4.1	外：糸切 内：ナデ？	密	—	灰白2.5Y8/2	高台部 ほぼ完存	柱状高台
298	2-021-03	2	ｄ１９ 包含層	土師質土器 小皿	口径 器高	10.6 1.85	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白2.5Y8/1	口縁部　3/12	
299	2-032-07	2	北区 表土掘削	土師質土器 皿	底径	6.4	外：ロクロナデ→糸切 内：ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10ＹＲ8/2	底部　　完存	
300	2-038-05	2	ｖ５ 包含層	土師器 小皿	口径	10.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/3	口縁部　2/12	ての字皿
301	2-022-03	2	ｄ２３ 包含層	土師器 皿	口径	11.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密	—	灰白2.5Y8/2	口縁部　1/12	南伊勢系
302	2-024-04	2	ｍ１２ 包含層	土師器 皿	口径	12.2	外：ナデ 内：ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：灰白2.5Y8/2 内面：灰白2.5Y8/1	口縁部　2/12	南伊勢系
303	2-023-01	2	ｄ２３ 包含層	土師器 鍋	口径	38.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	—	外面：灰黄褐10ＹＲ5/2 内面：灰白2.5Y8/2	口縁部　1/12	南伊勢系　第２段階ｃ
304	2-024-06	2	ｃ２３ 包含層	瓦器 椀	口径	15.0	外：オサエ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	灰N4/0	口縁部　1/12	大和型
305	2-033-01	2	ｋ１０ 包含層	陶器 小皿	口径 器高	8.0 2.0	外：ロクロナデ→ヘラ切り 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　3/12	山皿（知多・猿投） 第５型式
306	2-033-02	2	ｃ２３ 包含層	陶器 小皿	口径 器高 底径	9.2 1.7 5.5	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　2/12 底部　　5/12	山皿（知多・猿投） 第６型式
307	2-023-02	2	ｄ２３ 包含層	陶器 小椀	高台径	5.4	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰白５Y7/1 内面：灰白５Y8/1	高台部　4/12	自然釉 猿投・瀬戸産 第４型式？
308	2-063-04	2	北区 表土掘削	陶器 椀	高台径	7.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロ調整	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白2.5Y7/1	高台部　完存	山茶椀（渥美） 第６型式併行 内面自然釉
309	2-033-03	2	北区 表土掘削	陶器 椀	高台径	8.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	高台部　小片	山茶椀（知多・猿投） 第５型式 内面自然釉　モミガラ痕
310	2-033-05	2	ｃ２６ 表土掘削	陶器 椀	高台径	7.6	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰白５Y7/1	高台部　3/12 底部　　9/12	山茶椀（猿投・知多） 第５～６型式　底部に墨痕 内面見込み炭化物付着 重ね焼き痕　自然釉　研磨痕
311	2-022-05	2	ｄ２３ 包含層	陶器 椀	口径 器高 高台径	15.0 5.0 7.2	外：ロクロナデ→貼付ナデ→ナデ 内：ロクロナデ	密 ～0.5mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部　6/12 高台部　4/12	山茶椀（猿投・知多） 第５型式　自然釉 モミガラ痕　歪み大きい
312	2-033-04	2	ｃ２３ 包含層	陶器 椀	高台径	6.2	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰白５Y7/1 内面：灰５Y6/1	高台部　9/12	山茶椀（渥美） 第６型式併行 内面見込みに炭化物付着
313	2-022-01	2	ｄ２２ 包含層	陶器 椀	高台径	7.8	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	高台部　6/12	山茶椀（猿投・瀬戸） 第５型式　トチン痕　研磨痕 内面見込みに煤付着
314	2-034-03	2	ｃ２６ 表土掘削	陶器 椀	高台径	5.7	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	高台部 ほぼ完存	山茶椀（猿投・知多） 第６型式 自然釉　モミガラ痕
315	2-033-07	2	ｍ９ 排水溝	陶器 椀	高台径	5.5	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	高台部　3/12 底部　　9/12	山茶椀（知多・猿投） 第７型式
316	2-063-03	2	ｃ２３ 包含層	陶器 椀	高台径	6.6	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～5.0mmの砂粒含む	良	外面：灰白N8/0 内面：灰白N7/0	高台部　完存	山茶椀（知多・猿投） 第６型式　内面煤付着 底部外面煤？付着
317	2-033-06	2	ｄ２３ 包含層	陶器 椀			外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ→オサエ・ナデ	密 ～4.0mmの砂粒含む	良	灰白2.5Y7/1	底部	山茶椀（瀬戸）　第７型式 内面に炭化物付着 高台部欠損
318	2-034-01	2	ｅ２４ 包含層	陶器 椀			外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白2.5Y8/1	底部	山茶椀（瀬戸）　第７型式 内面に炭化物付着 自然釉　高台部欠損
319	2-034-02	2	１１０ 排水溝	陶器 椀	口径 器高 高台径	13.3 5.1 5.3	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	良	外面：灰白2.5Y7/1 内面：灰N6/0	口縁部　4/12	山茶椀（知多・猿投） 第７型式　モミガラ痕 内面に炭化物付着

第14表　出土遺物観察表⑦

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
320	2-035-01	2	c２６ 包含層	陶器 練鉢	口径	34.2	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密 ～5.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　5/12	知多・猿投
321	3-020-03	3	Ｔ３４ ＳＤ１３４	土師器 台付甕	台径	8.9	外：ハケメ→オサエ・ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	外面：灰黄褐10ＹＲ5/2 内面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3	台部　完存	外面煤付着
322	3-020-02	3	Ｑ３０ ＳＤ１３４	弥生土器 甕	底径	5.4	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	やや密 ～4.0mmの砂粒含む	—	外面：灰黄褐10ＹＲ5/2 内面：褐灰10ＹＲ4/1	底部　3/12	
323	3-023-03	3	Ｗ２５ ＳＤ１４８・１４９	土師器 台付甕	口径	13.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ？→ヨコナデ	密	—	浅黄橙10ＹＲ8/3	口縁部　2/12	Ｓ字甕Ｃ類
324	3-023-04	3	Ｘ２６ ＳＤ１４８・１４９	土師器 台付甕	台径	9.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—		台部　6/12	
325	3-020-04	3	Ｘ２６ ＳＤ１４８・１４９	土師器 台付甕	台径	9.7	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	台部　5/12	
326	3-020-05	3	Ｘ２６ ＳＤ１４８・１４９	土師器 甕			外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10ＹＲ7/3	口縁部　小片	
327	3-009-04	3	Ｒ３３ ＳＫ１７０	須恵器 杯身	口径 器高 受部径	12.4 3.3 14.8	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→ヘラ切り後オサエ・ナデ 内：ロクロナデ→一定方向ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰Ｎ6/0	口縁部　3/12 受部　3/12	
328	3-010-04	3	Ｒ３４ ＳＫ１７０	土師器 台付皿	裾部径	9.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：橙５ＹＲ7/8 内面：橙５ＹＲ7/8・灰白2.5Y8/2	裾部　5/12	脚部片
329	3-010-01	3	Ｒ３３ ＳＫ１７０	土師器 甑	口径	37.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：浅黄橙10ＹＲ8/3 内面：灰白10ＹＲ8/2	口縁部　1/12	
330	3-019-06	3	Ｑ４２ ＳＫ１３８	土師器 小形壺	体部最大径	12.9	外：ナデ・ケズリ 内：ナデ・オサエ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10ＹＲ8/3		内外面摩滅
331	3-021-02	3	Ｏ４１ ＳＤ１２５	土師器 甕	口径	13.3	外：ケズリ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	口縁部　3/12	内外面摩滅
332	3-021-06	3	Ｑ４０ ＳＤ１２８	土師器 甕			外：ヨコナデ 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい褐7.5ＹＲ6/3 内面：浅黄橙7.5ＹＲ8/4	口縁部　小片	外面摩滅
333	3-022-01	3	Ｖ２９ ＳＤ１４３ ※	土師器 小形鉢	口径 器高	10.9 4.1	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	淡黄５ＹＲ8/3	口縁部　8/12	
334	3-022-02	3	Ｙ２６ ＳＤ１５３ No.１	土師器 杯Ａ	口径 器高	12.6 3.9	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/3	口縁部　3/12	底部外面圧痕有
335	3-022-03	3	Ｙ２６ ＳＤ１５３ No.２	土師器 杯Ａ	口径 器高	15.2 4.0	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ7/6	口縁部　1/12	
336	3-020-01	3	Ｑ４２ ＳＫ１３２	土師器 杯Ａ	口径 器高	12.1 3.2	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：浅黄橙7.5ＹＲ8/4 内面：浅黄橙10ＹＲ8/4	口縁部　2/12	
337	3-019-04	3	Ｑ４２ ＳＫ１３２	土師器 杯Ａ	口径 器高	13.1 2.8	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	灰黄褐10ＹＲ6/2	口縁部　2/12	
338	3-019-05	3	Ｏ４２ ＳＫ１３２	土師器 甕	口径	17.1	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/3 灰褐7.5ＹＲ5/2	口縁部　小片	内外面摩滅 口縁部外面煤付着
339	3-019-03	3	Ｑ４２ ＳＫ１３９	土師器 皿Ａ	口径 器高	14.6 1.9	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：不明	やや密	—	橙５ＹＲ7/6	口縁部　1/12	内面摩滅
340	3-019-02	3	Ｑ４２ ＳＫ１３９	土師器 甕	口径	16.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙7.5ＹＲ7/4 内面：灰褐7.5ＹＲ5/2	口縁部　4/12	内面に炭化物付着 外面摩滅
341	3-019-01	3	Ｑ４２ ＳＫ１３９	須恵器 甕	口径	24.1	外：タタキ後カキメ・タタキ後ロクロナデ 内：タタキ→ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰Ｎ6/0 灰Ｎ4/0	口縁部　1/12	
342	3-025-07	3	Ｖ２７ ＳＤ１４６	土錘	残存長 残存幅 穴径	2.9 1.0 0.3		密	—	橙５ＹＲ6/6		重量　2.98ｇ
343	3-024-02	3	Ｗ２６ ＳＤ１４６	土錘	長さ 幅 穴径	4.8 2.3 0.6		やや密	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/3		重量　24.09ｇ
344	3-012-06	3	Ｖ・Ｗ２６ ＳＤ１４６	土錘	長さ 幅 穴径	7.3 2.6 0.7		密 ～1.5mmの砂粒含む	—	灰黄2.5Y7/2 黄灰2.5Y6/1		重量　54ｇ
345	3-024-03	3	Ｗ２６ ＳＤ１４６	土錘	長さ 幅 穴径	7.4 3.1 0.9		密	—	にぶい赤褐2.5ＹＲ5/4 黄灰2.5Y6/1		重量　66.96ｇ
346	3-015-04	3	Ｗ３３ ＳＤ１４７ No.１	土師器 椀	口径 器高	12.5 3.1	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/4	口縁部　9/12	
347	3-021-04	3	Ｏ４０ ＳＤ１２７	土錘	残存長 残存幅 穴径	4.9 1.6 0.5		やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10ＹＲ7/2		重量　10.05ｇ
348	3-021-05	3	Ｏ４０ ＳＤ１２７	土錘	残存長 残存幅 穴径	6.3 2.1 0.5		やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ6/4 にぶい黄橙10ＹＲ7/3		重量　25.41ｇ
349	3-015-02	3	Ｙ３１ ＳＤ１５２	土師器 杯Ａ	口径 器高	13.1 2.6	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：工具ナデ→ミガキ→ヨコナデ	密	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/4	口縁部　3/12	
350	3-013-02	3	ａ２６ ＳＤ１５２	土師器 杯Ａ	口径 器高	11.3 2.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	灰白10ＹＲ8/2	口縁部　4/12	
351	3-010-03	3	ａ２５ ＳＤ１５２	土師器 杯Ａ	口径	12.4	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	口縁部　2/12	
352	3-016-03	3	ｂ２５ ＳＤ１５２	瓦器 椀	高台径	8.0	外：ナデ→貼付ナデ 内：ナデ→暗文	密	良	外面：にぶい赤褐５ＹＲ5/4 内面：暗灰Ｎ3/0	高台部　2/12	
353	3-022-06	3	Ｚ２８ ＳＤ１５２	土馬	残存長 残存幅	12.3 4.7		密	—	灰白2.5Y		頭部・脚部・尾部欠損
354	3-016-05	3	ｂ２５ ＳＤ１５２	灰釉陶器 皿	口径 器高 高台径	15.2 2.6 7.2	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白Ｎ7/0	口縁部　2/12 高台部　4/12	
355	3-017-02	3	ｂ２５ ＳＤ１５２	灰釉陶器 皿	口径 器高 高台径	13.3 2.05 7.2	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	素地：灰白Ｎ7/0 釉色：灰白Ｎ8/0	口縁部　5/12 高台部　7/12	内面研磨痕 底部外面墨書
356	3-017-01	3	ｂ２５ ＳＤ１５２	灰釉陶器 椀	高台径	7.7	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白Ｎ8/0	高台部　4/12	内面研磨痕 底部外面墨書
357	3-013-01	3	Ｙ３１ ＳＤ１５２	灰釉陶器 椀	高台径	8.2	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰黄2.5Y7/2	高台部　3/12	内面研磨痕・重ね焼き痕 底部外面墨書
358	3-008-01	3	ａ２４ ＳＤ１５２ No.１	銭貨	直径 孔径	1.9 0.6						延喜通寶 重量　2.6ｇ
363	3-016-01	3	Ｘ３１ ＳＤ１６０	須恵器 蓋	つまみ径	2.5	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白Ｎ7/0		硯に転用か
364	3-010-05	3	Ｘ３０ ＳＤ１５６	須恵器 高杯			外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白Ｎ7/0	脚部片	内外面自然釉

第15表　出土遺物観察表⑧

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
365	3-009-06	3	X３０ SD１５８	製塩土器			外：ナデ 内：ナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５Y R6/6	小片	志摩式
366	3-021-01	3	O４２ SD１２３	灰釉陶器 椀	高台径	7.3	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	高台部　4/12	内面重ね焼き痕
367	3-021-03	3	O４１ SD１２６	白磁 椀	口径	7.1	外：ロクロナデ→施釉 内：ロクロナデ→施釉	密	良	素地：灰白５Y8/1 釉色：灰白10Y8/1	口縁部　2/12	
368	3-020-06	3	W３３ SE１５５	加工円盤	直径	5.5		密	—	灰白５Y8/1		土師質土器台部を転用
381	3-030-04	3	W３１ SD１４６	土師器 杯A	口径 器高	12.1 2.7	外：オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10Y R7/3	口縁部　2/12	
382	3-025-04	3	W２７ SD１４６	土師器 杯A	口径 器高	13.3 3.2	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙５Y R6/4 内面：褐灰7.5Y R5/1	口縁部　3/12	
383	3-024-06	3	V２７ SD１４６	土師器 杯A	口径	13.6	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	橙7.5Y R7/6	口縁部　3/12	
384	3-022-04	3	Y２７ SD１４６	土師器 杯A	口径 器高	14.0 2.5	外：工具ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	橙５Y R6/6・7/6	口縁部　3/12	
385	3-025-06	3	W２７ SD１４６	土師器 杯A	口径	14.0	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：灰白10Y R8/2 内面：にぶい黄橙10Y R7/2	口縁部　3/12	
386	3-030-05	3	W３１ SD１４６	土師器 鉢	口径	14.0	外：オサエ・ナデ→ケズリ→ヨコナデ 内：工具ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10Y R7/2	口縁部　2/12	外面黒変
387	3-012-03	3	V・W２６ SD１４６	土師器 小皿			外：ケズリ？→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10Y R8/2	口縁部　小片	
388	3-012-05	3	V・W２６ SD１４６	土師器 高杯	基部径	5.2	外：ケズリ、ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：橙7.5Y R6/6 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	脚部片	面取り12面
389	3-030-03	3	W２７ SD１４６ No.３	土師器 甕	口径 頸部径	15.5 14.0	外：ハケメ、オサエ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10Y R7/2	口縁部　2/12 頸部　3/12	外面煤付着
390	3-024-05	3	W２６ SD１４６	黒色土器 椀			外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密	—	外面：にぶい橙7.5Y R7/4 内面：暗灰N3/0	口縁部　小片	内黒
391	3-024-04	3	W２９ SD１４６	須恵器 高杯	頸部径	4.8	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰N5/0		
392	3-025-03	3	W３１ SD１４６	須恵器 平瓶	口径	11.5	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　2/12	
393	3-024-01	3	V２７ SD１４６	須恵器 甕	口径	16.3	外：タタキ→ロクロナデ 内：タタキ→ロクロナデ	密	良	灰白５Y8/1	口縁部　1/12	内外面摩滅
394	3-012-04	3	W２６ SD１４６ No.２	緑釉陶器 椀？	高台径	7.4	外：ロクロナデ→ヘラ切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	素地：灰N6/0 釉色：オリーブ灰10Y4/2	高台部　9/12	内面トチン痕３個 高台端部釉なし 猿投？
395	3-024-07	3	W２７ SD１４６	灰釉陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白2.5Y8/1	高台部 ほぼ完存	内面研磨痕・墨痕有 底部外面墨書「万礎」 硯に転用か
396	3-025-01	3	W２７ SD１４６	灰釉陶器 椀	高台径	8.5	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白N8/0	高台部	
397	3-025-02	3	W２７ SD１４６	灰釉陶器 椀	高台径	7.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Y7/1	高台部　3/12	内面研磨痕・墨痕有 硯に転用か
398	3-030-02	3	W２７ SD１４６	灰釉陶器 椀	高台径	8.2	外：ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ・ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	高台部	内面研磨痕・重ね焼き痕 底部外面墨書 高台部に重ね焼き痕
399	3-012-01	3	W２９ SD１４６ No.１	灰釉陶器 椀	口径 器高 高台径	16.1 6.2 8.1	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　3/12 高台部　完存	内面研磨痕
400	3-012-02	3	V３４ SD１４６ No.４	灰釉陶器 椀	口径 器高 高台径	14.8 4.6 7.1	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N8/0	口縁部　3/12 高台部　完存	内面自然釉・重ね焼き痕 底部外面墨書「万礎」
401	3-025-05	3	V２７ SD１４６	灰釉陶器 長頸壺	頸部径	7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	素地：灰白５Y7/1 釉色：灰オリーブ５Y5/3		
402	3-013-03	3	V３４ SD１４６	陶器 壺			外：回転ナデ 内：工具ナデ→回転ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰褐7.5Y R6/2・5/2 灰黄褐10Y R6/2・5/2	頸部　小片	
403	3-015-03	3	V３４ SD１６６	土師器 杯A	口径 器高	14.8 2.25	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密	—	灰白10Y R8/2	口縁部　2/12	
404	3-018-02	3	V３４ SD１６６ No.１	灰釉陶器 椀	高台径	7.6	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	素地：灰白N7/0 釉色：灰白7.5Y7/1	高台部　6/12	内面研磨痕・炭付着 底部外面墨書？「○」
405	3-017-03	3	V３４ SD１６６ No.２	灰釉陶器 椀	高台径	7.4	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	素地：灰白N8/0 釉色：灰白7.5Y8/1	高台部　完存	内面研磨痕 底部外面墨書 モミガラ痕？
406	3-010-02	3	a２７ SK１６７	陶器 椀	口径	14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	灰N4/0	口縁部　3/12	山茶椀（尾張）　第７型式 内面に炭化物多く付着 外面に煤付着
407	3-015-05	3	b２９ SD１６３	土師器 鍋			外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5Y R8/3	口縁部　小片	外面煤付着 南伊勢系　第１段階b
408	3-016-02	3	b２７ SD１６３	陶器 椀	高台径	6.2	外：ロクロナデ→ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～5.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　6/12	内面研磨痕・炭化物付着 モミガラ痕 山茶椀（尾張）　第６型式
409	3-018-03	3	b２８ SD１６３	陶器 椀	高台径	7.5	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　10/12	底部外面墨書「＋」 山茶椀（渥美？） 第６型式併行
410	3-018-01	3	b２９ SD１６３ No.１	陶器 椀	口径 器高 高台径	14.7 4.8 7.1～7.5	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	やや良	灰白N8/0	口縁部　5/12 高台部　完存	山茶椀（尾張）　第６型式 底部外面墨書 モミガラ痕？
411	3-016-04	3	b２４ SD１６３	加工円盤	直径	9.2～9.6		密	良	灰白N8/0		山茶椀（渥美？） 高台部を転用 重量130ｇ　砂痕？
412	3-015-06	3	b２６ SD１６３	加工円盤	直径	7.3～8.0		密	良	灰白N8/0		山茶椀高台部を転用 重量84ｇ
413	3-015-01	3	b２６ SD１６３	陶器 鉢	口径	20.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	—	橙５Y R7/6	口縁部　1/12	近世か
414	3-031-03	3	O４２ pit４堀方 （SB１２１）	須恵器 蓋	つまみ径 器高 口径	2.9 4.8 12.2	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	良	灰N6/0	口縁部　3/12	
415	3-011-02	3	Q３２ pit２	土師器 台付甕	台部径	9.6	外：ハケメ→オサエ・ナデ 内：ハケメ→オサエ・ナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	—	外面：黒褐10Y R3/1 内面：灰N4/0	台部　9/12	包含層※10出土の破片と接合
416	3-037-04	3	O４０ pit１柱痕 （SB１７１）	土師質土器 大皿？				密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10Y R8/2	口縁部　小片	内外面摩滅
417	3-034-04	3	O４３ pit９ 掘方	土師器 椀	口径	14.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密 ～2.5mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10Y R7/3	口縁部　1/12	

第16表　出土遺物観察表⑨

№.	登録№.	次数	出土遺構	器種	法量（ｃｍ）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
418	3-031-02	3	Ｐ４１ ｐｉｔ４堀方 （ＳＢ１２９）	土師質土器 小皿	口径 器高 底径	10.4 1.8 5.8	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/4	口縁部　3/12 底部　4/12	
419	3-031-01	3	Ｐ４１ ｐｉｔ４掘方 （ＳＢ１２９）	土師器 高杯	口径	17.0	外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	灰白10ＹＲ8/2	口縁部　2/12	内外面摩滅
420	3-011-01	3	Ｐ４１ ｐｉｔ４柱痕 （ＳＢ１２９）	砥石								重量　1.6kg 柱痕の根石として転用
421	3-031-05	3	Ｑ４１ ｐｉｔ６ 掘方	土師器 高杯	口径	15.4	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	橙2.5ＹＲ6/8	口縁部　4/12	
422	3-035-04	3	Ｏ４３ ｐｉｔ４ （ＳＢ１２１）	緑釉陶器 皿	口径	9.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	素地：灰黄2.5Ｙ6/2 釉色：灰オリーブ５Ｙ5/2	口縁部　4/12	
423	3-035-02	3	Ｏ４２ ｐｉｔ２ （ＳＢ１２１）	灰釉陶器 椀	高台径	8.9	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰黄2.5Ｙ7/2	高台部　5/12	
424	3-031-04	3	Ｏ４３ ｐｉｔ７ 掘方	土師質土器 小皿	底径	5.3	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	底部　6/12	
425	3-039-01	3	Ｐ４２ ｐｉｔ２	土師器 甕	口径	18.4	外：ナデ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい褐7.5ＹＲ6/3 内面：にぶい橙7.5ＹＲ7/3	口縁部　1/12	外面煤付着 南伊勢系
426	3-039-05	3	Ｐ４０ ｐｉｔ３ （ＳＢ１７２）	黒色土器 椀			外：ハケ後ミガキ 内：ハケ後ミガキ	密	—	外面：浅黄橙7.5ＹＲ8/3 内面：暗灰Ｎ3/0	口縁部　小片	内黒
427	3-034-05	3	Ｏ４３ ｐｉｔ９ 掘方	土師質土器 皿	底径	5.8	外：ロクロナデ→糸切 内：ロクロナデ	密 ～0.5mmの砂粒含む	—	外面：黒褐2.5Ｙ3/1 内面：灰白2.5Ｙ8/2	底部　6/12	
428	3-009-05	3	Ｏ４２ ｐｉｔ１ №.２	土師質土器 台付小皿	口径 器高 台径	9.2 1.4 4.9	外：ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：浅黄橙10ＹＲ8/3 内面：灰白10ＹＲ8/2	口縁部　完存 台部　11/12	
429	3-009-01	3	Ｏ４２ ｐｉｔ１ №.１	灰釉陶器 椀	口径 器高 高台径	15.0 5.6 8.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白５Ｙ7/1	口縁部　2/12 高台部　完存	内面研磨痕・重ね焼き痕
430	3-037-02	3	Ｑ４１ ｐｉｔ４ （ＳＢ１２９）	瓦器 椀			外：ミガキ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密	—	灰Ｎ5/0	口縁部　小片	
431	3-035-01	3	Ｐ４４ ｐｉｔ２ 柱痕	陶器 小椀	口径 器高 高台径	9.4 3.0 5.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白2.5Ｙ7/1	口縁部　10/12 高台部　完存	モミガラ痕 尾張　第４型式
432	3-033-01	3	Ｐ３９ ｐｉｔ３柱痕 （ＳＢ１３０）	灰釉陶器 壺	台径	15.4	外：ロクロケズリ→ヘラ切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	外面：灰白Ｎ7/0 内面：灰白５Ｙ7/1	台部　7/12	
433	3-032-05	3	Ｑ３１ 包含層	叩き石	長さ 幅 厚み	7.9 6.4 3.6						重量　258ｇ
434	3-039-03	3	南区 表土掘削	土錘	長さ 幅 穴径	4.9 1.4 0.4		密	—	橙５ＹＲ7/6		重量　10.22ｇ
435	3-014-04	3	Ｗ３０ トレンチ	弥生土器 壺			外：廉状文・直線文・波状文 内：ナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	灰黄褐10ＹＲ6/2	体部片	
436	3-041-02	3	Ｒ３０ 包含層 ※10	弥生土器 壺	底径	7.5	外：不明 内：ナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	橙7.5ＹＲ7/6	底部　完存	外面摩滅
437	3-042-01	3	Ｒ３０ 包含層 ※９	弥生土器 壺	底径 体部最大径	9.3 42.4	外：ミガキ、ナデ→櫛描横線文 内：ナデ・オサエ、工具ナデ	密 ～6.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙7.5ＹＲ7/3 内面：オリーブ黒7.5Ｙ3/1	底部　完存	
438	3-040-01	3	Ｐ４２ 下層包含層	土師器 甑	口径	23.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密	—	外面：浅黄橙7.5ＹＲ8/3 内面：橙7.5ＹＲ7/6	口縁部　2/12	
439	3-029-01	3	Ｑ４１ 下層包含層 ※13、14	土師器 台付甕	口径	15.7	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	—	外面：灰白10ＹＲ7/1 内面：浅黄橙10ＹＲ8/3	口縁部　完存	Ｓ字甕Ｅ類
440	3-029-02	3	Ｑ４１ 下層包含層 ※13、14	土師器 台付甕	台径	8.0	外：ケズリ→ハケメ、オサエ・ナデ 内：ケズリ・ナデ、オサエ・ナデ	やや密	—	灰褐7.5ＹＲ6/2	台部　完存	
441	3-033-04	3	北区 下層包含層	須恵器 短頸壺	口径 器高	9.0 8.1	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→ヘラ切り 内：ロクロナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Ｙ7/1	口縁部　1/12	
442	3-038-06	3	Ｏ４１ 包含層	須恵器 平瓶	口径	13.4	外：ロクロナデ、沈線 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	外面：灰Ｎ5/0 内面：灰Ｎ6/0	口縁部　1/12	内面自然釉
443	3-032-01	3	Ｒ４０ 包含層 ※３	須恵器 蓋	口径 器高	11.2 5.0	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	良	灰白Ｎ7/0	口縁部　8/12	
444	3-031-06	3	Ｒ４０ 包含層 ※３	須恵器 蓋	口径	12.5	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	良	灰白Ｎ7/0	口縁部　11/12	
445	3-028-02	3	Ｑ３１ 包含層 ※６	須恵器 杯蓋	口径 器高	13.9 4.8	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→ヘラ切り 内：ロクロナデ	密	良	灰白7.5Ｙ7/1	口縁部　8/12	
446	3-041-01	3	Ｑ３１ 包含層 ※６、８	須恵器 杯蓋			外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰Ｎ6/0	小片	外面にヘラ記号
447	3-033-03	3	北区 下層包含層	須恵器 杯身	口径	12.0	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	良？	外面：灰赤2.5ＹＲ4/2 内面：灰Ｎ5/0	口縁部　6/12	
448	3-027-04	3	Ｑ３１ 包含層 ※６、８	須恵器 杯身	口径 器高 受部径	11.5 4.1 14.0	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→ヘラ切り後未調整 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰Ｎ6/0 内面：灰Ｎ5/0	口縁部 ほぼ完存	
449	3-009-03	3	Ｔ２８ 北壁 №.１	須恵器 杯身	口径 器高 受部径	11.0 3.6 12.7	外：ロクロケズリ・ロクロナデ→ヘラ切り 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白Ｎ7/0	口縁部　6/12	外面灰かぶり
450	3-026-07	3	Ｗ２８ 包含層	須恵器 高杯	脚裾径	10.5	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰Ｎ5/0 内面：灰Ｎ7/0	脚裾部　2/12	
451	3-026-06	3	Ｑ４２ 下層包含層	須恵器 杯	底径	6.0	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	良	外面：黄灰2.5Ｙ6/1 内面：灰白2.5Ｙ7/1	底部　6/12	蓋の可能性あり
452	3-033-05	3	北区 下層包含層	須恵器 平瓶	体部最大径 底径	10.6 6.2	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→ヘラ切り後ナデ 内：不明	密 ～3.0mmの砂粒含む	良	灰白7.5Ｙ7/1 灰7.5Ｙ5/1	底部　完存	外面自然釉
453	3-033-02	3	北区 下層包含層	須恵器 蓋	口径	19.0	外：ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ 内：ロクロナデ→ナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白7.5Ｙ7/1	口縁部　5/12	
454	3-035-03	3	Ｑ４２ 包含層	須恵器 杯Ｂ	口径 器高 高台径	17.0 5.9 12.7	外：ロクロナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密	良	外面：灰白7.5Ｙ7/1 内面：灰黄2.5Ｙ7/2	口縁部　1/12 高台部　2/12	
455	3-030-01	3	北区 下層包含層	須恵器 杯Ｂ	口径 器高 高台径	16.8 6.1 11.4	外：ロクロナデ→ヘラ切り→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白Ｎ7/0	口縁部　2/12 高台部　6/12	
456	3-038-04	3	北区 表土掘削	須恵器 杯Ｂ	高台径	13.2	外：ロクロナデ→糸切後ナデ→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Ｙ7/1	高台部　3/12	内外面自然釉 歪み有
457	3-038-02	3	Ｒ４３ 排水溝	須恵器 椀	口径 器高 高台径	13.6 6.1 7.7	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	良	外面：黄灰2.5Ｙ6/1 内面：褐灰10ＹＲ6/1	口縁部　2/12 高台部　4/12	内面自然釉
458	3-014-03	3	ａ２３ 西壁	須恵器 甕			外：ロクロナデ→波状文・凹線 内：ロクロナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	良	灰Ｎ5/0	口縁部　1/12	

第17表　出土遺物観察表⑩

No.	登録No.	次数	出土遺構	器種	法量（cm）		調整（技法）の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
459	3-023-05	3	北区 下層包含層	製塩土器			外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ6/8	体部　小片	志摩式
460	3-023-07	3	北区 下層包含層	製塩土器			外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密 ～3.0mmの砂粒含む	—	橙2.5Y6/6	口縁部　小片	志摩式
461	3-026-03	3	Ｕ３０ 包含層	製塩土器			外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	やや粗 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ6/6	小片	志摩式
462	3-023-06	3	北区 下層包含層	製塩土器			外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ6/6	体部　小片	志摩式
463	3-037-05	3	Ｒ４０ 包含層	土師器 小皿	口径	11.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄橙10ＹＲ6/3 内面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3	口縁部　1/12	ての字皿
464	3-034-03	3	Ｒ４１ 包含層 ※２	土師器 杯Ａ	口径 器高	12.8 3.0	外：オサエ後ケズリ→ナデ→ヨコナデ 内：オサエ後ナデ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ7/6	口縁部　6/12	
465	3-034-02	3	Ｒ４１ 包含層 ※２	土師器 杯Ａ	口径 器高	15.6 3.95	外：ケズリ後ナデ→ヨコナデ 内：暗文、ヨコナデ	やや密 ～2.5mmの砂粒含む	—	橙7.5ＹＲ7/6	口縁部　3/12	内面煤付着？
466	3-034-01	3	Ｒ４１ 包含層	土師器 杯Ａ	口径 器高	15.5 4.6	外：ヘラケズリ→ヨコナデ 内：暗文、ヨコナデ	やや密 ～5.5mmの砂粒含む	—	外面：橙2.5ＹＲ6/6 内面：にぶい橙7.5ＹＲ7/4	口縁部　1/12	
467	3-035-06	3	Ｒ４１ 包含層 ※２	土師器 杯Ａ	口径 器高	13.9 3.65	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや粗 ～6.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙7.5ＹＲ6/4 内面：にぶい褐7.5ＹＲ6/3	口縁部　3/12	
468	3-037-01	3	Ｑ４０ 包含層	土師器 杯Ａ	口径	13.1	外：ケズリ・ナデ→ヨコナデ 内：ケズリ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ6/6	口縁部　2/12	
469	3-035-05	3	Ｎ４４ 包含層	土師器 杯Ａ	口径 器高	14.2 3.45	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	にぶい黄橙10ＹＲ7/3	口縁部　5/12	
470	3-037-03	3	Ｏ４２ 包含層 ※１	土師器 杯Ａ	口径	14.0？	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	口縁部　1/12	口径不安
471	3-026-04	3	Ｖ２９ 包含層	土師器 杯Ａ	器高	2.4	外：ナデ・オサエ→ナデ 内：ナデ・オサエ→ナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	橙7.5ＹＲ7/6	口縁部　小片	内外面摩滅
472	3-032-02	3	Ｒ４１ 下層包含層	土師器 杯Ａ	口径	13.2	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密 ～5.0mmの砂粒含む	—	橙7.5ＹＲ7/6	口縁部　2/12	内外面摩滅
473	3-022-05	3	北区 下層包含層	土師器 杯Ａ	口径 器高	12.0 3.6	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：橙５ＹＲ6/6 内面：にぶい橙7.5ＹＲ7/4	口縁部　3/12	内面暗文
474	3-014-01	3	南区 西壁	土師器 皿Ａ	口径	20.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：暗文→ヨコナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	—	明赤褐５ＹＲ5/6	口縁部　2/12	内面炭化物付着
475	3-026-05	3	Ｑ４０ 下層包含層	土師器 皿Ａ			外：ケズリ・ナデ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	やや密 ～1.0mmの砂粒含む	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	小片	
476	3-026-02	3	Ｖ２７ 包含層	黒色土器 椀	口径	14.2	外：オサエ後ミガキ→ヨコナデ 内：ミガキ→ヨコナデ	密	—	外面：浅黄橙10ＹＲ8/4 内面：暗灰N3/0	口縁部　2/12	内黒
477	3-010-06	3	ａ２６ 包含層 No.１	土師器 高杯			外：面取りナデ、ナデ 内：ナデ	密	—	浅黄橙7.5ＹＲ8/4	脚部片	
478	3-039-04	3	Ｐ４２ 包含層	土師器 甕	口径 頸部径	12.3 11.0	外：ケズリ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：橙５ＹＲ7/6 内面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3	口縁部　4/12 頸部　5/12	
479	3-032-03	3	Ｑ３１ 包含層	土師器 甕	口径	12.4	外：不明 内：ナデ、ケズリ？→ヨコナデ	密 ～2.5mmの砂粒含む	—	灰褐7.5ＹＲ5/2	口縁部　2/12	外面摩滅激しい
480	3-039-02	3	Ｒ４２ 包含層 ※４	土師器 甕	口径	12.9	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙５ＹＲ7/4 内面：浅黄橙10ＹＲ8/3	口縁部　2/12	内外面摩滅
481	3-027-01	3	Ｒ４２ 下層包含層 ※11	土師器 甕	口径 器高	12.0 11.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ケズリ→ヨコナデ	やや密 ～2.0mmの砂粒含む	—	浅黄橙10ＹＲ8/4	口縁部　4/12	黒斑
482	3-027-03	3	Ｒ４２ 下層包含層 ※16	土師器 甕	口径	12.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ケズリ・ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや密	—	にぶい橙7.5ＹＲ7/4	口縁部　5/12	
483	3-040-02	3	南区 表土掘削	土師器 甕	口径 頸部径	14.5 13.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙５ＹＲ7/4 内面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3	口縁部　1/12 頸部　4/12	
484	3-027-02	3	Ｒ３９ 下層包含層 ※15	土師器 甕	口径	16.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：オサエ後ハケメ→ヨコナデ	やや密	—	橙7.5ＹＲ7/6	口縁部　3/12	
485	3-036-02	3	Ｑ４２ 包含層	土師器 甕	口径	29.5	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケ後ケズリ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3 内面：にぶい黄橙10ＹＲ7/2	口縁部　2/12	
486	3-028-01	3	Ｗ２９ 包含層	土師器 甕	口径	24.2	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	やや密	—	にぶい橙５ＹＲ7/4	口縁部　2/12	
487	3-023-01	3	北区 下層包含層	土師器 甕	口径	22.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：工具ナデ→ヨコナデ	密	—	橙7.5ＹＲ6/6	口縁部　5/12	
488	3-036-03	3	Ｒ４１ 包含層 ※２	土師器 甕	口径	24.9	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケ後ケズリ→ヨコナデ	密 ～4.0mmの砂粒含む	—	外面：にぶい橙7.5ＹＲ6/4 内面：にぶい褐7.5ＹＲ6/3	口縁部　4/12	口縁部内面煤付着
489	3-036-01	3	Ｑ４２ 包含層	土師器 甕	口径	21.8	外：ハケメ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	—	外面：橙５ＹＲ6/6 内面：にぶい橙５ＹＲ6/4	口縁部　2/12	
490	3-032-04	3	Ｑ３１ 包含層	土師器 甕	口径	20.4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ	密 ～3.5mmの砂粒含む	—	灰白10ＹＲ8/2	口縁部　4/12	口縁部内面炭化物付着
491	3-014-02	3	南区 西壁	土師器 甕	口径	13.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：工具ナデ→ヨコナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	—	橙５ＹＲ6/6	口縁部　2/12	
492	3-026-01	3	Ｖ２７ 包含層	土師器 清郷型鍋	口径	23.1	外：ナデ・オサエ→ヨコナデ 内：板ナデ→ヨコナデ	やや密 ～3.0mmの砂粒含む	—	外面：灰褐7.5ＹＲ4/2 内面：橙５ＹＲ6/6	口縁部　3/12	外面煤付着
493	3-023-02	3	北区 下層包含層	土師器 甑	口径	28.0	外：ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内：工具ナデ・ナデ→ヨコナデ	密	—	外面：浅黄橙10ＹＲ8/3 内面：にぶい黄橙10ＹＲ7/3	口縁部　1/12	
494	3-038-01	3	南区 排水溝	灰釉陶器 椀	高台径	8.2	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　7/12	内面研磨痕
495	3-038-03	3	南区 表土掘削	灰釉陶器 椀	口径 器高 高台径	14.2 5.4 6.9	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～2.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	口縁部　2/12 高台部　9/12	内面重ね焼き痕
496	3-009-02	3	南区 西壁	陶器 椀	高台径	7.0	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～5.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　完存	底部外面墨書「上」 砂痕 山茶椀（源美）第６型式併行
497	3-038-05	3	南区 表土掘削	陶器 椀	高台径	6.3	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白N7/0	高台部　4/12	モミガラ痕 底部外面墨書？ 山茶椀（尾張）第７型式
498	3-013-05	3	Ｘ３３ 南壁	陶器 椀	口径 器高 高台径	16.8 4.8 7.9	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ→一定方向ナデ	密 ～1.5mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	口縁部　1/12 高台部　7/12	モミガラ痕 山茶椀（尾張）第６型式
499	3-013-04	3	Ｘ３３ 南壁	陶器 椀	高台径	9.2	外：ロクロナデ→糸切→貼付ナデ 内：ロクロナデ→一定方向ナデ	密 ～1.0mmの砂粒含む	良	灰白５Y7/1	高台部　5/12	内面研磨痕 山茶椀（尾張）第５型式 モミガラ痕

第18表　出土遺物観察表⑪

Ⅴ　自然科学分析

１　分析の目的

立花堂遺跡発掘調査関係資料の科学分析を株式会社パレオ・ラボおよび株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。

第２次調査では奈良時代後半の井戸１基、鎌倉時代の井戸４基を検出した。いずれにも埋土に粘質の強い層が確認でき、とくにＳＥ63～65・68では多量の有機物が見られたことから、これらの土壌を分析することで周辺の自然環境を復元することを試みた。また、ＳＥ57から出土した井戸側については樹種同定を、ＳＥ64の昆虫化石についても同定を依頼した。

そのほか、ＳＤ106をはじめＳＤ88やＳＤ98から動物骨が出土したため、それらについても同定を行った。

３次調査では平安時代後期の井戸を１基検出した。２次調査の５基の井戸とは所属時期が異なるが、これについても比較検討の資料として土壌の分析および出土した井戸施設の樹種同定を依頼した。

一方、ＳＤ152をはじめとした溝群からは多量の大形植物化石を確認した。これらから当時の古環境の復元や食性などの解明を試みた。

当章は、委託先から提出された報告を基本に、一部編集者の加筆・修正を行っている。また、各分析結果をひとつの遺跡の結果としてまとめるために、一報告を分解し並べ替えを行った。当章の最後には株式会社パレオ・ラボによる第２・３次の分析結果を踏まえたまとめを掲載している。なお、分析に関する事実関係には一切手を加えていないことを明記しておく。

各報告を分解してしまうため、以下に報告者をまとめて示す。

〔花粉化石分析〕

新山雅弘（株式会社パレオ・ラボ）：２次調査

鈴木　茂（株式会社パレオ・ラボ）：３次調査

〔昆虫化石同定〕

千藤克彦（岐阜県博物館）

〔大型植物化石同定〕

藤根　久（株式会社パレオ・ラボ）

〔樹種同定〕

株式会社吉田生物研究所：２次調査

藤根　久（株式会社パレオ・ラボ）：３次調査

〔動物遺体同定〕

黒澤一男（株式会社パレオ・ラボ）：２次調査

〔立花堂遺跡の自然科学分析〕

藤根　久・中村賢太郎・鈴木　茂（株式会社パレオ・ラボ）　（柴山）

２　立花堂遺跡の花粉化石分析

はじめに

立花堂遺跡は、三重県津市南河路に所在し、安濃川下流南岸の沖積地に立地する。本遺跡では、これまでの発掘調査により、古代の掘立柱建物や井戸、鎌倉期の井戸・溝が検出された。また遺物としては、土師器・須恵器・緑釉陶器・土錘などが検出された。ここでは、古代および中世の井戸の埋土などを試料とし、当時の古植生および古環境を明らかにする一端として花粉化石群集の検討を行った。

ａ　試料

〔２次調査〕

花粉化石群集の検討は、試料番号１～10の合計10試料について行った。各試料は、ＳＥ57･63･64・65・68（井戸）といった遺構内埋土ないし遺構に関連する堆積物などから採取された。以下に、各試料の記載を示す。なお、ＳＥ64（試料７・８）については、昆虫遺体の検討も行われた。

ＳＥ57（ｒ６・７グリッド）：奈良時代の井戸であり、試料１～４が採取された。試料１（ＳＥ57サンプル①）は、掘方埋土（第５層：第14図の土層番号に対応する）より採取され、黄灰色シルト質細砂で不鮮明な褐鉄鉱が認められる。試料２（ＳＥ57枠内サンプル②）は、井戸内埋土最下層（第６層）下部より採取され、黒褐色細砂で不鮮明な褐鉄鉱が認められる。試料３（ＳＥ57サンプル③）は、遺構外埋土（第10層）より採取され、黒褐色シルトで褐鉄鉱が認められる。試料４（ＳＥ57サンプル④）は、

遺構外埋土（第11層）より採取され、黒色シルト。

ＳＥ63（１８グリッド）：鎌倉時代の井戸であり、試料５、６が採取された。試料５は、遺構外埋土より採取され、暗緑灰色砂混じり粘土で褐鉄鉱が発達する。試料６は、井戸内埋土最下層（第５層）上部より採取され、暗緑灰色シルトで褐鉄鉱が認められる。

ＳＥ64（ｍ７グリッド）：鎌倉時代の井戸であり、試料７、８が採取された。いずれも第３層より採取され（同一層準で２試料を採取）、オリーブ黒色シルト。

ＳＥ65（ｍ７グリッド）：鎌倉時代の井戸であり、試料９が採取された。第５層上部より採取され、オリーブ黒色シルトで炭化物片を含み、褐鉄鉱が認められる。

ＳＥ68（ｍ７グリッド）：鎌倉時代の井戸であり、試料10が採取された。第４層上部より採取され、灰色シルト質細砂で褐鉄鉱が認められる。

〔３次調査〕

試料はＳＥ155の掘方埋土の⑥層（試料１）、⑤層（試料２）および遺構外の⑫層（試料３）と断面調査区外（試料４）より採取された４試料である（第40図）。各試料の特長について記すと、試料１は粘性の高い灰色粘土で、レキが認められる。試料２は灰色の砂質シルト、試料３は褐灰色の砂質粘土で、小レキ（マサ）が散在しており、根跡に酸化鉄が集積して褐色を呈している。試料４は黒灰色の砂質粘土で、酸化鉄やマンガンが集積して全体が赤褐色を呈している。時期としては試料１と２が平安時代で、試料３・４はこれより古いもののいつの時期かは不明である。

ｂ　方法

〔２次調査〕

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート１～２枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

〔３次調査〕

試料（湿重約５～７ｇ）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46％フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離（臭化亜鉛溶液：比重2.1を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

ｃ　花粉化石群集の記載

〔２次調査〕

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉22、草本花粉18、形態分類で示したシダ植物胞子２である。いずれの試料も花粉化石の産出個数は少なく、比較的多産した試料７～９のみ、参考までに花粉・胞子総数を基数として花粉化石分布図に示した。以下に、遺構ごとに花粉化石群集の記載を示す。

ＳＥ57（ｒ６・７グリッド；試料１～４）：いずれの試料も花粉化石の産出個数は、非常に少なかった。枠内埋土（試料１）、掘方埋土（試料２）からは、樹木花粉のスギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科が僅かに産出した。また、遺構外の11層（試料４）からはヨモギ属とシダ植物の単条型胞子が僅かに産出したが、10層（試料３）からは花粉・胞子化石は全く産出しなかった。

ＳＥ63（18グリッド；試料５、６）：井戸内５層（試料６）からは、他のキク亜科のみが僅かに産出したが、遺構外の試料５は花粉・胞子化石を全く産出しなかった。

ＳＥ64（ｍ７グリッド；試料７、８）：いずれの試料も草本花粉の占める割合が極めて高く、80％弱～90％強である。そして、いずれもクワ科の出現率が高い。試料７は、クワ科が40％強を占め、イネ科も20％弱と比較的高率である。他に、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、バラ科、タンポポ亜科が３～４％で出現し、イボクサ属、カラマツソウ属、アブラナ科、キカシグサ属、ヨモギ属などが概ね１％以下で出現する。樹木花粉は、モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、ヤマモモ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などが僅かに産出する。試料８は、クワ科の出現率がより高く、約85％を占める。他は、イネ科が約３％で出現し、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが概ね１％以下で出現する。樹木花粉は、マツ属（不明）、スギ属、アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ属、サンショウ属、ツツジ科、イボタノキ属などが僅かに産出する。

ＳＥ65（ｍ７グリッド；試料９）：樹木花粉の占める割合は、60％弱である。その中で、エノキ属－ムクノキ属が約26％を占め、シイノキ属も約７％と比較的目立つ。他は、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、コナラ亜属が３％弱で出現し、ツガ属、ヤマモモ属、ハンノキ属、ブナ属、アカガシ亜属、キハダ属、グミ属などが１ないし２％未満で出現する。草本花粉は、イネ科の20％弱、クワ科の約７％、アブラナ科の約５％が比較的目立つ。他に、ヨモギ属が２％弱、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、タンポポ亜科が１％未満で出現する。

ＳＥ68（ｍ７グリッド；試料10）：花粉･胞子化石は全く産出しなかった。

〔３次調査〕

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉31、草本花粉21、形態分類を含むシダ植物胞子５の総計57である。これら花粉・胞子の一覧を第20表に、それらの分布を第41図に示した。なお、分布図は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、樹木花粉の占める割合は低く、最も多い試料２でも20％に達していない。その中、試料２ではコナラ属アカガシ亜属が最も多く、次いでスギ属、モミ属が続いている。さらにマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、コナラ属コナラ亜属、コウヤマキ属がモミ属とほとんど差無く続いている。草本類ではイネ科が多産しており、出現率は40％を越えている。このイネ科以外で10％を越える分類群は無く、次いで多いカヤツリグサ科でも約７％、ヨモギ属は約４％である。その他ではベニバナ属が１個体であるが観察されており、水生植物のオモダカ属（抽水植物）や好水性のキカシグサ属などが若干検出されている。

試料４ではコウヤマキ属が最も多く検出され、次いでアカガシ亜属、コナラ亜属が多く観察されている。草本類ではヨモギ属が多く、次いでイネ科となっている。また単条型のシダ植物胞子が最も多く得られている。

試料１と３では樹木花粉の占める割合が非常に低く、試料１は約５％、試料３は約７％となっている。その中草本類のヨモギ属が多産しており、出現率はそれぞれ約60％、約75％を示している。

ｄ　考察

〔２次調査〕

［古植生について］

比較的多産したＳＥ64（試料７、８）、ＳＥ65（試料９）の組成から推定を試みる。井戸という狭い堆積盆のせいか、樹木花粉の産出個数は少なく、周辺の森林植生を十分に反映した組成ではないと考えられる。しかし、常緑のアカガシ亜属やシイノキ属がやや目立つ傾向があり、ヤマモモ属も随伴することから、照葉樹林が成立していた可能性が考えられる。主な構成種は、針葉樹では、ツガ属、マツ属

複維管束亜属、スギ属、落葉広葉樹ではクマシデ属－アサダ属、カバノキ属、コナラ亜属、エノキ属－ムクノキ属のほか、イボタノキ属なども混じっていたと考えられる。エノキ属－ムクノキ属は、試料９で突出するが、ＳＥ65付近に生育していたものが強く反映された可能性が考えられる。

ＳＥ64付近には、クワ科が繁茂し、アカザ科－ヒユ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科なども混じっていた。クワ科は、草本としては、カナムグラ、クワクサなどの可能性が考えられ、攪乱環境が存在していたと推定される。また、キカシグサ属、イボクサ属などが生育するような水位の低い湿地的環境も存在していたであろう。キカシグサ属は、水田にしばしば雑草として生育するが、水田が存在していたにしては、イネ科の出現率が低いように思われる。人為的干渉の強い草地の存在が推定されることから、イネ科は、イネ由来というよりは、むしろススキやシバなどを含む可能性が多分に考えられる。ＳＥ65付近には、イネ科、クワ科、アブラナ科をはじめ、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が生育しており、ＳＥ64付近と概ね類似した環境であったと推定される。

［栽培状況について］

ＳＥ64、ＳＥ65のいずれからもソバ属が産出し、ソバ栽培が行われていたと考えられる。また、出現率は高くはないが、有用植物を多く含むアブラナ科もソバと共に栽培されていた可能性がある。

［井戸の堆積環境について］

花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。従って、ＳＥ64、ＳＥ65は、樹木花粉数が少ないものの、花粉化石がそれなりに保存されていることから、水付きの井戸であったと推定される。一方、ＳＥ57、ＳＥ63、ＳＥ68の埋土は、花粉化石が殆どないし全く産出しないことから、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。つまり、これらの井戸は、乾燥していたか、常時滞水した環境ではなく、乾湿を繰り返す堆積環境であったことが示唆される。

〔３次調査〕

各試料とも樹木花粉が少ない傾向を示しており、これは先に行ったＳＥ64やＳＥ65においても同様の傾向を示している。その要因としては井戸という狭い堆積盆が影響していると考えられる。その中、比較的良好な状態で観察された試料２においてモミ属、ツガ属、ニヨウマツ類、コウヤマキ属、スギ属といった針葉樹類が比較的多く検出されており、平安時代の遺跡周辺丘陵部ではこれら温帯性針葉樹類が目立つ森林植生が斜面部を中心に成立していたとみられる。またこの試料２ではアカガシ亜属が最も多く検出されており、中世と考えられているＳＥ64やＳＥ65の花粉分析結果においてもアカガシ亜属やシイノキ属が目立つ傾向を示している。こうしたことから遺跡周辺丘陵部では尾根部にアカガシ亜属を中心にシイノキ属やヤマモモ属、モチノキ属などが生育する照葉樹林が一部に成立していたと推測される。このように平安時代～中世の立花堂遺跡周辺丘陵部では尾根部を中心に照葉樹林が、また斜面部には温帯性針葉樹林が成立していたと推測され、コナラ亜属やクマシデ属－アサダ属などの落葉広葉樹類も一部に生育していたとみられる。さらにこれら樹木に絡まるようにブドウ属やツタ属などのつる植物も生育していたと推測される。

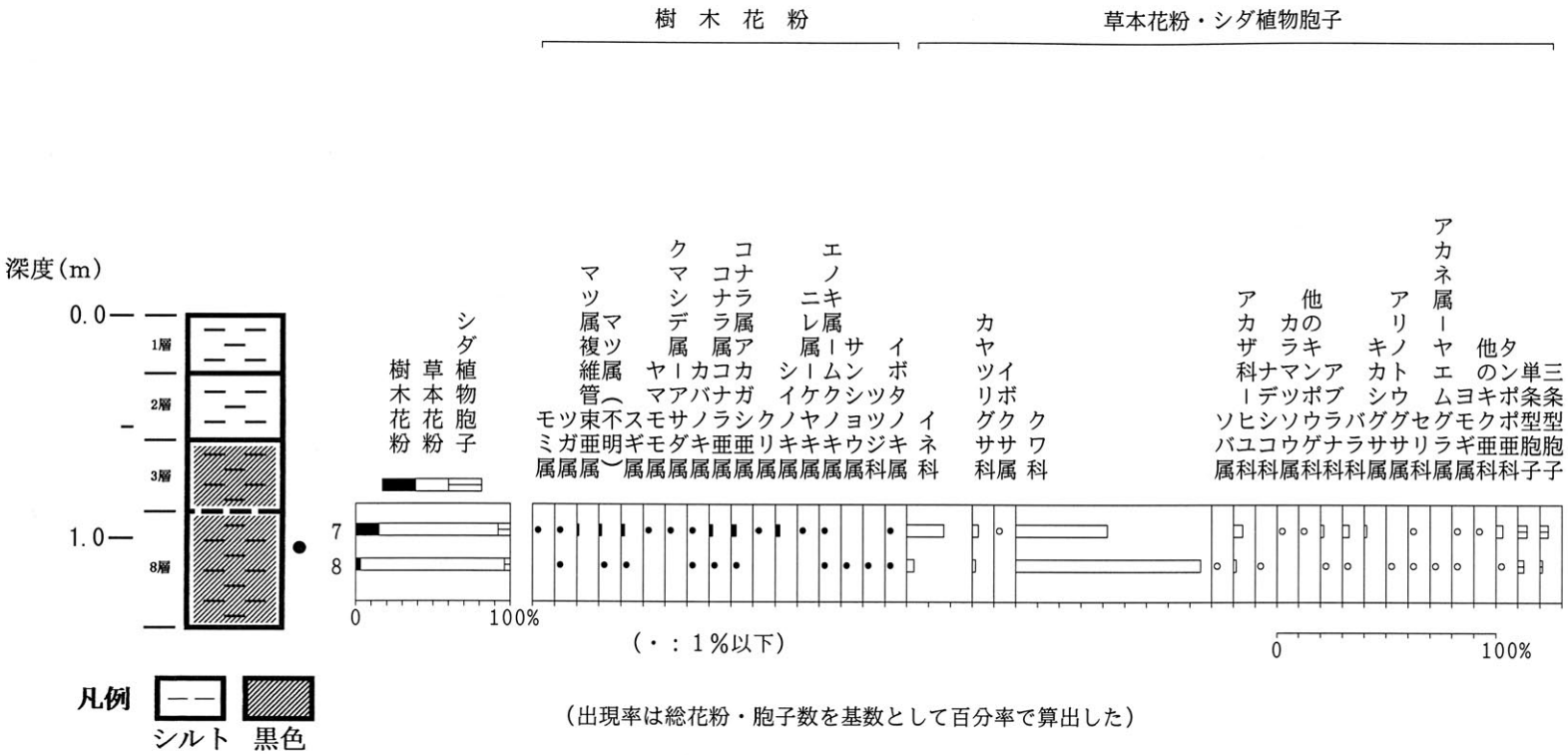
ＳＥ155付近についてみると、試料２においてイネ科が多産しており、その中にはイネと考えられる表面模様を示す花粉が多く観察された。また水田雑草を含む分類群のオモダカ属やキカシグサ属なども検出されていることから本遺構周辺において水田稲作が行われていた可能性が考えられる。なおこうした栽培植物については先に行ったＳＥ64やＳＥ65においてソバやアブラナ科（アブラナ、ダイコンなど）の栽培の可能性が示されている。同様に試料２よりベニバナ属が１個体検出されており、栽培も推測される。しかしながら染料などに花が使われた際、土壌中に混入したことも考えられ、ベニバナの栽培についてはさらに検討が必要であろう。

このＳＥ155の試料１・３においてはヨモギ属が高い出現率を示しており、このヨモギ属をはじめとしてツユクサ属、アカザ科－ヒユ科、オオバコ属、ヨモギ属を除く他のキク亜科、タンポポ亜科、シダ植物などの雑草類がＳＥ155遺構近辺に多く成育し

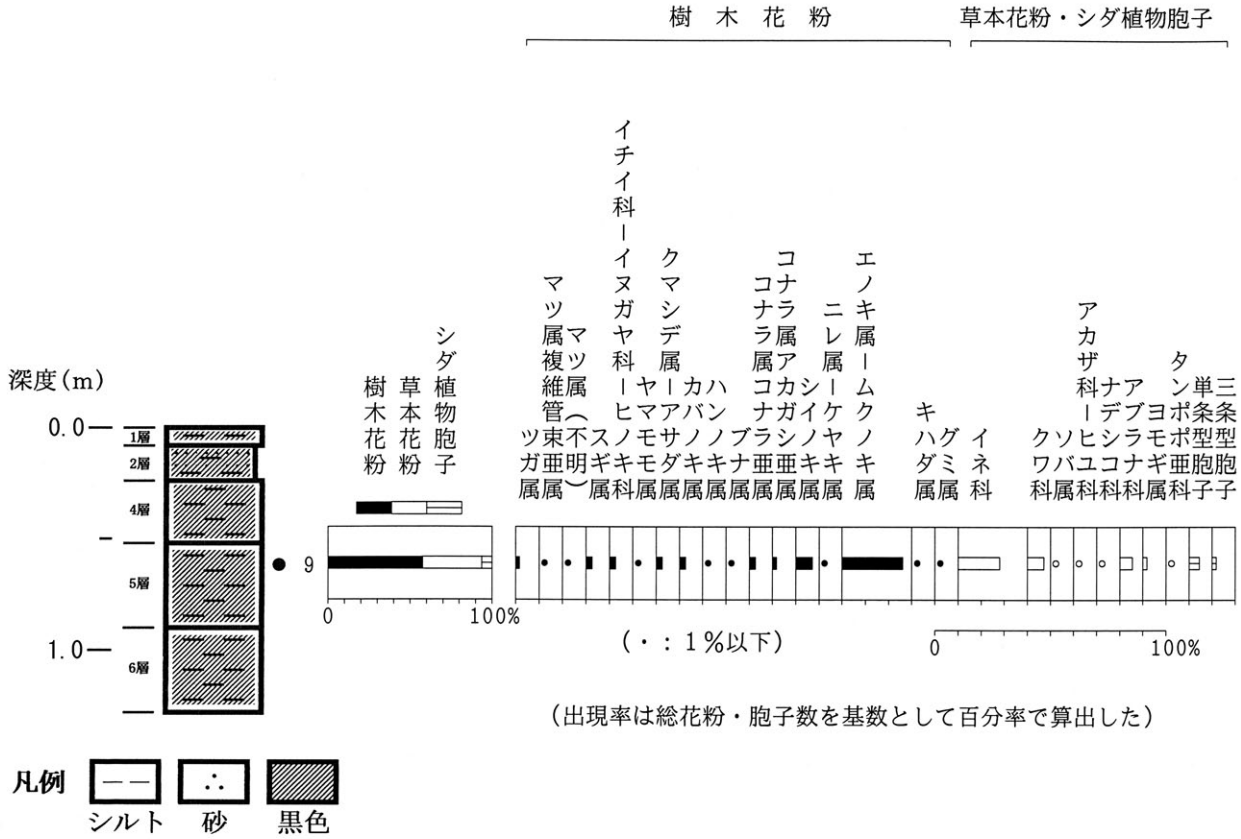
和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
樹木											
モミ属	*Abies*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	-	-	-	-	-	4	4	1	-
スギ属	*Cryptomeria*	1	-	-	-	-	-	5	5	3	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	-	-	-	-	2	-	3	-
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	-	-	-	1	1	3	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ブナ属	*Fagus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	1	-	-	-	-	5	1	3	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	-	-	-	-	-	7	2	2	-
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
シイノキ属	*Castanopsis*	-	-	-	-	-	-	6	-	8	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	2	2	29	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	1	5	-	-
草本											
イネ科	Gramineae	1	1	-	-	-	-	49	24	20	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	1	-	-	-	-	8	11	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	121	624	8	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	-	-	-	-	12	9	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	-	-	-	-	-	-	4	3	6	-
バラ科	Rosaceae	-	-	-	-	-	-	9	3	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	-	-	2	-	-	1	4	2	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	-	-	-	-	-	9	1	1	-
シダ植物											
単条型胞子	Monolete spore	-	4	-	3	-	-	12	20	5	-
三条型胞子	Trilete spore	1	-	-	-	-	-	11	8	2	-
樹木花粉	Arboreal pollen	2	1	0	0	0	0	43	23	64	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	2	3	0	2	0	1	222	685	40	0
シダ植物胞子	Spores	1	4	0	3	0	0	23	28	7	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	5	8	0	5	0	1	288	736	111	0
不明花粉	Unknown pollen	3	6	0	3	0	4	19	18	9	0

Ｔ．－Ｃ．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

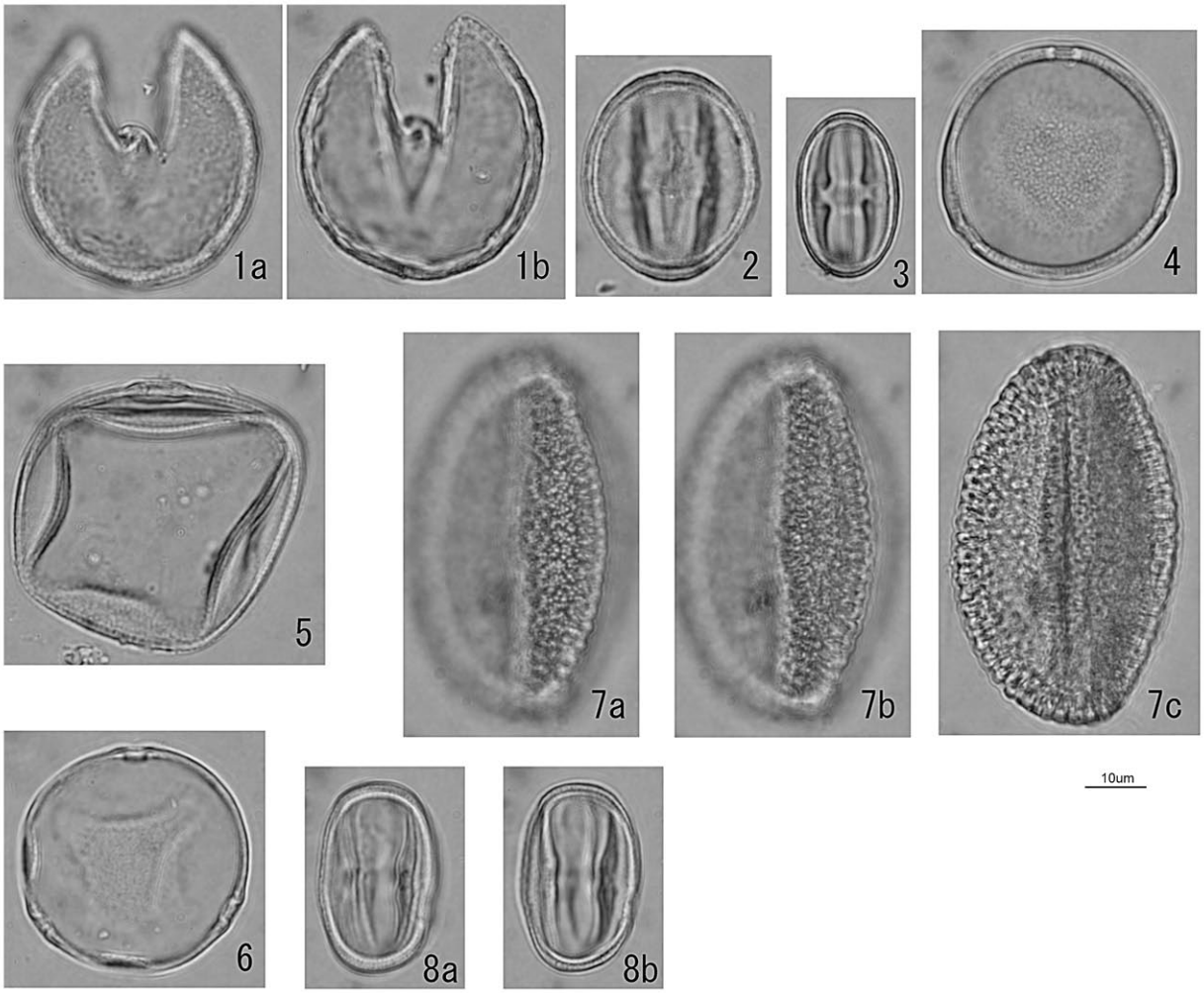
第19表　２次調査　花粉化石産出一覧



第38図　ＳＥ６４の花粉化石分布図

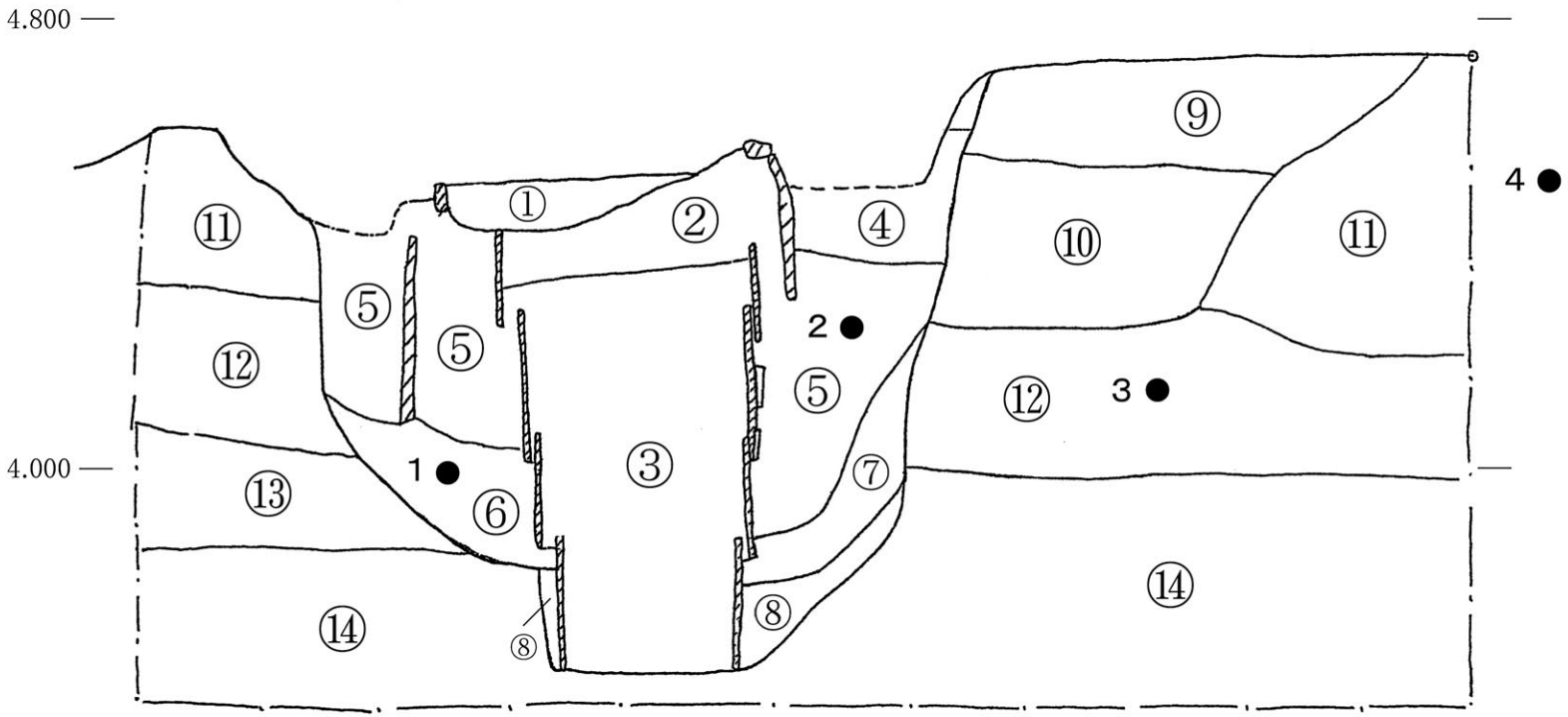


第39図　ＳＥ６５の花粉化石分布図



１．スギ属、試料9、PAL.MN　2392
２．コナラ属アカガシ亜属、試料7、PAL.MN　2387
３．シイノキ属、試料7、PAL.MN　2391
４．エノキ属－ムクノキ属、試料9、PAL.MN　2393
５．イネ科、試料7、PAL.MN　2386
６．クワ科、試料8、PAL.MN　2389
７．ソバ属、試料8、PAL.MN　2388
８．キカシグサ属、試料7、PAL.MN　2385

図版１　２次調査で産出した花粉化石

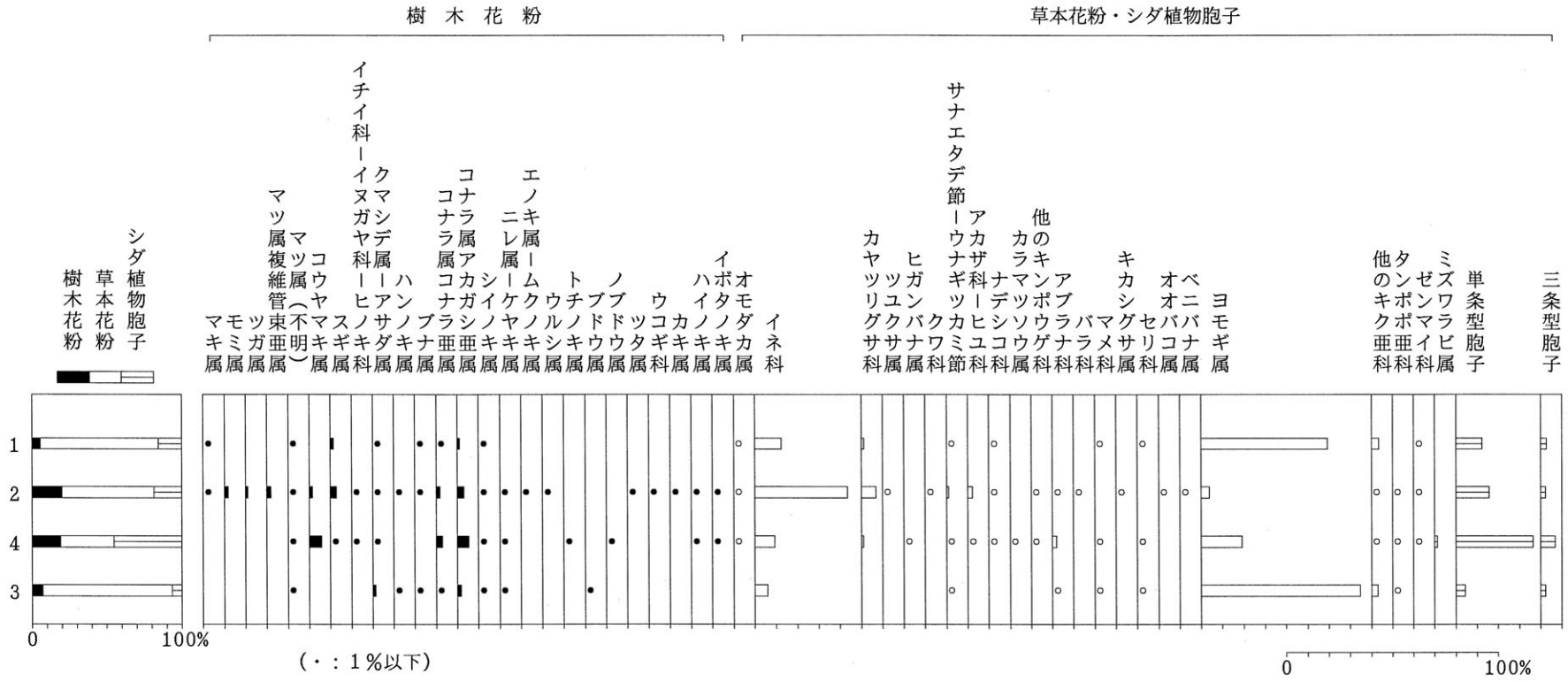


第40図　ＳＥ１５５　試料採取地点付近の土層断面図と試料採取層準（●）

和名	学名	1	2	4	3
樹木					
マキ属	*Podocarpus*	1	2	-	-
モミ属	*Abies*	-	15	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	8	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	15	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	4	2	1
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	13	27	-
スギ属	*Cryptomeria*	4	22	2	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	2	2	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	2	-	-
クルミ属	*Juglans*	-	2	-	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	1	2	2	3
ハンノキ属	*Alnus*	-	2	-	1
ブナ属	*Fagus*	1	2	-	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	2	14	14	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3	25	25	4
クリ属	*Castanea*	-	2	-	-
シイノキ属	*Castanopsis*	1	7	3	1
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	3	3	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	6	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	1	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	2	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	1	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	1
ノブドウ属	*Ampelopsis*	-	-	1	-
ツタ属	*Parthenocissus*	-	1	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	2	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	1	-	-
カキ属	*Diospyros*	-	1	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	1	1	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	1	1	-
草本					
オモダカ属	*Sagittaria*	2	1	1	-
イネ科	Gramineae	32	343	42	13
カヤツリグサ科	Cyperaceae	3	54	5	-
ツユクサ属	*Commelina*	-	1	-	-
ヒガンバナ属	*Lycoris*	-	-	3	-
クワ科	Moraceae	-	5	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	2	8	2	2
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	18	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	7	2	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	3	1	-
アブラナ科	Cruciferae	-	5	9	1
バラ科	Rosaceae	-	2	-	-
マメ科	Leguminosae	1	-	1	1
キカシグサ属	*Rotala*	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	-	1	1
オオバコ属	*Plantago*	-	1	-	-
ベニバナ属	*Carthamus*	-	1	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	154	30	87	169
他のキク亜科	other Tubuliflorae	9	3	3	7
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	3	4	1
シダ植物					
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	2	-
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	2	1	-
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	-	-	6	-
単条型胞子	Monolete spore	32	124	165	10
三条型胞子	Trilete spore	7	18	31	5
樹木花粉	Arboreal pollen	14	157	86	16
草本花粉	Nonarboreal pollen	206	486	163	195
シダ植物胞子	Spores	40	144	205	15
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	260	787	454	226
不明花粉	Unknown pollen	10	22	36	15

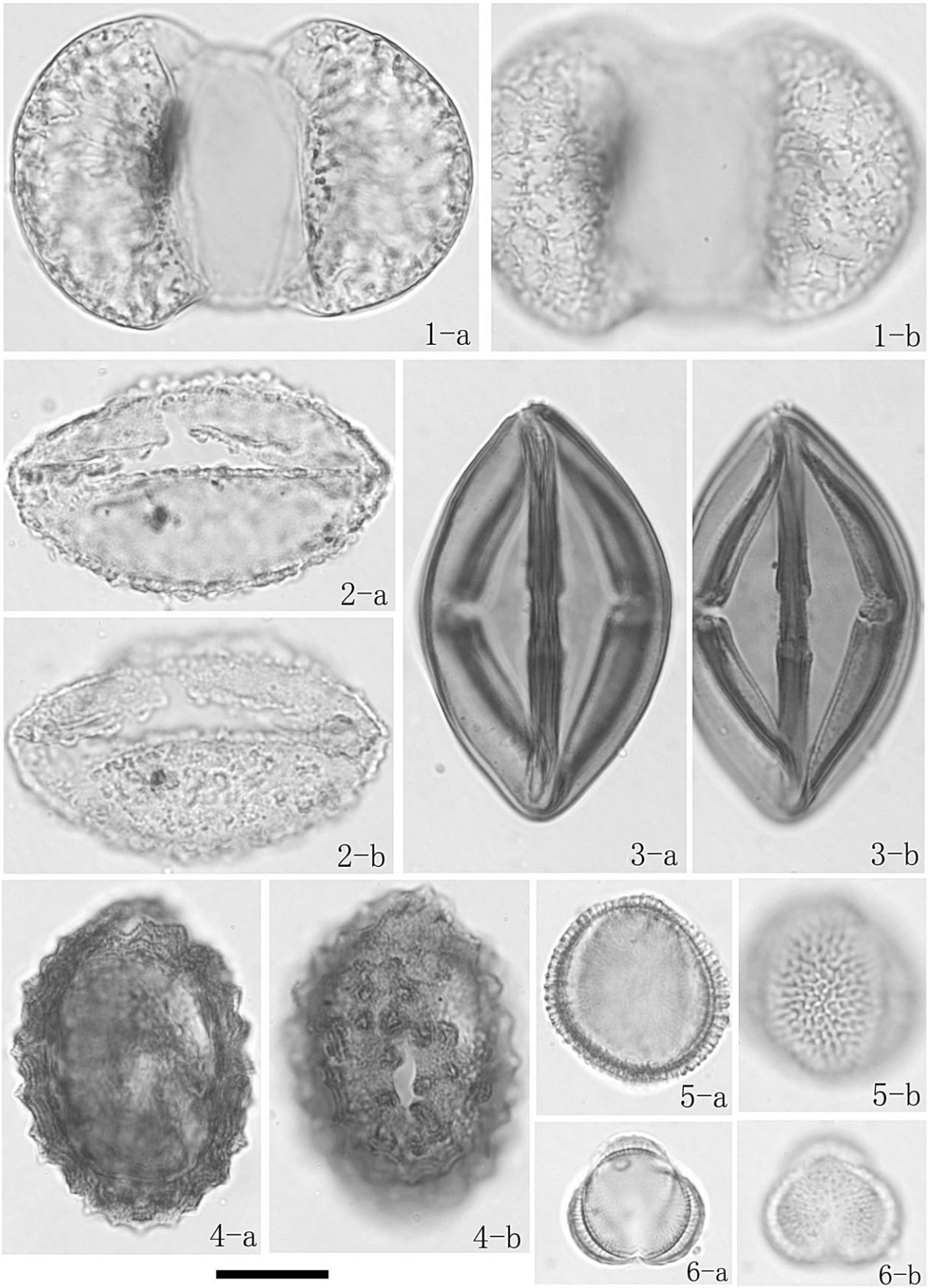
T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

第20表　３次調査　花粉化石産出一覧



（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

第41図　ＳＥ１５５の花粉化石分布図



1：マキ属　PLC.SS 4343　　4：ベニバナ属　PLC.SS 4346

2：コウヤマキ属　PLC.SS 4345　　5：アブラナ科　PLC.SS 4347

3：カキ属　PLC.SS 4344　　6：ヨモギ属　PLC.SS 4342

図版２　３次調査で産出した花粉化石（スケールは0.02㎜）

ていたとみられる。またＳＥ64やＳＥ65ではクワ科が多産しており、中世においては上記の雑草類の他カナムグラやクワクサなどが考えられるクワ科、イネ科などが生育していたと推測される。

おわりに

〔２次調査〕

中世の遺跡周辺には、照葉樹林が成立しており、ＳＥ65付近には、エノキ属－ムクノキ属が生育していた可能性が考えられた。ＳＥ64やＳＥ65の付近には、ソバの栽培地が存在しており、そのような耕作地や周辺においては、クワ科、イネ科をはじめ、アカザ科－ヒユ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などの草本類が繁茂していた。また、ＳＥ64付近には、キカシグサ属、イボクサ属などが生育する水位の低い湿地的環境も存在していた。検討した井戸のうち、ＳＥ64、ＳＥ65は、水付きの井戸であったが、ＳＥ57、ＳＥ63、ＳＥ68は、乾燥していたか､乾湿を繰り返す井戸であったと考えられた。

〔３次調査〕

図表類には示していないが寄生虫卵の回虫卵が試料２より１個体検出されている。本試料に混入した要因の一つとしてソバなどの栽培植物の肥料として糞便がまかれたことが考えられる。また先にも記したが同試料よりベニバナ属が検出されており、染料の他、寄生虫による下痢などの薬として用いられた可能性も推察される。今後、トイレ遺構の検出やその土壌の分析等により立花堂遺跡と寄生虫とのかかわりがより明瞭になる可能性があり、期待したい。

３　立花堂遺跡の大型植物化石

ａ　試料と方法

立花堂遺跡の調査では、溝ＳＤ152からモモ核など大型植物遺体が出土している。

これら試料について、肉眼および実体顕微鏡下で同定･計数を行った。なお、一部の試料は、千葉大園芸学部百原　新准教授にご教授いただいた。

ｂ　出土した大型植物化石

各試料から出土した大型植物化石の一覧を第21表で示す。ここで、完形でない場合、半分ないし破片の数を（）内に示した。なお、表は取り上げ単位で集計した。

ｃ　主な大型植物化石の形態記載

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核

核は灰褐色ないし茶褐色、完形であれば側面観は卵形から卵円形、先端は鋭頭。表面には縦方向に不規則な筋(隆起)があり、明瞭な１本の縫合線が縦に走る。

ナラガシワ　*Quercus aliena* Blume　幼果、殻斗

幼果は、円筒形で長さ９㎜程度である。殻斗は直径11㎜程度である。

コナラ属　*Quercus*　果実

果皮片のみが得られた。果皮片のみではこれ以上の同定には至らない。

ウメ　*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.　核

側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には小さく、深い穴が散在する。長さ18㎜程度である。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核

側面観は卵形ないし楕円形、上面観は両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する｡表面には不規則な流れるような溝と穴がある。大きなものは3.3㎝に達する。

サクラ属サクラ節　*Prunus* sect. *Pseudocerasus*　核

核は灰褐色で楕円形。一方の側面には縫合線がある。表面はウメやモモのような溝や穴はない。

エゴノキ　*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.　種子

種子は広卵形で頂部から３本の縦溝が走る。表面には、細かな網目紋があり、ざらつく。

マメ科？　(Leguminosae)　果序

長さ５㎜、幅1.5㎜の小型の果序である。

ｄ　考察

検出された大型植物遺体は、

［栽培･利用状況について］

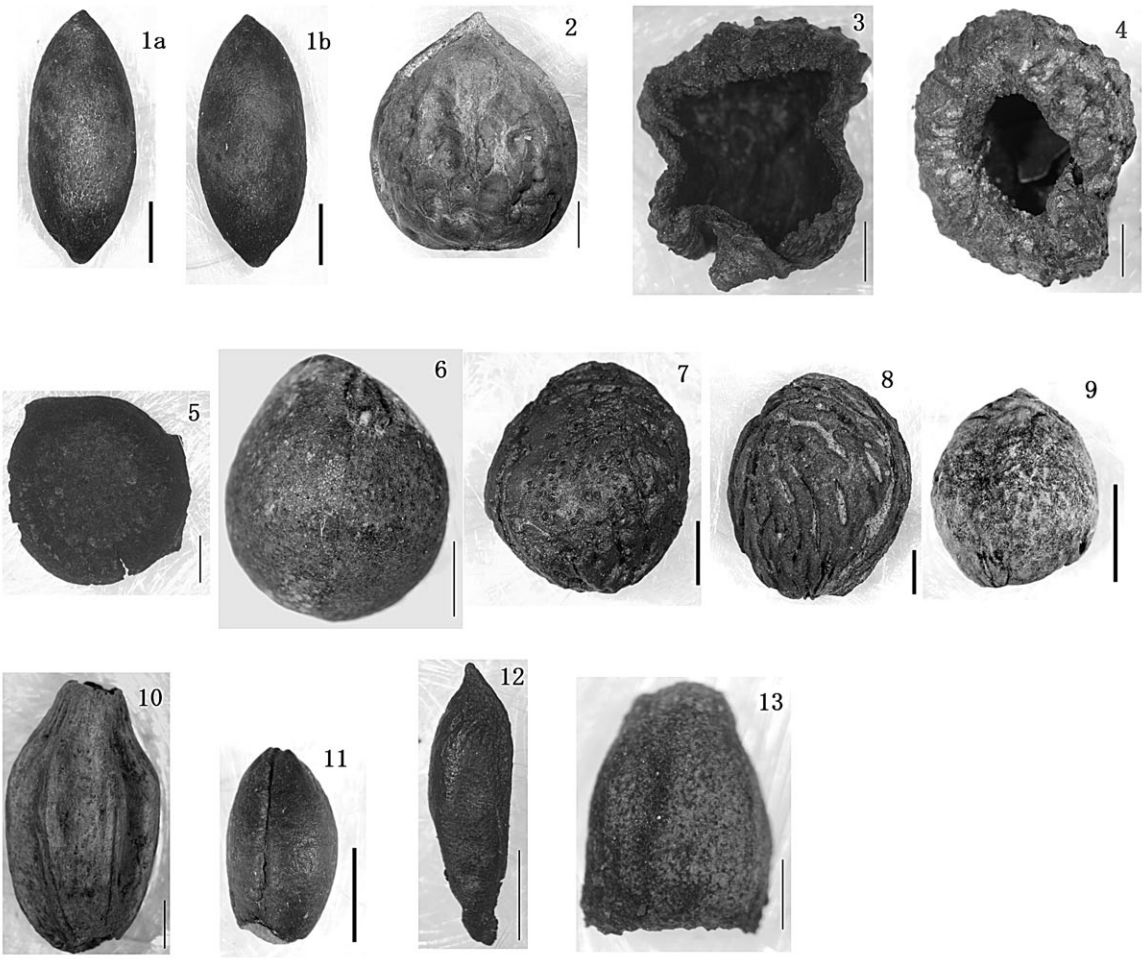
出土した分類群のうち、栽培植物ないし可能性の高いものは、ウメ、モモである。モモは、比較的多く出土しており、食後投棄されたものと思われる。

［植生環境について］

エゴノキの種子が比較的多産しているが、エゴノキは落葉高木であり、低山地や平原にきわめて普通に生える樹木であることから近接域に生えていたと

分類群名・部位 層位名・番号		Y29	Z27	a26	Z28	a24	a25	a24	Z28	Y28	Y31	Y32	Z28	Y30	a24	a24	a24	b25	b24	Z28	Z27	a25	Y30	b25
		SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152	SD152
イヌガヤ	種子																							1
オニグルミ	核		1(1)														(1)							
コナラ属	果実	1																						
ナラガシワ	幼果								2															
	殻斗								2															
ムクノキ	内果皮	1							2															
ウメ	核																				1			
モモ	核	3(2)	(1)		1	1	1(1)	2	1		1	1		1	1	3(1)		5(1)	1	1		2(1)	(1)	2
サクラ属 サクラ節	核	1			(1)																			
センダン	種子	1							1	(1)														
エゴノキ	種子	7(1)	9(3)	2	3			4(2)	7(1)	3		1	(1)			3		1			1			1
マメ科？	果序								1	1														
不明	種子								1															

第21表　3次調査　大型植物化石一覧　　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す



1a･1b. イヌガヤ種子（b25:5mm）　2. オニグルミ核（z27:5mm）　3. ナラガシワ幼果（z28:2mm）
4. ナラガシワ核斗（z28:2mm）　5. コナラ属果実（y29:2mm）　6. ムクノキ内果皮（z28:2mm）
7. ウメ核（z27:5mm）　8. モモ核（y29:5mm）　9. サクラ節核（y29:2mm）　10. センダン種子（z27:2mm）
11. エゴノキ種子（y29:5mm）　12. マメ科？果序（z28:2mm）　13. 不明種子（y28:2mm）

図版３　ＳＤ１５２から出土した大型植物遺体

思われる。こうした場所では、ナラカシワやムクノキなども生えていたものと推定される。

なお、センダンが含まれていたが、暖地の海に近いところなどに見られるが、古くから栽培もされていることから天然の分布域ははっきりとしない。

4　立花堂遺跡　出土昆虫化石群集について

はじめに

昆虫は、生物の中で最も多い種類数を誇り、多様な環境に棲み分けている。昆虫の大部分は年一化ないし二化性で世代交代が速い。しかも移動能力が高いために、環境の変化に敏感に反応する。また、花粉等と比べて死後の移動が少なく、現地性が高い。このような理由により、昆虫化石の分析は過去の環境を推定するのに有効である。

立花遺跡の鎌倉時代の井戸と考えられる遺構（ＳＥ64）の埋土から昆虫化石が出土した。井戸から出土した昆虫化石の分析を試みた。

ａ　分析試料および方法

昆虫化石が出土した試料は、ＳＥ64の第３層から採取した埋土サンプルである。No.７、No.８の土サンプルから分析担当者によってブロック割りによって昆虫化石が抽出された。各サンプルの量は、No.７が0.5kg、No.８が2.7kgである。

各昆虫の節片について、実体顕微鏡下で現生標本と比較しながら同定を行った。

ｂ　結果

検出された昆虫化石の同定結果を第22表に示した。全部で７分類群、26点の昆虫が検出された。種まで同定できたのは次の５種である。それぞれの種の生態については森（1994）と中山（2001）を参考にした。

ハンミョウ　*Cicindela　chinensis japonica*

青～緑色で金属光沢があり、大変きれいな昆虫である。体表を顕微鏡で拡大して観察すると表面全体に顆粒状の文様がある。現生標本と比較して部位の形態、大きさ、表面のしわ状の点刻の入り方まで一致しており、本種と同定した。

本種は地表性の昆虫で肉食である。開けた草地などに棲息する。

セマルガムシ　*Coelostoma　stultum*

全長が５㎜ほどの小さな昆虫である。全身が黒色で、背面には細かな点刻がある。現生標本との比較で、点刻の大きさや密度、部位の形や大きさが一致したため本種と同定した。

本種は水生昆虫で水田などのような水深の浅い、流れのない水域に棲息する。

オオクロコガネ　*Holotrichia　parallela*

左右の前脚のみ出土した。けい節側縁の突起の形状、稜線の入り方、点刻の形状と入り方をクロコガネ、コクロコガネの現生標本とも比べて検討した結果、オオクロコガネと同定した。

本種は草食性で、サクラやナシ、クワなどに集まる。

コガネムシ　*Mimela　splendens*

全身に緑色の金属光沢がある。各部位で大きさ、形、点刻の形状等を現生標本と比較したところ、コガネムシと一致したため、本種と同定した。

本種は植食性で､集落付近や林縁などに生息する。

ヒメコガネ　*Anomala　rufocuprea*

コガネムシと同様に全身が緑色で金属光沢があるが､コガネムシよりも小型である｡各部位で大きさ、形、点刻の形状等を現生標本と比較したところ、ヒメコガネと一致したため、本種と同定した。

本種は植食性で、さまざまな樹木や草本にやってくる。中世の遺跡からしばしば大量に出土し、作物の葉を食い荒らす畑作害虫の指標となっている（森1994）。

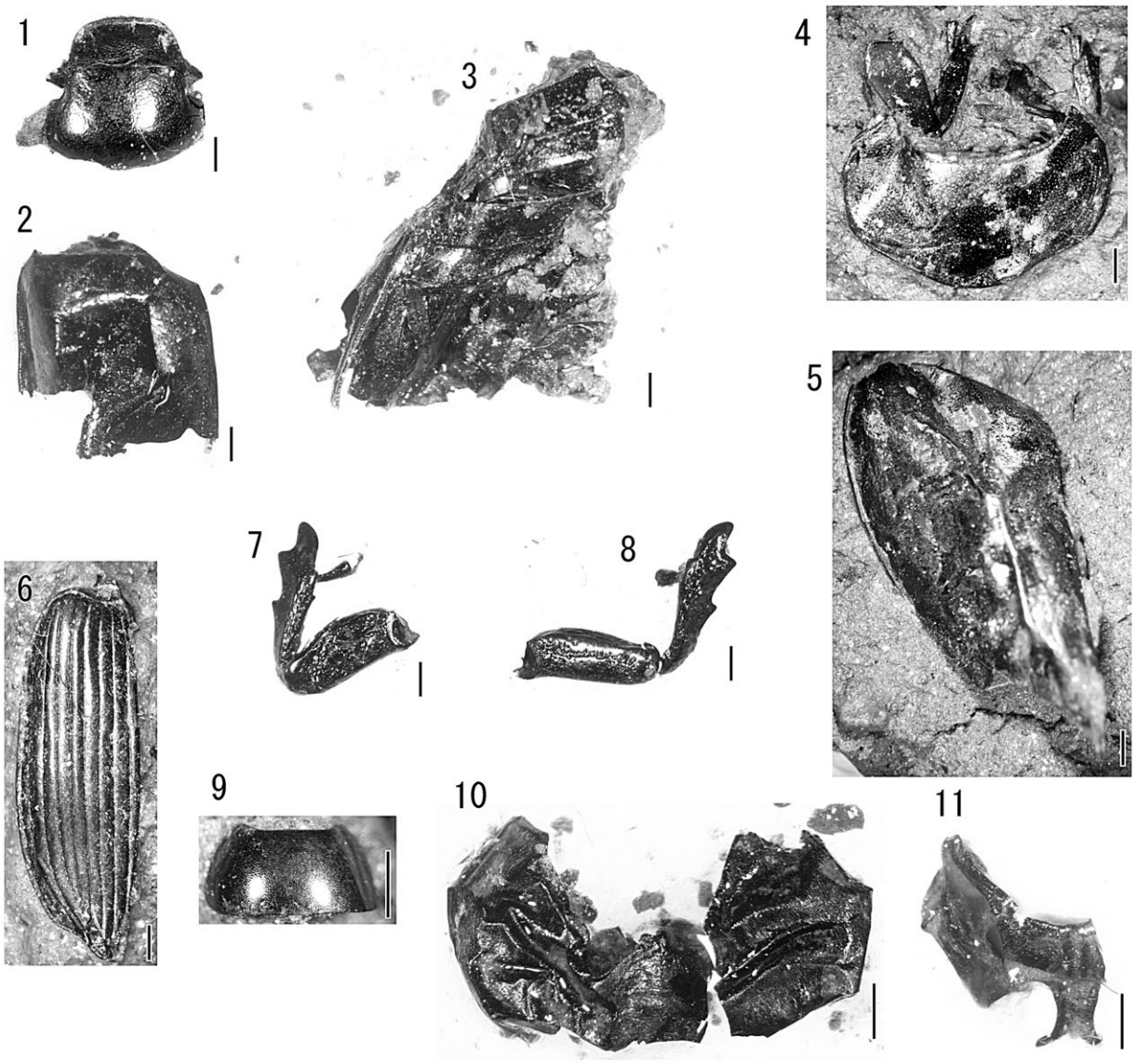
種まで同定されなかった昆虫化石の所見も第22表に示した。

ｃ　考察

昆虫遺体の節片は、かなり傷んでいるものや欠けているものが多く、完全な状態のものはなかった。これは、出土した昆虫遺体が出土した場所で生息していたものでなく、近辺に棲息していた遺体がバラバラになって風などによって移動して井戸遺構に入ったものであることを示している。そのため、ここで出土した昆虫群集は井戸の周辺の埋土が堆積した時代の昆虫群集を反映しているものと思われる。しかし、出土点数が26点と少なく、いちばん多くの点数が出土したコガネムシでもすべての出土化石を合

No.	種名	学名	部位	所見	生態
1	コガネムシ	*Mimela splendens*	右前脚、中脚腿節、後脚腿節、翅鞘片		植食性、樹上性
2	コガネムシ	*Mimela splendens*	左鞘翅、腹部腹板		植食性、樹上性
3	コガネムシ	*Mimela splendens*	右後脚、腹部腹板		植食性、樹上性
4	コガネムシ科	Scarabaeidae gen. sp	鞘翅端部片	緑色の金属光沢がありサクラコガネの鞘翅端部に大きさ、形状ともに似る。	植食性
5	コガネムシ	*Mimela splendens*	頭部		植食性、樹上性
6	ゴミムシ類	Carabidae gen. sp	右中脚腿節	緑色～紫色の金属光沢があり、長さ４㎜。オオクビボソゴミムシの脚に似る。	地表性
7	コガネムシ科	Scarabaeidae gen. sp	左前脚	黒色。けい節外側に３つの突起がある。マメコガネよりも小型のコガネムシのものと思われる。	植食性、樹上性
8	コガネムシ	*Mimela splendens*	左中脚けい節		植食性、樹上性
9	コガネムシ科	Scarabaeidae gen. sp	左後脚腿節	黒色。けい節外側に３つの突起がある。マメコガネよりも小型のコガネムシのものと思われる。	植食性
10	コガネムシ	*Mimela splendens*	左中脚腿節		植食性、樹上性
11	コガネムシ	*Mimela splendens*	左前脚腿節		植食性、樹上性
12	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea*	前胸背板、前脚、左鞘翅		
13	コガネムシ	*Mimela splendens*	左鞘翅片		植食性、樹上性
14	ゴミムシ類	Carabidae gen. sp	左鞘翅	長さ11㎜。表面に顆粒状の構造が見られる。	地表性
15	不明甲虫	COLEOPTERA gen. sp	脚	緑色の金属光沢があり大型の昆虫の脚の破片と思われる。	不明
16	ゴミムシ類	Carabidae gen. sp	後胸腹板	幅3.6㎜。黒色で体長13㎜のゴモクムシのものと大きさ、形が似る。	地表性
17	オオクロコガネ	*Holotrichia parallela*	左前脚		植食性、樹上性
18	コガネムシ	*Mimela splendens*	頭部		植食性、樹上性
19	セマルガムシ	*Coelostoma stultum*	前胸背板		水生
20	コガネムシ	*Mimela splendens*	右中脚腿節		植食性、樹上性
21	コガネムシ科	Scarabaeidae gen. sp	右中脚	けい節2.5㎜、腿節4㎜で植食性コガネムシのものと思われる。	植食性
22	ハンミョウ	*Cicindela chinensis japonica*	後胸腹板		地表性、肉食性
23	コガネムシ	*Mimela splendens*	左中脚腿節		植食性、樹上性
24	ハンミョウ	*Cicindela chinensis japonica*	中胸腹板片		地表性、肉食性
25	オオクロコガネ	*Holotrichia parallela*	右前脚		植食性、樹上性
26	コガネムシ科	Scarabaeidae gen. sp	右前脚	長さがけい節２㎜、腿節２㎜で小型のコガネムシ類のものと思われる。	植食性

第22表　ＳＥ６４　出土昆虫化石一覧



1. コガネムシ、頭部　2. コガネムシ、左鞘翅　3. コガネムシ、腹部腹板　4. ヒメコガネ、前胸背板と前脚　5. ヒメコガネ、左鞘翅　6. ゴミムシ類、左鞘翅　7. オオクロコガネ、左前脚　8. オオクロコガネ、右前脚　9. セマルガムシ、前胸背板　10. ハンミョウ、後胸腹板　11. ハンミョウ、中胸腹板片

図版４　出土した昆虫化石（スケールは１mm）

わせてもせいぜい２個体分しかない。したがって周辺の環境について考察することは難しく、ここでは出土した昆虫化石の記載をすることまでに留めておく。

引用文献

中山周平. 2001. 野や庭の昆虫. 小学館.

森　勇一. 1994. 昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷と復元. 第四紀研究33.

5　立花堂遺跡の動物遺体同定

a　対象試料および方法

三重県津市南河路にある立花堂遺跡から出土した動物遺体について同定をおこなった。同定は現生標本との比較によりおこなった。

b　同定結果および考察

立花堂遺跡から出土した動物遺体について同定した結果を以下に述べる。なお詳しい出土内容については、第23表に示す。

本遺跡の６地点から動物遺体が出土した。それらのほとんどは歯のエナメル質部分のみの検出で、一部にセメント質を残すものもあるが、象牙質はほとんど残っていない。そのため、エナメル質が破片化してしまい、同定が困難であるが、ｅ22地区包含層、ｄ22地区ＳＤ106とｖ４地区ｐｉｔ13掘方より検出されたものについてはウマの臼歯であり、それぞれ、左上顎第１後臼歯、左上顎第３後臼歯と下顎臼歯である。ｅ22地区包含層より検出された左上顎第１後臼歯は歯根が一部確認されるため、おおよその臼歯の全歯高（歯根中心部と咬合面中心部の直接距離；久保和士・松井章、1999）の計測をおこない、その結果からおよそ３～４才程度の若い成獣個体と推定される。左上顎第３後臼歯については歯冠部が約５cm程度、下顎臼歯については約6.8cm程度確認されることから同様に若い成獣個体の歯であると考えられる。

なお、ｅ22地区ＳＤ98とｄ23地区ＳＤ88より検出された歯はおそらくウマ臼歯のエナメル質部分破片と思われるが、破片であるため確実な同定にはいたらないため、「ウマ？」としている。またｆ22地区ＳＤ98より検出されている動物遺体は、歯のエナメル質部分破片ではあるが、より細片化しているため不明哺乳類としている。

おわりに

立花堂遺跡から出土した動物遺体を同定した結果、３～４才程度の若齢のウマの存在が確認された。若い成獣の歯が複数検出されているが、残存状態が悪く、破片化していることから同一個体のものであるかなどの詳細な検討にはいたらない。

引用文献

久保和士・松井章（1999）第９章家畜〈その２－ウマ・ウシ〉. 西本豊弘・松井章編「考古学と動物学」, 169-208.

6　立花堂遺跡出土木製品の樹種同定

a　試料

〔２次調査〕

試料は、ＳＥ64から出土した容器ほか２点、ＳＥ57から出土した井戸構築部材28点、その他建築部材６点の合計36点である。

〔３次調査〕

試料は、ＳＥ155から出土した井戸の構築部材13点、その他木製品が４点の合計17点である。

b　観察方法

〔２次調査〕

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

〔３次調査〕

木製品から剃刀を用いて３方向（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で観察して同定した。

c　結果

〔２次調査〕

樹種同定結果（針葉樹３種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

(*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)

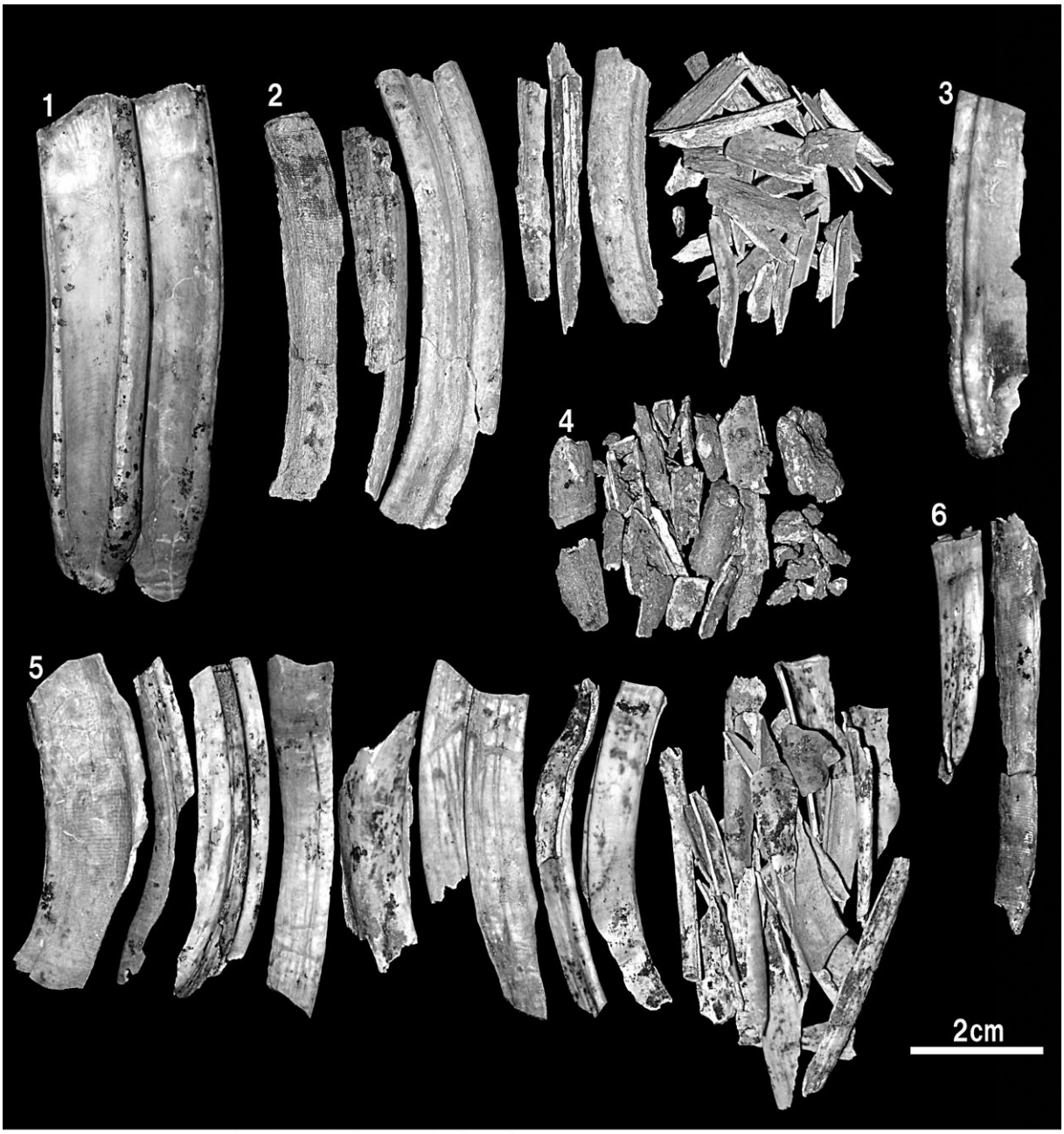
（遺物No.36）

（写真No.36）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾

グリッド	遺構	種名	部位	状態	備考
d23	SD88	ウマ？	臼歯	破片	
d22	SD106	ウマ	左上顎第３後臼歯	破片	
v4	pit13掘方	ウマ	下顎臼歯	破片	
e22	SD98	ウマ？	臼歯	破片	
e22	包含層	ウマ	左上顎第１後臼歯		全歯高約65mm
f22	SD98	不明哺乳類	歯	破片	

第23表　２次調査　出土骨類観察表



1.ウマ 左上顎第1後臼歯(e22 包含層)
2.ウマ 下顎臼歯 破片(v4 pit13掘方)
3.ウマ？ 臼歯 破片(e22 SD98)
4.不明哺乳類 歯 破片(f22 SD98)
5.ウマ 左上顎第3後臼歯(d22 SD106)
6.ウマ？ 臼歯 破片(d23 SD88)

図版５　立花堂遺跡　出土動物骨

目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州（福島以南）、四国、九州（宮崎まで）に分布する。

２）スギ科スギ属スギ

(*Cryptomeria japonica* D.Don)

(遺物No.１～18、22～30、34)

(写真No.１～18、22～30、34)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

３）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

(遺物No.19～21、31～33、35)

(写真No.19～21、31～33、35)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

〔３次調査〕

井戸（ＳＥ155）から検出された曲物４点はいずれもスギが利用されている。また、構築部材の隅柱４点はいずれもスギであるが、縦板５点はいずれもヒノキ属の木材を利用している。

一方、溝から出土した底板および不明木製品はヒノキ属とアカガシ亜属、棒状木製品がスギ、これに差し込んで使用された試料№11がヒノキ属、がそれぞれ利用されている。

木製品の木材利用状況は、曲物はヒノキ属を利用する場合が多いが、スギ材を利用する場合もある。ただし、８世紀以降ではヒノキ属を利用している場合が圧倒的に多い（山田、1993)。井戸構築材の場合、建築材として見ると、８世紀以降ではスギとヒノキ属は共に多く、その他の樹木としてマツ属複維管束亜属や広葉樹などの利用も多い（山田、1993)。

以下に、各樹種の特徴記載を述べる。

(1)スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　図版18　1a-1c（№６）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の仮道管壁は極めて厚い。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型、１分野に２～３個が水平に配列している。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。木材はやや軽軟で加工は容易である。

(2)ヒノキ属　*Chamaecyparis*　ヒノキ科　図版18　2a-2c（№12)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少ない。分野壁孔の孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型、１分野におもに２個が水平に整然と配列する。

ヒノキ属の樹木には、本州の福島県以南から九州に生育するヒノキ（*C.obtusa*）と本州の岩手県以南から九州に生育するサワラ（*C.pisifera*）がある。木材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

(3)コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版18　3a-3c（№10)

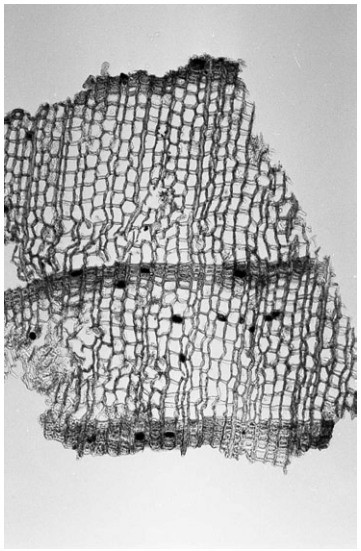
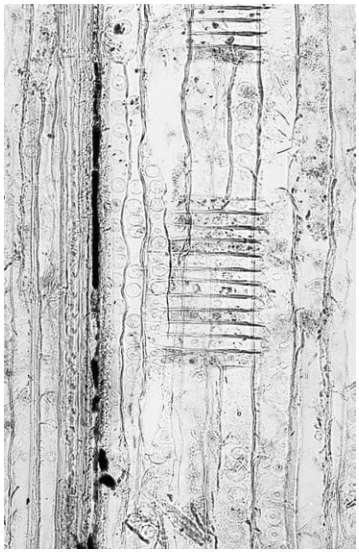
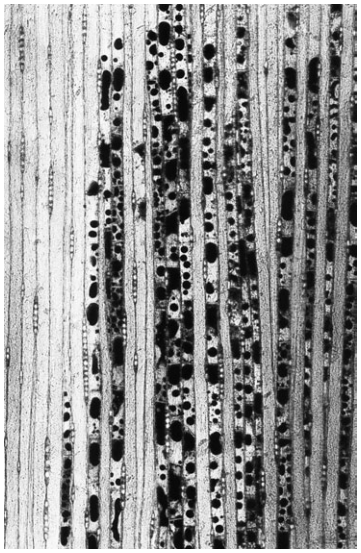
細胞幅の広い集合放射組織を挟み中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく、柵状・交互状である。

アカガシ亜属は、常緑で暖温帯に分布する。山野に普通のアラカシ（*Q.glauca*）やアカガシ（*Q.acuta*）あるいはシラカシ（*Q.myrsinaefolia*)、関東以南に多いイチイガシ（*Q.gilva*）やツクバネガシ（*Q.sessilifolia*)、海岸や乾燥地に多いウバメガシ（*Q.phillyraeoide*)、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシ（*Q.salicina*）などがある。木材は丈夫で弾性や耐湿性がある。

◆参考文献◆〔２次調査〕
島地 謙･伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」

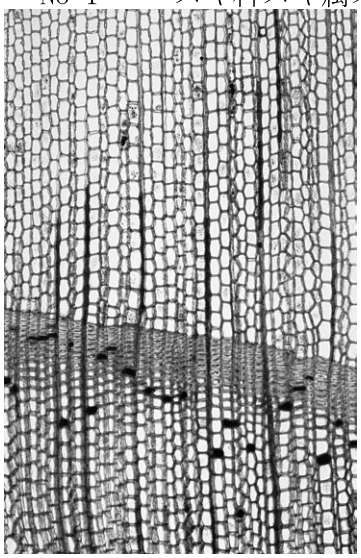
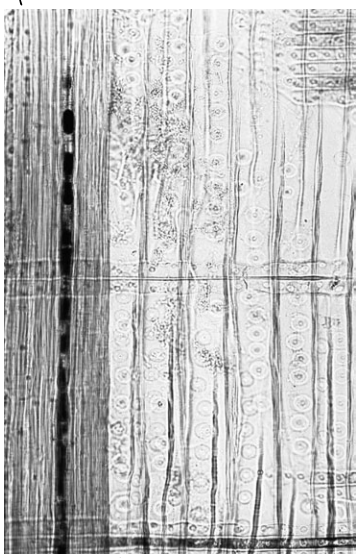
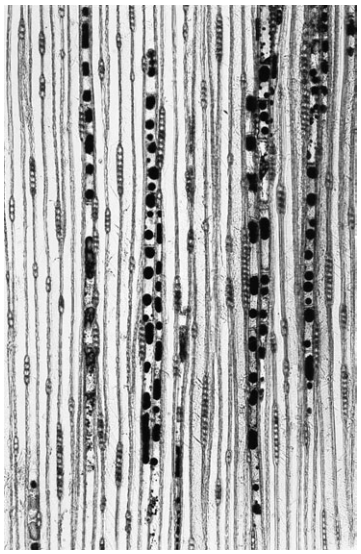
No.	報告番号	実測番号	出土遺構	品名	樹種
1	100	2-003-03	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
2	105	2-004-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
3	91	2-004-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
4	90	2-003-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
5	97	2-003-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
6	104	2-006-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
7	103	2-006-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
8	88	2-005-03	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
9	94	2-005-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
10	96	2-005-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
11	92	2-007-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
12	95	2-008-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
13	93	2-007-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
14	102	2-008-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
15	87	2-009-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
16	101	2-010-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
17	99	2-010-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
18	98	2-009-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
19	78	2-016-01	ＳＥ５７	井戸枠材	ヒノキ科アスナロ属
20	183	2-011-01	ＳＥ６４	板	ヒノキ科アスナロ属
21	184	2-015-01	ＳＥ６４	曲物	ヒノキ科アスナロ属
22	84	2-002-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
23	85	2-001-03	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
24	86	2-002-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
25	89	2-002-03	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
26	82	2-001-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
27	83	2-001-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
28	80	2-011-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
29	79	2-012-01	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
30	81	2-012-02	ＳＥ５７	井戸枠材	スギ科スギ属スギ
31		未実測	ＳＡ１０９	板材	ヒノキ科アスナロ属
32	210	2-013-02	ＳＡ１０９	板材	ヒノキ科アスナロ属
33	209	2-013-01	ＳＡ１０９	板材	ヒノキ科アスナロ属
34		未実測	ＳＡ１０９	板材	スギ科スギ属スギ
35		未実測	ＳＡ１０９	板材	ヒノキ科アスナロ属
36	208	2-014-01	ＳＢ４２	柱材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

第24表　２次調査　出土木製品同定表

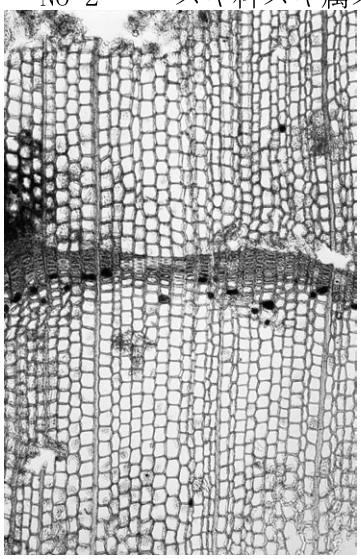
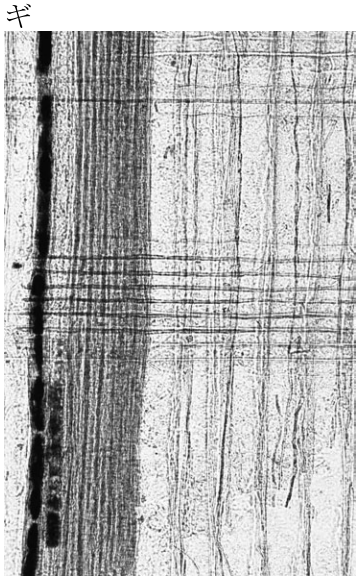
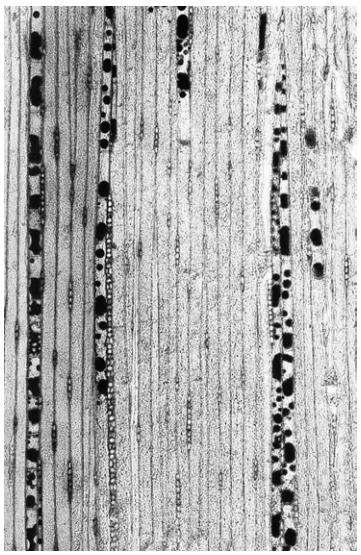
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-1　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

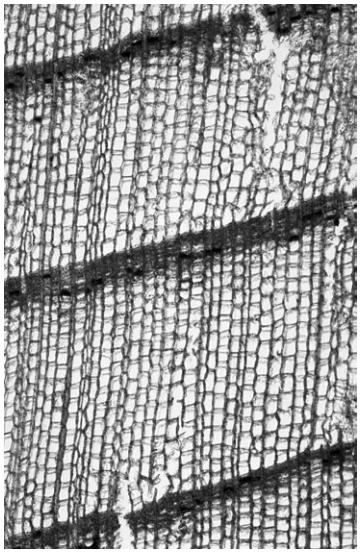
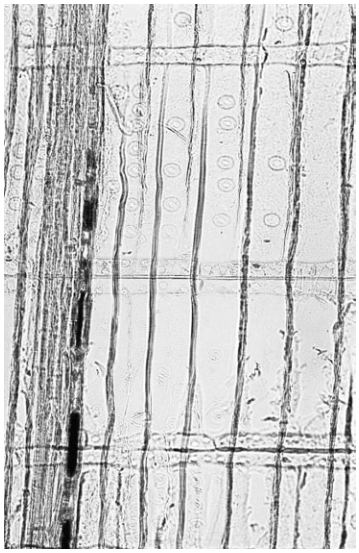
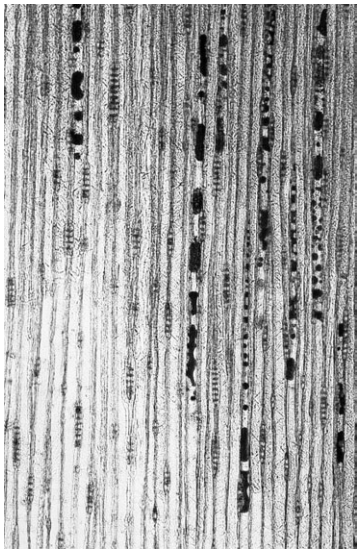
No-2　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

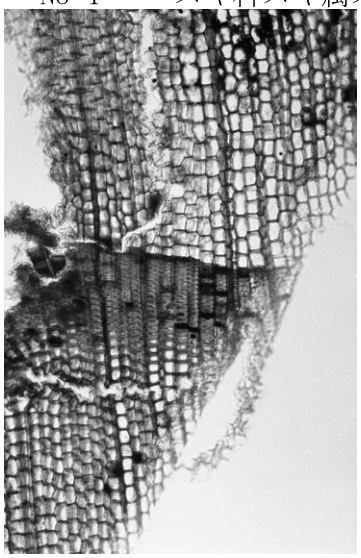
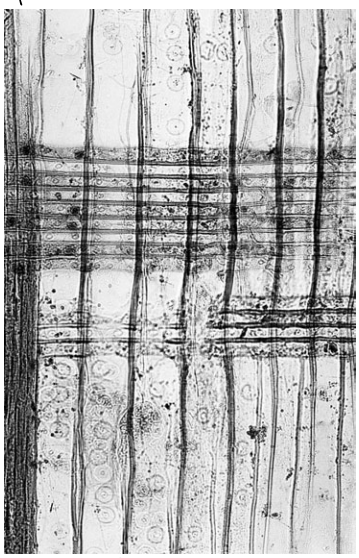
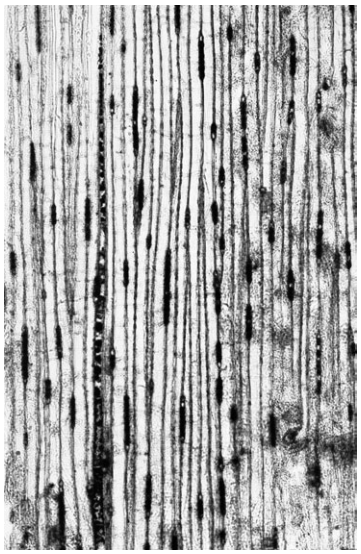
No-3　　スギ科スギ属スギ

図版６　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真①

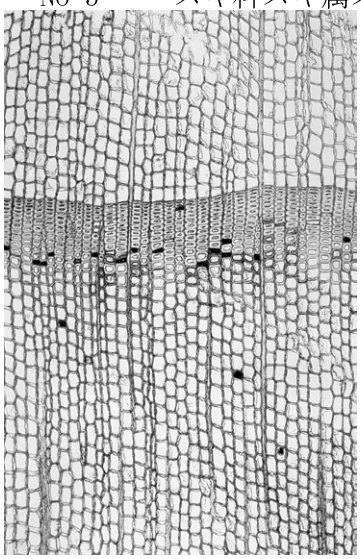
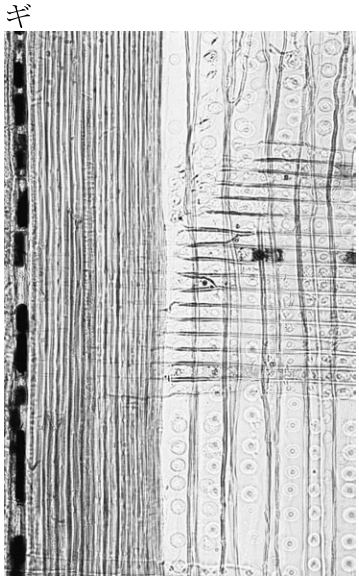
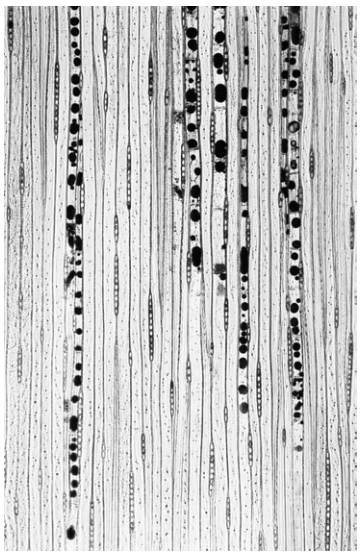
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-4　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

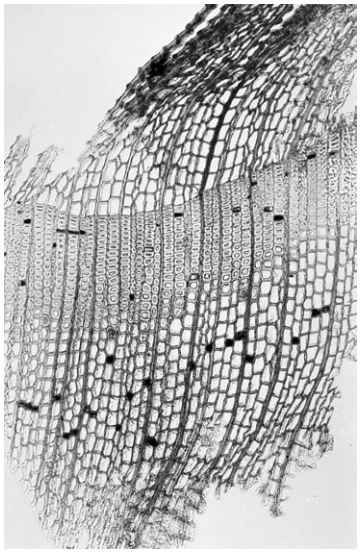
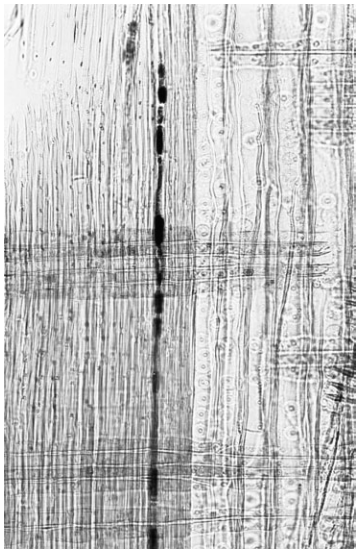
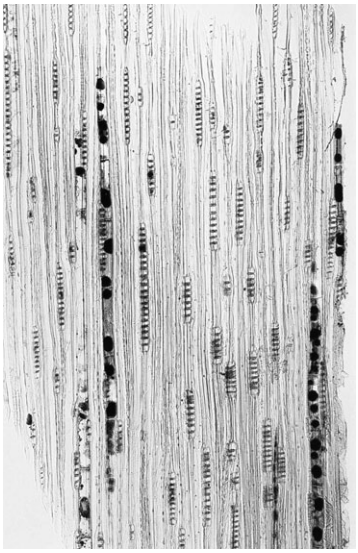
No-5　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

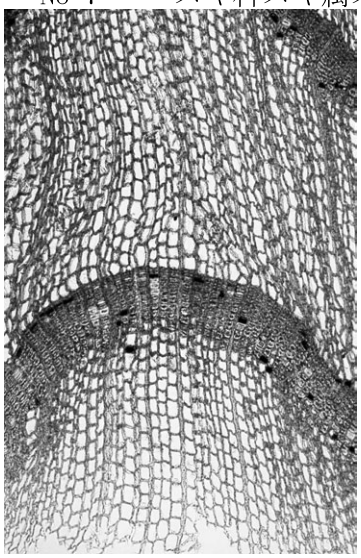
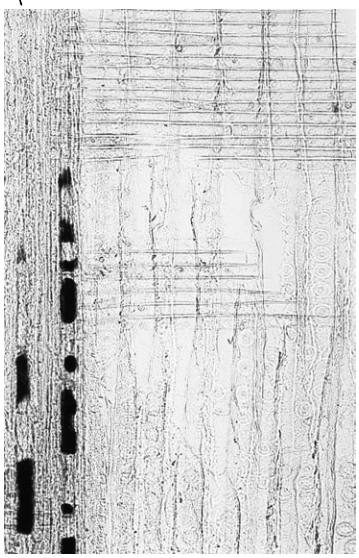
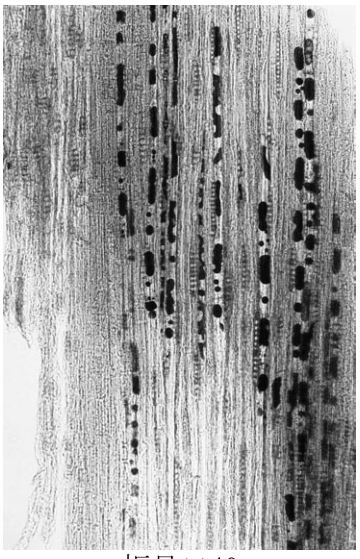
No-6　　スギ科スギ属スギ

図版７　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真②

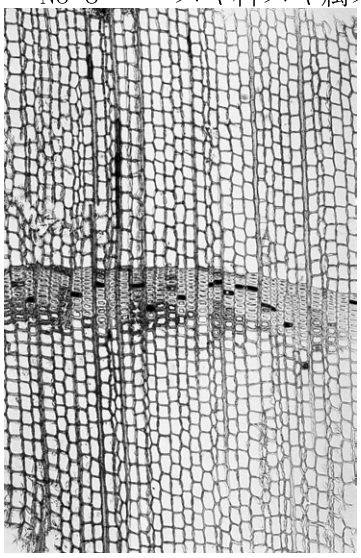
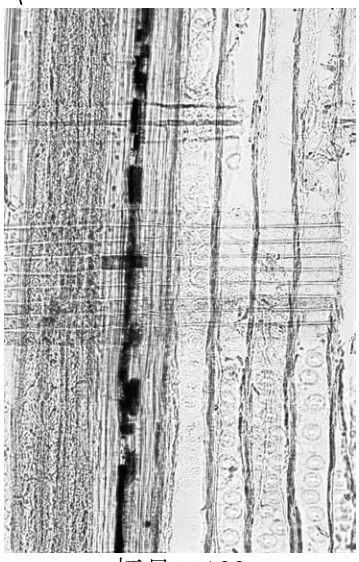
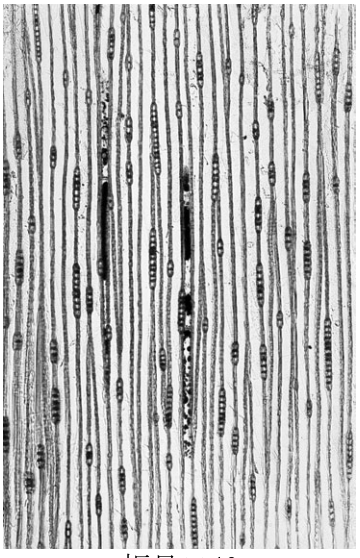
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-7　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

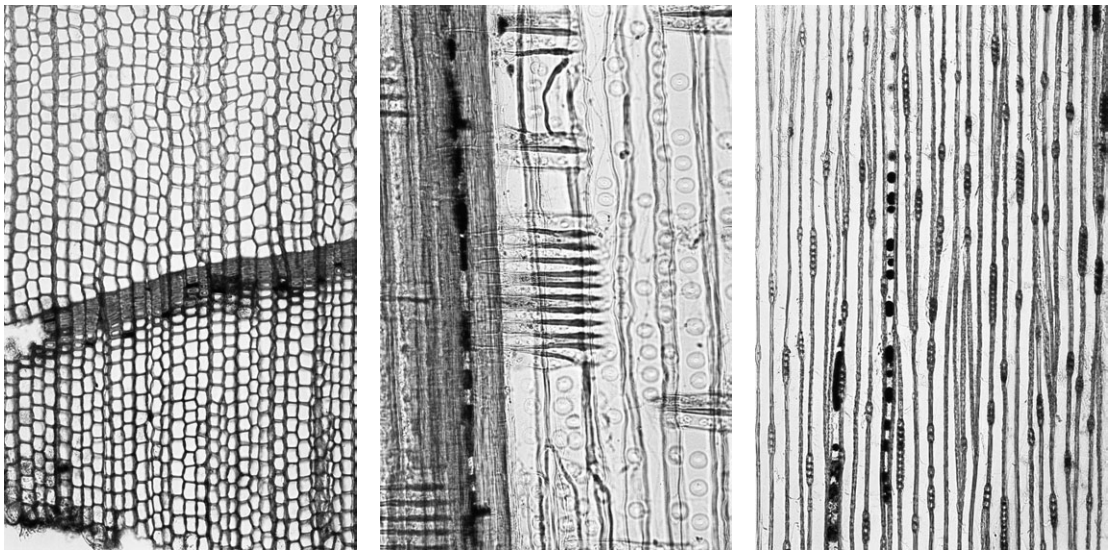
No-8　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

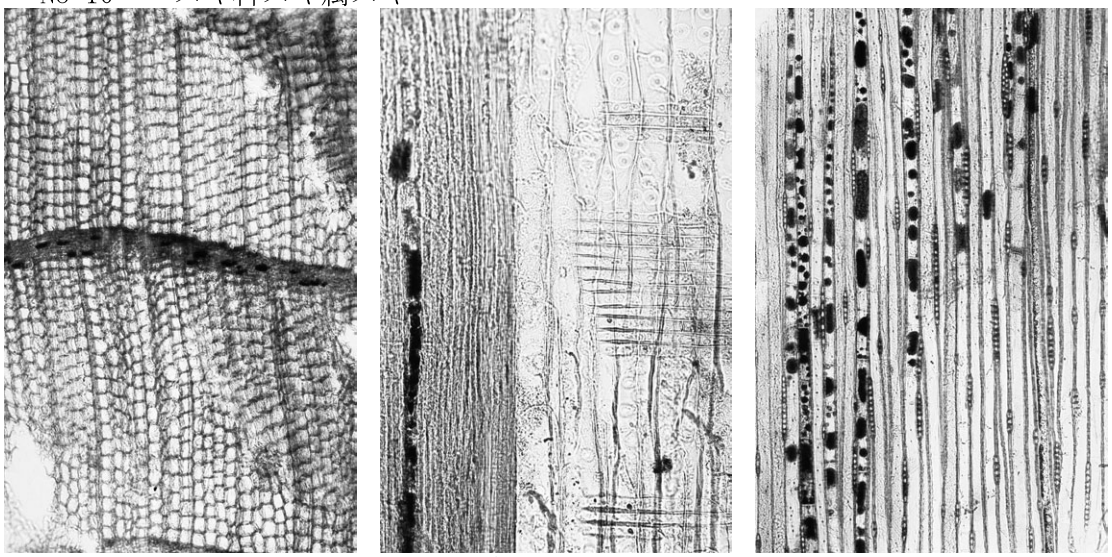
No-9　　スギ科スギ属スギ

図版８　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真③



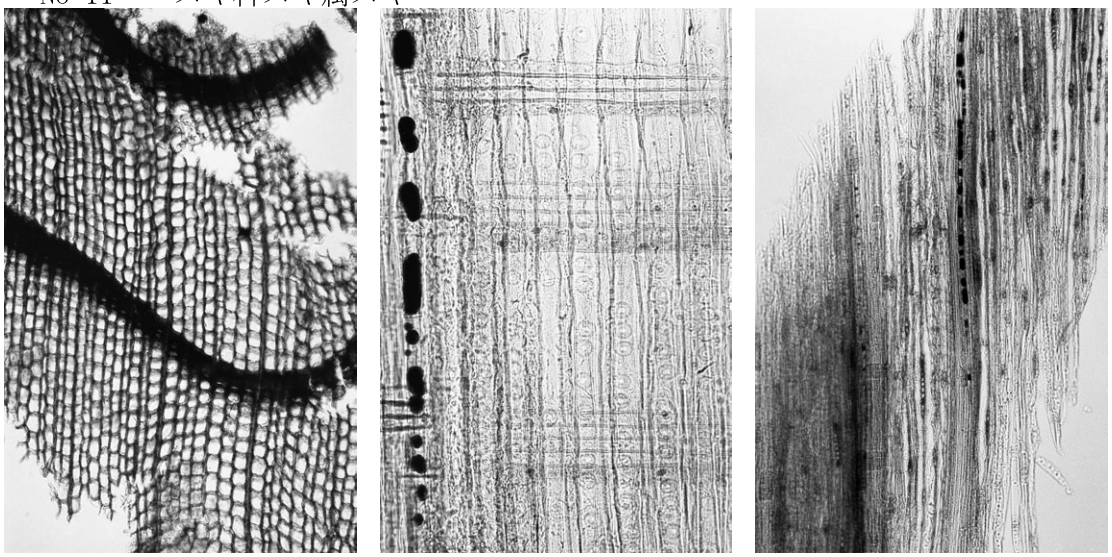
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-10　　スギ科スギ属スギ



木口×40　　柾目×100　　板目×40

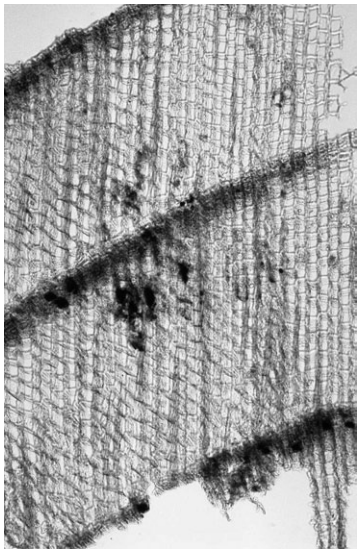
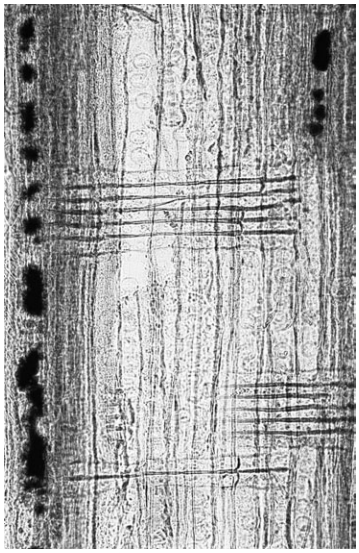
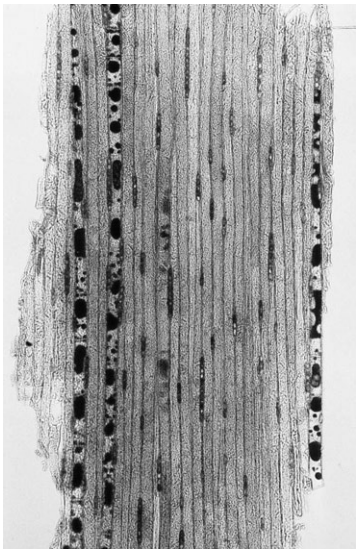
No-11　　スギ科スギ属スギ



木口×40　　柾目×100　　板目×40

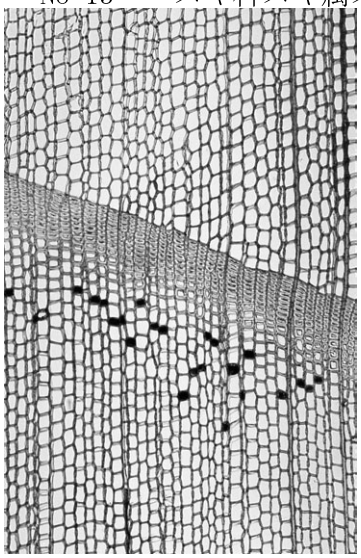
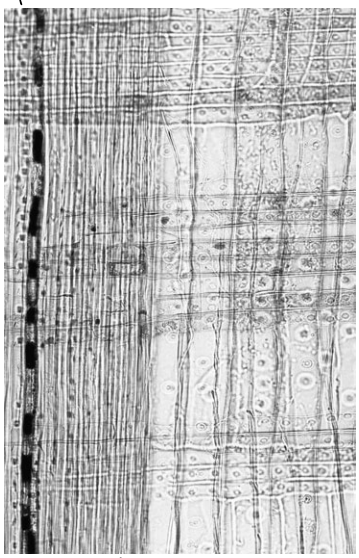
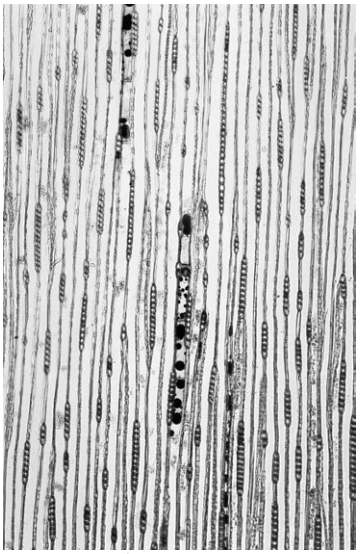
No-12　　スギ科スギ属スギ

図版９　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真④

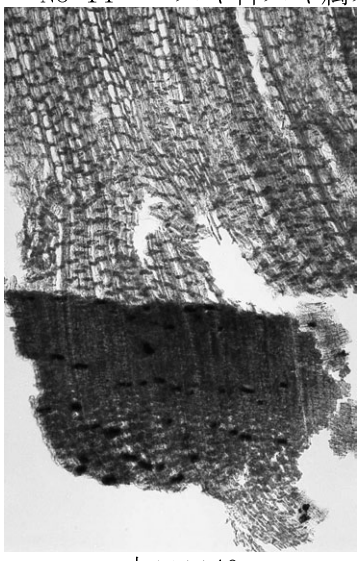
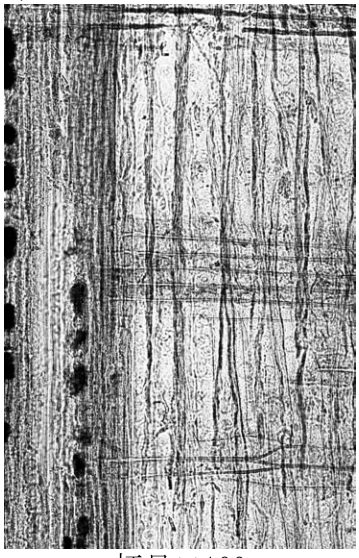
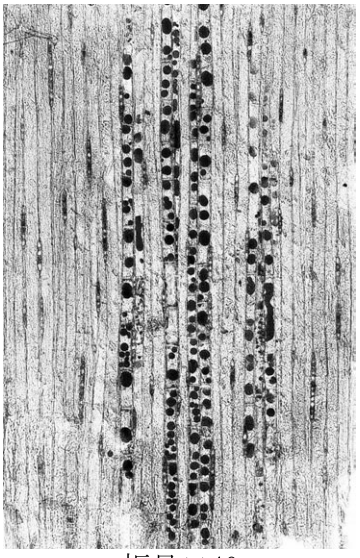
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-13　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

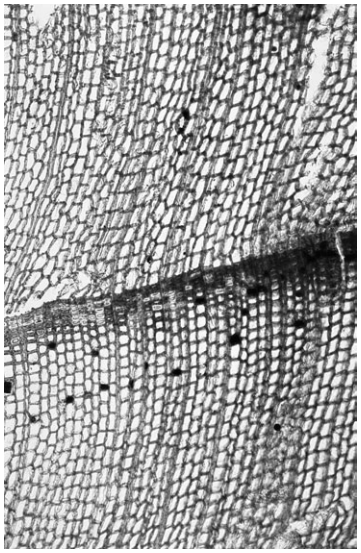
No-14　　スギ科スギ属スギ

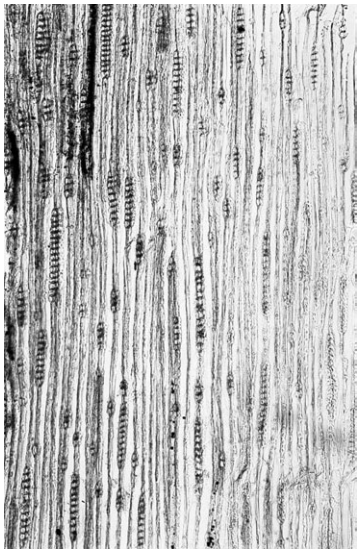




木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-15　　スギ科スギ属スギ

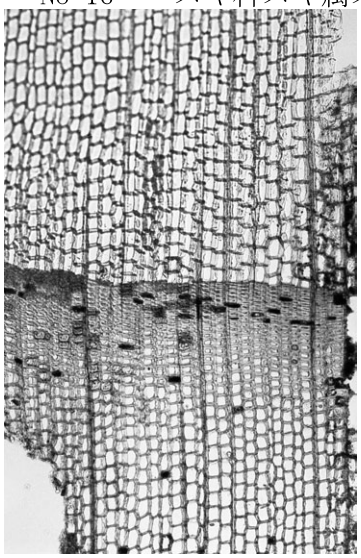
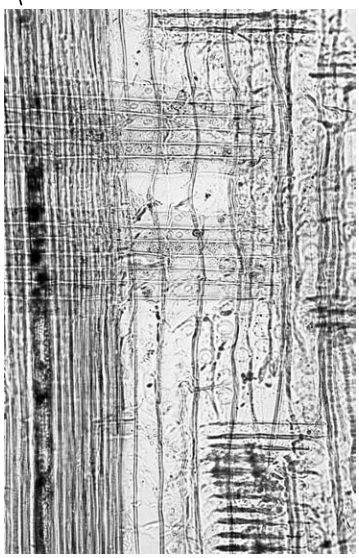
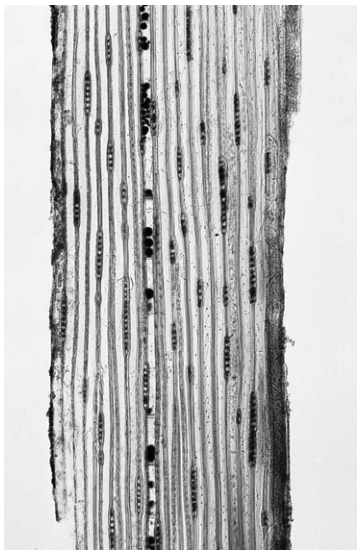
図版10　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑤





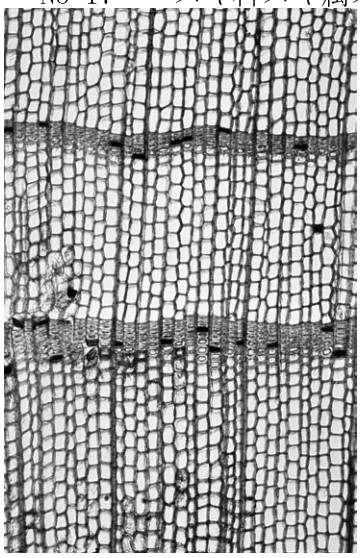
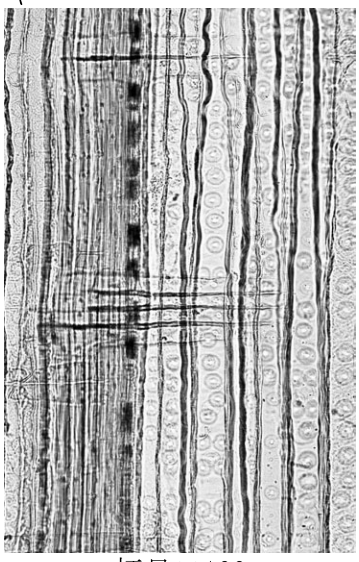
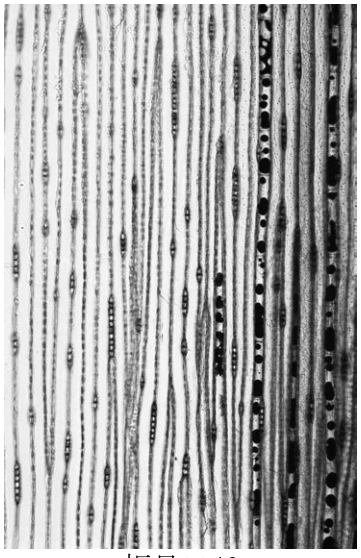
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-16　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

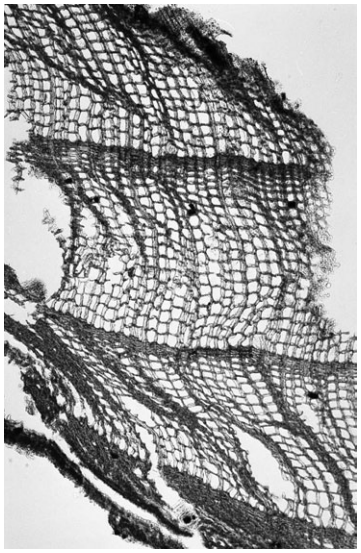
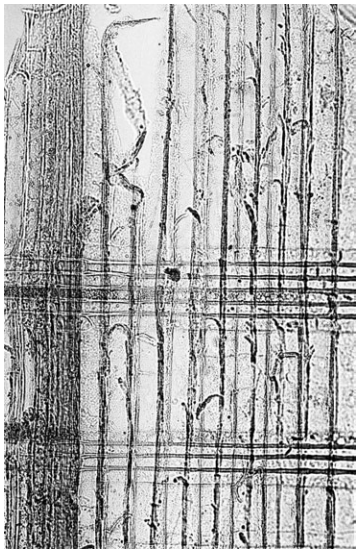
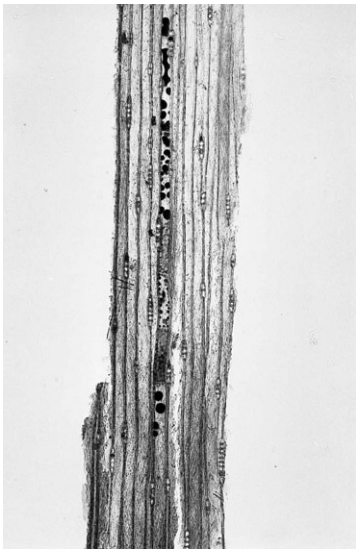
No-17　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

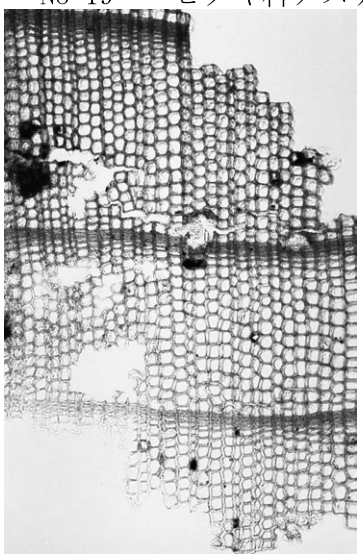
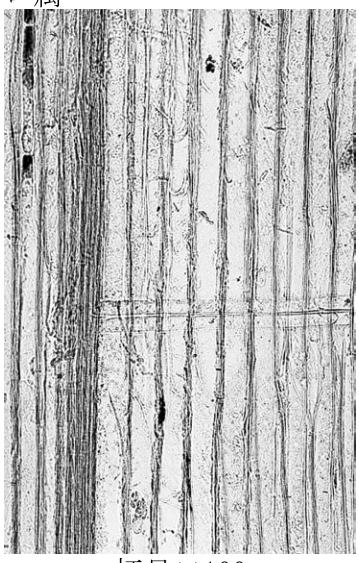
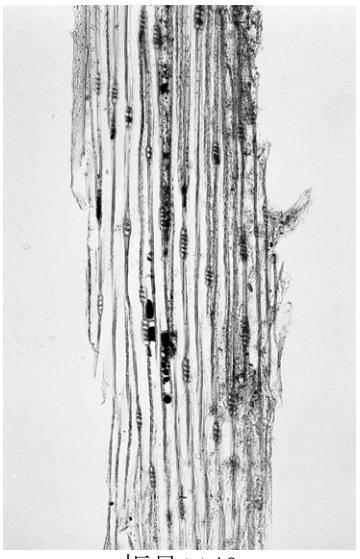
No-18　　スギ科スギ属スギ

図版11　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑥

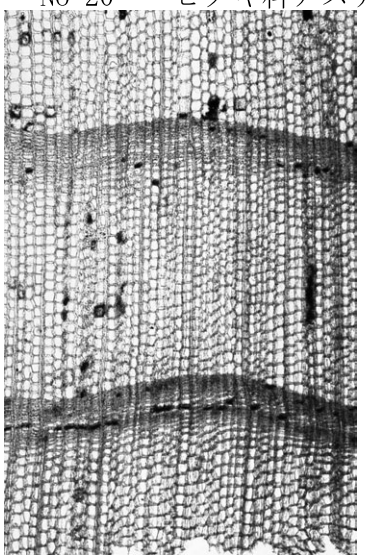
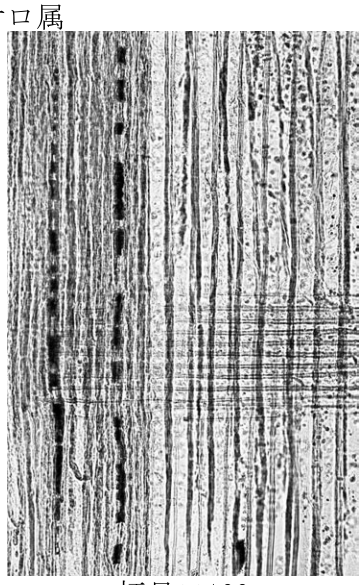
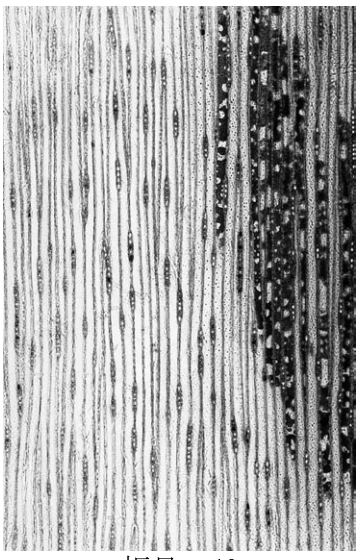
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-19　　ヒノキ科アスナロ属

木口×40　　柾目×100　　板目×40

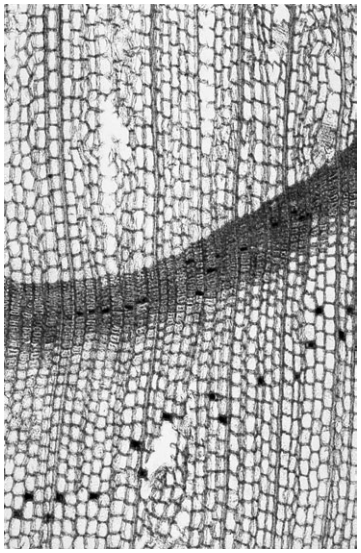
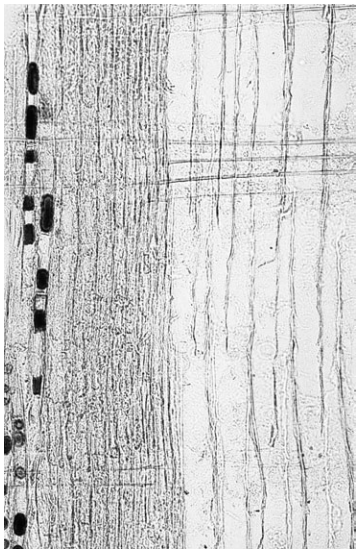
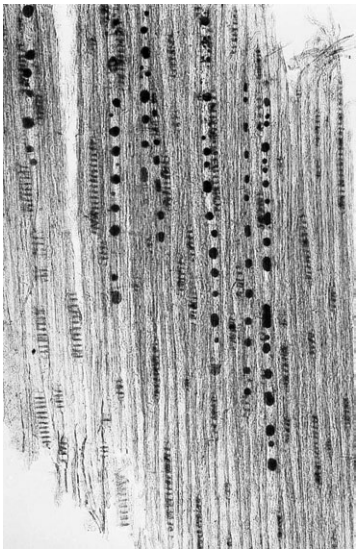
No-20　　ヒノキ科アスナロ属

木口×40　　柾目×100　　板目×40

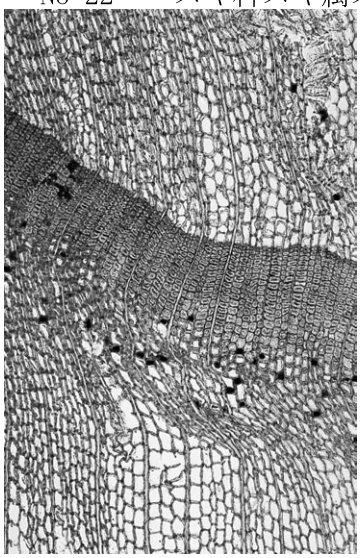
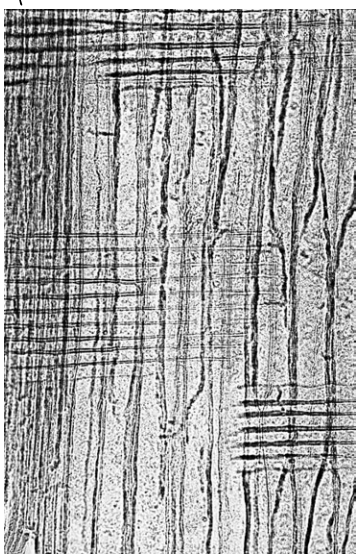
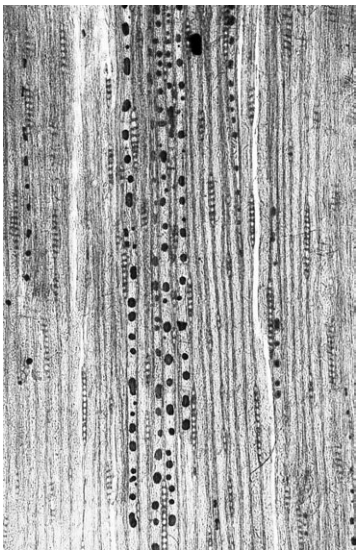
No-21　　ヒノキ科アスナロ属

図版12　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑦

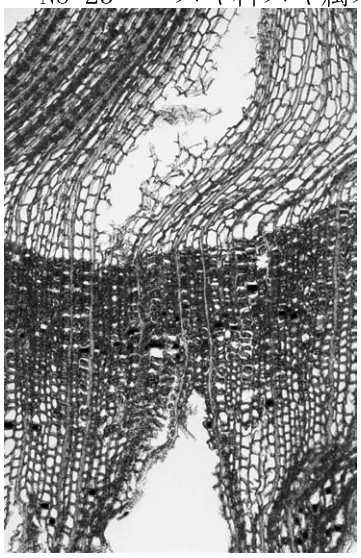
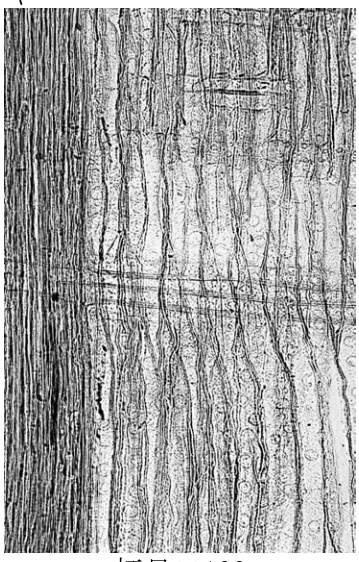
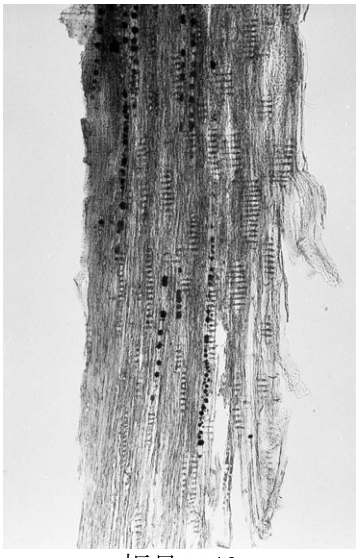
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-22　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

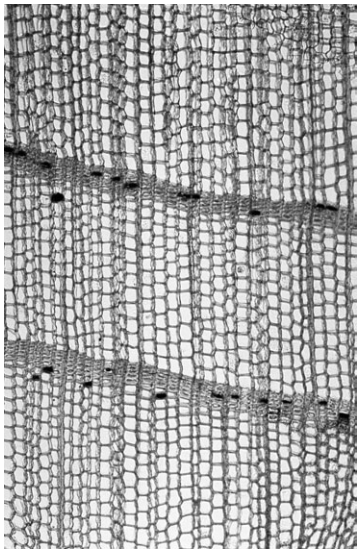
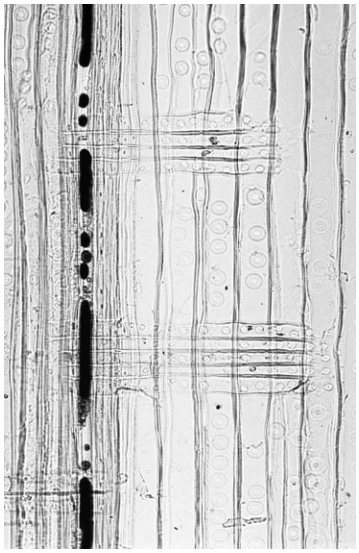
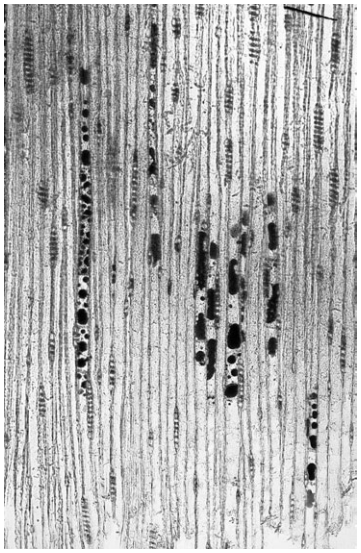
No-23　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

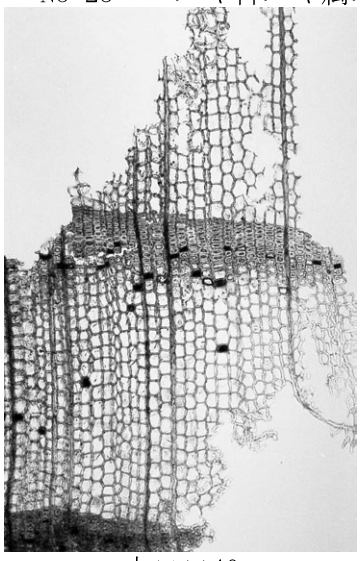
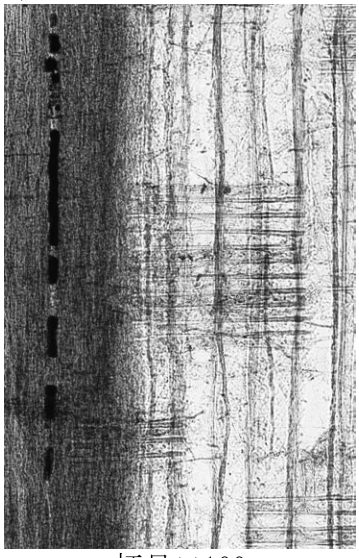
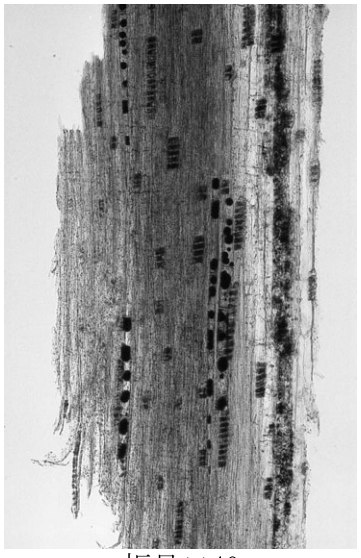
No-24　　スギ科スギ属スギ

図版13　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑧

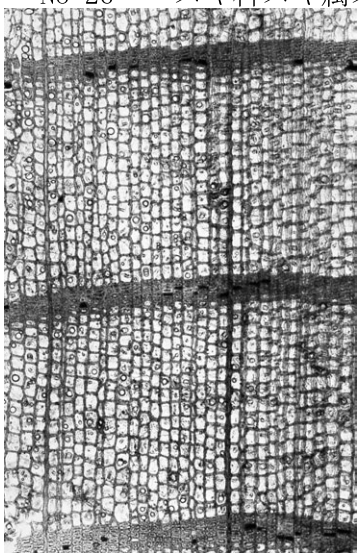
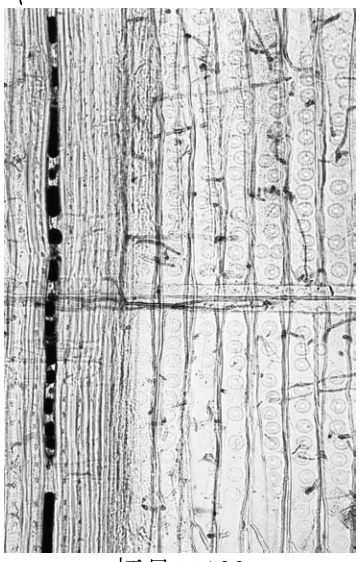
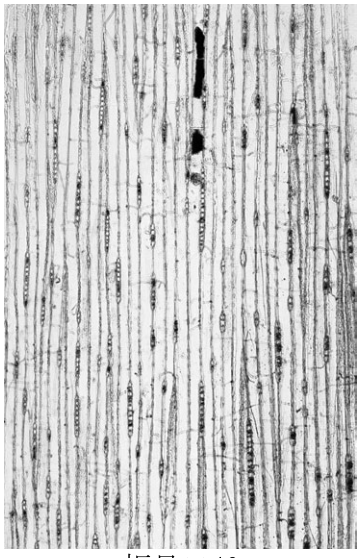
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-25　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

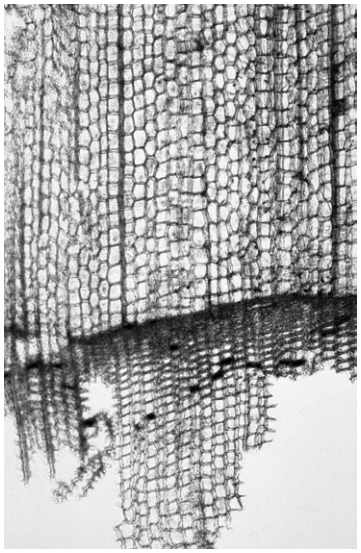
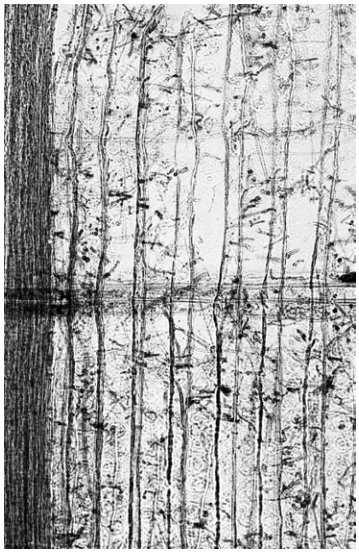
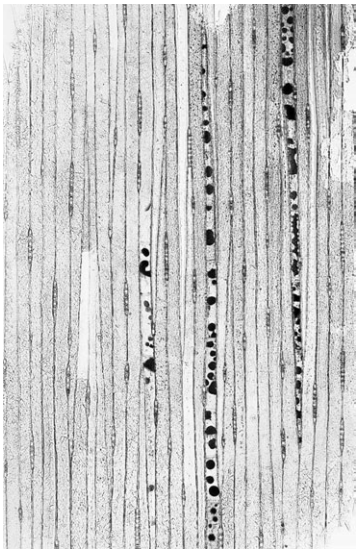
No-26　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

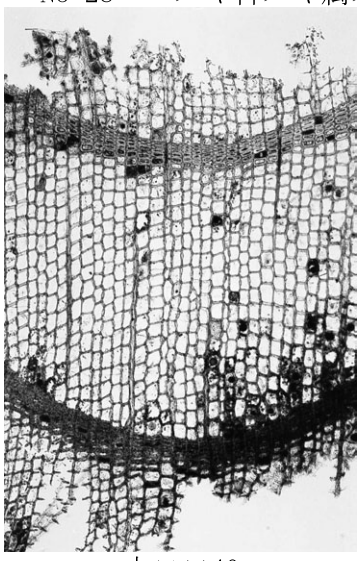
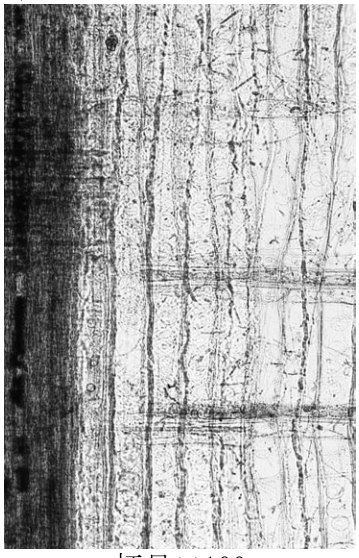
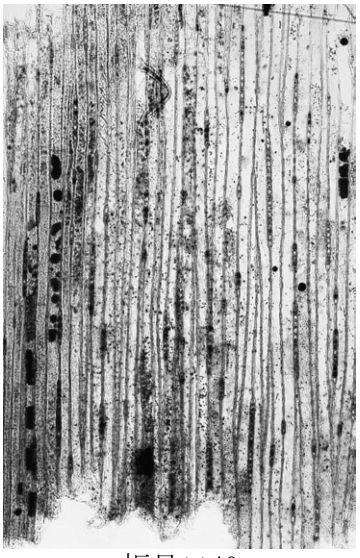
No-27　　スギ科スギ属スギ

図版14　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑨

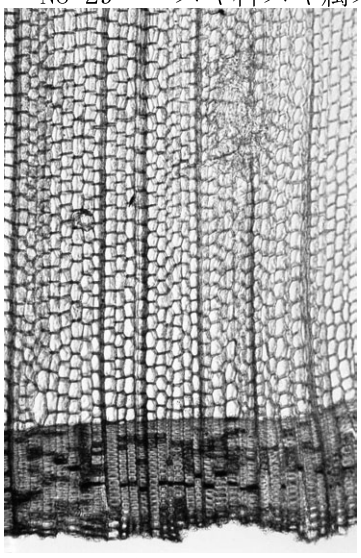
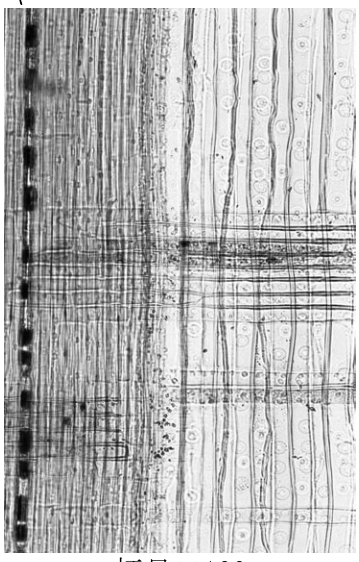
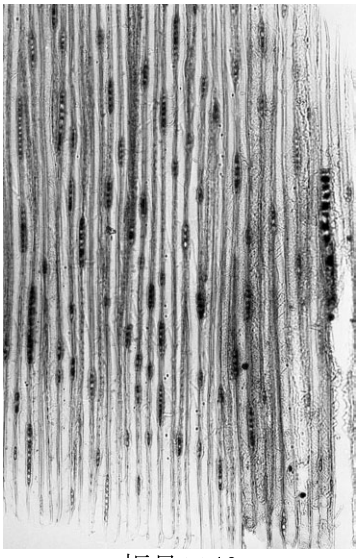
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-28　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

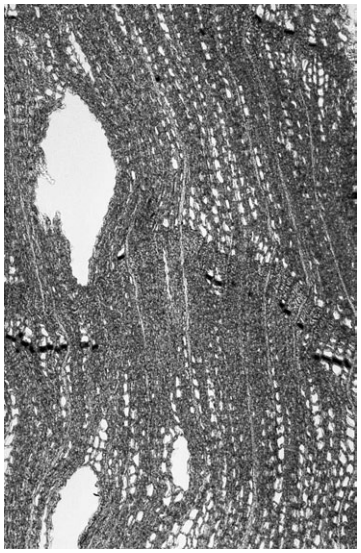
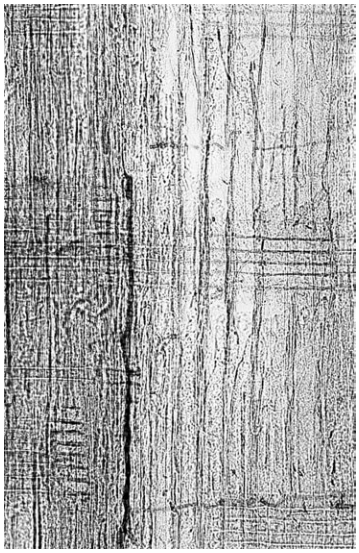
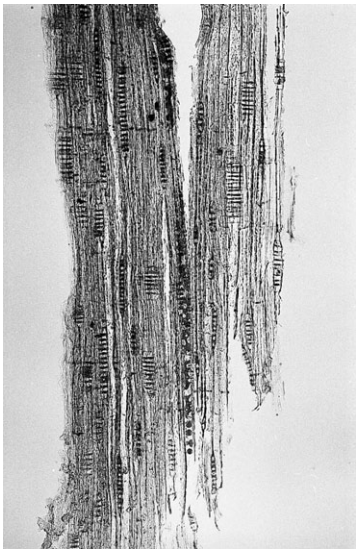
No-29　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×40

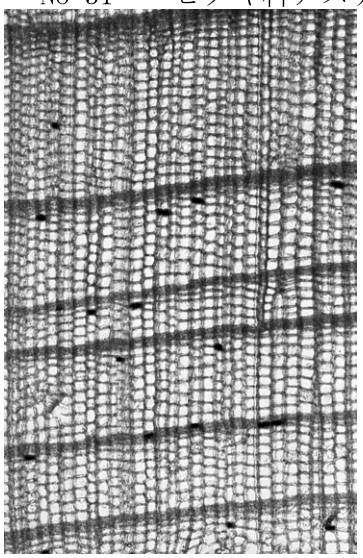
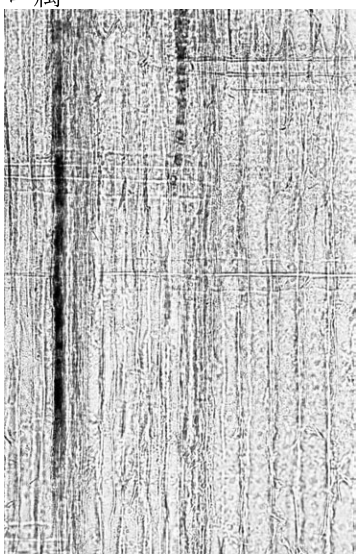
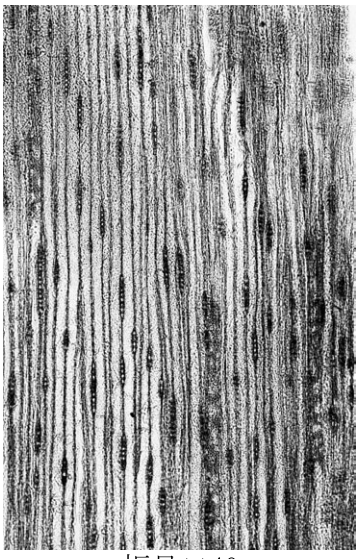
No-30　　スギ科スギ属スギ

図版15　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑩

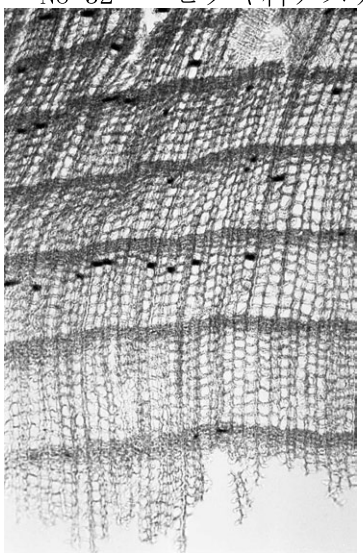
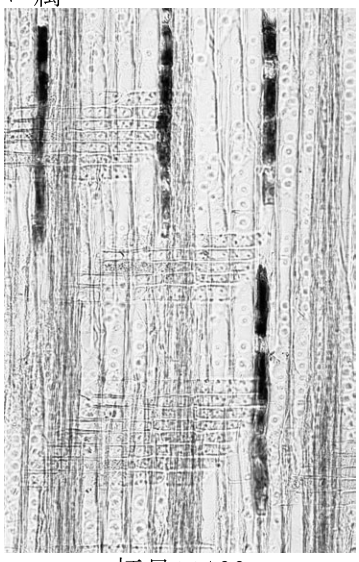
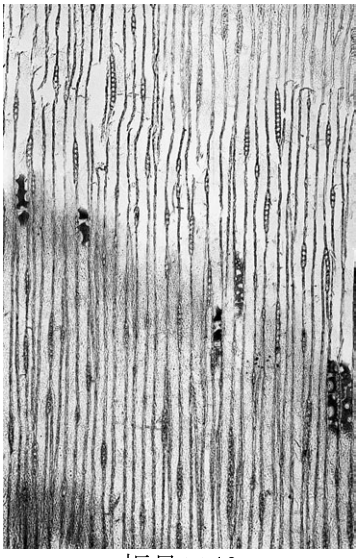
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-31　　ヒノキ科アスナロ属

木口×40　　柾目×100　　板目×40

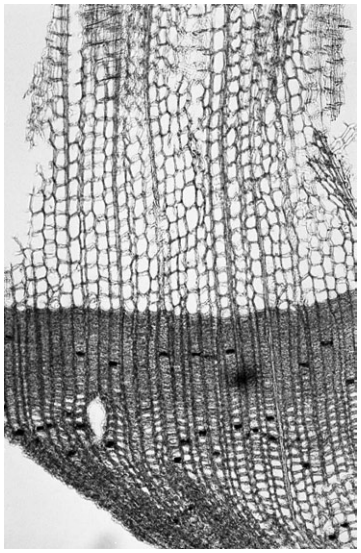
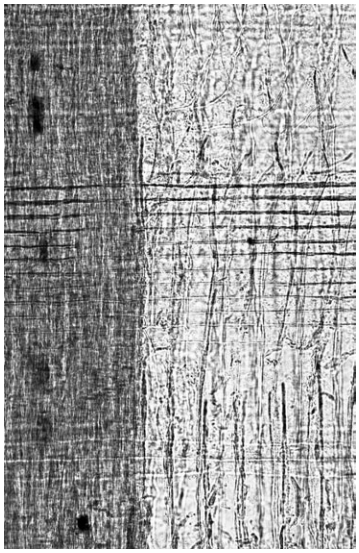
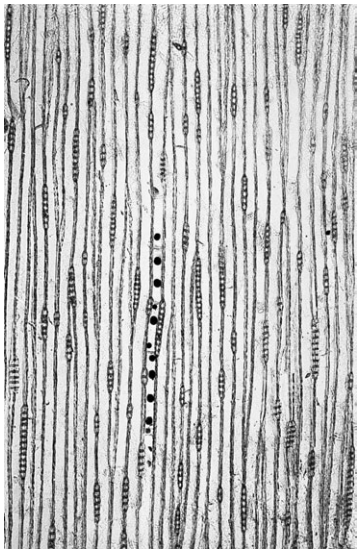
No-32　　ヒノキ科アスナロ属

木口×40　　柾目×100　　板目×40

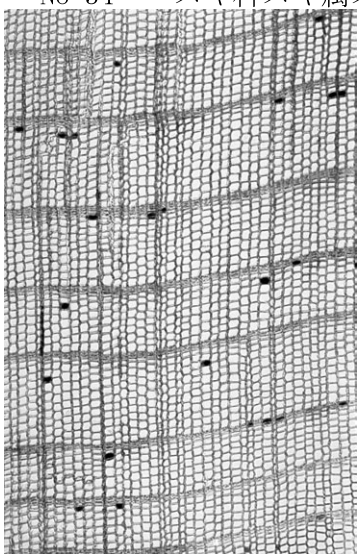
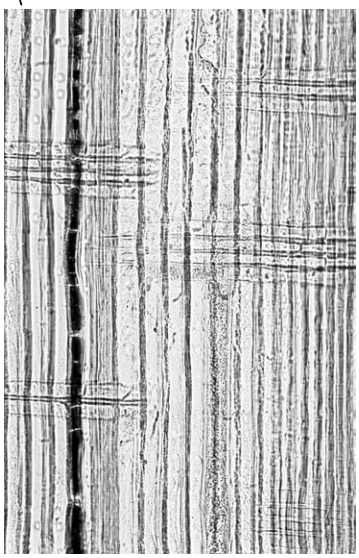
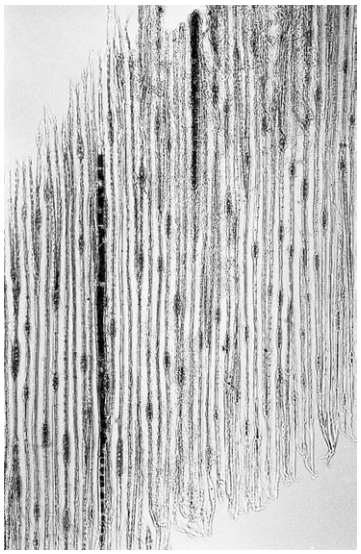
No-33　　ヒノキ科アスナロ属

図版16　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑪

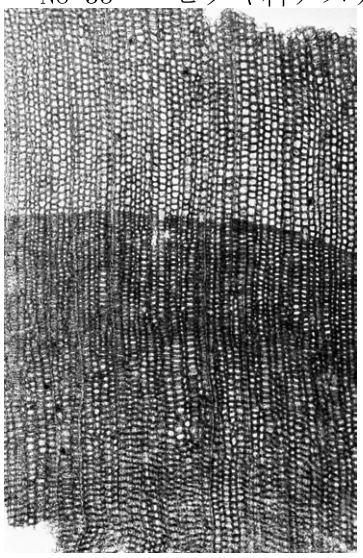
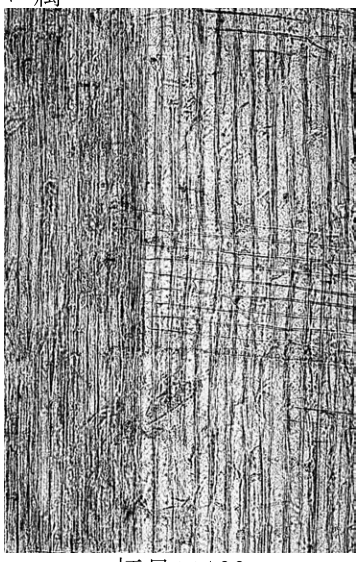
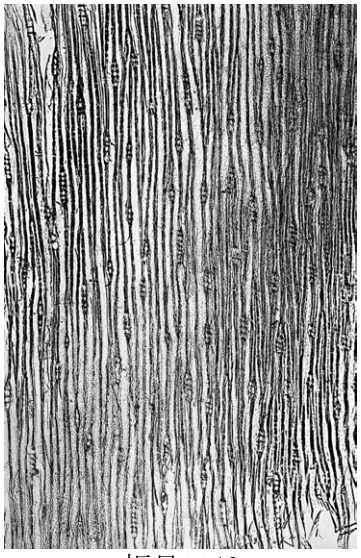
木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-34　　スギ科スギ属スギ

木口×40　　柾目×100　　板目×100

No-35　　ヒノキ科アスナロ属

木口×40　　柾目×100　　板目×40

No-36　　コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

図版17　２次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真⑫

雄山閣出版（1988）
島地 謙･伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」
京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎･村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」
保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」 海青社 （1997）
奈良国立文化財研究所
「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
奈良国立文化財研究所
「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)
－使用顕微鏡－
Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115
◆引用文献◆〔３次調査〕
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史、植生史研究.特別第１号，242p.

7　立花堂遺跡の自然科学分析

はじめに

立花堂遺跡は、津市南河路に所在する弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物が検出される遺跡である。調査は、これまで３次調査に及び、各遺構内の堆積物の自然科学分析と遺構構築部材の樹種あるいは動物遺体の同定を行っている。

ここでは、これらの成果を基に遺跡の自然科学分析についてまとめた。

ａ　試料と分析内容

第26表に一連の分析において対象とした遺構とその年代あるいは堆積物について示した。なお、花粉分析では複数試料を分析しているが、遺構の基盤層など花粉化石が検出されなかった試料については省略してある。

ここでは、主に古代と中世の井戸などの堆積物の花粉分析、平安時代の溝堆積物中の大型植物遺体同定、中世の井戸堆積物中の昆虫遺体同定、平安時代の井戸構築部材の木材樹種同定、平安時代の土坑などから出土した馬歯の同定についてまとめた。

ｂ　まとめ

以下では、(1)植生および環境復元、(2)生活関連遺物、に分けてまとめてみた。

(1)　周辺植生および環境復元

ここでは、井戸堆積物中の花粉分析、昆虫遺体同定、大型植物遺体同定の成果を基に述べる。

鎌倉時代の井戸ＳＥ64・ＳＥ65、平安時代の井戸ＳＥ155の井戸枠外側埋土の検討において、平安時代および中世では、遺跡周辺丘陵部では尾根部にアカガシ亜属を中心にシイノキ属やヤマモモ属、モチノキ属などが生育する照葉樹林が一部に成立し、また斜面部には温帯性針葉樹林、コナラ亜属やクマシデ属－アサダ属などの落葉広葉樹類も一部に生育していていたことが推測されている。さらに、これら樹木に絡まるようにブドウ属やツタ属などのつる植物も生育していたと推測される。なお、平安時代の溝ＳＤ152からは、エゴノキの種子が比較的多く出土し、ムクノキの内果皮も出土していることから、これら樹木も隣接地に生えていたことが推定されている。

鎌倉時代の井戸ＳＥ64第３層中の昆虫遺体は、周辺に棲息していた昆虫遺体の破片からなるが、個体数が少ないため周辺環境を推定するには至らなかった。なお、多くは樹上性や地表性の食植性昆虫からなる。

(2)　栽培および生活関連遺物

ここでは、井戸および土坑堆積物中の花粉分析、溝堆積物中から検出された大型植物遺体同定、井戸構築材の木材樹種同定、馬歯の同定などの成果を基に述べる。

鎌倉時代の井戸ＳＥ64・ＳＥ65の花粉化石の検討では、ソバやアブラナ科（アブラナ、ダイコンなど）の栽培の可能性が示されている。

平安時代の井戸ＳＥ155の井戸枠外側埋土中の花粉化石の検討では、イネ科が多産しており、その中にはイネと考えられる表面模様を示す花粉が多く観察されたことから、周辺域において稲作が行われていたことが推定されている。ただし、対象とした堆積物は井戸内堆積物ではないため、平安時代以前の花粉組成を示している可能性が高い。

平安時代の溝ＳＤ152内からは、比較的多くのモモ核とウメ核が出土していることから、生活残渣として投棄されたものであることが理解された。

平安時代の井戸ＳＥ155構築部材の木材樹種同定では、針葉樹のスギあるいはヒノキ属の木材が利用

され、建築材と同様に通直な木材の利用が行われている。ただし、これら井戸構築部材は、建築材の転用材であることも考えられる。

一方、同じく井戸ＳＥ155の曲物側板などは、８世紀以降で良く利用されるヒノキ属の木材ではなく、スギ材を利用している。

土坑などから出土している歯は、平安時代および中世のいずれも馬歯と同定されている。これらから平安時代～中世での馬の利用がうかがわれる。

おわりに

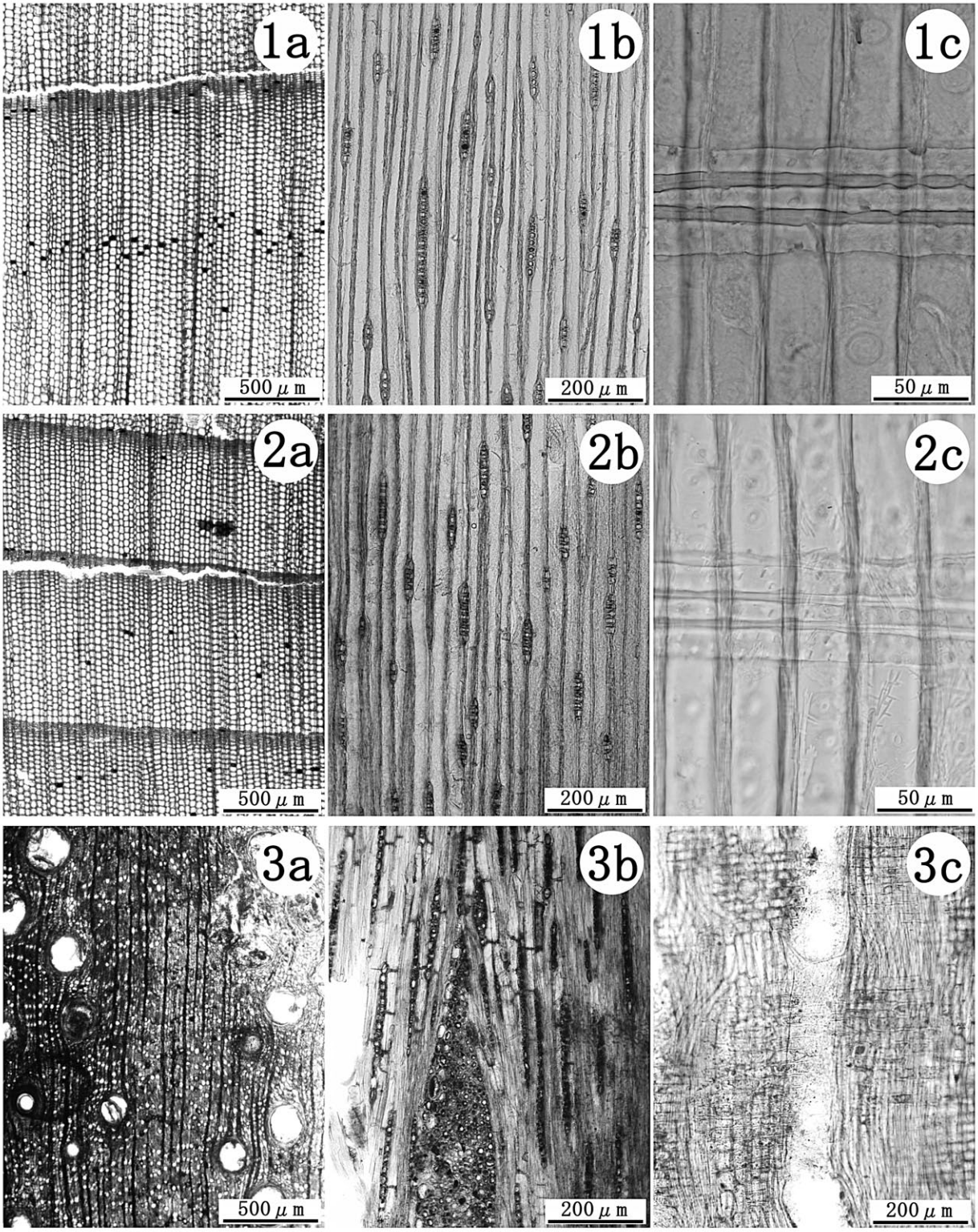
ここでは、平安時代および中世の遺構堆積物の花粉化石などの同定結果から、周辺植生および環境復元を行った。また、同様に花粉化石や大型植物遺体の同定結果から栽培および生活関連遺物の検討を行った。今後、周辺遺跡の調査においても同様の自然科学的検討を行うことにより、より精緻な周辺植生および環境の復元が可能になると考える。

試料№	報告番号	実測番号	遺構	種類	時期	樹　種
1	371	3-001-01	SE155	曲物	平安後	スギ
2	370	3-002-01	SE155	曲物	平安後	スギ
3	369	3-003-01	SE155	曲物	平安後	スギ
4	379	3-007-01	SE155	隅柱	平安後	スギ
5	378	3-007-03	SE155	隅柱	平安後	スギ
6	380	3-007-02	SE155	隅柱	平安後	スギ
7	377	3-004-02	SE155	隅柱	平安後	スギ
8	359	3-007-04	SD152	底板	平安後	ヒノキ属
9	362	3-004-01	SD152	棒状	平安後	スギ
10	360	3-004-03	SD152	不明	平安後	アカガシ亜属
11	361	3-004-04	SD152	不明	平安後	ヒノキ属
12	373	3-005-03	SE155	縦板	平安後	ヒノキ属
13	374	3-006-02	SE155	縦板	平安後	ヒノキ属
14	376	3-005-02	SE155	縦板	平安後	ヒノキ属
15	375	3-005-01	SE155	縦板	平安後	ヒノキ属
16	372	3-006-01	SE155	縦板	平安後	ヒノキ属
17		実測なし	SE155	曲物	平安後	スギ

第25表　３次調査　出土木製品同定表

試料№	遺構	時代	対象堆積物	分析内容
1	SE57	奈良	埋土	花粉分析
			構築部材	木材樹種同定
2	SE63	鎌倉	埋土	花粉分析
3	SE64	鎌倉	埋土	花粉分析
				昆虫遺体同定
4	SE65	鎌倉	埋土	花粉分析
5	SE68	鎌倉	埋土	花粉分析
6	SE155	平安後	井戸枠外側埋土	花粉分析
			構築部材	木材樹種同定
7	SD152	平安後	埋土	大型植物遺体同定
8	SD88	鎌倉		馬歯
9	SD106, ｖ４Pit13 掘方, SD98, 包含層	平安		馬歯

第26表　対象とした遺構と分析内容



1a-1c. スギ（№6）　2a-2c. ヒノキ属（№12）　3a-3c. アカガシ亜属（№10）

図版18　３次調査　出土木製品の樹種顕微鏡写真（ａ：横断面、ｂ：接線断面、ｃ：放射断面）

Ⅵ　結　　語

1　立花堂遺跡の遺構について

当遺跡の調査では、古墳時代後期および奈良時代後期、平安時代後期、鎌倉時代の遺構を確認した。調査区は南北に長く、その中を各期の溝が微高地間を縫うように走り、その微高地上に建物が存在するような状況を呈している。

建物については調査区の北端（３次調査区北区）と南端（２次調査区）で確認したが、いずれも平安時代後期のものである。北端では５棟の掘立柱建物を確認した。全て南北棟である。軸方向からおよそＮ10°Ｅ前後（ＳＢ121・ＳＢ130・ＳＢ171）とほぼ真北方向（ＳＢ129・ＳＢ172）の２種類に分けられる。ほかにもピットが検出されており、調査区外を含めたこの周辺にひとつの集落域が存在することが窺える。また、南端部ではＳＢ41とＳＢ42の２棟を確認した。ＳＢ42については柱穴から出土した土器が小片で、明確な時期の特定はできないが、奈良時代後期に廃絶したと考えられるＳＥ57の掘方を切り込んで柱穴が存在する。軸方向はＮ５～６°Ｗである。ＳＢ41周辺には、ほかにも多くのピットが確認できることから複数棟の建物が想定できる。軸方向はＮ５°Ｅである。これらの建物に条里方向（Ｎ30°Ｅ）を指向するものは認められない。

井戸については、奈良後期のもの１基、平安後期のもの１基、鎌倉時代のものを４基検出した。このうち古代の井戸では木組の施設が良好に残り、鎌倉期のものは素掘りであろうことが確認できた。時期差が構造差となって現れた興味深い例である。

今回の調査では溝の検出が非常に困難であった。特に奈良時代後期から平安時代後期、あるいは鎌倉期までの遺物を含む溝群は、同じ道筋を埋まっては流れ、埋まるというような状況であったと考えられる。異なる番号を付けて検出している重複した溝も、出土遺物での明確な時期差はほとんど見られず、砂が多いか粘性が強いかなど、埋土の状況の差で分けて掘削したものである。また溝の方向は、地形に沿うものやそれに直交するものが多く、条里方向を指向するものはほとんど認められないことも注目すべき点である。

2　周辺遺跡を含めた遺構の変遷

立花堂遺跡を含む、安濃川と岩田川に挟まれた南北約1.9kmの範囲（津市南河路および野田）では、中勢道路建設事業をはじめ圃場整備事業や道路改築事業など数多の事業に伴って、ほぼ全域にわたって範囲確認調査が行われている。詳細な範囲確認坑の位置および結果は既刊の報告書に掲載されている[1]のでそれを参照されたい。各年度に行われた範囲確認調査の原因事業名などは以下のとおりである。

平成元年度：中勢道路建設事業（替田遺跡・弐ノ坪遺跡・里前遺跡）
平成９年度：県営圃場整備事業（神戸遺跡南東部）
平成10年度：県営圃場整備事業（神戸遺跡北部・立花堂遺跡・替田遺跡・里前遺跡）
平成11年度：県営圃場整備事業（替田遺跡・弐ノ坪遺跡・惣作遺跡・里前遺跡）
平成12年度：安濃川河川改修（惣作遺跡・里前遺跡）
平成14年度：県営圃場整備事業（里前遺跡）

これらの範囲確認調査の結果を受けて、本発掘調査も平成８年度から以下のように行われ、今回報告する立花堂遺跡調査分を含めて約37,000㎡にも及ぶ発掘調査がなされている。詳細を以下に示す。なお、報告書も調査終了後にそれぞれ刊行されている。詳細は註を参照されたい。

平成８年度：替田遺跡　（第１次）[2]　6,620㎡
平成９年度：替田遺跡　（第２次）[3]　3,140㎡
　　弐ノ坪遺跡（第１次）[4]　5,100㎡
平成10年度：里前遺跡　（第１次）[5]　1,280㎡
　　神戸遺跡　（第１次）[6]　1,050㎡
平成11年度：替田遺跡　（第３次）[7]　80㎡
　　替田遺跡　（第４次）[8]　1,680㎡
　　神戸遺跡　（第２次）[9]　2,100㎡
平成12年度：惣作遺跡　（第１次）[10]　1,300㎡
　　惣作遺跡　（第２次）[11]　400㎡
　　里前遺跡　（第２次）[12]　1,300㎡
平成13年度：替田遺跡　（第５次）[13]　1,450㎡

弐ノ坪遺跡（第２次）[14]　400㎡
平成14年度：替田遺跡　（第６次）[15]　2,858㎡
里前遺跡　（第３次）[16]　988㎡
立花堂遺跡（第１次）[17]　299㎡
平成15年度：替田遺跡　（第７次）[18]　1,403㎡
里前遺跡　（第４次）[19]　260㎡
平成16年度：替田遺跡　（第８次）[20]　1,583㎡
平成17年度：立花堂遺跡（第２次）[21]　2,035㎡
平成18年度：立花堂遺跡（第３次）[22]　1,726㎡

以上の調査の結果から見えてくる、この地域の遺構の変遷を時代ごとにまとめておく。

（１）弥生時代

前期の遺構として明確なものは確認されていない。遺物は里前遺跡で少量ではあるが出土している。

中期の遺構は、替田遺跡および弐ノ坪遺跡、惣作遺跡で確認できる。

替田遺跡の第１次調査および第６次調査では合計14棟の竪穴住居のほか、溝や土坑なども多く検出されている。この替田遺跡に南接する弐ノ坪遺跡でも調査区の北半部に集中して、焼失住居１棟をはじめ溝などが検出されおり、替田遺跡とともに一連の集落を形成していたものと考えられる[23]。また、このような住居跡のほかに土壙墓あるいは方形周溝墓を構成する溝と考えられる遺構が多数検出されているが、決め手にかけるものである。

惣作遺跡で確認されている遺構としては、方形周溝墓１基や土坑である。ほかにも方形周溝墓になるような溝も何条か確認されており、最低でも３基存在する可能性が示されている。これらの方形周溝墓は中期後葉に比定されており、前述の替田遺跡の集落よりは時期が下るものである。

後期の遺構は替田遺跡で確認できるほかは、はっきりしない。遺物は替田遺跡をはじめ、立花堂遺跡でも後期初頭の壺が１点出土している。

（２）古墳時代

この時期の遺構は全期をとおして非常に散在的である。まず前期の遺構としては、替田遺跡の１次調査で掘立柱建物１棟をはじめ井戸や土坑などが確認されており、包含層からの出土ではあるが石釧が１点見つかっていることは特筆される。また、１次調査区に北接する２次調査区の南端で古式土師器がまとまって出土した溝が検出されており、集落域の北限の溝として認識できよう。また、１次調査区に西接する第４・５次調査区でも中期以前とした掘立柱建物１棟とそれをコの字状に囲む柱列や井戸、土坑などを検出している。

里前遺跡の第２次調査区では、弥生時代末～古墳時代前期に比定される方形周溝墓と思われる溝が見つかっている。前述の替田遺跡の集落とこの里前遺跡の方形周溝墓を同じ集団の集落域と墓域として捉えるには、三泗川を挟んで南方に約520mと距離がありすぎるように思う。しかし、それぞれの遺跡周辺で行われた範囲確認調査でも、当該時期の遺構や遺物がほとんど確認されていないことを考え合わせると、何らかの関係を持つ可能性があろう。

後期になると、替田遺跡の東方約760mの神戸遺跡備後地区で行われた第２次調査で、掘立柱建物３棟や土坑などが確認されている。その他の遺跡では建物跡などは見つかっていないが、立花堂遺跡をはじめ神戸遺跡鳥井前地区の第１・２次調査区などで数条の溝を検出している。前時期に引き続き遺構密度は非常に薄い。

以上のことから、前期遺構は替田遺跡周辺および里前遺跡の微高地上に、後期遺構は神戸遺跡備後地区を中心とした微高地上に存在することが窺える。

（３）飛鳥・奈良時代

この時期の遺構も散在的かつ疎らである。まず飛鳥期の遺構としては、替田遺跡第４次調査区において、掘立柱建物が２棟検出されている。これらは、平面形状が台形や平行四辺形を呈しており、柱間が１m程度の規模の小さいものである。ほかに建物に伴うような井戸や土坑などは見つかっていない。

また、替田遺跡の西方約240mに位置する惣作遺跡の第１次調査区では、飛鳥・奈良期とした掘立柱建物が２棟、そのほか土坑や溝などが確認されており、周辺の範囲確認調査の結果も併せて、まだ複数の建物跡が存在する可能性も示されている。ここでの建物跡２棟は条里プランとは方向を異にすることから、条里に先行する建物として報告されている。

つぎに、奈良時代に比定される遺構としては替田遺跡第６次調査区で掘立柱建物１棟が確認されている。このほかにも、同じ調査区に古代とした建物が

数棟検出されており、なかに当該期のものが含まれている可能性も考えられるが、出土している遺物で奈良時代に相当するものは少ない。また同じ替田遺跡の２次調査区では奈良時代後期に比定される井戸が２基検出されている。

立花堂遺跡では、２次調査区で後期の井戸が１基見つかった。いずれの遺跡でも建物跡は確認されていないが、立花堂遺跡では当該期の遺物が２次調査区を中心に出土していることから、調査区周辺に建物跡が存在する可能性は充分考えられる。

以上のことから現在の安濃川に近い自然堤防上にこの時期の集落が存在する状況が窺える。

（４）平安時代

平安時代前期の遺構は、前代の集落が確認された惣作遺跡や替田遺跡では見られず、代わって弐ノ坪遺跡で集中して確認されている。遺構としては、条里プランと同じ方向を指向し、規則性をもって並ぶ掘立柱建物が14棟、その集落の南北を画すると考えられる溝などである。北を画する溝は条里地割の坪境に該当することから、道路遺構の可能性も考えられている。このような、建物が整然と並んだ官衙的様相を呈する集落が、中期まで続かず廃絶する。

中期の遺構は、神戸遺跡備後地区の第２次調査区で建物跡が見られる。同じ場所に数回の建て替えが行われており、一定期間この地に定住した状況が窺われる。

後期の遺構としては、替田遺跡周辺や立花堂遺跡周辺で見ることができる。替田遺跡第１・２・４・５次調査区では掘立柱建物が30棟弱、井戸が５基ほど、そのほか土坑や溝などが確認されている。特に建物跡は、第１次調査区でも安濃川寄りに集中している。

また立花堂遺跡では、掘立柱建物７棟および井戸１基、ほか溝などを検出した。この立花堂遺跡の調査区周辺で行われた範囲確認調査では、緑釉陶器や灰釉陶器、土師質土器などが見つかっており、調査区を含めた立花堂遺跡内に当該期の集落跡が広がるものと考えられる。

以上のことから、平安時代は各期に集落跡が存在すること、弐ノ坪遺跡の前期集落が特徴あるものであること、それぞれの集落が短期で終息していること、後期集落が安濃川沿いの自然堤防上に集まっていることなどがいえる。

（５）鎌倉・室町時代

この時期になっても遺構が濃密に見られる場所は無く、相変わらず散在的ではあるが、鎌倉時代の遺構を確認した地点が、前代までと比較して増加する。替田遺跡周辺、里前遺跡周辺、立花堂遺跡から神戸遺跡備後地区・フナハチ地区に広がる範囲で遺構や遺物が確認できる。

まず里前遺跡の１次調査区では建物跡はみられないが井戸が７基検出されている。また、特筆されるのは山茶椀および山皿が大量に出土しており、河川を輸送経路とした物流の一端を担っていた地域として認識されている[24]。２次調査区においても当該期の井戸３基や土坑、中世墓５基などが見つかっている。この里前遺跡では、中世後半期に比定される遺構も遺跡の東側を中心に確認されている。

また立花堂遺跡の２次調査区では、井戸を４基検出したが建物跡は見つかっていない。おそらく集落が調査区周辺に広がっているものと思われる。

替田遺跡では７・８次調査区を中心に当該時期の遺構や遺物が確認されている。建物の検出例は少ないが、墨書山茶椀を含む大量の遺物が出土した溝をはじめ、中世墓や土坑、井戸なども見つかっている。14世紀前葉から15世紀初頭までの空白期を挟んで後半期の遺構や遺物も確認できるが、13世紀中葉頃が最盛期であろうことが指摘されている。また同調査区の北に字「結縁寺」があり、ここで確認した遺構に関しては、かつて存在したとされる「結縁寺」との関わりも含めた考察が必要とされている。

以上、この地域の動向をこれまでの調査結果から概観してきたが、各時代を通して遺構は散在的で、いずれも短期間で廃絶している。範囲確認調査結果で「遺構・遺物とも無し」とされる地点および自然流路とされる地点を拾っていくと、安濃川沿いに立花堂遺跡から神戸遺跡フナハチ地区および備後・高入地区に張り出し、替田遺跡・弐ノ坪遺跡までの範囲に大きな微高地としてのひとつのまとまりを認識できる。実際この範囲は、現況でも比較的標高が高い。このほかにも里前遺跡や惣作遺跡などが、島状

に存在する様子が見てとれる。

また各調査においては、自然流路や旧河道がいくつか検出されており、全時代を通して、微高地上とはいえ決して安定した土地ではなかったことが窺い知れる。その結果、前述のように、短期間で終息するような集落が、限られた微高地上に転々と確認できるような状況を作ったのであろう。

3　建物の時期と方向

立花堂遺跡および周辺遺跡で検出された掘立柱建物の軸方向などに、何らかの規則性が存在するか見出すことを目的に、古代～中世に比定される建物跡の一覧表を作成した（第27表）。替田遺跡第１・２次調査結果については概報を参照したが、軸方向などの詳細な情報は掲載されていない。そのため、概報掲載の図面からおおよその軸方向を求めた（ただし、第27表には掲載しなかった）。

この結果、替田遺跡１次調査で検出した掘立柱建物には各調査区（Ａ～Ｄ）においてそれぞれ３つのまとまり（軸方向による）がみられる。Ｂ地区では平安時代のものが９棟検出されており、建物配置に規則性は見られないが、Ｎ15°Ｅ３棟、Ｎ21～22°Ｅ２棟、Ｎ12°Ｗ２棟、そのほか２棟のように軸方向によって数棟ずつのまとまりに分けられる。Ｄ地区では平安末～鎌倉初頭に比定される建物を15棟検出している。これらは、３箇所にまとまっており、各場でそれぞれの軸方向を踏襲した、数回の建て替えがなされているようである。その軸方向はＮ18～19°Ｅ、Ｎ27～28°Ｅ、Ｎ31～32°Ｅである。後２者は条里方向（Ｎ30°Ｅ）とほぼ一致する。２次調査区でもまとまりは無いものの、掘立柱建物が２棟検出されており、Ｎ21°Ｅ、Ｎ31°Ｅと１次調査で確認した軸方向のいずれかに揃う。

このようなまとまりが、１つの遺跡内だけでなく隣接する遺跡間で見られないであろうか。第27表にまとめた結果から、遺跡内もしくは遺跡間でまとまる顕著な建物群は、弐ノ坪遺跡以外では確認できないことがわかる。この弐ノ坪遺跡の平安時代初頭の例が、全て条里方向を指向するというのは、この地域において特異な例であり、条里の施工時期を考える上でも興味深い。

しかし、弐ノ坪遺跡建物群は短期で終息し、その後出現する平安後期以降の建物群には、所々で条里方向に則した建物が確認される以外は、条里に規制されない数棟ずつの建物のまとまりが確認できるに止まるのである。現在まで条里制の名残を色濃く残す当地域で、弐ノ坪遺跡例以降、その条里に規制される建物群が少ないことは、当地の性格を考えるうえでも興味深い事実である。

ところで、替田遺跡で飛鳥時代に比定される２棟の掘立柱建物が確認されているが、これらは軸方向がほぼ条里方向に揃う。このことから、調査担当者によって条里の施工がこの時期まで遡る可能性が指摘されている。しかし、建物の柱穴から出土した遺物はいずれも細片であるとしており、溝との重複関係から時期が決定されているが、その溝も「飛鳥時代以降」というものである。よって、この例だけで積極的に条里の施工が飛鳥期にまで遡るとは言いがたい。

4　井戸について

３次にわたる立花堂遺跡の発掘調査で確認した井戸は、奈良時代１基、平安時代１基、鎌倉時代４基である。このうち古代の２基は木組、中世のものが素掘りの井戸であった。ここでは、各井戸の構造をまとめ、周辺遺跡で検出されているものとの比較検討を試みる。

ＳＥ57は横板を積み上げて組み立てたもので、宇野隆夫氏の分類[25]による「横板井籠組井戸」に相当し、その中でも「両方に溝状の切込みをつけて組むもの」に分類される。「横板組相欠き仕口型」ともいう。掘方の平面プランは方形である。横板組は６段確認したが、最下段の２枚の横板のみ片側からの仕口であった。横板全体の長さや仕口間の長さは、下段に行くほど規格性が見られる傾向にあるようで、４段目以降は全長約108㎝、仕口間は約80㎝にまとまる。底の標高は約3.7ｍである。出土遺物から奈良時代後半に廃絶したものと考えられる。

ＳＥ155は井戸側として縦板と横桟、隅柱を組み合わせており、宇野分類による「縦板組隅柱横桟どめ」に相当する。掘方の平面プランは楕円形である。隅柱４本のうち３本までは建築部材を転用したと考

遺跡名	遺構番号	時　期	主軸	軸方向	規模（間×間）	備　　考	参考文献
立花堂遺跡	ＳＢ４１	平安後期	南北	Ｎ５°Ｅ	２×５		
	ＳＢ４２	古代	南北	Ｎ５～６°Ｗ	２×３		
	ＳＢ１２１	平安後期	南北	Ｎ９～10°Ｅ	２×３		
	ＳＢ１２９	平安後期	南北	Ｎ２°Ｗ	２×４		
	ＳＢ１３０	平安後期	南北	N11～12°Ｅ	２×４		
	ＳＢ１７１	平安後期	南北	Ｎ８～９°Ｅ	２×４		
	ＳＢ１７２	平安後期	南北	Ｎ０～１°Ｗ	２×３		
弐ノ坪遺跡	ＳＢ１	奈良後期	南北	N28°Ｅ	３×２	条里方向・平安初かも	4
	ＳＢ２	平安初	東西	N27°Ｅ	３×２	条里方向	4
	ＳＢ３	平安初	南北	N33°Ｅ	３×２	条里方向	4
	ＳＢ４	平安初	南北	N28°Ｅ	４×２	条里方向	4
	ＳＢ５	平安初	南北	N28°Ｅ	３×２	条里方向	4
	ＳＢ６	平安初	東西	N28°Ｅ	３×２	条里方向	4
	ＳＢ７	平安初	南北	N28°Ｅ	４×２	条里方向	4
	ＳＢ８	平安初	東西	N29°Ｅ	３×２	条里方向	4
	ＳＢ９	平安初	東西	N28°Ｅ	３×２	条里方向	4
	ＳＢ６５	奈良後期	東西	N27°Ｅ	２×２	条里方向・平安初かも	4
	ＳＢ７３	平安初	東西	N28°Ｅ	２×（１）	条里方向	4
	ＳＢ７４	平安初	東西	N30°Ｅ	２×（１）	条里方向	4
	ＳＢ７５	平安初	南北	N28°Ｅ	４×（１）	条里方向	4
	ＳＢ７６	平安初	南北	N30°Ｅ	２×４	条里方向	4
神戸遺跡	ＳＢ１６	奈良～平安	東西	N38°Ｅ	（１）×（２）		6
	ＳＢ１０	平安	南北	N15°Ｅ	（１）×５		6
	ＳＢ４３		東西	Ｎ６°Ｅ	４×２		7
	ＳＢ４４		南北	N23°Ｅ	３×２		7
	ＳＢ４５		南北	Ｎ２°Ｗ	３×２		7
	ＳＢ５２		東西？	N32°Ｅ	５×（１）	条里方向	7
	ＳＢ５３	平安	南北？	N27°Ｅ	２×（１）	条里方向	7
	ＳＢ５４	平安	東西？	N16°Ｅ	（４）×（１）		7
	ＳＢ５５	平安	東西？	N17°Ｅ	３×（１）		7
	ＳＢ５７	平安	南北	N23°Ｅ	４×２		7
	ＳＢ５８	平安	東西	N26°Ｅ	５×４	総柱・四面庇か	7
	ＳＢ５９	平安	東西	N26°Ｅ	５×４	総柱・四面庇か	7
	ＳＢ６０	平安	南北	N23°Ｅ	３×４	総柱？・東面庇か	7
惣作遺跡	ＳＢ５９	飛鳥・奈良	東西？	N45°Ｅ	（２）×５		10
	ＳＢ６０	飛鳥・奈良		Ｎ１～２°Ｗ	２×？		10
替田遺跡	ＳＢ６１０		南北	N39°Ｅ	４×３		8
	ＳＢ６１２	平安後期	南北	N23°Ｅ	５×３	総柱	8
	ＳＢ６１３	平安後期	南北	N23°Ｅ	３×１		8
	ＳＢ６２１	飛鳥？	東西	N28.5～33°Ｅ	３×３	条里方向	8
	ＳＢ６２２	飛鳥？	東西	N28.5°Ｅ	３×２	条里方向	8
	ＳＢ１５４	古代～中世	東西	N29°Ｅ	４×２	条里方向	13
	ＳＢ１５５	古代～中世	東西	N20°Ｅ	５×３		13
	ＳＢ１５６	古代～中世	東西	Ｎ５°Ｅ	（４）×２		13
	ＳＢ１５７	古代～中世	東西	N14°Ｅ	（３）×（２）		13
	ＳＢ１５８	古代～中世	東西	N17°Ｅ	（４）×（１）		13
	ＳＢ１５９		東西	N36°Ｅ	（３）×（１）		13
	ＳＢ１６０		東西	N38°Ｅ	（３）×（１）		13
	ＳＢ１６１		東西	N27°Ｅ	５×？	条里方向	13
	ＳＢ１６２	鎌倉	東西	N37°Ｅ	（１）×（４）		13
	ＳＢ３４３	古代	東西	N10°Ｅ	５×３		13
	ＳＢ３４４	古代末	東西	Ｎ８°Ｅ	４×２		13
	ＳＢ３４５	奈良	東西	N19°Ｗ	（２）×（２）	総柱	13
	ＳＢ３４６	古代以降	南北	Ｎ２°Ｅ	３×２		13
	ＳＢ３４７	古代末	正方形	Ｎ７°Ｗ	２×２	総柱	13
	ＳＢ３４８	古代末	南北	N32°Ｅ	３×２	条里方向	13
	ＳＢ３４９	古代	南北	N26°Ｗ	４×２		13
	ＳＢ３５０	古代	南北	N37°Ｅ	３×３		13
	ＳＢ３５１	中世	南北	N16°Ｅ	３×３	総柱	13
	ＳＢ３５２	中世	南北	Ｎ１°Ｗ	２×２		13
	ＳＢ５４９	中世	東西	N21°Ｅ	５×（２）	南東隅土坑	13

※なお、替田遺跡第１・２次調査は概報に詳細が掲載されていないためここでは割愛した。
※参考文献に記述の番号は、結語の【註】番号と対応する。

第27表　立花堂遺跡および周辺遺跡の掘立柱建物一覧

えられるもので、土に差し込まれたほうが差込の凸部のように加工されている。残りの１本は自然木をそのまま使用している。いずれにも横桟を差し込む枘は無い。横桟は１段しか確認できなかった。また、集水施設として曲物を使用しており４段残っていた。上から１～３段目まではそれほど直径に差は無く、内と外が接するように組まれていたが、４段目は３段目との直径の差が大きい。そのため４段目を据え固定した後、３段目の曲物を支えるために４方向に石を置いていた（第21図参照）。底の標高は約2.5mである。出土した遺物は非常に少ないが、平安時代後期のものと考える。

ＳＥ63～65、ＳＥ68は埋土から山茶椀などが出土しており、鎌倉期の素掘りの井戸である。掘方の平面プランは円形である。遺構の重複関係や出土遺物からＳＥ63・ＳＥ65→ＳＥ68→ＳＥ64の順に掘削されたと考えられる。底の標高はＳＥ63が約4.0m、ＳＥ65が約3.85m、ＳＥ68が約4.1m、ＳＥ64が約3.7mである。

前述の宇野隆夫氏によって井戸の歴史が検討されている。それによるとⅠ期として木組井戸を用いるが、素掘り井戸が主体をなす弥生～古墳時代、Ⅱ期として木組井戸が主体をなす古代、Ⅲ期として石組井戸が主体をなす中世、Ⅳ期として石組井戸に加えて土製品組井戸が普及する近世～近代という四期を設定している。この四期はさらに検討され検出例をもとに細分されている。Ⅱ期の範疇である７～９世紀の特徴として、木組井戸に多くの種類があることと横板井籠組井戸の比率が高いことが示されている。また、10世紀～12世紀初頭の特徴としては横板井籠組井戸が著しく少なくなり、素掘り井戸と木組井戸の検出例だけで約92％を占めるとのことである。また木組井戸の内訳として縦板組横桟どめ井戸と縦板組隅柱横桟どめ井戸を合わせて約59％になるという。その後、Ⅲ期の12世紀中頃～14世紀では地域差が顕在化するといい、畿内北部では木組と石組、畿内南部では木組と土器組、西国では木組、東国では木組を用いるが多数は素掘り井戸というようにそれぞれで特徴を持つようである。15世紀～16世紀中頃では石組井戸が盛行する時代とされている。

以上の検討の結果に、立花堂遺跡で検出した井戸の構造と所属時期は見事に当てはまっている。

周辺遺跡でも多数の井戸を検出している（第28表）。里前遺跡では１次調査で11基、２次調査で６基、３次調査で２基確認されている。そのほとんどが中世（宇野分類Ⅲ期）前半に比定されるもので、素掘りと木組井戸である。そのほかⅢ期後半のもの３基が素掘りおよび木組、近世（Ⅳ期）のもの２基が「石組あるいは石組？」と報告されており、これも前述の宇野氏が指摘する傾向にほぼ当てはまる。木組に関しては横板組のものは無く、縦板組と曲物を組み合わせたもののほか、結桶と曲物を組み合わせたものである。

替田遺跡では16基の井戸を検出している。内訳は古墳時代１基、古代６基、中世７基、不明２基である。いずれも木組および素掘りの井戸で、石組は確認されていない。

惣作遺跡では古代の井戸を１基検出している。横組と思われる木材が出土しているが、「息抜き」の祭祀が行われた痕跡が残り、上層を土坑として再利用されていることから、井戸を埋めるときに木組施設は抜き取られたものであろうことが指摘されている。

これら周辺遺跡での検出結果でも、ほぼ宇野氏の分類が当てはまることがいえる。

また水谷豊氏の検討[26]によれば、三重県内では、中世から近世にかけて雲出川・安濃川流域の山間部と平地部の様相が異なり、山間部では鎌倉期から数基の石組井戸の確認例が存在するのに対し、平地部では素掘り・木組井戸が中心であると指摘している。このことも立花堂遺跡はじめ周辺遺跡の井戸の検出例とも矛盾しない。

最後に、立花堂遺跡のＳＥ57の性格について述べておく。黒崎直氏は、平城宮において内裏には丸太刳り抜き井戸、官衙には横板井籠組井戸が多いことを明らかにした[27]。また同氏は「大膳職・造酒司」の大型井戸を除くと横板井籠組の井戸の一辺の内法には1.1～1.65mまでのほぼ６段階があること、宮内の中枢から離れた地域や京内においては縦板組や曲物の井戸が多いことを示し、横板井籠組井戸が宮内では役所の格式を、京内ではそこに住む人の官位を反映している可能性が高いことを明らかにしてい

遺跡名	遺構名	時期	施設	底の標高(m)	備考	参考文献
立花堂遺跡	ＳＥ５７	奈良後期	横板井籠組	3.7	花粉なし	
	ＳＥ１５５	平安後期	縦板組隅柱横桟どめ	2.5	曲物４段	
	ＳＥ６３	13世紀前半	素掘り	4.0	花粉なし	
	ＳＥ６５	13世紀前半	素掘り	3.85		
	ＳＥ６８	13世紀中頃	素掘り	4.1	花粉なし	
	ＳＥ６４	14世紀初頭	素掘り	3.7	昆虫化石	
里前遺跡	ＳＥ５	12世紀末～13世紀初頭	素掘り	1.0～1.22	底付近石組１段	5
	ＳＥ６	12世紀末～13世紀前葉	素掘り	1.0～1.22		5
	ＳＥ１７	12世紀末～13世紀初頭	素掘り	－0.6～－0.2		5
	ＳＥ１６	12世紀末～13世紀初頭	素掘り	1.0～1.22		5
	ＳＥ３	13世紀初頭～13世紀前葉	素掘り	1.7～1.9		5
	ＳＥ５４	13世紀中頃	結桶・曲物積上げ	3.4	こぶし大の石	12
	ＳＥ１８４	13世紀前葉	縦板組隅柱横桟どめ	1.25	曲物２段	16
	ＳＥ１８２	13世紀後葉	縦板組横桟どめ	0.9	縦板１枚板・曲物２段	16
	ＳＥ７１	13世紀前半	縦板組隅柱横桟どめ？		曲物１段	12
	ＳＥ１０４	平安末～鎌倉	素掘り？	2.4		12
	ＳＥ１２６	平安末～鎌倉	縦板組隅柱横桟どめ？	3.2	曲物３段	12
	ＳＥ１１	15世紀後半	素掘り	－0.6～－0.2		5
	ＳＥ２	15世紀末	素掘り	1.7～1.9		5
	ＳＥ６８	室町～戦国	縦板組隅柱横桟どめ？	2.9	曲物１段	12
	ＳＥ１９	16世紀後半	石組？	1.7～1.9		5
	ＳＥ９	17世紀前半	石組	1.7～1.9	下方に板材	5
	ＳＥ１１６	中世	素掘り？	5.4		12
	ＳＥ８	前身遺構が13世紀後葉以前	石組＋木組	1.26～1.5		5
	ＳＥ２５	13世紀中葉～13世紀後葉	底に敷石	1.26～1.5		5
替田遺跡	ＳＥ１０５	古墳		5.9		13
	ＳＥ２５８	古代	素掘り	5.84		13
	ＳＥ３２４	古代	縦板組横桟どめ	5.76		13
	ＳＥ３２７	古代	素掘り？	5.52		13
	ＳＥ６１１	平安前期	縦板組隅柱横桟どめ？	4.16	礫敷	8
	ＳＥ６２７	平安後期	曲物２段	4.6		8
	ＳＥ１０６	平安中～後期	縦板組横桟どめ？	4.5？	底板３枚	13
	ＳＥ２５９	中世前半	素掘り	4.72		13
	ＳＥ２６３	中世前半	素掘り	5.04		13
	ＳＥ１２９	鎌倉	曲物	4.8		13
	ＳＥ２６６	中世		5.0	曲物破片？	13
	ＳＥ２６７	中世	曲物？	4.08		13
	ＳＥ２９９	中世	木組？	5.4		13
	ＳＥ５３８	中世		4.4	曲物底板	13
惣作遺跡	ＳＥ９	奈良～平安初頭	木組？	5.2	下層井戸、上層土坑	10

※なお、替田遺跡第１・２次調査は概報に詳細が報告されていないためここでは割愛した。
※参考文献に記述の番号は、結語の【註】番号と対応する。

第28表　立花堂遺跡および周辺遺跡の井戸一覧

る。また、宇野氏はこれに付け加えて京内や京外の横板井籠組井戸のほとんどは一辺の内法が1.2m以下であることを指摘している[28]。

古代の横板井籠組井戸は、県内では立花堂遺跡のほかに伊賀市に所在する森脇遺跡[29]や津市安濃町に所在する浄土寺南遺跡[30]でも確認されている。

浄土寺南遺跡例では、内枠と外枠が設けられており、格段の井戸枠には、添板が付属する。掘立柱建物群および出土遺物などから、官衙的性格を持つ可能性を指摘されている。

森脇遺跡例では、木組の内法約138㎝、横板の中央に枘孔を設け、駄枘によって上下の枠板を連結する構造になっており、立花堂遺跡ＳＥ57と比較して非常に丁寧な造りの井戸である。また枠板には組み上げる位置を指定するような墨書がなされている。この森脇遺跡は、飛鳥時代の官衙的な様相を示す建物群や奈良時代の規則的に配列する建物群、倉庫と考えられる建物も検出されており、墨書土器も多数出土している。積極的に「官衙遺跡」という位置づけはなされていないが、黒崎・宇野両氏の指摘も考え合わせると、非常に興味深い要素である。

古代前半の建物が見つかっていない立花堂遺跡の官衙的要素を、ＳＥ57の構造だけで述べるわけにはいかないが、ひとつの可能性という意味で提示しておく。

5　墨書土器について

今回の調査では墨書土器が比較的多く出土した。須恵器の蓋に墨書したもの１点のほか、灰釉陶器椀の底部に墨書したもの10点、山皿および山茶椀の底部外面に墨書したもの10点である。

須恵器の蓋は奈良時代後期のもので、ＳＥ57の掘方に付属するＳＤ52から出土したものである。この外面に「刀自女」と読める墨書が認められる（遺物番号45）。この「刀自女」は女性の名前と考えられる。『国史大辞典』によると、「刀自」とは「一般的に女性への敬愛の情を示す呼称として使われるが、歴史的に重要なのは、男性と一対の女性統率者を意味すると思われる刀自の用法である。家刀自は富豪層の家での家長と対の統率者を意味している。そしてこのことは刀自が元来は家より大きな人間集団での男女対の統率者だった可能性を示す。したがって元来刀自とは小地域の男女対の女性の長で、それが富豪層の家に転用されて家刀自となり、さらにそれが一般的な女性の尊称、または単なる一家の主婦の意に転じたと考えられる。」とされている。

県内では、この立花堂遺跡と同じ「刀自女」が墨書された土器は現在のところ確認されていないが、古代における、そのほかの人名墨書例としては、松阪市杉垣内遺跡から出土した土師器杯の底部外面に「舩女」としたもの、伊賀市森脇遺跡出土の須恵器杯蓋の内面に「安麿」と書かれたものなどがある[31]。

県外では、千葉県香取市吉原山王遺跡で大量の墨書土器が出土しており、立花堂遺跡出土と同じ「刀自女」をはじめ「瓶刀自」などの人名墨書が見られる[32]。また、平城京の左京八条一坊三坪でも土師器の杯や皿の底部外面に、同じく「刀自女」と墨書されたものが確認されている[33]。

今回立花堂遺跡で出土した１点のみで、女性首長級の存在をいうことは困難ではあるが、様々な可能性を含めて考える必要があろう。

灰釉陶器椀で特筆できるものとしては「万饒」の墨書がある。字体などから書き手は異なると思われるが、ＳＤ146から２点（遺物番号395・400）、ＳＤ166から１点（遺物番号405）出土している。この２条の溝は重複しており、遺物番号400と405が出土したのはほぼ同じ地点である。「饒」には「ゆたか」という意味があり、吉祥句的な用語であろう。

県内でも吉祥句を墨書した土器は数多く確認されている。多気郡明和町に所在する斎宮跡では、平安時代になると「万」や「豊」といった吉祥文字が急激に増加するようである[34]。また桑名市多度町の柚井遺跡でも吉祥句を墨書された土器が大量に出土している。しかし現在のところ立花堂遺跡と同じ「万饒」と書かれた墨書土器は確認されていない。

県外に目を向けてみると、「饒」の一文字が書かれた土器が千葉県八千代市の白幡前遺跡や茨城県鹿嶋市神野向遺跡で見つかっている[35]。白幡前遺跡は八千代市萱田地区遺跡群の中のひとつで、奈良・平安時代の大規模な集落遺跡である。また神野向遺跡は常陸国鹿嶋郡家跡とされる遺跡である。このほか、群馬県藤岡市に所在する上栗須寺前遺跡では

「神饒」と墨書された灰釉陶器の椀が出土している[36]。

いずれにしても、「万饒」という言葉は２文字の熟語として認識されていたものというよりは「万」「饒」という一文字でも吉祥句となる文字を組み合わせて、より吉祥の意味を強くする意識で書かれ、何らかの祭祀に使用されたものと考えられる。

今回出土した墨書土器は、前述したように灰釉陶器椀と山皿・山茶椀がほとんどである。これらは、ひとつの遺構からまとまって出土したものではない。しかし出土遺構などを詳細に見ていくと、灰釉陶器については全て溝および旧河道から出土しており、１点ずつではなく２～４点ほどまとまって見つかっていることが注目される。前述のＳＤ146・166のほかＳＤ152からは３点出土している。残念ながらいずれも破片のため墨書された文字は不明であるが、この溝からは土馬も出土しており、祭祀と墨書土器との関連を考える上で非常に興味深い。

また灰釉陶器の墨書がほとんど文字であるのに対して、山皿・山茶椀の墨書が「○」や「＋」の記号などが多いことにも注目される。これらは、大量の墨書土器が出土した里前遺跡や替田遺跡でも数多く確認されており[37]、この時期の墨書土器としては普遍的なものである。

以上、今回の調査で出土した墨書土器について概観してきたが、立花堂遺跡の墨書灰釉陶器の出土量は、周辺で調査された遺跡と比較して多いものである。精査をして比較したものではないが、前述の里前遺跡や替田遺跡などでも平安後期～鎌倉時代初頭と比定される集落があるにもかかわらず、山皿・山茶椀の墨書土器の多さと比較して、墨書灰釉陶器の量は微々たるものである。このことから考えても、立花堂遺跡の平安時代後期集落の特殊性が浮かび上がるのではないだろうか。

６　立花堂遺跡の評価

これまで、周辺遺跡を含め、立花堂遺跡の特徴などを考察してきた。ここで改めてまとめを行う。

弥生・古墳時代　包含層からの出土ではあるが、弥生中期から後期初頭の遺物が数点出土している。古墳時代になると、前代に比べて遺物量が増え、後期の遺物を埋土に含む溝などが確認されるようになる。

奈良時代　建物は見つかっていないが、後半期に廃絶したと考えられる井戸を１基検出した。これは前述したように、規模はとくに大きいものではないが、構造的に「官衙」や「有力者の屋敷」との関連も考えられる。しかし、建物が見つかっていないことをはじめ、墨書土器は１点のみの出土、そのうえ木簡も確認されておらず、ほかの要素からこれを補えるものはない。周辺の調査を待って、再度検討を加える必要があるが、可能性も含めて提示しておく。

平安時代　ほかの時期と比較して遺物量が増加し、とくに後期に相当する遺構を中心に検出できる。掘立柱建物をはじめ、井戸や溝群である。ここで特筆できるのは、周辺遺跡と比較して墨書された灰釉陶器が多いこと、祭祀に関連する可能性のある「万饒」という墨書が３点出ていること、土馬や皇朝十二銭の「延喜通寶」が出土していることが挙げられる。これらのことから、今回検出した当該時期の建物群に祭祀と密接に関連する集団が存在した可能性が考えられよう。

また、数点の鉄滓や当該時期から中世までの遺物が確認される溝から鞴の羽口の破片が出土しており、周辺で鍛冶が行われていた可能性を示すものとして注目される。平安期の鉄滓出土例は、県内では多気郡明和町に所在する史跡斎宮跡で見られるが、非常に少ない。

なお、天禄元年（973）に安濃郡は神宮の神郡となっている[38]。このような歴史的事実も当遺跡の動向と何らかの関わりがあるのかもしれない。

おわりに

今回行った立花堂遺跡の発掘調査で、平成８年度から継続的に行われてきた津市南河路および野田周辺の発掘調査はひとまず終焉を迎える。立花堂遺跡では、奈良期の井戸、平安期の墨書灰釉陶器椀や土馬の出土など、特徴ある遺構・遺物を確認することができた。また本章でも述べてきたように、当遺跡を含む周辺の調査から数々の貴重な成果を得ることができた。しかし、決してこの地域の歴史が全て明らかになったわけではなく、今後考えていかなければならない課題も多く残っている。とくに古代から中世前半期にかけてのこの地域の様相は非常に興味

深く、様々な検討を加える余地がある。今回の報告がその検討から当地域の歴史の解明へのひとつの資料となり得ることを祈念したい。

【註】

（１）三重県埋蔵文化財センター『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』(2001年)
　三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡（第２次）発掘調査報告』(2005年)

（２）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』(1997年)
　なお、今年度以下の報告書が刊行される。
三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う　替田遺跡（第１・２次）発掘調査報告』(2008年)

（３）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ｘ』(1998年)
　本報告は前掲（２）に記した報告書に掲載。

（４）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ｘ』(1998年)
　三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う　弐ノ坪遺跡発掘調査報告』(2005年)

（５）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う　里前遺跡発掘調査報告』(2002年)

（６）三重県埋蔵文化財センター『神戸遺跡発掘調査報告―鳥井前地区―』(1999年)

（７）三重県埋蔵文化財センター『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』(2001年)

（８）三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第４次）発掘調査報告』(2004年)

（９）前掲（７）文献に同じ。

(10) 三重県埋蔵文化財センター『惣作遺跡発掘調査報告』(2002年)

(11) 三重県埋蔵文化財センター『惣作遺跡（第２次）発掘調査報告』(2002年)

(12) 三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡（第２次）発掘調査報告』(2005年)

(13) 三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第５次～第８次）発掘調査報告』(2007年)

(14) 前掲（13）文献に同じ。

(15) 前掲（13）文献に同じ。

(16) 三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡（第３・４次）発掘調査報告』(2006年)

(17) 本書

(18) 前掲（13）文献に同じ。

(19) 前掲（16）文献に同じ。

(20) 前掲（13）文献に同じ。

(21) 本書

(22) 本書

(23) 石井智大「替田遺跡における弥生集落の様相」(『替田遺跡（第５次～第８次）発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　2007年)

(24) 伊藤裕偉「補論１　安濃津と物資集散機能」(『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』　岩田書院　2007年)

(25) 宇野隆夫「井戸考」(『史林』第65巻第５号　史学研究会　1982年)

(26) 水谷　豊「石組井戸と木組井戸―三重県内の資料から見たその使い分け―」(『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター　1999年)

(27) 黒崎　直「平城宮の井戸」(『月刊文化財』151号　1967年)

(28) 前掲（25）文献に同じ。

(29) 三重県埋蔵文化財センター「森脇遺跡」(『研究紀要』第12号　2002年)

(30) 三重県埋蔵文化財センター「Ⅷ　安芸郡安濃町　浄土寺南遺跡」(『昭和55年度　県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1981年)

(31) 斎宮歴史博物館『眠りから覚めた文字たち－斎宮跡出土の墨書土器－』(1997年)

(32) 千葉県文化財センターほか『佐原市吉原三王遺跡－東関東自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ（佐原地区２）－』(1990年)

(33) 巽　淳一郎「都城出土墨書土器の性格」(『古代官衙・集落と墨書土器－墨書土器の機能と性格をめぐって－』　独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　2003年)

(34) 前掲（30）文献に同じ。

(35) 平川　南『墨書土器の研究』(吉川弘文館　2000年)

(36) 高島英之『古代出土文字資料の研究』(東京堂出版　2000年)

(37) 川崎志乃「中世の墨書土器について」(『替田遺跡（第５次～第８次）発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　2007年)

(38) 岡野友彦「伊勢中世都市の歴史的位置づけ」(『中世都市研究13　都市をつなぐ』　新人物往来社　2007年)

写　真　図　版

調査前風景（南西から）

調査前風景（東から）

写真図版２

２次調査区　遠景（南西上空から）

２次調査区　遠景（南上空から）

2 次調査区　遠景（垂直方向から）

2 次調査区　全景（南西から）

２次調査区　全景（北東から）

２次調査区　西半（北東から）

3 次南調査区　全景（北東から）

3 次南調査区　全景（南西から）

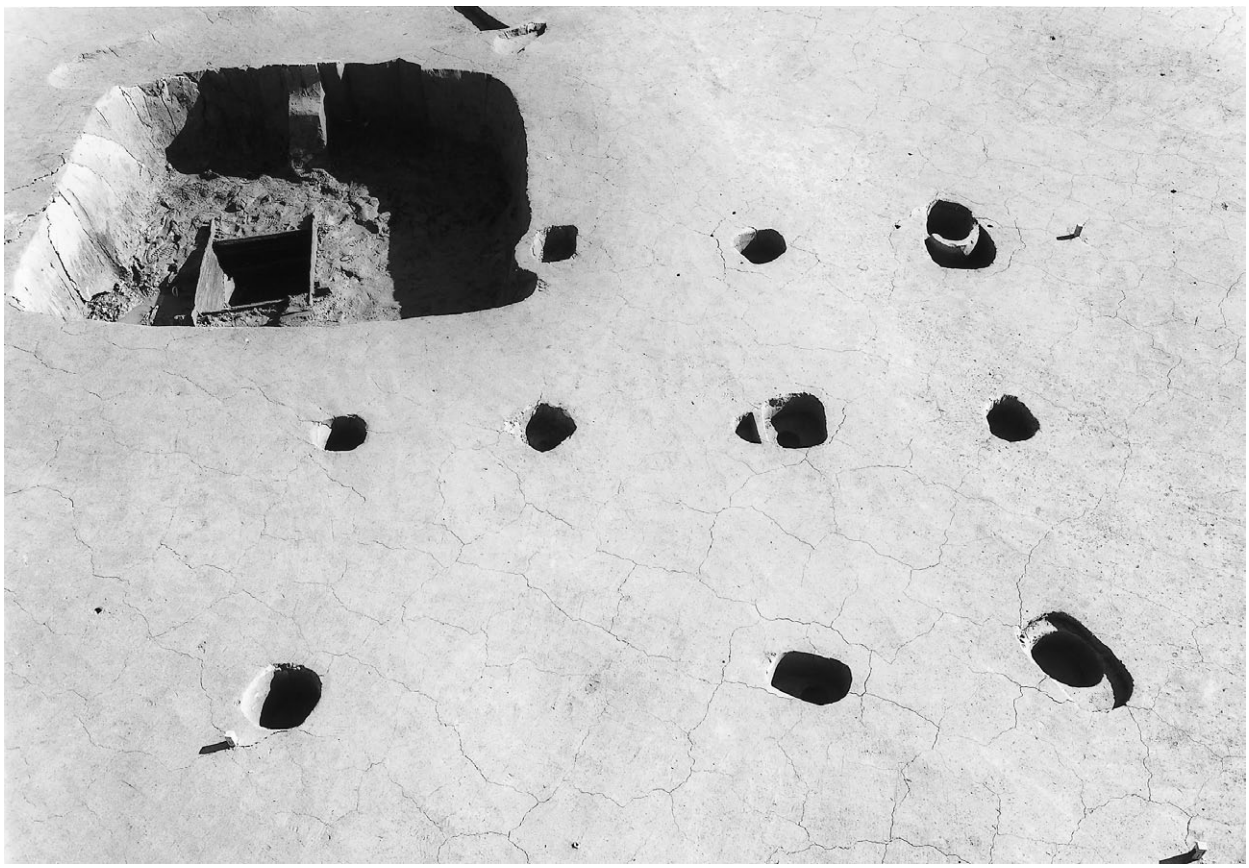
3 次北調査区　全景（東から）

3 次北調査区　全景（西から）

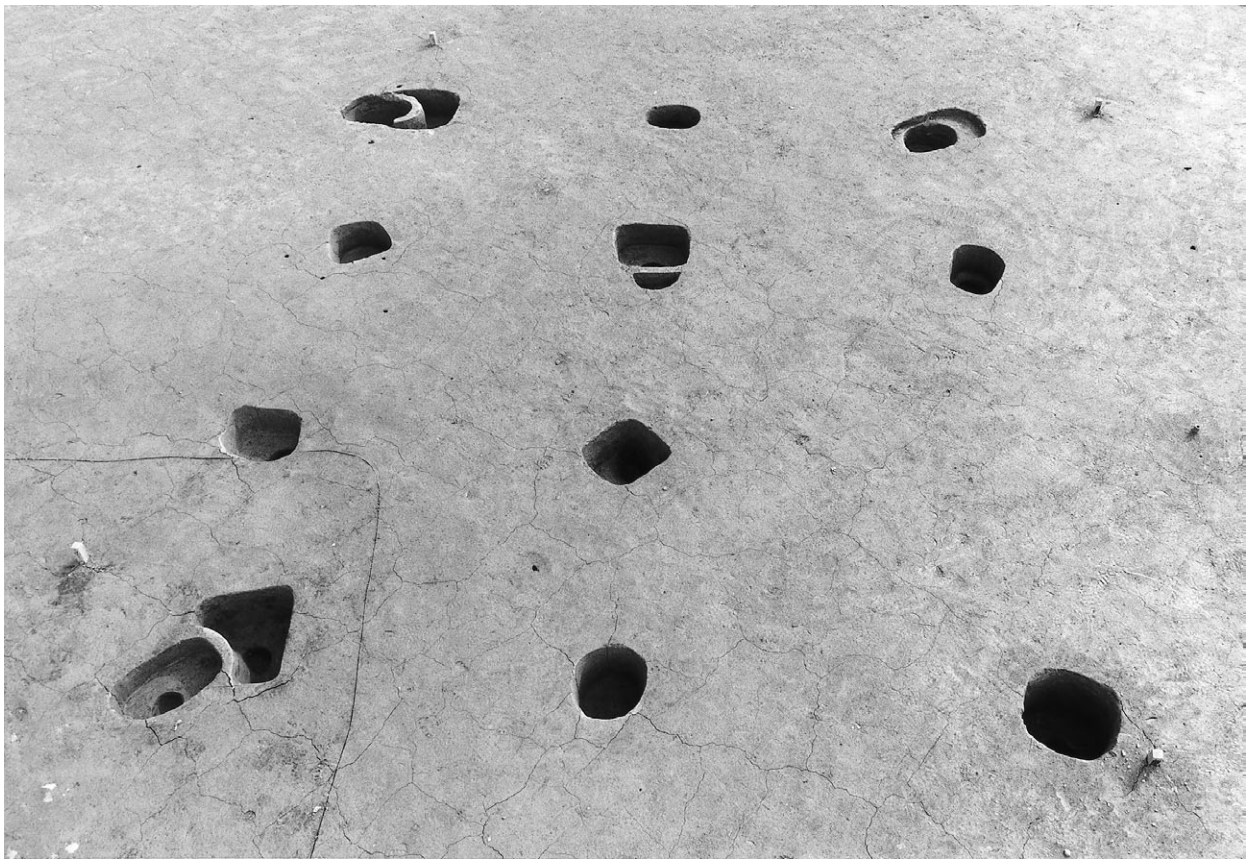
ＳＥ５７　井戸側検出状況（北西から）

ＳＥ５７　井戸側近接（北から）

ＳＥ５７　井戸側近接（東から）



ＳＥ５７，ＳＢ４２（西から）

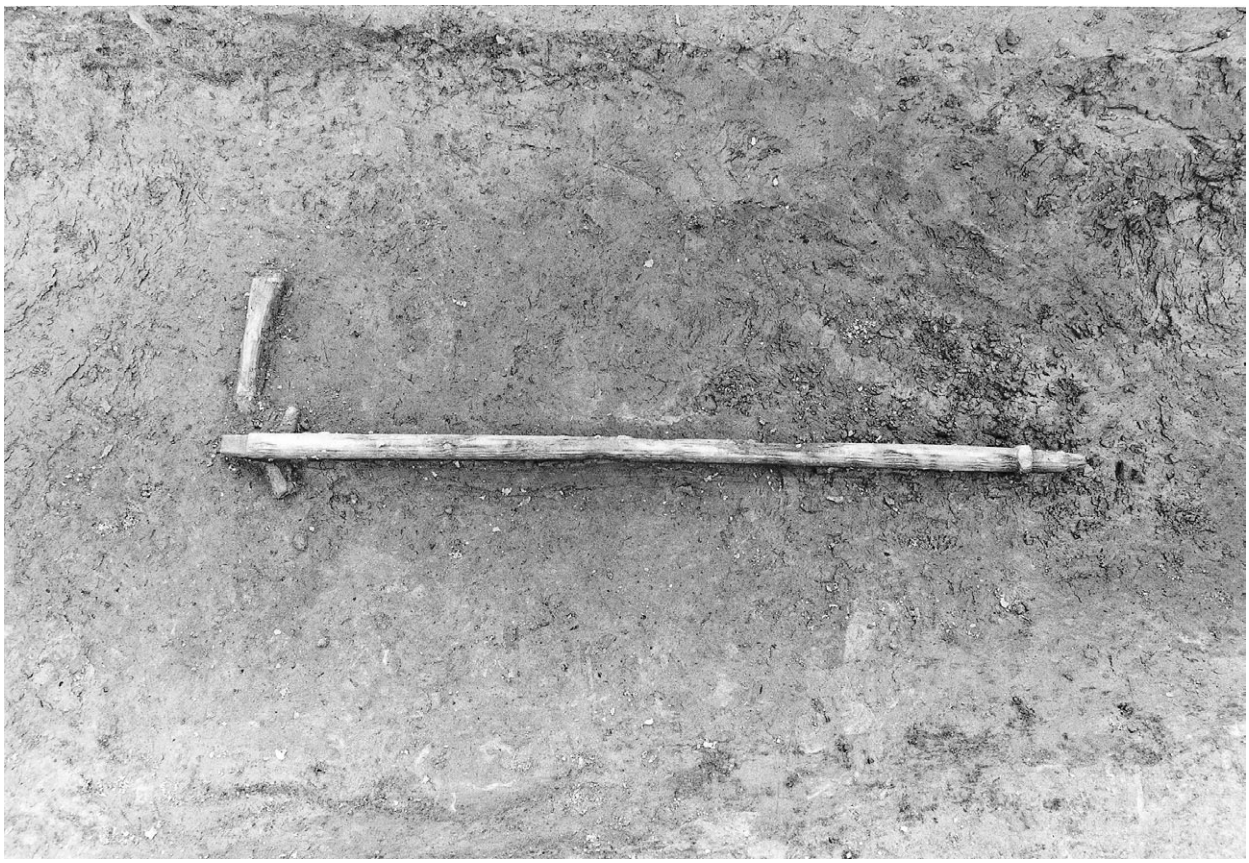


ＳＢ４２（北から）

ＳＢ４１（北から）

ＳＢ４２内　ｓ６　ｐｉｔ６（垂直方向から）

ＳＢ４２内　ｓ６　ｐｉｔ６半裁状況（東から）



ＳＤ１５２　出土状況（遺物番号360・361・362）（南から）

ＳＢ１２１（南から）

ＳＢ１２９（南から）

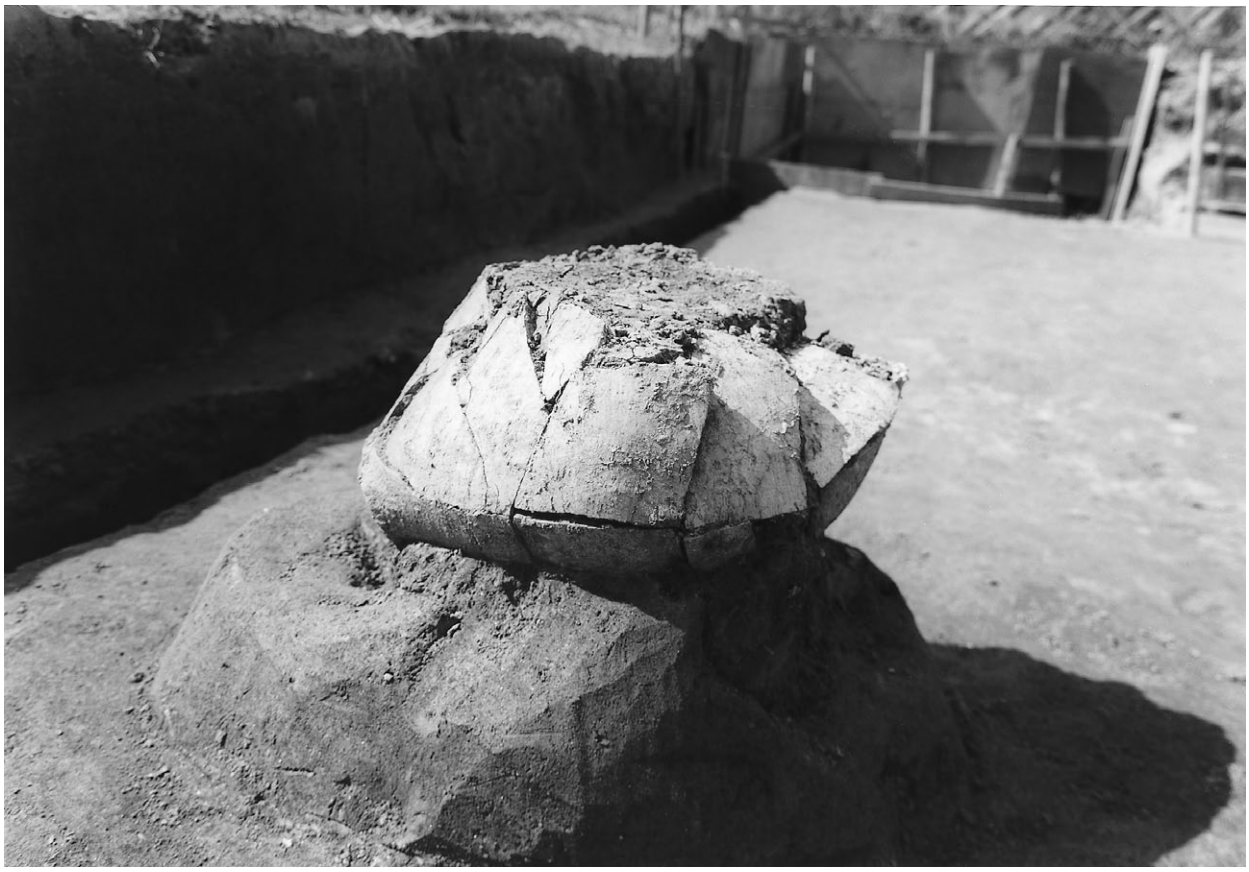
ＳＢ１３０（南から）

ＳＥ１５５（西から）

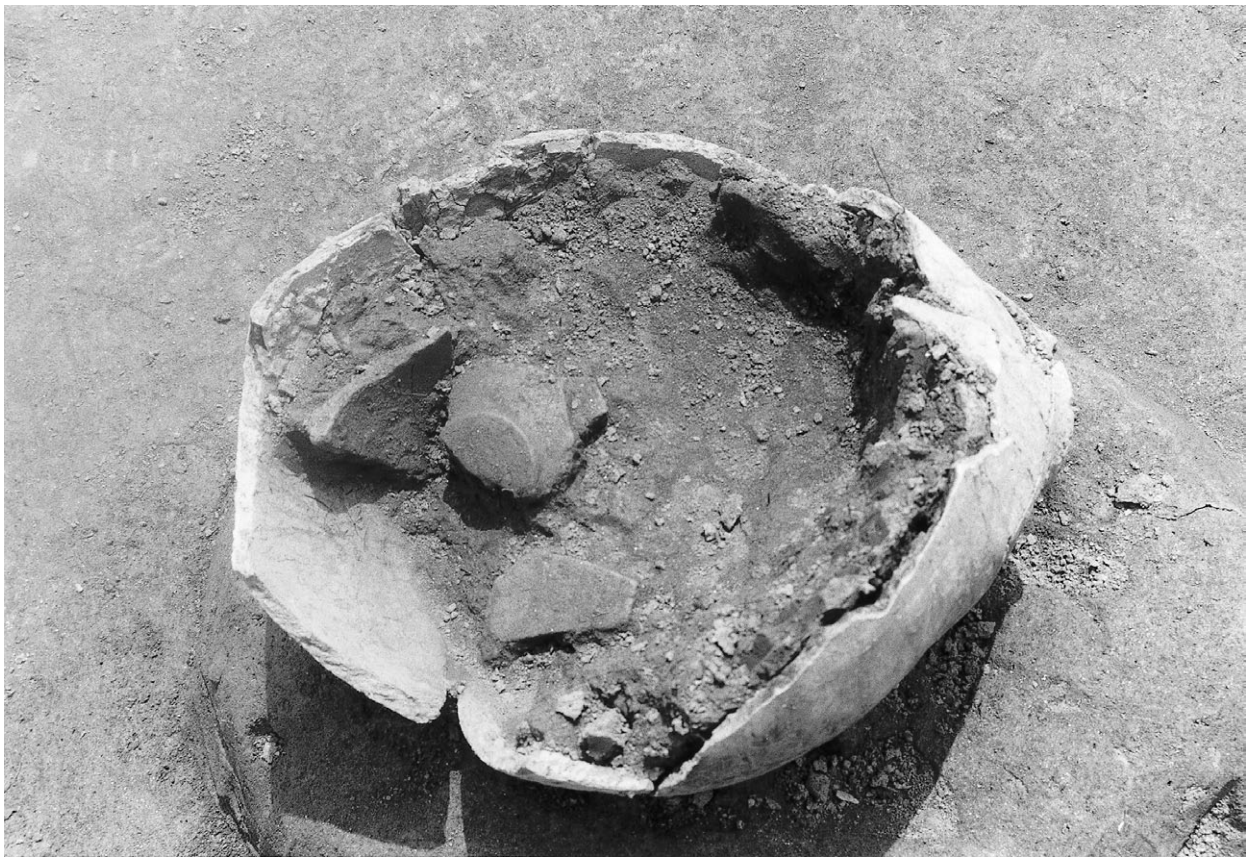
ＳＥ１５５（南西から）

ＳＥ１５５　半裁状況（南西から）

ＳＥ１５５　半裁状況（南西から）



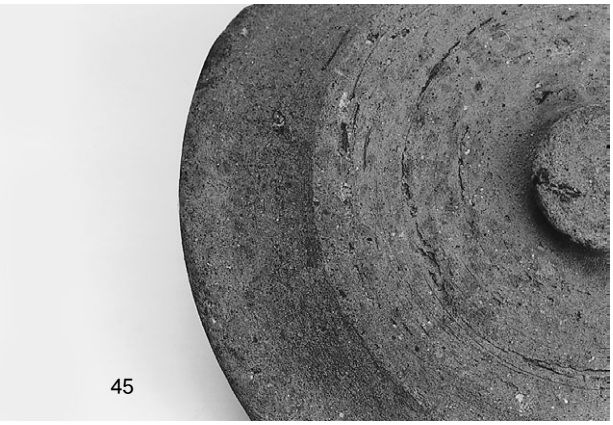
弥生土器（遺物番号437）　出土状況（南から）



弥生土器（遺物番号436・437）　出土状況（北から）

立花堂遺跡現状風景（北東から）

立花堂遺跡現状風景（南西から）



出土遺物①

55

56

61

65

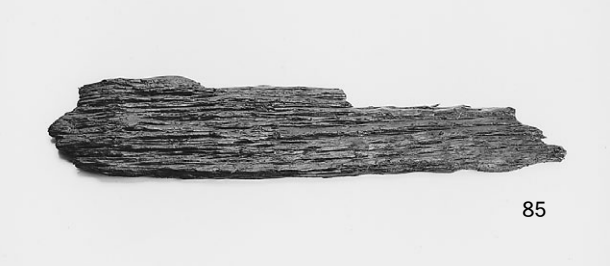
78

79

82

83

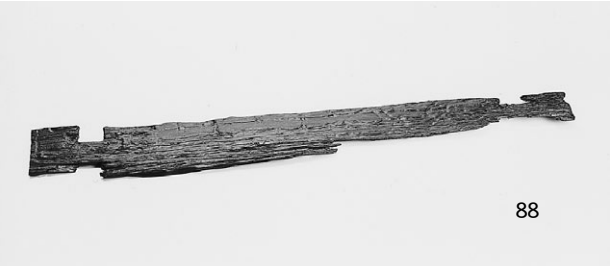
84


85

出土遺物②

86

87


88

89

90

91

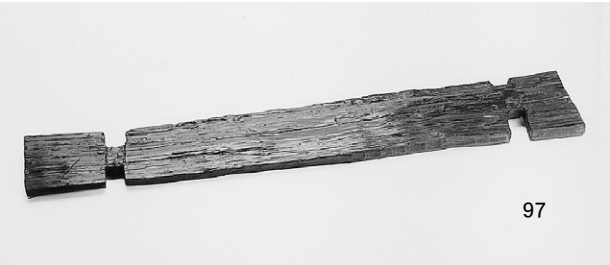
92

93

94

95

96


97

出土遺物③

98

99

100

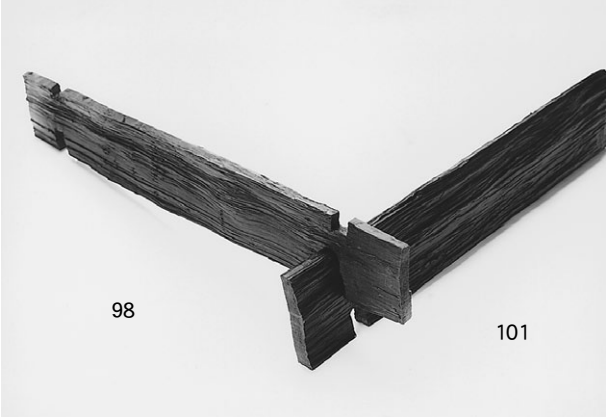
101

102

103

104

105



106

出土遺物④

111

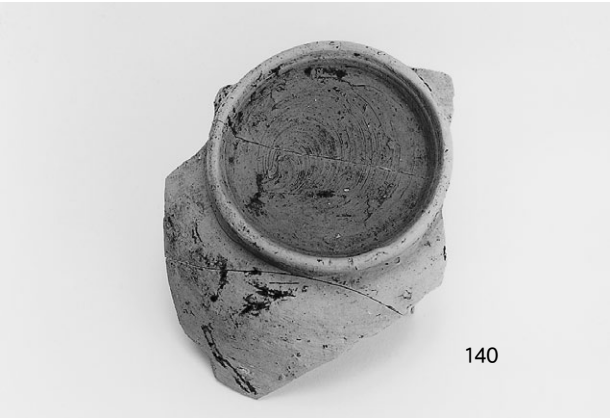
131

136

139

140

144


140

147

出土遺物⑤

出土遺物⑥

170

171

170

177

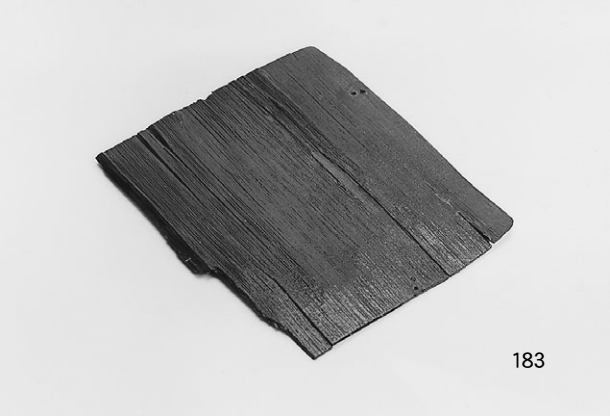
180

181

180

181

出土遺物⑦


183

184

189

184

192

194

196

197

出土遺物⑧

出土遺物⑨

225

236

240

237

242

244

247

249

出土遺物⑩

264

259

282

298 297

311

314

317

319 312

出土遺物⑪

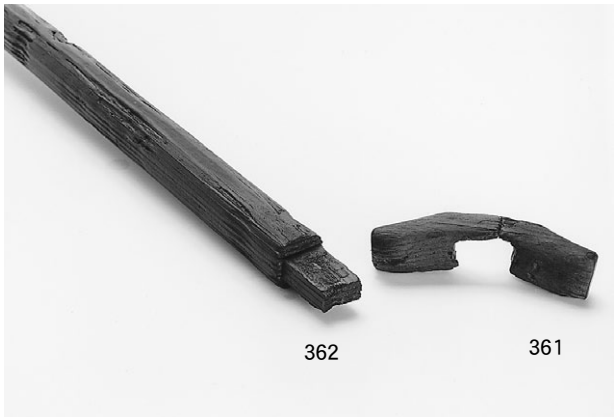
333

334

353

356

357


362 361

362

363

出土遺物⑫

369

378

370

379

371

380

371

394

出土遺物⑬

出土遺物⑭

出土遺物⑮

448

452

448

481

455

464

487

496

出土遺物⑯

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	たちばなどういせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	立花堂遺跡発掘調査報告
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ　名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ　番号	２９７
編　著　者　名	柴山　圭子
編　集　機　関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　　TEL 0596-52-1732
発　行　年月日	２００８（平成２０）年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たちばなどういせき 立花堂遺跡	つし 津市 みなみこうじ 南河路	24201	a851	３４度 ４３分 ６秒 付近	１３６度 ２９分 ９秒 付近	20020701 ～20021128（１次）	299	県営ほ場整備事業(津中部地区)
						20050926 ～20060110（２次）	2,035	国道163号（南河路ＢＰ）道路改築事業
						20060623 ～20061107（３次）	1,726	一般国道163号南河路ＢＰ国補道路特殊改良（一種）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立花堂遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代後期 奈良時代後半 平安時代後期 鎌倉時代	溝 井戸 掘立柱建物・井戸・溝 井戸・溝	弥生土器 土師器・須恵器 井戸側板 土師器・灰釉陶器・黒色土器・土馬・銭貨（延喜通寶） 陶器（山茶椀） （重量：２次　120.8kg ３次　102.1kg）	墨書土器「刀自女」 「万饒」、延喜通寶、土馬などの祭祀に関わる遺物が集中

要約

立花堂遺跡の調査では、奈良時代後期に廃絶したと考えられる井戸や平安時代後期の集落跡、鎌倉時代の井戸などを確認した。奈良期では、墨書須恵器「刀自女」の出土が特筆される。この時期の井戸については、木組の施設が良好に残る。これまでに調査がなされた周辺遺跡でも多くの井戸を検出しているが、全く同じ施設を有するものは確認されておらず、集落の性格と井戸の構造の関係を考える上で貴重な例である。また平安期の遺構については、掘立柱建物や木組井戸、溝などがある。溝からは祭祀に関連すると考えられる墨書灰釉陶器椀（「万饒」）や土馬、延喜通寶などが出土しており、集落を形成する集団と祭祀との関連が窺われる。

結語においては、立花堂遺跡の調査のまとめに加えて、平成８年度から継続的に実施されてきた津市南河路および野田における発掘調査結果を概観し、各期の遺構の変遷や掘立柱建物、井戸についての考察を行った。

三重県埋蔵文化財調査報告２９７

立花堂遺跡発掘調査報告

２００８（平成20）年３月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　（有）山　文　印　刷